

# 独立行政法人国立美術館の平成25年度に係る業務の実績に関する評価

## 全体評価

<参考> 業務の質の向上:A 業務運営の効率化:A 財務内容の改善:A

### 評価結果の総括

- ・第3期中期計画に対し、事務・事業運営が計画どおり実施されていると評価できる。
- ・美術振興のナショナルセンターとして、各美術館・フィルムセンターがそれぞれの特性をいかし、充実した企画展・所蔵品展・上映を実現し、さらに、多角的かつ専門的な美術情報の発信に取り組むとともに、調査・研究においても一定の成果を上げている。
- ・業務運営の効率化等の面でも着実な実績を上げており、来館者へのサービス向上にも積極的に取り組んでいると認められる。

### 平成25年度の評価結果を踏まえた、事業計画及び業務運営等に関して取るべき方策(改善のポイント)

#### (1)事業計画に関する事項

- ・企画展の入場者数は、遞減傾向を示しており、その要因分析を行う必要がある。その上で企画展の運営方式を含めた取組の検討が必要である。(項目別P.4参照)
- ・各館の収蔵スペースは一部改善されたものの、まだ十分とは言えず、引き続き作品を安全かつ機能的に収蔵する方策を検討すべきである。(項目別P.79参照)
- ・美術館活動を担う中核的人材の育成については、法人として研修制度・インターンシップなどの活動内容の根本的な再検討が必要である。(項目別P.131参照)

#### (2)業務運営に関する事項

- ・人事に関する事項については、常勤職員数の減少が抑制されたものの、国際的な水準にはいまだ及ばない。常勤職員の減少を補う任期付職員の採用などで改善が図られているが、高度専門人材の確保と活用に向けた将来的な人事計画の策定が望まれる。(項目別P.175参照)

#### (3)その他

- ・特になし

### 特記事項

- ・特になし

文部科学省独立行政法人評価委員会  
文化分科会 国立美術館部会 名簿

< 正委員 >

前 田 富士男 中部大学特任教授、慶應義塾大学名誉教授

< 臨時委員 >

市 川 政 憲 元茨城県近代美術館館長

金 原 宏 行 豊橋市美術博物館館長

斉 藤 綾 子 明治学院大学文学部教授

宮 島 博 和 公認会計士

( 以上 5 名 )

# 独立行政法人国立美術館の平成25年度に係る業務の実績に関する評価

## 項目別評価総表

項目名	中期目標期間中の評価の経年変化					項目名	中期目標期間中の評価の経年変化				
	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度		23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
(大項目名)国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置	A	A	A			(大項目名)業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置	A	A	A		
(中項目名)美術振興の中心的拠点としての多彩な活動の展開	A	A	A			(小項目名)業務の効率化の状況	A	A	A		
(小項目名)展覧会への取組	A	A	A			(小項目名)給与水準の適正化等	A	A	A		
(小項目名)国立新美術館等の取組	A	A	A			(小項目名)内部統制	A	A	A		
(小項目名)情報の発信	A	B	A			(小項目名)情報安全	A	A	A		
(小項目名)教育普及活動の実施状況	A	A	A			(大項目名)財務、人事、施設整備に関する目標を達成するためにとるべき措置	A	A	A		
(小項目名)調査研究の実施状況	A	A	A			(小項目名)財務の状況	A	A	A		
(小項目名)観覧環境の提供	A	A	A			(小項目名)人事の状況	A	B	A		
(中項目名)我が国の近・現代美術及び海外の美術を体系的・通史的に提示しうるナショナルコレクションの形成・継承	A	A	A								
(小項目名)収蔵品の収集	A	A	A								
(小項目名)収蔵品の保管・管理	A	B	B								
(小項目名)収蔵品の修理	A	A	A								
(小項目名)収集・保管のための調査研究	A	A	A								
(中項目名)我が国における美術館のナショナルセンターとして美術館活動全体の活性化に寄与	A	A	A								
(小項目名)ナショナルセンターとしての国内外の美術館等との連携・協力	A	A	A								
(小項目名)ナショナルセンターとしての人材育成	B	B	B								
(小項目名)フィルムセンターの取組状況	A	A	A								

当該中期目標期間の初年度から経年変化を記載。

「-」は当該年度では該当がないことを、「/」は終了した事業を表す。

備考(法人の業務・マネジメントに係る意見募集結果の評価への反映に対する説明等)

【参考資料1】予算、収支計画及び資金計画に対する実績の経年比較(過去5年分を記載)

(単位:百万円)

区分	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	区分	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度
収入						支出					
運営費交付金	5,773	5,859	5,973	7,701	7,546	運営事業費	14,787	15,237	14,010	13,700	14,032
展示事業収入	1,294	1,432	1,150	1,172	1,195	人件費	1,189	1,038	1,087	1,000	978
受託収入	4	0	0	0	0	管理部門	346	285	293	283	263
寄附金収入	17	13	28	16	9	事業部門	843	753	794	717	715
消費税等還付税額	0	0	0	0	3	業務経費	12,549	14,199	12,923	12,700	13,054
施設整備費補助金	7,205	7,836	7,026	5,318	5,533	一般管理費	1,467	1,315	1183	1,161	1,113
文化芸術情報電子化推進費補助金	1,049	0	0	0	0	展覧事業費	2,735	3,642	3401	5,007	5,346
						調査研究事業費	198	172	191	208	155
						教育普及事業費	999	1,178	1101	1,006	907
						施設整備費補助金	7,150	7,892	7047	5,318	5,533
						文化芸術情報電子化推進費補助金	1,049	0	0	0	0
計	15,342	15,140	14,177	14,207	14,286	計	14,787	15,237	14,010	13,700	14,032

備考(指標による分析結果や特異的なデータに対する説明等)

(単位:百万円)

区分	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	区分	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度
費用						収益					
経常費用	5,704	5,795	5,444	5,501	5,049	運営費交付金収益	4,297	4,554	4,142	4,134	3,685
収集保管事業費	341	411	386	364	398	資産見返運営費交付金戻入	156	148	157	145	138
展覧事業費	1,714	1,815	1,698	1,947	1,653	資産見返寄付金戻入	1	3	3	3	3
調査研究事業費	322	302	318	324	280	資産見返物品受贈額戻入	15	14	12	12	11
教育普及事業費	1,156	1,288	1,229	1,127	1,049	入場料収入	786	932	693	677	699
新館設置対応費	0	0	0	0	0	その他事業収入	500	491	451	483	475
受託事業費	4	0	0	0	0	受託収入	4	0	0	0	0
一般管理費	1,992	1,810	1,638	1,578	1,515	補助金等収益	10	0	0	0	0
減価償却費	172	165	174	161	152	寄附金収益	41	8	15	29	8
臨時損失	3	4	1	0	2	施設費収益	66	175	42	14	73
						雑益	7	9	6	12	24
						臨時利益	18	0	0	1	0
計	5,704	5,795	5,444	5,501	5,049	計	5,901	6,334	5,521	5,510	5,116
						純利益	197	539	77	9	67
						目的積立金取崩額	6	0	12	2	
						総利益	203	539	89	11	67

備考(指標による分析結果や特異的なデータに対する説明等)

(単位:百万円)

区分	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	区分	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度
資金支出						資金収入					
業務活動による支出	6,681	7,940	7,103	8,370	8,267	業務活動による収入	7,340	8,186	7,158	8,938	8,744
投資活動による支出	7,858	6,610	8,186	5,641	5,044	運営費交付金収入	5,773	5,859	5,973	7,701	7,546
財務活動による支出	1	0	0	0	0	入場料収入	785	931	694	674	703
国庫納付金の支払額	0	0	1,606	0	0	その他事業収入	575	485	463	546	486
資金に係る換算差額	0	4	0	0	0	寄附金収入	18	13	28	17	9
翌年度への繰越金	2,435	2,755	1,300	1,617	1,955	受託収入	33	4	0	0	0
						補助金等収入	156	894	0	0	0
						投資活動による収入	7,858	6,688	8,282	5,390	4,905
						前年度よりの繰越金	1,777	2,435	2,755	1,300	1,617
計	16,975	17,309	18,195	15,628	15,266	計	16,975	17,309	18,195	15,628	15,266

備考(指標による分析結果や特異的なデータに対する説明等)

【参考資料2】貸借対照表の経年比較(過去5年分を記載)

(単位:百万円)

区分	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	区分	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度
資産						負債					
流動資産	3,692	4,261	1,549	1,813	2,767	流動負債	2,681	2,638	1,453	1,706	2,581
固定資産	142,359	149,765	156,316	163,783	171,187	固定負債	1,085	1,102	968	880	1,009
						負債合計	3,766	3,740	2,421	2,586	3,590
						純資産					
						資本金	81,019	81,019	81,019	81,019	81,019
						資本剰余金	59,805	67,268	73,954	81,511	88,797
						利益剰余金	1,461	1,999	471	480	548
						(うち当期末処分利益)	(203)	(539)	(89)	(11)	(69)
						資本合計	142,285	150,286	155,444	163,010	170,364
資産合計	146,051	154,026	157,865	165,596	173,954	負債資本合計	146,051	154,026	157,865	165,596	173,954

備考(指標による分析結果や特異的なデータに対する説明等)

【参考資料3】利益(又は損失)の処分についての経年比較(過去5年分を記載) (単位:百万円)

区分	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度
当期末処分利益	203	539	89	11	69
当期総利益	203	539	89	11	69
利益処分額	203	539	89	11	69
積立金	203	539	89	11	69
独立行政法人通則法第44条第3項により主務大臣の承認を受けた額	0	0	0	0	0
美術作品購入・修理積立金	0	0	0	0	0
設備積立金	0	0	0	0	0

備考(指標による分析結果や特異的なデータに対する説明等)

【参考資料4】人員の増減の経年比較(過去5年分を記載) (単位:人)

職種	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度
定年制研究系職員	61	57	57	54	50
定年制事務系職員	59	52	51	45	49
定年制技能・労務系職員	3	3	3	3	2
指定職相当職員	2	2	2	1	2

職種は法人の特性によって適宜変更すること

備考(指標による分析結果や特異的なデータに対する説明等)

# 独立行政法人国立美術館の平成25年度に係る業務の実績に関する評価

【(大項目)1】	国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置	【評定】 A			
		H23	H24	H26	H27
		A	A		
【(中項目)1-1】	1. 美術振興の中心的拠点としての多彩な活動の展開	【評定】 A			
		H23	H24	H26	H27
		A	A		

【(小項目)1-1-1】	展覧会への取組	【評定】 A			
【法人の達成すべき目標(計画)の概要】					
(1) 多様な鑑賞機会の提供					
<p>-1 中期目標で示された学術的意義、国民の関心、国際文化交流の推進等に配慮しつつ、国立美術館ならではの多様な美術作品の鑑賞機会をより多くの国民に提供するため、各館において魅力ある質の高い所蔵作品展・企画展及び企画上映を実施する。</p> <p>-2 所蔵作品展は、各館におけるコレクションの充実を図りつつ、その特色を十分に発揮したものとす。また、最新の研究結果を基に、美術に関する理解の促進に寄与することを旨とする。また、所蔵作品の鑑賞・理解に資するため作品の展示替えに加え、小企画展・テーマ展などを開催する。</p> <p>-3 企画展は、積年の研究成果に基づき、時宜を得たものを企画し、学術水準の向上に寄与するとともに、利用者のニーズに対応しつつ、次の観点に留意して実施する。また、入館者数を念頭においた展覧会のみならず、新しい視点・観点を提示する展覧会をも提供する。</p>		H23	H24	H26	H27
<p>(イ) 国際的視野に立ち、アジア諸地域を含め海外の主要美術館と連携し、確固たる評価を得ている世界の美術を紹介するとともに、我が国の作家や芸術的動向を海外に紹介する展覧会等に積極的に取り組む。</p> <p>(ロ) 展覧会テーマの設定や他の芸術文化との連携による展示方法等について方向性を提示することに取り組む。</p> <p>(ハ) メディアアート、アニメ、建築など我が国が世界から注目される新しい領域の芸術表現を積極的に取り上げ、最先端の現代美術への関心を促す。</p>		A	A		
<p>(ニ) 過去の埋もれていた作家・作品・動向の発見や再評価に取り組む。</p> <p>なお、企画展の開催回数は概ね以下のとおりとする。</p>		<p>実績報告書等 参照箇所</p> <p>&lt; 実績報告書 &gt;</p> <p>P3 ~ 10</p> <p>1 美術振興の中心的拠点としての多彩な活動の展開</p> <p>(1) 多彩な鑑賞機会の提供</p> <p>所蔵作品展</p> <p>企画展</p> <p>東京国立近代美術館フィルムセンター映画上映等</p> <p>巡回展</p>			

(東京国立近代美術館)  
 本館 年4～6回程度  
 工芸館 年2～3回程度  
 フィルムセンター 年15回程度(展覧会を含む)  
 (京都国立近代美術館)  
 年4～6回程度  
 (国立西洋美術館)  
 年3回程度  
 (国立国際美術館)  
 年5～6回程度  
 (国立新美術館)  
 年5～6回程度(公募展を除く。)

-4 展覧会を開催するにあたっては、実施目的、期待する成果、学術的意義を明確にし、専門家等からの意見を聞くとともに、入館者に対するアンケート調査を実施し、そのニーズや満足度を分析し、それらを展覧会に反映させることにより、常に魅力あるものとなるよう取り組む。

-5 5館共同企画展「陰影礼讃 国立美術館コレクションによる」(平成22年9月開催)の成果を踏まえ、今後の各館連携を引き続き推進する。

公私立美術館等のニーズ等を十分踏まえ、国立美術館が所蔵する美術作品及びそれに関する調査研究の成果を活用して、地方巡回展を積極的に開催する。

また、あわせて当該地方巡回展に関連する講演会又はシンポジウムを開催することにより、ナショナルセンターとして地域における鑑賞機会の充実と美術の普及に資する。

このほか、公立文化施設等と連携協力して、所蔵映画フィルムによる優秀映画鑑賞会を実施する。

入館者数については、展覧会ごとに実施目的、想定する入館者層、実施内容、学術的意義、良好な観覧環境の確保、広報活動、過去の入館者等の状況等を踏まえて、国立美術館としてふさわしい入館者数の目標を設定し、その達成に取り組む。

映画フィルム・資料の所蔵作品を活用した上映、展示等の活動に積極的に取り組む。

P24～29

(5)調査研究成果の美術館活動への反映  
 調査研究一覧

<平成24年度計画>

P1～11

国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1 美術振興の中心的拠点としての多彩な活動の展開

(1)多様な鑑賞機会の提供

【インプット指標】

(中期目標期間)	H23	H24	H25	H26	H27
決算額(百万円)	1,698	1,947	1,653	-	-
従事人員数(人)	57	54	50	-	-

1)決算額は損益計算書 展覧事業費を計上している。

2)従事人員数は、すべての研究職員数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準	実績	分析・評価
<p>各館において、魅力ある質の高い所蔵作品展・企画展及び企画上映を実施したか。</p> <p>(所蔵作品展)</p> <p>各館におけるコレクションの充実を図りつつ、その特色を十分に発揮したものとしたか。また、最新の研究結果を基に、美術に関する理解の促進に寄与することを目指すとともに、所蔵作品の鑑賞・理解に資するため作品の展示替えに加え、小企画展・テーマ展などを開催したか。</p>	<p>(所蔵作品展)</p> <p>東京国立近代美術館 (本館)</p> <p>平成 24 年度に実施した 10 年ぶりのリニューアルの成果を踏まえ、コレクションの特徴を活かしつつ、新収蔵品の活用や研究成果のいち早い公開を積極的に行うとともに、特集展示を積極的に展開した。特に、日露戦争、関東大震災、日中戦争、太平洋戦争といった大きな時代の出来事に即して美術の動向を紹介した「何かがおこってる：1907-1945 の軌跡」は、4 - 3 階すべてを用いた初の大規模特集となった。</p> <p>(工芸館)</p> <p>春季に開催した「花咲く工芸」展や「花」展では、花を主題とした作品に焦点をあて、工芸家たちが生み出した個性豊かな作品を紹介した。「ボディ」展では、人形や身体のパーツなどを表した「ヒトガタ」、人体のスケールを基準として大きさと機能が検証された器や着物を「カラダサイズ」、そして叩く力や呼吸など身体的活動によって成形された作品を「カラダエネルギー」として分類し、視覚的に分かりやすく展示した。</p> <p>京都国立近代美術館</p> <p>引き続き企画展に連動させた関連展示を実施しながらコレクションを紹介するとともに、開館 50 周年を記念する小企画展も実施した。特に、開館した年に開催した展覧会「村上華岳展」に因んで企画した「開館 50 周年記念 村上華岳特集」は、50 年前には同一組織であった東京国立近代美術館と連携する形で開催し、開館 50 周年の記念に相応しい展示となった。</p> <p>国立西洋美術館</p> <p>所蔵作品展会場内においても特別展及び小企画展を開催した。「ル・コルビュジエと 20 世紀美術」では、パリのル・コルビュジエ財団等から借用した作品など 150 点により、芸術家としてのル・コルビュジエの活動を彼が設計した本館展示室において紹介した。日本スペイン交流 400 周年事業の一環として開催した「ソフィア王妃芸術センター所蔵 内と外 スペイン・アンフォルメル絵画の二つの『顔』」では、20 世紀美術史における最も重要な運動の一つとなったアンフォルメル(不定形)絵画のスペインにおける展開を、同国を代表する現代美術館であるマドリードのソフィア王妃芸術センターの所蔵品 14 点により紹介した。</p> <p>国立国際美術館</p> <p>同時開催の企画展に合わせて展示内容を見直し、企画展に関連する作家及び作品や、近年収蔵された作品による展示構成とした。企画展「あなたの肖像 工藤哲巳回顧展」と同時期に開催した所蔵作品展に</p>	<p>国立美術館全体として、計画どおり所蔵作品展、企画展、企画上映を開催し、質の高い展覧会・上映会が実施された。美術館全体としては目標を達成したものの、緩やかな減少傾向に対しての要因分析が望まれる。</p> <p>所蔵作品展については、入館者数は目標を達成しており、各館とも、漫然としたコレクション名作展示ではなく、テーマをしぼった小企画展や、研究活動を反映する充実した展観が行われ、評価できる。</p> <p>特に、東京国立近代美術館の「何かがおこっている：1907-1945 の軌跡」は大きな時代の中での美術の動向を紹介した野心的な取組であることを大いに評価したい。</p> <p>コレクションに関する調査研究が深まるとともに、変化する社会への現代的な問題意識から所蔵品の評価及び展示についての見直しが行われている。今後もこうした努力のより一層の充実を期待したい。</p>

においては、1960年代の「反芸術」の動向から、工藤哲巳と同時に活躍した作家たち、さらに工藤哲巳に以前から関心を示してきたアメリカ西海岸のアーティストの作品を紹介した。平成25年度に購入したアルベルト・ジャコメッティの《男》については、他の所蔵作品とともに、現代美術を先導してきた西洋美術100年の歩みを紹介する形で展示した。

【数値目標の達成状況】

・所蔵作品展入館者数  
実績 897,568人  
目標 690,000人  
目標達成率 130.1%

【所蔵作品展 過去の実績】

	H21	H22	H23	H24	H25
開催日数	1,082	1,166	1,200	1,084	1,169
展示替回数	24	22	19	21	21
入館者数	844,672	1,051,827	864,514	777,106	897,568
目標数	709,000	823,000	689,000	697,000	690,000

(企画展)

積年の研究成果に基づき、時宜を得たものを企画し、学術水準の向上に寄与するとともに、利用者のニーズに対応しつつ、特に次の観点に留意して実施したか。また、入館者数を念頭においた展覧会のみならず、新しい視点・観点を提示する展覧会をも提供したか。

- ・国際的視野に立ち、アジア諸地域を含め海外の主要美術館と連携し、確固たる評価を得ている世界の美術を紹介するとともに、我が国の作家や芸術的動向を海外に紹介する展

(企画展)

企画展は、来館者のニーズに応え、以下の観点に留意して実施した。

- イ 国際的視野に立ち、海外の主要美術館と連携し、確固たる評価を得ている世界の美術を紹介するとともに、我が国の作家や芸術的動向を海外に紹介する展覧会等に積極的に取り組む。
- ロ 展覧会テーマの設定やその提示方法等について新しい方向性を示すことに努める。
- ハ メディアアート、アニメ、建築など我が国が世界から注目される新しい領域の芸術表現を積極的に取り上げ、最先端の現代美術への関心を促す。
- ニ 過去の埋もれていた作家・作品・動向の発見や再評価に努める。
- ホ その他

企画展については、中世から現代までを主題とする多様な展覧会が企画され、一部の展覧会を除き、企画展全体では目標を達成しており、評価できる。

東京国立近代美術館の「フランス・ベーコン展」における映像の会場設置や、「竹内栖鳳展」における展示構成など、学芸員の意欲や情熱が伝わる展観が行われた。

国立国際美術館と国立新美術館における「アンドレアス・グルスキー展」は、作者本人のデ

覧会等に積極的に取り組んだか。

・ 展覧会テーマの設定や他の芸術文化との連携による展示方法等について新しい方向性を提示することに取り組んだか。

・ メディアアート、アニメ、建築など我が国が世界から注目される新しい領域の芸術表現を積極的に取り上げ、最先端の現代美術への関心を促したか。

・ 過去の埋もれていた作家・作品・動向の発見や再評価に取り組んだか。

(企画展の開催回数基準)

・ 東京国立近代美術館  
本館 年4～6回程度  
工芸館 年2～3回程度  
フィルムセンター年15回程度  
(展覧会を含む)

・ 京都国立近代美術館  
年4～6回程度

・ 国立西洋美術館  
年3回程度

・ 国立国際美術館  
年5～6回程度

・ 国立新美術館  
年5～6回程度(公募展を除く。)

【企画展】

以下の表の( )内は会期全体の数値

館名	展覧会名	開催日数	入館者数	目標数	企画趣旨	共催者
東京国立近代美術館 本館	フランス・ベーコン展	51 (73)	96,168 (124,720)	75,000 (120,000)	イ、ロ	日本経済新聞社
	プレイバック・アーティスト・トーク	45	7,306	13,000	ロ	
	竹内栖鳳展 近代日本画の巨人	37	109,589	70,000	ロ、ニ	日本経済新聞社、NHK、NHKプロモーション
	ジョセフ・クーデルカ展	56	23,457	34,000	イ	マグナム・フォト東京支社
	あなたの肖像 工藤哲巳回顧展	49	8,975	15,000	ニ	国立国際美術館、青森県立美術館
	<b>計</b>	<b>238</b>	<b>245,495</b>	<b>207,000</b>		
東京国立近代美術館 工芸館	東京オリンピック 1964 デザインプロジェクト	51 (93)	40,995 (56,739)	23,000 (41,000)	ニ	
	クローズアップ工芸	74	8,707	13,000	ニ	
	現代のプロダクトデザイン - Made in Japan を生む	60	21,456	16,000	ニ	
	日本伝統工芸展 60 回記念 工芸から K GEI へ	52	10,098	12,000	ニ	公益社団法人日本工芸会
	<b>計</b>	<b>237</b>	<b>81,256</b>	<b>64,000</b>		
京都国立近代美術館	開館 50 周年記念特別展 交差する表現 工芸 / デザイン / 総合芸術	32 (46)	10,636 (13,477)	23,000 (33,000)	ロ	京都新聞社
	芝川照吉コレクション展 ~青木繁・岸田劉生らを支えたコレクター	38	17,462	26,000	ニ	朝日新聞社
	泥象 鈴木治の世界 - 「使う陶」から「観る陶」、そして「詠む陶」へ -	39	10,723	12,000	ロ	日本経済新聞社、京都新聞社
	映画をめぐる美術 - マルセル・ブローターズから始める [注 1]	43	9,500	15,000	ロ、ハ	東京国立近代美術館、京都新聞社
	皇室の名品 - 近代日本美術の粋 - [注 2]	53	93,527	200,000	ホ	宮内庁、日本経済新聞社

ザインによる野心的な展示空間を試み、若者も引きつける魅力的な展覧会となった。

また、「国立クリュニー中世美術館所蔵(貴婦人と一角獣)展」は、世界的に評価の高い作品を円遊的な展示手法で構成し、圧倒的な展示内容となった。

こうした多様な展示は、国際的な美術に対するニーズを満たした一方で、一部の展覧会は入館者数が未達であったことから、その要因分析を行うとともに、ナショナルセンターとして高いレベルの展示の企画や運営・広報の在り方などを検討することを望みたい。

		Future Beauty 日本ファッション: 不連続の連続	9 (45)	3,365 (27,471)	5,000 (26,000)	八	公益財団法人京都服飾文化研究財団
		チェコの映画ポスター テリー・ポスター・コレクションより[注 3]	9 (45)	3,603 (26,969)	5,000 (25,000)	口	東京国立近代美術館フィルムセンター
		<b>計</b>	<b>214</b>	<b>145,213</b>	<b>281,000</b>		
国立西洋美術館		ラファエロ[注 4]	56 (82)	365,635 (505,246)	220,000 (317,000)	イ	フィレンツェ文化財・美術館特別監督局、読売新聞社、日本テレビ放送網
		システーナ礼拝堂 500年祭記念 ミケランジェロ展 - 天才の軌跡	63	220,144	202,000	イ	TBS、朝日新聞社
		国立西洋美術館 × ポーラ美術館 モネ、風景をみる眼 - 19世紀フランス風景画の革新[注 5]	77	313,737	206,000	イ	公益財団法人ポーラ美術振興財団 ポーラ美術館、TBS、読売新聞社
		<b>計</b>	<b>196</b>	<b>899,516</b>	<b>628,000</b>		
国立国際美術館		美の響演 関西コレクションズ	88	50,293	47,000	口	朝日新聞社
		フランス国立クリュニー中世美術館所蔵貴婦人と一角獣展	75	116,173	80,000	ホ	フランス国立クリュニー中世美術館、NHK 大阪放送局、NHK プラネット近畿総支社、朝日新聞社
		あなたの肖像 - 工藤哲巳回顧展	61	11,669	15,000	二	東京国立近代美術館、青森県立美術館
		アンドレアス・グルスキー展	50 (88)	32,897 (72,534)	15,000 (27,000)	イ	読売新聞大阪本社、読売テレビ、読売新聞東京本社
		<b>計</b>	<b>274</b>	<b>211,032</b>	<b>157,000</b>		
国立新美術館		アーティスト・ファイル 2013 - 現代の作家たち	1 (60)	785 (30,914)	1,000 (32,000)	八、ホ	
		カリフォルニア・デザイン 1930-1965 - モダン・リビングの起源	56 (67)	49,490 (65,160)	34,000 (40,000)	イ、口、 八	ロザンゼルス・カウンティ美術館

-					
フランス国立クリュニー中世美術館所蔵貴婦人と一角獣展	73	213,512	189,000	イ	フランス国立新美術館クリュニー中世美術館、NHK、NHKプロモーション、朝日新聞社
アンドレアス・グルスキー展	66	119,467	54,000	ホ	読売新聞社、TBS、TOKYO FM
アメリカン・ポップ・アート展	66	187,627	163,000	イ	TBS、読売新聞社
クレラー＝ミュラー美術館所蔵作品を中心に 印象派を超えて - 点描の画家たち ゴッホ、スーラからモンドリアンまで	70	180,769	239,000	イ	東京新聞、NHK、NHKプロモーション
未来を担うアーティストたち 16th DOMANI・明日展 文化庁芸術家在外研修の成果【注6】	26	15,050	10,000	ハ	文化庁、読売新聞社、アート・ベンチャー・オフィス・ショー
第17回文化庁メディア芸術祭	11	38,938	45,000	ハ	文化庁メディア芸術祭実行委員会(文化庁、国立新美術館)
イメージの力 - 国立民族学博物館コレクションにさぐる【注7】	36 (97)	14,711 (59,767)	12,000 (32,000)	ロ	国立民族学博物館
中村一美展【注8】	12 (55)	2,466 (18,939)	3,000 (13,000)	ロ	
計	<b>417</b>	<b>822,815</b>	<b>750,000</b>		
合計	<b>1,576</b>	<b>2,405,327</b>	<b>2,087,000</b>		

備考:

【注1】特別警報発令により臨時休館した(9月16日)ため、開催日数が当初予定の44日から変更となった。

【注2】展示替えのため臨時休館した(12月10日)。さらに、入館者数を伸ばすべく、年末年始の休館期間中に特別開館を実施した(12月28日、12月29日、1月3日)。そのため、開催日数が当初予定の51日から変更となった。

【注3】コレクション・ギャラリーの一部を使って開催した展覧会のため、開催日数、入館者数及び目標数はそれぞれの合計に含めない。

【注4】休館日に団体特別鑑賞会を実施した(4月15日)ため、開催日数(通期の開催日数)が当初予定の55日(81日)から変更となった。

【注5】休館日に団体特別鑑賞会を実施した(1月20日)ため、開催日数が当初予定の76日から変更となった。

【注6】開催日数が当初予定の27日から変更となった。

【注7】高さ6メートルを超える作品が出品リストに加わったことから会場を変更したため、開催日数(通期の開催日数)が当初予定の41日(84日)から変更となった。また、会期が大幅にのびたことにより、改めて目標入館者数を算

出した結果、当初予定の 17,000 人(34,000 人)から変更となった。  
 [注 8]「イメージの力 国立民族学博物館コレクションにさぐる」の会場変更に伴い会場を変更したため、通期の開催日数が当初予定の 67 日から変更となった。また、会期変更に伴い、通期の目標入館者数が当初予定の 16,000 人から変更となった。

【数値目標の達成状況】

・企画展入館者数

実績 2,405,327 人

目標 2,087,000 人

目標達成率 115.3%

【企画展 過去の実績】

	H21	H22	H23	H24	H25
開催日数	1,778	1,623	1,849	1,699	1,576
目標回数	25～31	25～31	23～30	23～30	23～30
開催回数	36	41	36	38	33
入館者数	3,582,458	3,450,921	2,566,205	2,559,604	2,405,327
目標数	2,519,000	2,196,400	1,926,600	2,295,000	2,087,000

展覧会を開催するにあたっては、実施目的、期待する成果、学術的意義を明確にし、専門家等からの意見を聞くとともに、入館者に対するアンケート調査を実施し、そのニーズや満足度を分析し、それらを展覧会に反映させることにより、常に魅力あるものとなるよう取り組んだか。

所蔵作品展(常設展)、企画展、自主企画展等により、それぞれ実施目的、期待する成果、学術的意義は異なるが、各館の研究員の研究結果の反映としての位置づけ(実績報告書 P24～29に各館における調査研究成果の美術館活動(展覧会の開催)への反映を参照)という点では、共通している。実施目的、期待する成果については、年度計画において明確にされており、それに基づいて実施した。

企画展等の開催に際し、専門家や作品貸出館の担当キュレーター等から協力を得た。主な例として、国立西洋美術館の「ラファエロ」展では、フィレンツェ文化財・美術館監督局との共同研究及び共同主催により、展覧会及び講演会を開催した。国立国際美術館、国立新美術館の「アンドレアス・グルスキー展」では、出品作品の選定に加え、会場構成もグルスキー自らが手がけ、展示室全体をグルスキー自身の一つの作品のように見せるよう工夫を行った。国立新美術館の「イメージの力 - 国立民族学博物館コレクションにさぐる」(国立新美術館)では、美術史学や芸術学以外の国立民族学博物館の専門家の協力を得て実施した。

また、展覧会ごとに、入館者に対するアンケート調査を実施し、その意見の中から改善可能なものについては、以降の展覧会における観覧環境の改善等に反映するよう取り組んだ。展覧会情報については、インターネットから情報を得ているというアンケートの回答を踏まえ、特設サイトの設置やソーシャルネットワークサービス(SNS)の活用などにより、幅広い情報発信に取り組んだ。

展覧会開催の実施目的、期待する成果等については、年度計画に明確に位置づけており、展覧会開催の都度、担当研究員等の学術的協力を得て実施されている。

また、展覧会ごとにアンケート調査を実施し、その意見の中から改善可能なものについては、以降の展覧会における観覧環境の改善等に反映するよう取り組み、特に、アンケート結果から、展覧会情報についてはインターネットから情報を得ているという多数の意見を踏まえ、

5館共同企画展「陰影礼讃 国立美術館コレクションによる」(平成22年9月開催)の成果を踏まえ、今後の各館連携を引き続き推進したか。

(地方巡回展)

公私立美術館等のニーズ等を十分踏まえ、国立美術館が所蔵する美術作品及びそれに関する調査研究の成果を活用して、地方巡回展を積極的に開催したか。また、あわせて当該地方巡回展に関連する講演会又はシンポジウムを開催することにより、ナショナルセンターとして地域における鑑賞機会の充実と美術の普及に寄与したか。

このほか、公立文化施設等と連携協力して、所蔵映画フィルムによる優秀映画鑑賞会を実施したか。

5館の横断的・総合的事業プロジェクトとして、平成22年度に初めての合同企画展「陰影礼讃 国立美術館のコレクションによる」を開催し高評を得た。平成25年度は、平成24年度に採択した企画案「記憶と想起—コレクションとリコレクション(仮称)」について、平成27年度の開催に向けて、担当者間で準備を進めた。

(地方巡回展)

国立美術館コレクションの調査研究成果を反映し、公私立美術館のニーズ等を十分に踏まえ、当該コレクションの地方における鑑賞機会の充実と美術の普及を図るため、これまで道府県の教育委員会等、全国の美術館と連携して「国立美術館巡回展」を実施している。同展を開催したことのない美術館も含め、より多くの美術館に応募してもらえよう、各年度の担当館(出品概要)を募集要項に提示するなど、公募方法を工夫している。

【巡回展】

企画館	展覧会名	開催館	開催日数	入館者数
京都国立近代美術館	平成25年度国立美術館巡回展 西洋への憧れ 個のめざめ 日本近代洋画の東西	川越市立美術館	32	4,192
	平成25年度国立美術館巡回展 [第一部] 西洋への憧れ 個のめざめ 日本近代洋画の東西 [第二部] 浅井忠と京都の弟子たち	佐倉市立美術館	32	2,559
東京国立近代美術館(工芸館)	東京国立近代美術館工芸館所蔵名品展 近代工芸の巨匠たち	田辺市立美術館 [注1]	57	1,912
		南丹市立文化博物館 [注2]	32	849
計			153	9,512

[注1] 会場館が、できる限り長く開催するために見直しを行ったため、開催日数が当初予定の38日から変更となった。

[注2] 会場館が、できる限り長く開催するために見直しを行ったため、開催日数が当初予定の26日から変更となった。

ホームページに特設サイトを設置したり、ソーシャルネットワークサービス(SNS)を活用したりするなど、広報面で活用したことは、評価できる。

企画案「記憶と想起—コレクションとリコレクション(仮称)」について、担当者間で準備が進められるなど、平成27年度の開催に向けて準備が進められている。

地方巡回展については、入館者数の減少はあったものの、公私立美術館と連携し、実施された。また、巡回展に関連する講演会、優秀映画鑑賞会は、地域における鑑賞機会の充実に貢献した。

地方巡回展・上映の開催意義は大きいことから、今後も公私立美術館との連携実績の検証を踏まえ、事業の一層の充実を図ることが期待される。

【巡回展に関連する講演会又はシンポジウム】

セミナー・シンポジウム名	講演会「洋画家たちの近代」	開催日	平成 26 年 2 月 2 日
場所	川越市立美術館	聴講者数	62 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	平井章一(主任研究員)		
内容	国立美術館巡回展開催に伴い、講演会を実施した。		

セミナー・シンポジウム名	講演会「洋画家たちの近代」	開催日	平成 26 年 3 月 1 日
場所	佐倉市立美術館	聴講者数	40 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	平井章一(主任研究員)		
内容	国立美術館巡回展開催に伴い、講演会を実施した。		

【巡回上映】(東京国立近代美術館フィルムセンター)

企画館	タイトル	会場数	開催日数	入館者数
東京国立近代美術館(フィルムセンター)	平成 25 年度優秀映画鑑賞推進事業	198	363	81,490
	日本が声を上げる！ パート 2: 歌手とサムライ	1	8	1,112
	蘇ったフィルムたち 東京国立近代美術館フィルムセンター復元作品特集	2	15	1,371
	NFC 所蔵作品選集 MoMAK Films	1	10	555
	第 7 回中之島映像劇場 日本の漫画映画の誕生と発展 草創期～1946 年 東京国立近代美術館フィルムセンター所蔵作品を中心に	1	3	807
計		203	399	85,335

【巡回展 過去の実績】

	H21	H22	H23	H24	H25
事業数	3	4	2	3	2
会場数	4	5	3	4	4
開催日数	127	200	141	157	153
入館者数	26,819	30,667	9,077	28,953	9,512

【巡回上映 過去の実績】(東京国立近代美術館フィルムセンター)

	H21	H22	H23	H24	H25
事業数	6	5	8	6	5
会場数	205	201	199	195	203
開催日数	450	473	428	437	399
入館者数	105,082	100,001	96,621	117,918	85,335

(入館者)

入館者数については、展覧会ごとに実施目的、想定する入館者層、実施内容、学術的意義、良好な観覧環境の確保、広報活動、過去の入館者等の状況等を踏まえて、国立美術館としてふさわしい入館者数の目標を設定し、その達成に取り組んだか。

(入館者)

各展覧会の目標入館者数については、年度計画において、近年の同種の展覧会の実績や、共催者の広報活動、作家の特性、作品の内容等に鑑みて算出した。

展覧会開催中は、定期的に入館者数を調査、確認し、一日平均入館者数が、目標値に達していない場合は、大学等へのチラシの追加配布やメールマガジンの配信、特設サイトのコンテンツの充実、また、共催者がある場合は、共催者の協力により新聞広告などを追加で行うなど、さらなる広報活動を検討し、工夫した。

目標入館者数は、各展覧会の特性を踏まえて適切な水準で設定されている。また、展覧会開催中は、日々の入館者数の動向を分析し、広報活動を追加するなど、その達成に取り組んだことは評価できる。

(フィルムセンター)

映画フィルム・資料の所蔵作品を活用した上映、展示等の活動に積極的に取り組んだか。

(フィルムセンター)

東京国立近代美術館フィルムセンター映画上映等  
【上映会】

タイトル	会場	上映回数	日数	入館者数	目標数	企画趣旨	共催者
特集・逝ける映画人を偲んで 2011-2012	大ホール	96	48	14,344	16,000	ニ	
生誕 110 年 映画監督 清水宏	大ホール	98	49	17,684	15,000	ニ	
よみがえる日本映画 vol.6[東宝篇] 映画保存のための特別事業費による	大ホール	40	20	8,137	7,000	ニ	
シネマの冒険 闇と音楽 2013 ロイス・ウェバー監督選集	大ホール	12	6	1,438	1,500	ニ	
映画監督 山田洋次	大ホール	108	36	12,538	16,000	ニ	
テクニカラー・プリントでみる NFC 所蔵外国映画選集	大ホール	36	18	5,645	4,500	口	
自選シリーズ 現代日本の映画監督 2 大森一樹	大ホール	24	12	3,576	3,500	口、ニ	
京橋映画小劇場 No.26 アンコール特集:2012 年度上映作品より	小ホール	18	9	2,010	1,500	ホ	
京橋映画小劇場 No.27 映画の教室 2013	小ホール	18	9	1,365	2,000	ホ	
よみがえる日本映画 vol.7[松竹篇] 映画保存のための特別事業費による[注 1]	小ホール	69	23	8,133	8,000	ニ	
計		519	230	74,870	75,000		

【数値目標の達成状況】

・上映会入館者数(東京国立近代美術館フィルムセンター)

実績 74,870 人

目標 75,000 人

目標達成率 99.8%

上映会入館者数はほぼ目標を達成し、展覧会入館者数も167%と前年度より大幅に目標を上回っており、目標は達成している。また、目標未達の要因も分析されている。

企画内容としては、「逝ける映画人」「京橋映画小劇場」等といった定番の企画のみならず、外国でも評価が高まってきた清水宏の初の回顧特集で他機関と連携し、貴重な初期の映像を上映したことは評価できる。

また、「闇と音楽 2013 ロイス・ウェバー監督特集」はパイオニア的的女性映画監督の特集上映であり、ニューヨーク近代美術館やアメリカ議会図書館など海外の FIAF 加盟組織と連携した特集上映で、学術的な意義も高く、フィルムセンターが FIAF 会員であることをいかした企画として評価したい。

「よみがえる日本映画」シリーズは、各撮影所がそれぞれに所有している原盤素材を整備する企画で、日本の映画産業が残した映画遺産を継承、保存するというナショナルセンターならではの取り組みとして評価できる。

目標未達成の原因・理由

上映会の入館者数が目標を下回った主な理由として、例えば「映画監督 山田洋次」では、テレビの放映や DVD の販売、レンタルなどを含めて、常に作品に触れる機会に恵まれている人気監督であることが、逆に大きな集客に結び付かなかったようであった。この点は、専門的なシネマテークとしてのフィルムセンターが抱えるジレンマである。また、「京橋映画小劇場 No.27 映画の教室 2013」は、映画を学ぶ上で必要となる古典作品で構成された上映会であり、学生入場者の増加では一定の成果を上げた。集客力にのみとられず映画史の理解に不可欠な作品の上映を継続していくことは重要な課題ではあるが、初期の無声映画やアニメーション映画の古典などは集客に結び付きにくかったようである。

【展覧会】

展覧会名	日数	入館者数	目標数	企画趣旨	共催者
映画より映画的！日本映画 スチル写真の美学	85	4,845	4,000	口	
チェコの映画ポスター テリー・ポスター・コレクションより	74	6,470	4,000	口、二	京都国立近代美術館
小津安二郎の図像学	86	7,876	3,500	口	
計	245	19,191	11,500		

【数値目標の達成状況】

・展覧会入館者数(東京国立近代美術館フィルムセンター)

実績 19,191 人

目標 11,500 人

目標達成率 166.9%

【上映会 過去の実績】(東京国立近代美術館フィルムセンター)

	H21	H22	H23	H24	H25
開催日数	368	328	323	308	230
目標回数	5～6	5～6	15 回程度	15 回程度	15 回程度
開催回数	18	15	14	13	10
入館者数	113,677	109,098	105,163	89,905	74,870
目標数	121,500	105,500	99,000	97,500	75,000

【展覧会 過去の実績】(東京国立近代美術館フィルムセンター)

	H21	H22	H23	H24	H25
開催日数	276	246	278	263	245
開催回数	4	4	4	3	3
入館者数	15,518	13,552	17,301	15,612	19,191
目標数	11,500	11,000	13,500	11,500	11,500

「生誕 110 年 映画監督 清水宏」は、日本映画を代表する巨匠でありながらこれまでそれほど特集が組まれてこなかった清水宏監督の回顧上映である。部分のみ現存する作品や近年発見された記録映画など現存作品を可能な限り集めた史上最大規模の回顧上映とした。

「よみがえる日本映画」シリーズは、平成 21 年度補正予算から映画保存のための特別事業費を得てフィルムセンターが取り組んできた原版素材の整備の成果をまとめて紹介するシリーズ企画であり、最終回となる平成 25 年度は東宝篇と松竹篇を上映した。

「小津安二郎の図像学」では、巨匠小津安二郎の作品を、絵画やデザインなど美術の諸分野とのかかわりにおいて捉え直すという過去にない試みを行った。ますます世界的評価の高まるその作品と生涯に対して、美術という新しいアプローチで臨み、「図像」という新視点を提示した。

継続して取り組んでいる巡回上映「優秀映画鑑賞推進事業」では 198 の会場で、普段目にすることができない貴重な作品の上映会を延べ 399 日間開催し、約 8 万人が観賞した。京都国立近代美術館での「NFC 所蔵作品選集 MoMAK Films」及び国立国際美術館での「中之島映像劇場」は、関西におけるフィルムセンター所蔵作品の定期的な上映拠点ともなっている。

また、継続して収集している監督作品や、アニメーション映画、上映企画にあわせて購入した作品、寄贈作品等を積極的に上映した。パンフレット、ポスターなどの貴重な映画関連資料も上映会との連動を考慮して積極的に展示した。

近年の映画フィルムのデジタル化や 35mm 映写機が将来的にますます使用できなくなる状況において、我が国の美術館のナショナルセンターとして、フィルムセンター所蔵の映画フィルム上映及び展覧会の開催に積極的に取り組んだ。

【(小項目)1-1-2】	国立新美術館等の取組	【評定】																					
<p>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</p> <p>(2)美術創造活動の活性化の推進</p> <p>国立新美術館は、全国的な活動を行っている美術団体等に展覧会会場の提供を行うとともに、新しい美術の動向を紹介することなどを通じて、美術に関する新たな創造活動の展開や芸術家の育成等を支援し、我が国の美術創造活動の活性化に資する。</p> <p>また、メディアアート、アニメ、建築など世界から注目される新しい芸術表現の国内外に向けた拠点的な役割を果たすことを目指し、その取組みを積極的に進める。</p>		A																					
		H23	H24	H26	H27																		
		A	A																				
		<p>実績報告書等 参照箇所</p> <p>&lt;実績報告書&gt;</p> <p>P10～13</p> <p>(2)美術創造活動の活性化の推進</p> <p>公募団体等への展覧会会場の提供(国立新美術館)</p> <p>新しい芸術表現への取組み</p>																					
【インプット指標】																							
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 15%;">(中期目標期間)</th> <th style="width: 15%;">H23</th> <th style="width: 15%;">H24</th> <th style="width: 15%;">H25</th> <th style="width: 15%;">H26</th> <th style="width: 15%;">H27</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>決算額(百万円)</td> <td style="text-align: center;">1,934</td> <td style="text-align: center;">1,896</td> <td style="text-align: center;">1,630</td> <td style="text-align: center;">-</td> <td style="text-align: center;">-</td> </tr> <tr> <td>従事人員数(人)</td> <td style="text-align: center;">8</td> <td style="text-align: center;">7</td> <td style="text-align: center;">6</td> <td style="text-align: center;">-</td> <td style="text-align: center;">-</td> </tr> </tbody> </table>	(中期目標期間)	H23	H24	H25	H26	H27	決算額(百万円)	1,934	1,896	1,630	-	-	従事人員数(人)	8	7	6	-	-					
(中期目標期間)	H23	H24	H25	H26	H27																		
決算額(百万円)	1,934	1,896	1,630	-	-																		
従事人員数(人)	8	7	6	-	-																		
<p>1)決算額は、セグメント情報 国立新美術館経常費用を計上している。</p> <p>2)従事人員数は、国立新美術館のすべての研究職員数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。</p>																							
<b>評価基準</b>	<b>実績</b>				<b>分析・評価</b>																		
<p>全国的な活動を行っている美術団体等に展覧会会場の提供を行うとともに、新しい美術の動向を紹介することなどを通じて、美術に関する新たな創造活動の展開や芸術家の育成等を支援し、我が国の美術創造活動の活性化に寄与したか。</p> <p>また、メディアアート、アニメ、建築など世界から注目される新しい芸術表現の国内外に向けた拠点的な役割を果たすことを目指し、その取組みを積極的に進めたか。</p>	<p>公募団体等への展覧会会場の提供(国立新美術館)</p> <p>公募展団体数:69団体</p> <p>年間利用室数:延べ3,500室/年</p> <p>稼働率:100%</p> <p>入館者数:1,205,249人</p> <p>【公募団体への展覧会会場の提供(国立新美術館)過去の実績】</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th></th> <th>H21</th> <th>H22</th> <th>H23</th> <th>H24</th> <th>H25</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>利用団体数</td> <td style="text-align: center;">69団体</td> </tr> <tr> <td>入館者数</td> <td style="text-align: center;">1,246,840</td> <td style="text-align: center;">1,266,989</td> <td style="text-align: center;">1,253,764</td> <td style="text-align: center;">1,259,966</td> <td style="text-align: center;">1,205,249</td> </tr> </tbody> </table>					H21	H22	H23	H24	H25	利用団体数	69団体	69団体	69団体	69団体	69団体	入館者数	1,246,840	1,266,989	1,253,764	1,259,966	1,205,249	<p>国立新美術館が美術団体等に展覧会会場を提供する活動は、我が国独自の文化振興政策でもあり、その点で120万人の入館者を集めるなど、瞠目すべき成果をあげており、高く評価できる。</p> <p>各館における新しい芸術表現への取組みについては、入館者数が目標に達していない企画もあるが、おおむね入館者数が目標入館者数を達成しており、国立新美術館における「第17回文化庁メディア芸術祭」開催や、フィルム</p>
	H21	H22	H23	H24	H25																		
利用団体数	69団体	69団体	69団体	69団体	69団体																		
入館者数	1,246,840	1,266,989	1,253,764	1,259,966	1,205,249																		

- 1 公募団体等から寄せられた意見・要望も参考としつつ、公募展の効率的な開催準備と円滑な運営を図るため、以下のような取組を行った。
  - ・作品搬入出時の車両の入退館時間の指定や駐車場の割振りを団体ごとに実施
  - ・作品用エレベータの使用時間割振りや使用備品の事前配置等の徹底
  - ・審査、展示等に必要な備品の充実
  - ・展示作品の素材や陳列方法等について、施設の管理運営上問題の生じる可能性のある公募団体等との事前協議の徹底
  - ・公募展運営サポートセンターにおいて、使用公募団体等に関する電話(国立新美術館公募展案内ダイヤル)への問い合わせ対応の実施
  - ・公募展のポスター掲示や公募展開催案内チラシの作成及び配布による広報の実施
  - ・館ホームページの公募展紹介ページに、文字情報に加えポスター等の画像情報を掲載することにより広報を充実
  - ・国立新美術館ニュースへ公募団体からの寄稿を掲載することにより、広報の支援を実施
  - ・公募展と企画展の観覧料の相互割引について、実施団体の情報を館内で周知
- 2 公募団体等が行う教育普及活動
 

館を使用する公募団体等が実施する教育普及活動に対し、講堂及び研修室の提供や運営管理上必要な助言、参加者の動線の確保等のサポートを行った。また、館ホームページへ情報を掲載し普及・広報の支援を実施した。
- 3 平成 27 年度に展示室(公募展用)を使用する 69 団体(野外展示場のみ使用団体を含む。)を決定した。
- 4 平成 29 年度に展示室(公募展用)を使用する美術団体等の募集について、館内に検討ワーキングを設置し、情報収集及び検討課題の整理を開始した。

#### 新しい芸術表現への取組み

【東京国立近代美術館本館】

展覧会名	日数	ジャンル	入館者数	目標数	共催者
MOMAT コレクション	293	ビデオ・アート	190,074	150,000	-
フランス・ベーコン展	51	ビデオ・アート	96,168	75,000	日本経済新聞社

・「フランス・ベーコン展」では、ベーコンに影響を受けた振付家による作品(映像)をあわせて展示することで、身体表現がなぜ芸術において根幹的であり続けているかについての理解を深められる工夫をした。

【東京国立近代美術館フィルムセンター】

・イタリア・ローマの現代アート美術館における上映会に日本初期アニメーション映画 6 本を

センターにおける国内外の初期アニメーションの紹介などが行われており評価できる。

新たな芸術表現に関する取組は、「メディア・ミックス」への取組も視野に入れ、展示だけでなく、研究面からの拠点としての充実を望みたい。

貸与したほか、国内ではカナザワ映画祭 2013「ゼロ歳からの映画館」に対し戦前の日本アニメーション映画 5 本の貸与を行うなど、アニメの原点といえる初期アニメーション映画の豊かな創造性と卓抜な技術を広く紹介した。また、デジタル復元版特別上映会においては、デジタル復元した政岡憲三・大藤信郎アニメーション作品 3 本を上映した。

【京都国立近代美術館】

展覧会名	日数	ジャンル	入館者数	目標数	共催者
映画をめぐる美術 - マルセル・プローターズから始める	43	フィルム、写真、ビデオ、インスタレーション等	9,500	15,000	東京国立近代美術館、京都新聞社

・映画という古典的な映像表現から、写真、ビデオプロジェクションや最新のビデオインスタレーションまでを用いた展覧会において、映画という手法から、現在までの多様な技術を用いて表現される美術を検証した。

【国立西洋美術館】

展覧会名	日数	ジャンル	入館者数	目標数	共催者
ル・コルビュジエと 20 世紀美術【注】	79	建築・近代絵画	126,406	-	-

【注】常設展と併設の展覧会のため、会期中の常設展入館者数を展覧会入館者数として記載。

- ・ル・コルビュジエが設計した本館展示室で、芸術家としてのル・コルビュジエの活動をたどった展覧会。
- ・国立西洋美術館では、平成 23 年 6 月にパリのユネスコ本部で開催された第 35 回世界遺産委員会において国立西洋美術館を含む「ル・コルビュジエの建築作品 - 近代建築運動への顕著な貢献」の推薦案件が「記載延期」と決定されて以降、平成 27 年 2 月の改訂推薦書の提出を目指して登録推進事業を継続している。
- ・世界遺産登録を目指した活動に関連し、平成 19 年度に作成した「重要文化財国立西洋美術館本館保存活用計画」について、重要文化財(建造物)である本館の保存の方針をより具体的かつ詳細に示すとともに、登録記念物(名勝地関係)である敷地との一体的な保存の必要性を盛り込むため、株式会社文化財保存計画協会の協力も得て改訂作業にあっていたが、外部有識者を含めた国立西洋美術館修理検討委員会での検討を踏まえ、「重要文化財(建造物)国立西洋美術館本館及び登録記念物(名勝地関係)国立西洋美術館園地 保存活用計画」として平成 25 年 9 月に改訂を行った。
- ・地元自治体との連携世界遺産登録推進活動の一環として、引き続き台東区等と連携し、「世界遺産区民講座 国立西洋美術館・東京文化会館両館施設見学会」、「大茶会」等

のイベントを実施した。

【国立国際美術館】

展覧会名	日数	ジャンル	入館者数	目標数	共催者
アンドレアス・グルスキー展	50	CG を活用した写真	32,897	15,000	読売新聞社、読売テレビ

・ドイツの現代写真をリードし、また世界各地でも個展開催が相次ぐなど、確固たる評価を得ているグルスキーの個展。展示作品の選択から展示順に至るまでが作家自身の手によってなされ、撮影の年代順ではなく、時にはシリーズ作品さえバラバラに配置された作品を、広いスペースを使ってゆったり展示し、一点一点の作品鑑賞とともに、展覧会全体を新たなインスタレーションとして捉えられるような工夫をした。

【国立新美術館】

展覧会名	日数	ジャンル	入館者数	目標数	共催者
カリフォルニア・デザイン 1930-1965 - モダン・リビングの起源	56	建築、デザイン、映像	49,490	34,000	ロサンゼルス・カウンティ美術館
アンドレアス・グルスキー展	66	CG を活用した写真	119,467	54,000	読売新聞社、TBS、TOKYO FM
第 17 回文化庁メディア芸術祭	11	ビデオ・アート、インタラクティブ・アート、アニメーション、マンガ、ゲーム等	38,938	45,000	文化庁
イメージの力 - 国立民族学博物館コレクションにさぐる	36	博物館資料に基づく美術展示	14,711	12,000	国立民族学博物館
中村一美展	12	ウォール・ペインティング	2,466	3,000	

・アニメーション表現などの新しい視覚表現を紹介するための試みとして、(A)「インターカレッジアニメーションフェスティバル(ICAF)2013」への特別協力を行い、(B)「TOKYO ANIMA!2013 秋」への共催を実施した。(A)の ICAF2013 では国内の学生によるアニメーション作品に加え、韓国の映像作品を 4 日間に渡り講堂と研修室 A・B にて上映し、日本のアニメーション表現のこれからの可能性を紹介する機会となった。4 日間の会期中、来場者は 1,634 名であった。(B)の「TOKYO ANIMA! 2013 秋」は、約 30 名の若手映像作家の近作・新作を中心に 2 日間に渡り上映し、延べ 945 名の来場者があった。

【(小項目)1-1-3】	情報の発信	【評定】  A			
【法人の達成すべき目標(計画)の概要】		H23	H24	H26	H27
(3)美術に関する情報の拠点としての機能の向上		A	B		
<p>国立美術館として美術に関する情報の拠点としての機能を向上させるため、国立美術館及び各館のホームページの充実のほか、所蔵作品に関する情報や展覧会活動、その他の活動状況を、情報通信技術を活用して積極的に広く社会に紹介し、国立美術館についての理解を得よう取り組む。</p> <p>また、国内外の美術に関する情報の収集・提供・利用の促進に取り組むとともに、国立美術館が保有する所蔵作品情報等について、関係機関と連携協力し、検索できる環境を構築する。</p> <p>ICT(情報通信技術)を活用した展覧会情報や調査研究成果などの公表等の積極的な情報発信やホームページの充実を図り、ホームページのアクセス件数の年間の平均が、前中期目標期間の年間平均を上回る実績となるよう取り組む。</p> <p>-1 美術史その他の関連諸学に関する基礎資料、国内外の美術館や展覧会に関する情報及び資料を収集し、展覧会活動の推進に役立てるとともに、図書室等において芸術文化に関する情報サービスを広く提供し、その利用者数が前中期目標期間の年間平均(新規開館により利用者が著しく増加した年度の実績を除く)を上回るよう取り組む。</p> <p>-2 所蔵作品データ、所蔵資料データのデジタル化を一層推進し、ネットワークを通じてより良質で多様なコンテンツの提供を進める。特に、各館におけるナショナルコレクションを広く周知するため、所蔵作品総合検索システムの充実を図ることとし、各年度末における掲載作品数(全所蔵作品数に占める掲載件数)の割合が、前中期目標期間の年間平均を上回るよう取り組む。</p> <p>-3 国立美術館全体の機能として、ネットワーク共有を前提とするIDC(インフォメーションデータセンター)を確立し、美術館における情報技術の活用策を積極的に開発しながら、その知見を広く共有化することに取り組む。</p>		実績報告書等 参照箇所			
		<p>&lt;実績報告書&gt; P13～17</p> <p>(3)美術に関する情報の拠点としての機能の向上 情報通信技術(ICT)を活用した展覧会情報や調査研究成果などの公表等 美術情報の収集、記録の作成・蓄積、デジタル化、レファレンス機能の充実</p>			

【インプット指標】

(中期目標期間)	H23	H24	H25	H26	H27
決算額(百万円)	1,229	1,127	1,049	-	-
従事人員数(人)	57	54	50	-	-

1) 決算額は損益計算書 教育普及事業費を計上している。(本項目は教育普及事業費の一部であり、個別に計上できないため、教育普及事業費全額を計上している。)  
 2) 従事人員数は、すべての研究職員数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準	実績	分析・評価									
<p>国立美術館に関する情報を広く社会に紹介し、国立美術館についての理解を得よう、以下のことに取り組んだか。</p> <p>また、国内外の美術に関する情報の収集・提供・利用の促進に取り組むとともに、国立美術館が保有する所蔵作品情報等に</p>	<p>情報通信技術(ICT)を活用した展覧会情報や調査研究成果などの公表等</p> <p>ア ホームページアクセス件数</p> <table border="1" data-bbox="672 1300 1534 1476"> <thead> <tr> <th data-bbox="672 1300 1075 1388">館名</th> <th data-bbox="1075 1300 1310 1388">アクセス件数 (ページビュー)</th> <th data-bbox="1310 1300 1534 1388">目標数 (第2期平均)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="672 1388 1075 1436">本部</td> <td data-bbox="1075 1388 1310 1436">45,217,325</td> <td data-bbox="1310 1388 1534 1436">9,076,555</td> </tr> <tr> <td data-bbox="672 1436 1075 1476">東京国立近代美術館</td> <td data-bbox="1075 1436 1310 1476">12,658,565</td> <td data-bbox="1310 1436 1534 1476">10,500,075</td> </tr> </tbody> </table>	館名	アクセス件数 (ページビュー)	目標数 (第2期平均)	本部	45,217,325	9,076,555	東京国立近代美術館	12,658,565	10,500,075	<p>ホームページのアクセス件数は、目標数を大きく上回っており、展覧会情報や調査研究成果などの公表も積極的に実施されており、評価できる。</p> <p>また、新たな取り組みとして、国</p>
館名	アクセス件数 (ページビュー)	目標数 (第2期平均)									
本部	45,217,325	9,076,555									
東京国立近代美術館	12,658,565	10,500,075									

ついて、関係機関と連携協力し、検索できる環境を構築したか。

・ICT(情報通信技術)を活用した展覧会情報や調査研究成果などの公表等の積極的な情報発信やホームページの充実を図り、ホームページのアクセス件数の年間の平均が、前中期目標期間の年間平均を上回る実績となるよう取り組んだか。

(本館・工芸館・フィルムセンター含む)		
京都国立近代美術館	2,332,653	2,244,585
国立西洋美術館	12,423,130	6,313,881
国立国際美術館	2,514,145	2,266,576
国立新美術館	9,660,555	9,372,754
計	<b>84,806,373</b>	<b>39,774,426</b>

【数値目標の達成状況】

・ホームページアクセス件数(ページビュー)

実績 84,806,373 件

目標 39,774,426 件

目標達成率 213.2%

【ホームページアクセス件数 過去の実績】

	H21	H22	H23	H24	H25
アクセス件数合計	50,292,663	49,210,479	46,207,321	51,970,748	84,806,373
目標数	5,724,278(第1期平均)		39,774,426(第2期平均)		

目標数は前中期目標期間のアクセス件数の平均とする。

イ 各館のICT活用の特徴

(ア)本部

平成20年度にリニューアルした法人ホームページにおいては、引き続き5館の展覧会及び各種催事等トピックスの一覧を維持した。

「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」については、平成23度より「指導者研修Web報告」のページを充実させて、平成25年度も継続してその記録公開に努めた。

(イ)東京国立近代美術館

平成19年度より稼働のコンテンツ・マネジメント・システム(CMS)を用いて、ホームページ・コンテンツの追加更新を迅速化しているが、サイト構成及びデザイン等において一層の改良を図るべく大規模リニューアルを実施するため、ホームページ全体の刷新へ向けて全館的に見直し、全面改修へ向けての仕様書を策定した(改修は平成26年度に実施予定)。

独立行政法人国立美術館所蔵作品総目録検索システムに新収蔵作品の文字画像データを追加するとともに、同システムへの著作権のある作品画像掲載を進めるため、許諾を得た工芸[陶磁]の作品611点について画像を新規登録した。また、工芸についての著作権者情報の整備を引き続き行い、

実際の美術図書館横断検索システム(artlibraries.net)との連携が本年度に軌道に乗ったことをはじめ、新しい情報サービスへの参加なども評価できる。SNSの活用もこの1年間に進歩をみたところであるが、単なる普及手段の利用にとどまらず、ナショナルセンターとしての適切な活用となるよう、自己点検をしつつ検証しつづけてほしい。

美術情報等の基礎資料の収集、デジタル化等については、各館とも着実に進捗しており、今後はこれらの積極的な公開を進めてもらいたい。

また、フィルムセンターにおいては、フィルム以外の映画関連資料のデジタル化が進捗しているが、これらのデータを速やかに公開することが望まれる。

さらに、国立美術館5館全体における情報ネットワークも継続して行われている。今後は、研究紀要などの積極的な公開とともに、情報ネットワークや機関リポジトリを活用し、より一層充実した情報発信の取り組みが望まれる。

国立新美術館のアートライブラリー別館閲覧室の開設も図書資料閲覧のための地道な努力として評価できる。図書室利用者数については、目標値を下回っているが、これは、国立新美術館

	<p>工芸[漆工・染織]の著作権許諾申請手続を開始した。</p> <p>平成 23 年度に着手した東京国立近代美術館所蔵作品管理システムならびに独立行政法人国立美術館総合目録のデータ登録更新のためのインターフェースの改良を、他国立美術館と連携して実装させ、平成 25 年度は各館ローカルシステムと総合目録とのデータ連携を改善した。</p> <p>平成 23 年度に欧米主要美術図書館横断検索システムである artlibraries.net (<a href="http://artlibraries.net/index_en.php">http://artlibraries.net/index_en.php</a>)と国立美術館の図書検索システム(東京国立近代美術館及び国立西洋美術館)の連携可能性について、国立情報学研究所と連携して始めた受託研究の成果により、artlibraries.net への参加を実現させ、全国美術館会議の会報などにおいて国内広報に尽くした。</p> <p>フィルムセンターでは、初めてのウェブ上での所蔵資料公開事業である「NFC デジタル展示室」を開設し、5 回の特集展示を行った。事業関連の情報を提供する「NFC メールマガジン」は着実に登録者が増えている。また、NFCD(ナショナル・フィルムセンター・データベース)については、人物情報の統合を進めるとともに、所蔵映画フィルムの運用を NFCD 上で行えるよう重要な改善を加えた。さらに、映画関連資料へのアクセス希望に対しては、図版提供をすみやかに行うため、また、識別を容易にするため適宜デジタル・データへのスキャンや簡易撮影を行い、データの蓄積を進めた。</p> <p>(ウ)京都国立近代美術館</p> <p>ホームページにおいて、各展覧会の基本情報や講演会、教育普及関連のイベントの案内・報告、美術館ニュースや研究論集の内容紹介、さらには「友の会」の行事報告などを行った。特にコレクション・ギャラリー(常設展示)については、展示替えごとに出品リストや解説を掲載するだけでなく、平成 25 年度から著作権に支障のない範囲で出品作品の画像を掲載し、情報のさらなる充実に努めた。また、レストランのページをリニューアルし、料理の特色やメニューを掲載して、より具体的で親しみやすい内容にした。</p> <p>(エ)国立西洋美術館</p> <p>ホームページやフェイスブック・ページを通じて展覧会や教育普及プログラム、所蔵作品に関する情報等を和英 2 か国語で提供し、活動状況を広く社会に紹介した。</p> <p>所蔵作品データベースについては、科学研究費補助金(研究成果公開促進費)の交付を受けて内容の充実に取り組んだ。平成 25 年度は作品購入に関する法人文書などアーカイブズ(資料)の調査を重点的に行い、各作品の来歴データの追加入力を実施した。また、個々の作品の「展示中」情報ステータスの更新を例年通り実施し、利用者のニーズに応えた。さらに、『研究紀要』などの調査研究成果の公開のため、国立情報学研究所が提供する機関リポジトリ共用サービスの利用について検討を進め、平成 26 年度導入に向けて具体的な準備に着手した。科学研究費助成事業「海外における松方コレクション関連資料の収集と公開」の成果の一部として、展覧会リストである「松方コレクションに関する展覧会:1922-1960 年」をホームページ上で公開した。所蔵作品に関する情報資産の安全な運用のため、所蔵作品情報管理システムのバックアップ・コピーの遠隔地での保管を例年どおり実施した。</p>	<p>の新規開設時に利用者が著しく増加したことが目標値を高く押し上げていることに起因しており、諸資料のデジタル化が進む現状も踏まえ、今後、適切な目標利用者の設定が必要である。</p>
--	--	---

美術史その他の関連諸学に関する基礎資料、国内外の美術館や展覧会に関する情報及び資料を収集し、展覧会活動の推進に役立てるとともに、図書室等において芸術文化に関する情報サービスを広く提供し、その利用者数が前中期目標期間の年間平均(新規開館により利用者が著しく増加した年度の実績を除く)を上回るよう取り組んだか。

(オ)国立国際美術館

老朽化に伴いウェブサーバをリプレイスし、ハードウェアと OS の入替を行った。また、工藤哲巳回顧展においては、共同開催の東京国立近代美術館、青森県立美術館とともに特設ウェブサイトを開設し、最新情報を日々更新した。

(カ)国立新美術館

引き続き展覧会情報検索サービス「アートコムズ」において日本国内の美術館、画廊、美術団体が開催する展覧会の情報を収集し、検索可能とすることに努めた。平成 25 年度は 3,018 件の展覧会情報を 1,170 の美術館・美術団体・画廊の協力により収集・公開した。

ホームページを通じて、国立新美術館の活動を紹介すると共に、これまでのメールマガジンの発行に加え、ソーシャルネットワークサービス(SNS)の活用により、昨今のインターネットの利用形態の変化に対応した幅広い情報発信の道筋について実践的に試行・検証した。

美術情報の収集、記録の作成・蓄積、デジタル化、レファレンス機能の充実

ア 図書資料等の収集

館名		収集件数	累計件数	利用者数	目標利用者数 (第2期平均)
東京国立 近代美術 館	本館	3,388	127,781	2,372	2,921
	工芸館	929	23,814	298	356
	フィルムセンター	3,236	42,610	3,562	3,273
京都国立近代美術館		1,449	23,902	-	-
国立西洋美術館		1,031	47,262	363	399
国立国際美術館		1,488	38,467	-	-
国立新美術館		3,876	130,187	21,941	44,365
計		<b>15,397</b>	<b>434,023</b>	<b>28,536</b>	<b>51,314</b>

注 東京国立近代美術館は本館 4 階、京都国立近代美術館は 4 階、国立西洋美術館は 1 階、国立国際美術館は地下 1 階に図録等が閲覧できる情報コーナーを設け、入館者が自由に閲覧できるようにしており、その場所については、利用者数の把握はしていない。

注 東京国立近代美術館本館の平成 24 年度累計件数は 124,367 件であったが、平成 25 年度に雑誌から図書への移管が 26 件あったため、26 件増となっている。

注 東京国立近代美術館工芸館の平成 24 年度累計件数は 22,888 件であったが、平成 25 年度に図書から雑誌への移管が 3 件あったため、3 件減となっている。  
新規開館により利用者が著しく増加した年度の実績を除く

【数値目標の達成状況】

・図書室利用者数

実績 28,536 人

目標 51,314 人

目標達成率 55.6%

目標未達成の原因・理由

目標未達成の要因として、主に国立新美術館の利用者数が挙げられる。新規開館当初に利用者数が著しく増加した年度(平成 18 年度及び平成 19 年度)以降も、アトライブラリーという新規施設の見学を目的とした利用者が多く見られた。近年は調査・研究目的に所蔵資料の閲覧等や複写を行う利用者が定着してきており、利用者数に落ち着きが見られる。

イ 特記事項

(ア)東京国立近代美術館

本館では、平成 24 年度からの 60 周年事業の一環である 60 年史のデータ集成及び編集作業を進めて、ミュージアム・アーカイブの整備をあわせて進めた。『60 年史』の附録 CD-ROM に PDF ファイルで収めた「企画展出品作家総索引(和・欧)」をデータベース化し、検索システムとしてホームページに公開した。「海外日本美術資料専門家(司書)の招へい・研修・交流事業」を立案して、平成 26 年度に実施するための準備を推進した。

工芸館では、購入及び資料交換・寄贈によって、平成 25 年度も順調に収集件数が増加した。購入については、企画展やテーマ展示の関連資料の収集に努めているが、平成 26 年度開催予定の「大阪万博 デザインプロジェクト 1970」にあわせて、万博当時刊行された会報やデザインガイドなどを収集した。

フィルムセンターでは、一定の網羅性を目指して、映画関連の新刊書と雑誌の収集を行うとともに、未所蔵の古書や一般の書籍流通ルートには乗らない刊行物の収集にも努めている。貴重な映画文献の購入にも努め、平成 25 年度は日本で映画を扱った最初期の文献「実地応用 近世新奇術」を収集した。図書公開への準備としては、今後のデータベース登録を見越して図書室内の映画雑誌などのリスト化を進めた。映画パンフレットについては、OPAC データベースへの登録が進み、外国映画パンフレットの登録が終了している。

(イ) 京都国立近代美術館

開催予定の展覧会に関係する書籍を購入するとともに、研究分担者として外部の研究者と連携して研究をすすめている科学研究補助金によっても図書を収集した。

(ウ) 国立西洋美術館

中世末期から 20 世紀前半までの西洋美術に関する専門書・学術雑誌を収集・整理し、展覧会事業等、館の事業活動の推進に役立てた。学術情報資源を研究資料センターにおいて全国の美術館学芸員や大学院生等にも提供し、西洋美術分野における質の高い情報を提供するよう努めた。欧米の美術図書館横断検索システム「artlibraries.net」にアジア圏の美術館として初めて東京国立近代美術館と共に参加し、欧米諸国の美術図書館との国際連携協力のもと、図書情報の検索環境の充実に取り組んだ。また、所蔵作品に関する研究資料(一過性資料を含む)の収集・整理を行い、美術作品・作家研究基盤の充実に図った。

(エ) 国立国際美術館

国内外の現代美術に関連する図書資料等を中心に収集を継続した。

(オ) 国立新美術館

引き続き日本の展覧会カタログを中心に網羅的・遡及的収集に努め、国内約 400、海外約 100 の美術館・博物館と展覧会カタログの相互寄贈関係を維持している。

平成 25 年 8 月に、別館 1 階に「アーツライブラリー別館閲覧室」を開室した。これまで予約制だった所蔵資料が当日出納(脆弱な資料等一部を除く)できるようになったほか、「アーティスト・ファイル」展資料などを提供している。また、平成 24 年度までに寄贈された複数の個人からの大口寄贈資料についての整理作業を進め、一部を別館閲覧室において公開した。さらに所蔵資料のうち脆弱なものの一部についてデジタル化を行い、画像データを通じた資料閲覧の実現に向けて実証的な検討を開始した。

【図書資料等の収集 過去の実績】

	H21	H22	H23	H24	H25
収集件数	25,495	21,812	23,848	19,494	15,397
累計件数	353,351	375,120	398,972	418,603	434,023
利用者数合計	45,442	42,044	29,186	28,408	28,536

所蔵作品データ、所蔵資料データのデジタル化を一層推進し、ネットワークを通じてより良質で多様なコンテンツの提供を進める。特に、各館におけるナショナルコレクションを広く周知するため、所蔵作品総合検索システムの充実を図ることとし、各年度末における掲載作品数(全所蔵作品数に占める掲載件数)の割合が、前中期目標期間の年間平均を上回るよう取り組んだか。

ウ 所蔵作品データ等のデジタル化

館名		画像データ				テキストデータ			
		デジタル化件数	デジタル化累計	累積公開件数(公開率)	目標公開率(第2期平均)	デジタル化件数	デジタル化累計	累積公開件数(公開率)	目標公開率(第2期平均)
東京国立近代美術館	本館	80	10,639	6,959 (55.8%)	33.0%	255	11,287	10,594 (84.9%)	97.3%
	工芸館	37	4,074	1,136 (34.3%)	5.5%	29	4,382	3,376 (101.8%)	99.5%
	フィルムセンター (映画関連資料)	-	-	-	-	8,337	159,095	-	-
京都国立近代美術館		54	7,519	2,082 (18.1%)	11.4%	399	13,600	12,296 (107.0%)	85.8%
国立西洋美術館		300	5,927	205 (3.7%)	4.4%	825	5,792	4,600 (83.2%)	94.7%
国立国際美術館		387	7,149	3,657 (51.3%)	19.0%	374	8,065	7,180 (100.8%)	97.6%
計		<b>858</b>	<b>35,308</b>	<b>14,039 (35.1%)</b>	<b>17.8%</b>	<b>10,219</b>	<b>202,221</b>	<b>38,046 (95.3%)</b>	<b>93.9%</b>

注 「累計公開件数」は、所蔵作品総合目録における画像及びテキストデータの公開件数である。東京国立近代美術館工芸館、京都国立近代美術館、国立国際美術館では、複数で一揃いの作品を個別に掲載しているため、テキストデータの公開率が高くなっている。国立西洋美術館は「国立西洋美術館所蔵作品データベース」で画像データ 5,630 点を公開している。フィルムセンターについては、映画フィルムを除いた映画の関連資料についての件数を掲載している。

【数値目標の達成状況】

・所蔵作品データ等のデジタル化(画像データ)

実績 35.1%  
 目標 17.8%  
 目標達成率 197.2%

・所蔵作品データ等のデジタル化(テキストデータ)

実績 95.3%  
 目標 93.9%  
 目標達成率 101.5%

【所蔵作品データ等のデジタル化 過去の実績】

(画像データ)

	H21	H22	H23	H24	H25
デジタル化 件数	859	753	1,311	2,078	858
デジタル化 累計	31,036	31,464	32,614	34,450	35308
公開件数	7,257	10,491	12,297	13,212	14,039

(テキストデータ)

	H21	H22	H23	H24	H25
デジタル化 件数	10,221	5,820	4,141	36,926	10,219
デジタル化 累計	144,983	150,797	154,274	192,002	202,221
公開件数	31,666	32,276	33,382	36,876	38,046

・ 国立美術館全体の機能として、ネットワーク共有を前提とするIDC(インフォメーションデータセンター)を確立し、美術館における情報技術の活用策を積極的に開発しながら、その知見を広く共有化することに取り組んだか。

エ インフォメーションデータセンター(IDC)の確立

引き続き国立美術館5館全体においてVPN(暗号化された通信網)を採用し、情報ネットワークの安定かつ高速化を実現し、VPNを用いたグループウェア及びテレビ会議システムを継続して稼働させている。

独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システムに新収蔵作品の文字・画像データを追加するとともに、同システムへの著作権のある作品画像掲載を進めるため、許諾を得た工芸[陶磁]の作品700点について画像を新規登録した。また、工芸についての著作権者情報の整備を引き続き行い、工芸[漆工・染織]の著作権許諾申請手続を開始した。

平成23年度に着手した東京国立近代美術館所蔵作品管理システムならびに独立行政法人国立美術館総合目録のデータ登録更新のためのインターフェースの改良を、他国立美術館と連携して実装させ、平成25年度は各館ローカルシステムと総合目録とのデータ連携を改善した。

平成23年度に欧米主要美術図書館横断検索システムであるartlibraries.net([http://artlibraries.net/index\\_en.php](http://artlibraries.net/index_en.php))と国立美術館の図書検索システム(東京国立近代美術館及び国立西洋美術館)の連携の可能性について、国立情報学研究所と連携して始めた受託研究の成果により、artlibraries.netへの参加を実現させ、全国美術館会議の会報などにおいて国内広報に尽くした。

【(小項目)1-1-4】	教育普及活動の実施状況	【評定】			
【法人の達成すべき目標(計画)の概要】		A			
(4)国民の美的感性の育成		H23	H24	H26	H27
<p>国立美術館における美術教育に関する調査研究の成果を踏まえ、学校や社会教育施設等との連携強化により、子どもから高齢者までを対象とした幅広い学習機会を提供し、各館の年間の平均参加者数が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るよう、それらの参加者数の増加に積極的に取り組む。</p> <p>ボランティアや支援団体の育成と相互協力による教育普及事業の充実を図る。また、ボランティアの参加人数及び活動日数の増加に積極的に取り組む。</p> <p>映画フィルム・資料の所蔵作品を活用し、児童生徒を対象とした「こども映画館」の開催やジュニアセルフガイドの作成など教育普及活動に積極的に取り組む。</p>		A	A		
		実績報告書等 参照箇所			
		<p>&lt;実績報告書&gt; P17～23</p> <p>(4)国民の美的感性の育成 幅広い学習機会の提供 ボランティアや支援団体の育成等による教育普及事業 映画フィルム・資料を活用した教育普及活動</p>			

【インプット指標】

(中期目標期間)	H23	H24	H25	H26	H27
決算額(百万円)	1,229	1,127	1,049	-	-
従事人員数(人)	11	12	11	-	-

- 1) 決算額は損益計算書 教育普及事業費を計上している。
- 2) 従事人員数は、教育普及事業を担当するすべての研究職員数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準	実績	分析・評価																						
<p>国立美術館における美術教育に関する調査研究の成果を踏まえ、学校や社会教育施設等との連携強化により、子どもから高齢者までを対象とした幅広い学習機会を提供し、各館の年間の平均参加者数が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るよう、それらの参加者数の増加に積極的に取り組んだか。</p>	<p style="text-align: center;">幅広い学習機会の提供(講演会、ギャラリートーク、アーティスト・トーク等)</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 40%;">館名</th> <th style="width: 10%;">実施回数</th> <th style="width: 15%;">参加者数</th> <th style="width: 35%;">目標数 (第2期平均)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="3">東京国立近代美術館</td> <td>本館</td> <td>406</td> <td>7,525</td> </tr> <tr> <td>工芸館</td> <td>142</td> <td>2,640</td> </tr> <tr> <td>フィルムセンター</td> <td>183</td> <td>11,836</td> </tr> <tr> <td>京都国立近代美術館</td> <td>70</td> <td>3,060</td> <td>3,724</td> </tr> <tr> <td>国立西洋美術館</td> <td>324</td> <td>15,566</td> <td>10,261</td> </tr> </tbody> </table>	館名	実施回数	参加者数	目標数 (第2期平均)	東京国立近代美術館	本館	406	7,525	工芸館	142	2,640	フィルムセンター	183	11,836	京都国立近代美術館	70	3,060	3,724	国立西洋美術館	324	15,566	10,261	<p>講演会、ワークショップ、ギャラリートーク、アーティストトークなどの幅広い学習機会の提供については、各館で目標が未達のものもあるが、全体では目標を大きく上回るなど、その充実は十分に評価できる。</p> <p>特に、各館における児童生徒にむけたきめ細かい教育的配慮、また教職員対象の取り組みやアーティストのワークショップ</p>
館名	実施回数	参加者数	目標数 (第2期平均)																					
東京国立近代美術館	本館	406	7,525																					
	工芸館	142	2,640																					
	フィルムセンター	183	11,836																					
京都国立近代美術館	70	3,060	3,724																					
国立西洋美術館	324	15,566	10,261																					

国立国際美術館	64	3,076	3,486
国立新美術館	111	17,571	10,518
計	1,300	61,274	44,847

【数値目標の達成状況】

・幅広い学習機会の提供(講演会、ギャラリートーク、アーティスト・トーク等)参加者数  
実績 61,274 人  
目標 44,847 人  
目標達成率 136.6%

ア 各館の特徴

(ア)東京国立近代美術館

(本館)

幅広い層への解説プログラム(所蔵品ガイド、ハイライトツアー、キュレータートーク、音声ガイド、子ども用セルフガイドやイベント等)や来館者サービス(ライブラリ、ショップ、レストラン、休憩室、バリアフリー情報、夜間開館、無料観覧日、MOMAT パスポート等)を一覧できるリーフレット「活用ガイド」を引き続き活用した。

所蔵作品展では、リニューアル工事休館が終わり、開催日数が戻ったため、ガイド等の実施回数や参加者数が回復した。また、6月から7月にかけて東京都図画工作研究会(都図研)との連携授業を行い、7月には休館日を使って研修会を開催してその成果を発表した。

企画展「あなたの肖像 - 工藤哲巳回顧展」では、主催3館の担当者の共同研究の成果を報告するとともに、展覧会開催に向けて人々の期待感を高めるため、展覧会開催の約半年前にプレイベントを行った。

夏の小学生向けプログラム「もうすぐ夏休み!こども美術館」では、異学年児童の同グループ配置、鑑賞活動とギャラリーでの活動を交互に行う構成など新たなプログラム開発に取り組んだ。「竹内栖鳳展 近代日本画の巨人」では、小中学生向けワークシート「こどもセルフガイド」を制作した。

(工芸館)

一定以上の高度で専門的な内容を提供し、近現代工芸及びデザインに関する情報発信、あるいは情報交換を行う場としての工芸館の役割を想定して、ギャラリートーク、アーティスト・トーク、コロキウム、座談会、シンポジウムなどさまざまな手法で教育普及事業を実施した。その一方で、工芸の知識をそれほど持たない来館者でも気軽に参加できるボランティアによるガイドプログラム「タッチ&トーク」においては、単なる情報提供にとどまらない、鑑賞者の自発的な姿勢を促す工芸鑑賞のあり方を検討しながら事業を進めた。

の内容は期待した成果をあげている。ボランティアや支援団体の育成も進んでおり、評価する。

講演会・ワークショップ・ボランティアの活用など、教育普及の分野からの連携や相互依存はますます高まっている。今後は、教育プログラムの経験者や専門家を置くなどきめ細かな対応をすべきである。また、大学生を対象とするキャンパスメンバーズの拡充、中高生の来館促進に向けた環境整備は引き続き努力を重ねてほしい。

子ども向けプログラムとしては、所蔵作品展「ボディ 3」を通して小中学生の工芸への関心を促進させるセルフガイド及びワークシートを制作、また子ども向けのギャラリートークを一般対象とは別途に実施した。また、作家によるワークショップを開催し、素材と技法の体験から工芸の理解を深める様子を検証した。

(フィルムセンター)

大ホールの5企画及び展示室の3企画で、計46回のトークイベントを行った。これらに加え、教育普及を目的とする上映イベントでは、小中学生を対象とする「こども映画館」と、ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」記念特別イベント(「伝説の映画コレクション 早稲田大学演劇博物館所蔵フィルム特別上映会」といった恒例行事に加え、研究員による講演解説付きの特別イベント「政岡憲三・大藤信郎アニメーション作品デジタル復元版特別上映会」「小津安二郎作品デジタル復元版特別上映会」などを開催した。

国立美術館キャンパスメンバーズの加盟校(東京国立近代美術館利用校)が、フィルムセンターの所蔵映画フィルムと施設を利用して講義等を行う東京国立近代美術館フィルムセンター・大学等連携事業及び大学等の学生がフィルムセンターで映画の上映会または展覧会を観覧したことを証明する「鑑賞証明カード」の配付は2年目を迎え、大学等連携事業では、8回(5校)の講義が実施された。

12年目を迎えた「こども映画館」では、映画上映に施設見学や弁士・伴奏付きの無声映画上映などを組み合わせるスタイルを踏襲しつつ、子どもたちが日常のテレビやDVDなどでは接する機会を持ちにくい映画遺産に触れる機会を作るとともに、写真画像や手作りの動画等も用いて、わかりやすい解説を行うよう心がけた。相模原分館では、相模原市及び独立行政法人宇宙航空研究開発機構(JAXA)と締結した文化事業等協力協定により、相模原市内の小・中学生並びに相模原市及びJAXAとの共催事業の参加者を対象に、無料で映画鑑賞と保存施設の案内を実施した。映画フィルムの受入・検査・収納までの工程を解説し、映画フィルムの保存についても普及することができた。

(イ)京都国立近代美術館

引き続き企画展ごとに講演会等を実施した。「映画をめぐる美術 - マルセル・ブロータースから始める」では、出品作家3名による連続アーティスト・トークを開催するとともに、夜間開館の時間を利用して「金曜夜の上映プログラム」を3度にわたり開催した。「皇室の名品 - 近代日本美術の粋 -」では、天皇陛下の傘寿祝賀記念として「雅楽演奏会」を開催した。

また、引き続き展覧会に即した内容でワークショップを企画した。「開館50周年記念特別展 交差する表現 工芸/デザイン/総合芸術」では、再現展示された(スターバー)を利用したワークショップ「カンパイ・かざる・グラス」を開催した。「芝川照吉コレクション展 ~ 青木繁・岸田劉生らを支えたコレクター」では、ご親族の協力を得ながらワークショップ「私の蔵書印を作ろう」を開催した。「泥象 鈴木治の世界 - 「使う陶」から「観る陶」、そして「詠む陶」へ -」では、「鑑賞」に重点を置いたワークショップを二つ開催し、未就学児に向けた美術鑑賞の機会を積極的に提示した。

学校との連携では、平成24年度に引き続き、京都市教育委員会、京都市図画工作教育研究会と

の共催で、小学校教員を対象に鑑賞教育の指導力向上に向けた講座「京都市図画工作科指導講座」を開催した。教員と美術館の距離が縮まるよう、ワールドカフェなどの意見交換のメソッドを取り入れ、内容面でも改善を加えた。

また、大阪教育大学附属池田小中学校と連携をはかり、約 160 名の子どもたちがギャラリートークを体験した。ギャラリートーク体験は作品に対する理解を深めるとともに、子どもたち自身が後日学校で行うギャラリートークにおいて、話すテーマや内容を構成する時にヒントとなるよう実践した。

#### (ウ)国立西洋美術館

年に 1 回、土日の 2 日間に館を無料開放する「ファン・デー」は、従来は常設展を中心としたプログラムを組んでいたが、平成 25 年度は企画展「ル・コルビュジエと 20 世紀美術」を活用し、同展のギャラリートークや建築ツアーを実施した。常設展を活用した恒例のプログラムが利用者の間に定着している中で、平成 25 年度には常設展示室内での企画展開催や施設改修のための一部閉室により常設展示の入れ替えが頻繁にあり、教育普及プログラムの内容や実施回数にも影響を及ぼした。安定した常設展の必要性和重要性が改めて認識された一年であった。

#### (エ)国立国際美術館

引き続き企画展ごとに講演会、対談、ギャラリートークなどを実施するとともに、コレクション 1 特集展示「塩見允枝子とフルクサス」の関連イベントとしてのコンサート「Music Today on Fluxus 蓮沼執太 vs 塩見允枝子」や、支援団体との協力によるミュージアムコンサート等を開催した。また、「あなたの肖像 - 工藤哲巳回顧展」に関連した国際シンポジウムや、英国のテートから専門家を招いた保存・修復に関する国際シンポジウム等も開催した。

また、引き続き小中学生を対象とした鑑賞ツアー「こどもびじゅつあー」に加えて、参加者が比較的参加しやすい長期休暇期間中(夏休み、冬休み、春休みなど)に、集中的に親子で展覧会に親しむ手だてとなる鑑賞教育プログラム「なつやすみびじゅつあー」、「びじゅつあーすべしやる」を実施した。「なつやすみびじゅつあー」、「びじゅつあーすべしやる」では、同時期に開催中の企画展と関連したテーマを選び、タピスリーを展示した「貴婦人と一角獣展」の開催中には、織り物づくり体験、「アンドレアス・グルスキー展」開催中には、参加者が自分で撮影した写真を使った作品制作等、実際に作品を制作することにより、企画展をより深く鑑賞できるよう工夫した。

#### (オ)国立新美術館

講演会や作品解説会、シンポジウムなど、展覧会の内容をより深く検証するための従来のイベントに積極的に取り組んだほか、平成 25 年度の新規事業として、「アンドレアス・グルスキー」展において展示室内での学芸員によるギャラリートークを実施した。開館以来の特徴的な試みである「アーティスト・ワークショップ」では、初めて外部機関と協力し、21\_21 DESIGN SIGHT との共催で「“ハウス・オブ・カード”をつかったワークショップ」を開催した。また、自主展に合わせた鑑賞ガイドシリーズ「アートのとび

ら 国立新美術館ガイドブック』に加え、共催展「アメリカン・ポップ・アート展」でも鑑賞ガイドを作成・無料配布した。

このほか、美術館の設計者である建築家黒川紀章氏の七回忌を機に、日本デザインフォーラムとの共催で3日間にわたる大型イベントを開催したほか、「イメージの力」展では全館協力のもと、同展と美術館の普及を目的に、講演会やワークショップ、コンサート、スタンプラリー等で構成されたプロジェクト「みる、きく、あそぶ イメージの力 ウィークエンド」を2日にわたって開催するなど、多彩なプログラムの実施に努めた。

平成24年度に初めて取り組んだ未就学児を対象にしたワークショップを、引き続き企画・実施した。未就学児(2～6歳)親子を対象に、大森靖枝氏(劇団風の子東京・演出家)を講師に招いた「はじめてのアート - つくって遊ぶ、劇ごっこ - 」は、応募者も多く、参加者の満足度も非常に高かった。また、「イメージの力」展に合わせて開催したワークショップ「わたし みんな めぐる イメージ 世界のものと向き合おう」では、同じ内容を初日は中学生以上向け、2日目は子供(小学校4年～6年生)向けのプログラムとして企画した。一方、21.21 DESIGN SIGHTとの共催による「“ハウス・オブ・カード”をつかったワークショップ」と、「みる、きく、あそぶ イメージの力 ウィークエンド」に合わせて開催したワークショップ「折りジナルフェイスをつくろう!」は、事前申込不要の自由参加型ワークショップであったが、小さな子供でも楽しめる内容としたことから未就学児を含む家族や親子の参加が非常に多かった。

【幅広い学習機会の提供(講演会、ギャラリートーク、アーティストトーク等)過去の実績】

	H21	H22	H23	H24	H25
実施回数	766	667	671	676	1,300
参加者数合計	52,354	41,183	51,653	74,251	61,274

ボランティアや支援団体の育成と相互協力による教育普及事業の充実を図ったか。また、ボランティアの参加人数及び活動日数の増加に積極的に取り組んだか。

ボランティアや支援団体の育成等による教育普及事業

ア ボランティアによる教育普及事業

館名	ボランティア登録者数	ボランティア参加者数	事業参加者数	
東京国立近代美術館	本館	40	545	4,873
	工芸館	30	244	1,479
京都国立近代美術館		32	-	-
国立西洋美術館		45	542	10,356
国立国際美術館		25	31	561
国立新美術館		80	106	4,070
計	252	1,468	21,339	

ボランティアや支援団体による教育普及事業については、事業参加者数が昨年度を大幅に上回っており、安定した活動となっており、また、コンサートの開催や企業との連携などの着実な努力を評価する。

	<p>イ 各館の特徴</p> <p>(ア)東京国立近代美術館</p> <p>本館では、ガイドスタッフのフォローアップ研修において、5月に一條彰子(主任研究員)が「ドイツと北米、美術教育の現場から」、1月に大高幸氏(放送大学講師)が「米国の美術館でのギャラリートークについて」の講演を行い、海外の教育普及事業について理解を深めた。また1月の研修は、ガイドスタッフ有志による研修会を反映し講師とガイドスタッフとの協議の時間を設けた。夏の小中学生向けプログラム KIDS MOMAT2013 では、ガイドスタッフが「もうすぐ夏休み！こども美術館」、「夏休みトークラリー」のスタッフを担当した。</p> <p>工芸館では、長期休館に伴い、ボランティアによる事業回数は減少した。一方、学校等団体対応の機会の増加にあわせ、平日午前中の活動可能な人を中心に新規募集を行い、6名の養成研修を実施した。平成26年度からの正規採用に向けて、養成研修は14日間約70時間にわたり、工芸の素材、技法、歴史、また作品の扱い方や接遇等の内容で構成した。工芸の素材・技法は多様かつ複雑であるが、プログラム参加者の反応に即して適切な情報を提供し、作品への関心を深めていくか、ディスカッションを重ねながら研修を進めた。また、この養成研修を通して得た新たな気づきは登録中のメンバーとも共有し、フォローアップ研修のテーマにおいて検討を重ねた。夏のKIDS MOMAT2013では、ガイドスタッフが「こどもタッチ&amp;トーク」、「親子でタッチ&amp;トーク」を企画、実施した。</p> <p>(イ)京都国立近代美術館</p> <p>京都市内博物館施設連絡協議会及び京都市教育委員会が主催する「京都市博物館ふれあいボランティア養成講座」の受講・修了者が所属する京都市博物館ふれあいボランティア「虹の会」からボランティアを受け入れ、来館者へのアンケート調査回収、集計に携わってもらうことで、ボランティアの経験、知識の向上等に協力した。また、京都市博物館ふれあいボランティア「虹の会」の研修会実施に協力し、研究員による解説等を行った。</p> <p>(ウ)国立西洋美術館</p> <p>年々利用者が増加してきたスクール・ギャラリートークに対応するためにボランティア・スタッフの募集を行い、学校と家族向けプログラム担当者8名、週末の建築ツアー担当者5名を新たに採用し、1年をかけてプログラムに必要な技術・知識の研修を実施した。平成25年度は、スクール・ギャラリートークの数こそ減少したが、それ以外のプログラムは例年通り充実した活動を実施した。現スタッフと共に、新規スタッフはファン・デー、どようびじゅつ、ウィンター・プログラムなどのサポートに入ることで実践に向けての準備も行った。</p> <p>(エ)国立国際美術館</p> <p>学生ボランティアを広く募り、教育普及事業の準備補助、実施補助、図書資料等の整理、「国立国際美術館友の会」発送業務補助等、美術館運営の補助業務を実施することを通して、美術館活動に接</p>	
--	--	--

する機会を提供した。

(オ)国立新美術館

学生ボランティアである「サポートスタッフ」として、80名の大学生・大学院生が登録した。美術や美術史だけでなく、幅広い分野の専攻の学生が、講演会やシンポジウム、ワークショップの運営補助、広報事業の補助などの活動に参加した。館内の職員にサポートスタッフ事業への協力を積極的に呼びかけ、その結果、サポートスタッフの活動回数は大幅に増加した。

ウ 支援団体等の育成と相互協力による事業

(ア)コンサート等の実施

京都国立近代美術館では、京都市立芸術大学との共催によるコンサート「京都国立近代美術館ホワイエコンサート」を開催した。(計2件、2回)

国立西洋美術館では、「ウィンター・プログラム」クリスマスキャロル・コンサート、NPO法人ジャパンアカデミーフィルハーモニックとの連携による「ファン・デー2013」前庭コンサートを開催した。(計2件、10回)

国立国際美術館では、コレクション 1 特集展示「塩見允枝子とフルクサス」の関連イベントとして「Music Today onFluxus 蓮沼執太 vs 塩見允枝子」、公益財団法人ダイキン工業現代美術振興財団との連携によって「国立国際美術館ミュージアムコンサート」を開催した。また、電子音響芸術研究会の主催で開催された「Japan Electroacoustic Music Concert 日本の若き電子音楽作曲家による、アコースモニウム空間音響芸術演奏会」に協力し、当館客員研究員がアフタートークに参加した。(計3件、3回)

国立新美術館では、企業協賛金を活用した館主催のロビーコンサート「国立新美術館サマー・ジャズコンサート」及び「国立新美術館音楽の楽しみ『弦楽四重奏の魅力』」を開催した。(計2件、2回)

(イ)ぐるっとパスへの参加

東京の美術館・博物館等 77 施設が参加する共通入館券事業「東京・ミュージアムぐるっとパス2013」及び関西の美術館・博物館等 59 施設が参加する「ミュージアムぐるっとパス・関西 2013」に参加し、所蔵作品展観覧料の無料化または割引や、企画展観覧料の割引などを実施した。

(ウ)NPO 法人との連携

国立西洋美術館では、NPO 法人ジャパンアカデミーフィルハーモニックとの連携による「ファン・デー2013」前庭コンサートを開催した。(8月10日、11日 計6回)

国立国際美術館では、NPO 法人大阪美術市民会議との共催により、「現代美術シンポジウム：アートにブレイクはあるのか？ 私が垣間見た世界」を開催した。

(エ)企業との連携

東京国立近代美術館及び国立西洋美術館では、三菱商事株式会社と共同で行っている障がい者のための鑑賞プログラムを実施した。

東京国立近代美術館では、「ジョセフ・クーデルカ展」(11月30日)の閉館後に障がい者特別内覧会を実施し、参加者は50名であった。

国立西洋美術館では、「ラファエロ」(4月27日)、「モネ、風景を見る眼」(2月1日)を対象に障がい者特別内覧会を実施し、参加者は674名であった。

東京国立近代美術館工芸館では、「工芸からK GEIへ」展の会期中(平成26年2月10日実施)、公益財団法人ポーラ伝統文化財団と協力して「MOVIE + TOUCH & TALK PART 6 - 映画上映 + 作品鑑賞 -」を、工芸館の展示室を使って開催した。これは工芸館の鑑賞プログラム「タッチ&トーク」とポーラ伝統文化財団が所有している工芸技術記録映画の鑑賞をドッキングしたもので、人間国宝の技を伝える記録映画を鑑賞した後、関連する作品や資料を実際に手にとって鑑賞する「さわってみようコーナー」の体験と、開催中の展覧会を研究員のギャラリートークによって鑑賞した。参加者は50名であった。

国立国際美術館では、企業とのタイアップによる前売券の発券、企業等が発行する印刷物・ホームページへの展覧会情報の掲載等、企業との連携を進めた。

朝日新聞グループ 朝日友の会、(株)阪急阪神カード、(株)京阪カード及び大阪市交通局の情報誌・ホームページに展覧会情報を掲載するとともに割引を実施した。

近隣ホテルと連携し、広報誌への情報掲載及びホームページのリンク等を実施した。「Osaka メセナカード」と連携し、カードの普及広報を行った。

中之島地区にある企業等からなる「中之島まちみらい協議会」にオブザーバーとして協力するとともに、同協議会メンバーである京阪電鉄の広報誌において、展覧会及びイベントの広報を行った。

国立新美術館では、外部協力者(参与)と連携し、外部資金の募金活動を行い、コンサート事業等の支援を目的に、企業から協賛金を受け入れた。企業協賛金を活用した事業として、託児サービスの提供(36回)、JAC(Japan Art Catalog)プロジェクトとして海外の日本美術の研究拠点4箇所へ国内で開催された展覧会図録の寄贈、教育普及事業としてワークショップ開催、講演会及びシンポジウム開催、鑑賞ガイドの作成を行った。

(オ)その他

京都国立近代美術館では、京都ミュージアムズ・フォーの連携講座として講演会「鈴木治の陶芸」(講師:中尾優衣研究員)を実施した。また、京都岡崎魅力づくり推進協議会に協力し、「美術館学芸員さんと巡る、展覧会の楽しみ方」を開催した。

国立西洋美術館では、国立西洋美術館世界遺産登録上野地区推進委員会との共催により「国立西洋美術館 大茶会」(10月28日、1回)、「ル・コルビュジエと20世紀美術」展無料観覧を実施した。また、一般社団法人アーツアライブが実施した認知症鑑賞プログラムに協力した(6月20日、10月23

日、12月18日、1月22日、計4回)。

国立新美術館では、政策研究大学院大学学生向けガイダンスを実施した(2回)。また、絵画鑑賞を通じて障害者への理解を深めることを目的に、港区内の障害者施設で制作された作品を展示する「地域で共に生きる障害児・障害者アート展」(主催:港区、共催:国立新美術館)を実施した。

【ボランティアによる教育普及事業 過去の実績】

	H21	H22	H23	H24	H25
事業参加者数	8,229	9,777	12,385	11,108	21,339
ボランティア登録者数	212	240	252	279	252
ボランティア参加者数	1,444	1,756	1,528	1,484	1,468

映画フィルム・資料の所蔵作品を活用し、児童生徒を対象とした「こども映画館」の開催やジュニアセルフガイドの作成など教育普及活動に積極的に取り組んだ。

**映画フィルム・資料を活用した教育普及活動**

京都国立近代美術館では、東京国立近代美術館フィルムセンターとの共同主催による映画上映「NFC 所蔵作品選集 MoMAK Films」を5回にわたり実施した。監督映画上映記念として松本俊夫氏によるアフタートークを実施し、内容を充実させた。また、上映作品プログラムのデザインを一新するとともに、展覧会広報物にも「NFC 所蔵作品選集 MoMAK Films」の情報を載せるなど、広報に力を入れた。

国立国際美術館では、映画上映「中之島映像劇場」の第6回、第7回を開催した。第7回は、東京国立近代美術館フィルムセンターとの共催により、1920年代から1946年までの貴重な映像フィルムにより日本の漫画映画の誕生と発展をたどるプログラムを企画し、3日間でのべ1,000人を超える来場者があった。

これらの共催事業は、関西におけるフィルムセンター所蔵作品の定期的な上映拠点の形成に、堅実な成果を上げている。

< 映画フィルム・資料等を活用した教育普及活動 >

- ・「こども映画館 2013年の夏休み」回数:4回、参加者数:522人
- ・相模原分館「フィルム上映&施設ツアー」(JAXA 特別公開との共催事業)回数:8回、参加者数:1,047人
- ・相模原分館 さがみ風っ子「親子映画鑑賞会」回数:2回、参加者数:49人

12年目を迎えた「こども映画館」では、平成25年度も映画上映に施設見学や弁士・伴奏付きの無声映画上映などを組み合わせるスタイルを踏襲しつつ、子どもたちが日常のテレビやDVDなどでは接する機会を持ちにくい映画遺産に触れる機会を作るとともに、写真画像や手作りの動画等も

映画フィルム・資料の所蔵作品を活用した教育事業では、関西におけるフィルムセンター所蔵作品の定期的な上映拠点形成、12年目を迎えた「こども映画館」の定着、また相模原分館におけるJAXAとの連携事業は、デジタル化が進む中で、フィルム保存の重要性や文化財としての重要性の意義を広く知らせるのみならず、将来的な観客層の育成や地域との連携、広報活動の事例として評価できる。

また、フィルムセンターにおけるキャンパス・メンバーズの加盟校との連携事業は2年目を迎え、前年の倍となる8回が開催され、今後もさらに広がるのが期待でき、評価できる。

	<p>用いて、わかりやすい解説を行うよう心がけた。</p> <p>相模原分館では、相模原市及び独立行政法人宇宙航空研究開発機構(JAXA)と締結した文化事業等協力協定により、相模原市内の小・中学生並びに相模原市及び JAXA との共催事業の参加者を対象に、無料で映画鑑賞と保存施設の案内を実施した。映画フィルムの受入・検査・収納までの工程を解説し、多くの参加者から好評を得、映画フィルムの保存についても普及することができた。</p>	
--	--	--

【(小項目)1-1-5】	調査研究の実施状況					【評定】			
【法人の達成すべき目標(計画)の概要】						A			
(5) 調査研究成果の反映						H23	H24	H26	H27
各館の役割・任務に従い、展覧会開催のための調査研究、教育普及活動のための調査研究、情報の収集・提供のための調査研究等を、外部資金の活用を含めて計画的に実施し、これらの成果を確実に美術館活動に反映させる。なお、実施に当たっては、国内外の博物館・美術館及び大学等の機関との連携協力を図り、調査研究成果の共有を図る。						A	A		
						実績報告書等 参照箇所			
【インプット指標】						<p>&lt; 実績報告書 &gt; P24～39 (5) 調査研究成果の美術館活動への反映 調査研究一覧 展覧会カタログの執筆 研究紀要の執筆 館ニュース等の執筆</p>			
						<p>&lt; 実績報告書 &gt; P77～83 (2) 国内外の美術館等との連携 シンポジウムの開催等による国内外の優れた研究者等との人的ネットワークの構築 我が国の作家、美術作品による展覧会開催のための海外の美術館との連携・協力 その他海外の美術館との連携・協力</p>			
(中期目標期間)	H23	H24	H25	H26	H27				
決算額(百万円)	318	324	280	-	-				
従事人員数(人)	57	54	50	-	-				
1) 決算額は損益計算書 調査研究事業費を計上している。									
2) 従事人員数は、すべての研究職員数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。									
評価基準	実績					分析・評価			
各館の役割・任務に従い、展覧会開催のための調査研究、教育普及活動のための調査研究、情報の収集・提供のための調査研究等を、外部資金の活用を含めて計	調査研究一覧 ア 東京国立近代美術館 (本館)					展覧会開催のための調査研究等は着実に実施されて、他機関との連携、外部資金の獲得を含め、その達成度は高い水準で成果をあげたと評価する。			

<p>画的に実施し、これらの成果を確実に美術館活動に反映させたか。なお、実施に当たっては、国内外の博物館・美術館及び大学等の機関との連携協力を図り、調査研究成果の共有を図ったか。</p>	調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関	<p>各館の研究員の業務が過重負担の領域に達していることはよく認知しているが、研究テーマが展覧会等によらない長期的かつ総合的な内容への取組や、研究成果のピアレビュー、我が国の主要学会などでの成果発表や査読付き学会誌への投稿などの努力も求めたい。</p>
	フランシス・ベーコン	「フランシス・ベーコン展」を開催しカタログを発行	豊田市美術館	
	竹内栖鳳	「近代日本画の巨人 竹内栖鳳展」を開催しカタログを発行	京都市美術館	
	ジョセフ・クーデルカ	「ジョセフ・クーデルカ展」を開催しカタログを発行		
	工藤哲巳	「あなたの肖像 工藤哲巳回顧展」を開催しカタログを発行	国立国際美術館、青森県立美術館	
	コレクションを中心とした小企画 都市の無意識	小冊子を発行、ギャラリートーク開催		
	コレクションを中心とした小企画 泥とゼリー	小冊子を発行、ギャラリートーク開催		
	MOMATコレクション特集「何かがおこってる：1907-1945の軌跡」	MOMATコレクション特集「何かがおこってる：1907-1945の軌跡」の開催及び章パネル、解説キャプション執筆、ギャラリートーク開催		
	菱田春草作品の科学調査	平成26年度に「菱田春草展」を開催し、カタログを発行	東京文化財研究所、東京藝術大学、福井県立美術館、日本経済新聞社	
	鑑賞教育に関する美術館と学校の連携や、鑑賞と表現の授業の連続性	教員研究・研修会の実施	東京都図画工作研究会	
	美術館の教育普及事業(ワークショップ、鑑賞ガイド等)	ワークショップの実施、セルフガイドの制作		
	国立美術館の情報資源と国立情報学研究所によるWebcatPlus、文化庁文化遺産オンライン等に掲載の文化情報資源を、国立美術館「想 - IMAGINE」において連携して検索・閲覧できるシステムの公開	国立美術館「想 - IMAGINE」の公開	国立情報学研究所、国立国会図書館	
国立情報学研究所との共同による海外主要美術図書館横断検索システム(artlibraries.net)と国立美術館図書館OPACとの連携可能インターフェース	artlibraries.netへの参加による美術書誌情報の発信	国立情報学研究所、artlibraries.net、カールスルーエ工科大学		

1960-70年代の概念芸術:作品の所在調査とデータ・ベース構築(科研費 基盤B 研究代表者:中林和雄、平成24年度~26年度)	データ・ベース「1960-70年代の概念芸術」を構築	
美術館の所蔵作品を活用した鑑賞教育プログラムの開発(科研費 基盤B 研究代表者:一條彰子、平成24年~平成26年)	所蔵作品を活用した鑑賞教育への反映	
1900 -30年代フランスの美術と建築における軸測投影に関する総合的研究(科研費 若手B 研究代表者:米田尚輝、平成24~26年度)	論文「モンドリアンとファン・ドゥースブルフのグラフィック・イメージ」の執筆	国立新美術館
(工芸館)		
調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関
児童を対象とする工芸作品の鑑賞教育	タッチ&トークの構成	東京都図画工作研究会
児童・生徒を対象とする工芸素材と技法の体験及び鑑賞教育	セルフガイドの作成	多摩美術大学
一般鑑賞者を対象とする工芸技法の鑑賞教育の推進に関する調査研究	「工芸からK GEIへ」展カタログ	日本工芸会
現代のプロダクトデザインに関する調査研究	企画展「現代のプロダクトデザイン Made in Japanを生む」	日本デザインコミッティー
工芸の現代的表現に関する調査研究	米・モリカミ博物館「現代の日本工芸」展	文化庁、外務省、在マイアミ総領事館、モリカミ博物館
東京オリンピックと社会システムに関する調査研究(科研費「社会システム<芸術>とその変容」)	公開コロキウム「社会システムのなかのオリンピックとデザイン」(東近美)2013年4月21日	科研費
東アジア地域のデザインに見る交流に関する歴史的研究:中国、台湾、韓国、日本(科研費 挑戦的萌芽研究 研究代表者:木田拓也、23年 25年)	企画展「越境する日本人展」(平成24年度)	

(フィルムセンター)		
調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関
国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)会員、その他同種機関、現像所等からの情報に基づく、未発見の日本映画フィルムについて	右記諸機関からの情報に基づき、フィルムの収集、保存・復元の検討を行った。	UCLAフィルム・アンド・テレビジョン・アーカイブ、ジョージ・イーストマン・ハウス、福岡市総合図書館(以上FIAF機関)、現像所
文化庁との共同事業による「近代歴史資料調査」の結果に基づき、新たに残存が確認された映画フィルムについて	『日本南極探検』(1912年)について、所有者からフィルムを借用し、内容確認及び今後の保存・復元に向けて、現物調査を開始した。	
可燃性フィルムを含む映画フィルム及びデジタルメディアの登録・長期保管・保存・変換、アナログ及びデジタル技術を活用した復元、及び映写について	・所蔵ドイツ映画の可燃性フィルムより不燃化作業を行った。 ・平成15年にデジタル復元を行った『斬人斬馬剣』(1929年)の保存用デジタルテープのメディア及びフォーマット変換を行った。 ・小津安二郎監督カラー作品4作品のデジタル復元を初め、多くのフィルムの購入・複製化を行った。	日本映画製作者連盟、コミュニティシネマセンター、映画製作会社、現像所、映画映像機器メーカー
清水宏監督に関する調査研究	上映会「生誕110年 映画監督 清水宏」	
東宝の歴史と作品に関する調査研究	上映会「よみがえる日本映画 vol.6[東宝篇] 映画保存のための特別事業費による」	
無声映画に関する調査研究	上映会「シネマの冒険 闇と音楽 2013 ロイス・ウェバー監督選集」	
山田洋次監督に関する調査研究	上映会「映画監督 山田洋次」	
所蔵外国映画に関する調査研究	上映会「テクニカラー・プリントでみる NFC所蔵外国映画選集」	
松竹の歴史と作品に関する調査研究	上映会「よみがえる日本映画 vol.7[松竹篇] 映画保存のための特別事業費による」	
現代日本映画に関する調査研究	上映会「自選シリーズ 現代日本の映画監督2 大森一樹」	
新収蔵作品とその作者や時代背景に関する調査研究	上映会「よみがえる日本映画 vol.6[東宝篇] 映画保存のための特別事業費による」並び	

	に「よみがえる日本映画 vol.7[松竹篇] 映画保存のための特別事業費による」	
新たに復元された映画とその作者、技術フォーマットや時代背景に関する調査研究	教育普及事業「小津安二郎作品デジタル復元版特別上映会」並びに「政岡憲三・大藤信郎アニメーション作品デジタル復元版特別上映会」	
日本映画におけるスチル写真	展覧会「映画より映画的！ 日本映画 スチル写真の美学」の企画構成	
チェコの映画ポスター	展覧会「チェコの映画ポスター」の企画構成	京都国立近代美術館
小津安二郎作品における画像	展覧会「小津安二郎の画像学」の企画構成	
映画美術資料を調査及び整理するとともに、その画像をデジタル化し、若手美術監督等の育成及び映画美術の研究に活用することを目的とする「日本映画美術遺産プロジェクト」	映画資料のアーカイビング	協同組合日本映画・テレビ美術監督協会
無声映画の音 帝政期ロシアにおける初期映画興行研究(科研費 若手B 研究代表者:大傍正規、平成23年度～26年度)	その他の美術館活動推進のための調査研究	

#### イ 京都国立近代美術館

調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関
近代「工芸」概念	展覧会「開館50周年記念特別展」の開催	
近代におけるコレクターと美術とのかかわり	展覧会「芝川照吉コレクション展」の開催、所蔵作品目録の刊行	
陶芸家・鈴木治	展覧会「泥象 鈴木治の世界」の開催	
映画をめぐる美術	展覧会「映画をめぐる美術」の開催	東京国立近代美術館
皇室ゆかりの近代洋画・日本画・工芸	展覧会「皇室の名品」の開催	宮内庁三の丸尚蔵館

	ファッション	展覧会「Future Beauty」の開催	京都服飾文化研究財団
	チェコの映画ポスター	展覧会「チェコの映画ポスター」の開催	東京国立近代美術館フィルムセンター
	日本近代洋画の東西	国立美術館巡回展「西洋への憧れ 個のめざめ」の開催	川崎市立美術館 佐倉市立美術館
	洋画家・浅井忠	国立美術館巡回展 第二部「浅井忠と京都の弟子たち」の開催	佐倉市立美術館
	子どもを対象とした鑑賞教育	展覧会に関連したワークショップの開催	
	ベルリン工芸博物館開館時の展示方法一考 源泉としてのジオラマとグロピウス一族 (科研費 基盤C 研究代表者:池田祐子、平成25年～平成27年)	工芸(デザイン)コレクションが持つ意義と、その収蔵活動ならびにコレクション・ギャラリーでの展示方法の検証	
	近代美術工芸における「図案」と「図案家」をめぐる基礎的研究 (科研費 若手B 研究代表者:中尾優衣、平成25年～平成28年)	研究成果の一部を平成26年度に実施する展覧会「うるしの近代 京都、「工芸」前夜から」で発表予定。	
<b>ウ 国立西洋美術館</b>			
	調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関
	ラファエロ	展覧会及び講演会等の開催	フィレンツェ文化財・美術館特別監督局
	ミケランジェロ	展覧会及び講演会等の開催、図録の刊行	カーサ・ブオナローティ、福井県立美術館
	モネと19世紀フランス風景画	展覧会及び講演会等の開催、図録の刊行	ポーラ美術館
	ル・コルビュジエの絵画	展覧会及び講演会等の開催、図録の刊行	ギャラリー・タイセイ
	スペインのアンフォルメル芸術	展覧会の開催、ギャラリートーク等の開催、図録の刊行	国立ソフィア王妃芸術センター
	旧松方コレクションを含む松方コレクション全体	作品収集、作品及び文研調査、所蔵作品展・企画展、刊行物、講演発表、解説等	

	中世末期から 20 世紀初頭の西洋美術	同上	
	所蔵版画作品	同上	
	美術館教育	教育普及プログラムを実施。鑑賞教育教材制作、インターンシップ、ボランティア指導、解説等	
	ル・コルビュジエによる国立西洋美術館本館の設計	教育普及プログラムの実施。文献及び図面調査。本館保存に関する修理検討委員会開催及び保存活用計画改訂。	
	ジャック・カロ	展覧会及び講演会等の開催準備	
	橋本コレクション	同上	
	フェルディナント・ホドラー	同上	ベルン美術館、スイス芸術学研究所、ジュネーヴ芸術・歴史博物館
	グエルチーノ	同上	ポーロニャ文化財・美術館特別監督局
	ボルドーの美術	同上	ボルドー美術館、アキテーヌ美術館、装飾芸術美術館
	国立西洋美術館所蔵作品データベース(科研費(研究成果公開促進費(データベース))、研究代表者:川口雅子)	国立西洋美術館所蔵作品データベースの構築、整備	
	17世紀オランダ美術の東洋表象研究(科研費(基盤A)、研究代表者:幸福輝)	作品及び文献調査、データベースの構築	
	共和主義におけるチャールズ・ウィルソン・ピールのミュージアムの教育的役割と視覚による教育の成立(科研費(基盤C)、研究代表者:横山佐紀)	教育普及活動に関する文献調査、今後の活動に関する基礎資料。	
	ジャン・パオロ・パニーニの風景画に描かれた古代建築と古代彫刻のデータベース構築(科研費(基盤C)、研究代表者:飯塚隆)	作品及び文献調査、所蔵作品展・企画展、刊行物、解説等。	

<p>エライザ法を用いた膠着材同定の 実現のための検討(科研費(若手 B)、研究代表者:高嶋美穂)</p>	<p>所蔵作品の保存のための基礎資料</p>	
<p>装飾とデザインのジャポニスム 西欧におけるその概念形成と実 作の研究(科研費(基盤B)、研究 代表者:馬淵明子)</p>	<p>作品及び文献調査、刊行物等</p>	
<p>古代ローマ工芸美術の基礎的研 究 ～ テッラ・シギラタについて～ (科研費(基盤C)、研究代表者: 向井朋生)</p>	<p>作品及び文献調査、刊行物等</p>	
<p>前衛と古典主義:20世紀イタリア 美術における美術館と複製媒体 の諸機能に関する研究(科研費( 若手B)、研究代表者:阿部真弓)</p>	<p>作品及び文献調査、刊行物等</p>	
<p>エ 国立国際美術館</p>		
<p>調査研究テーマ</p>	<p>美術館活動への反映</p>	<p>連携機関</p>
<p>国立国際美術館所蔵作品</p>	<p>コレクション展</p>	
<p>現代美術の動向</p>	<p>コレクション展</p>	
<p>フランス国立クリュニー中世美術 館所蔵作品</p>	<p>「フランス国立クリュニー中世美術館所蔵 貴 婦人と一角獣展」</p>	<p>フランス国立クリュニー中世 美術館、国立新美術館</p>
<p>工藤哲巳</p>	<p>「あなたの肖像 工藤哲巳回顧展」</p>	<p>東京国立近代美術館、青森 県立美術館</p>
<p>アンドレアス・グルスキー</p>	<p>アンドレアス・グルスキー展</p>	<p>国立新美術館</p>
<p>郭 徳俊</p>	<p>「郭徳俊 ニコッとシェー 1960年絵画を中心 に」</p>	
<p>ジャン・フォートリエ</p>	<p>「ジャン・フォートリエ展(仮称)」</p>	<p>東京ステーションギャラリー、 豊田市美術館</p>
<p>フィオナ・タン</p>	<p>「フィオナ・タン展(仮称)」</p>	<p>東京都写真美術館</p>

高松次郎	「高松次郎展(仮称)」	
アルベルト・ジャコメッティ	「ジャコメッティ展(仮称)」	
美術館教育	美術館、展覧会運営	
アジアの美術館並びに美術館運営	美術館、展覧会運営	国際交流基金
現代美術の保存収集	NMAO国際シンポジウム「現代美術をコレクションするとは？」	TATE、東京都現代美術館、東京都写真美術館、兵庫県立美術館、ブリティッシュ・カウンシル

#### オ 国立新美術館

調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関
日本の現代美術の動向に関する調査研究	「アーティスト・ファイル2013 現代の作家たち」	
海外の現代美術の動向に関する調査研究	「アーティスト・ファイル2013 現代の作家たち」	
20世紀中葉のロサンゼルスにおけるデザイン潮流についての調査研究	「カリフォルニア・デザイン 1930-1965 モダン・リビングの起源」	ロサンゼルス・カウンティ美術館
フランスの中世美術に関する調査研究	「フランス国立クリュニー中世美術館所蔵『貴婦人と一角獣』展」を開催	フランス国立クリュニー中世美術館、国立国際美術館
アメリカにおけるポップ・アートについての調査研究	「アメリカン・ポップ・アート展」を開催	
ヨーロッパにおける点描技法と分割主義の系譜と伝播に関する調査研究	「印象派を超えて 点描の画家たち ゴッホ、スーラからモンドリアンまで」展を開催	クレラー＝ミュラー美術館、広島県立美術館、愛知県美術館
中村一美の芸術とその展開についての調査研究	「中村一美展」を開催	
先史時代から現代にいたるまでの造形物の機能と役割に関する、受容美学的観点での調査研究	「イメージの力 国立民族学博物館コレクションにさぐる」展を開催	国立民族学博物館

日韓の現代美術作家に関する調査研究	展覧会開催に向けた調査	韓国国立現代美術館 国際交流基金
美術館の教育普及事業(ワークショップ、鑑賞ガイド等)に関する調査研究	教育普及事業	
日本の近・現代美術資料に関する調査研究	美術資料の収集・提供事業	
戦後の日本の美術館等における展覧会データの収集及び公開に関する調査研究	美術資料の収集・提供事業	
美術情報の収集・提供システムに関する調査研究	美術資料の収集・提供事業	
美術館におけるデジタル・アーカイブの構築に関する調査研究	美術資料の収集・提供事業	

### 展覧会カタログの執筆

#### ア 東京国立近代美術館

(本館)

タイトル	執筆者氏名(職名)	展覧会名
「泥とジェリー」	蔵屋 美香 (美術課長)	コレクションを中心とした小企画「泥とジェリー」
「そこにあるものから何を学ぶのか 観察とつくること」「夏の家」観察ノート」	柴原 聡子 (研究補佐員)	「夏の家」
「都市の無意識」	鈴木 勝雄 (主任研究員)	「都市の無意識」展プロローシャ
「試みる人、栖鳳」、章解説、作品解説、 年譜、主要参考文献	中村 麗子 (主任研究員)	「近代日本画の巨匠 竹内栖鳳展」
「箱があなたに贈られるとき 工藤哲巳 の展開を探る。1962年、パリ。」、仏文和 訳	榊田 倫広 (研究員)	「あなたの肖像 工藤哲巳回顧展」
「クーデルカの世界」、「最善を尽くすこ と、それをいつも頭においている:ジョセ フ・クーデルカとの対話ノートより」(翻 訳)、章解説(執筆及び翻訳)	増田 玲 (主任研究員)	「ジョセフ・クーデルカ展」

## (工芸館)

タイトル	執筆者氏名(職名)	展覧会名
セルフガイド「ボディ <sup>3</sup> 」	今井 陽子 (主任研究員)	「所蔵作品展 ボディ <sup>3</sup> 」
ボディ・ブック&ノート	今井 陽子 (主任研究員)	「所蔵作品展 ボディ <sup>3</sup> 」
「森口華弘と染めの美」	今井 陽子 (主任研究員)	『クローズアップ工芸』展
作家略歴、用語解説、作品目録	今井 陽子 (主任研究員)	『工芸から K GEI へ』展
「松田権六(蒔絵竹林文箱)に見る蒔絵表現」	北村 仁美 (主任研究員)	『クローズアップ工芸』展
Made in Japan を生む:現代日本のプロダクトデザインの力	諸山 正則 (主任研究員)	企画展「現代のプロダクトデザイン Made in Japanを生む」
「小名木陽一が極めた織の造形」	唐澤 昌宏 (工芸課長)	『クローズアップ工芸』展
「工芸」から「K GEI」へ	唐澤 昌宏 (工芸課長)	『工芸からK GEIへ』展
作家略歴、用語解説、作品目録	唐澤 昌宏 (工芸課長)	『工芸から K GEI へ』展
富本憲吉の羊歯模様について:クローズアップ(色絵金銀彩羊歯文八角飾箱)	木田 拓也 (主任研究員)	『クローズアップ工芸』展

## (フィルムセンター)

タイトル	執筆者氏名(職名)	展覧会名
映画作品解説	岡田秀則 (主任研究員)	チェコの映画ポスター テリー・ポスター・コレクションより

イ 京都国立近代美術館

タイトル	執筆者氏名(職名)	展覧会名
工芸 表現の一断面から見たその諸相	山野 英嗣 (学芸課長[当時])	開館 50 周年記念特別展 交差する 表現 工芸 / デザイン / 総合芸術
<芝川照吉コレクション> について	山野 英嗣 (客員研究員[当時])	芝川照吉コレクション展 ~ 青木繁・岸 田劉生らを支えたコレクター
芝川照吉と芸家たち 藤井達吉、バ ーナード・リーチ、富本憲吉、河合卯之助	松原龍一 (学芸課長)	芝川照吉コレクション展 ~ 青木繁・岸 田劉生らを支えたコレクター
出品作家紹介	平井 啓修 (研究員)	芝川照吉コレクション展 ~ 青木繁・岸 田劉生らを支えたコレクター
泥象 鈴木治の世界 「使う陶」から「観 る陶」、そして「詠む陶」へ	松原 龍一 (学芸課長)	泥象 鈴木治の世界 「使う陶」から 「観る陶」、そして「詠む陶」へ
鈴木治が求めた「象」 「詠む陶」の視点 から	中尾 優衣 (研究員)	泥象 鈴木治の世界 「使う陶」から 「観る陶」、そして「詠む陶」へ
Column04 「泥像」から「泥象」へ	中尾 優衣 (研究員)	泥象 鈴木治の世界 「使う陶」から 「観る陶」、そして「詠む陶」へ
映画を読む、言葉を探す マルセル・ブ ローターズから始めてみる	牧口 千夏 (研究員)	映画をめぐる美術 マルセル・ブ ローターズから始める
「皇室の名品 近代日本美術の粋 - 」 展について	尾崎 正明 (前館長)	皇室の名品 近代日本美術の粋
皇室と近代日本工芸	松原 龍一 (学芸課長)	皇室の名品 近代日本美術の粋
作品解説	松原 龍一 (学芸課長) 小倉 実子 (主任研究員) 中尾 優衣 (研究員) 平井 啓修 (研究員)	皇室の名品 近代日本美術の粋
ポスター作家略歴	池田 祐子 (主任研究員)	チェコの映画ポスター テリー・ポスタ ー・コレクションより
西洋への憧れ 個のめざめ	山野英嗣 (前学芸課長)	国立美術館巡回展 西洋への憧れ 個のめざめ 日本近代洋画の東西

### ウ 国立西洋美術館

タイトル	執筆者氏名(職名)	展覧会名
「芸術家としてのル・コルビュジエ」、章解説、作品解説	村上 博哉 (副館長)	ル・コルビュジエと20世紀美術
「壁は語る」、章解説、作品解説、年譜	林 美佐 (客員研究員)	ル・コルビュジエと20世紀美術
「ル・コルビュジエの探求した「総合芸術」、作品解説	山名 善之 (客員研究員)	ル・コルビュジエと20世紀美術
「システイーナ礼拝堂小史 - シクストゥス4世、ミケランジェロ、コンクラヴェ」、作品解説	川瀬 佑介 (研究員)	システイーナ礼拝堂 500年祭記念 ミケランジェロ展 天才の軌跡
「アントニオ・サウラ」、「エステバン・ピセンテ」	川瀬 佑介 (研究員)	ソフィア王妃芸術センター所蔵 内と外 スペイン・アンフォルメル絵画の二つの『顔』
章解説、解説(「サン＝シメオン農場の道」、「両世界の芸術」とモネの挿絵、「古きフランスのピトレスクでロマンティックな旅」、「海辺の子どもたち ルノワールとゴーガン」、「睡蓮の大装飾画をめぐって 松方コレクションとモネ」)	陳岡 めぐみ (主任研究員)	国立西洋美術館×ポーラ美術館 モネ、風景をみる眼 19世紀フランス風景画の革新
解説(「オシュデ邸の装飾」、「最後の印象派展」、「ジヴェルニーの庭」、「モネ - ロダン」展)、作家解説、関連年表	中田 明日佳 (研究員)	国立西洋美術館×ポーラ美術館 モネ、風景をみる眼 19世紀フランス風景画の革新

### エ 国立国際美術館

タイトル	執筆者氏名(職名)	展覧会名
生きているコレクション	山梨 俊夫 (館長)	美の響演 関西コレクションズ
「関西コレクションズ」の開催にあたって、作品解説	島 敦彦 (副館長)	美の響演 関西コレクションズ
第1～5章の章解説、作品解説	安来 正博 (主任研究員)	美の響演 関西コレクションズ
作品解説	中井 康之 (主任研究員)	美の響演 関西コレクションズ
作品解説	中西 博之 (主任研究員)	美の響演 関西コレクションズ

作品解説	植松 由佳 (主任研究員)	美の響演 関西コレクションズ
作品解説	橋本 梓 (研究員)	美の響演 関西コレクションズ
作品解説	竹内 万里子 (客員研究員)	美の響演 関西コレクションズ
工藤哲巳入門 ~	島 敦彦 (副館長)	あなたの肖像 工藤哲巳回顧展
工藤哲巳の宇宙論	中井 康之 (主任研究員)	あなたの肖像 工藤哲巳回顧展
工藤哲巳の政治性	福元 崇志 (研究補佐員)	あなたの肖像 工藤哲巳回顧展
アンドレアス・グルスキー：大阪、東京、 福山そしてカミオカンデ	植松 由佳 (主任研究員)	アンドレアス・グルスキー展

#### オ 国立新美術館

タイトル	執筆者氏名(職名)	展覧会名
「パシフィカ」と「ジャパニーズ・モダン」 1950年代カリフォルニアと日本における 日本調のモダン・デザイン	本橋 弥生 (主任研究員)	「カリフォルニア・デザイン 1930- 1965 モダン・リビングの起源」
『貴婦人と一角獣展』について	南 雄介 (副館長)	「フランス国立クリュニー中世美術館 所蔵『貴婦人と一角獣』展」
関連年表	宮島 綾子 (主任研究員)	「フランス国立クリュニー中世美術館 所蔵『貴婦人と一角獣』展」
主要参考文献目録	米田 尚輝 (研究員)	「フランス国立クリュニー中世美術館 所蔵『貴婦人と一角獣』展」
「アンドレアス・グルスキー：絵画的コンポ ジションとしての写真」	長屋 光枝 (主任研究員)	「アンドレアス・グルスキー展」
「アンドレアス・グルスキー、その革新の 軌跡」/略歴/主要参考文献	山田 由佳子 (研究員)	「アンドレアス・グルスキー展」
章解説/作家略歴「1章 ロバート・ラウシ エンバーグ」「2章 ジャスパー・ジョーンズ」 「3章 ラリー・リヴァーズ/ジム・ダイ	西野 華子 (主任研究員)	「アメリカン・ポップ・アート展」

	ン」6章 アンディ・ウォーホル」/ 作品解説		
	「芸術と日常をつなぐ 『ニュー・リアリスツ』展における『アメリカン・ポップ・アート』の形成」/「クレス・オルデンバーグ」/「メル・ラムス/ジェイムズ・ローゼンクイスト/トム・ウェッセルマン」(章解説)/作品解説	瀧上 華 (アソシエイトフェロー)	「アメリカン・ポップ・アート展」
	「筆触と色彩 ポップ・アートと絵画」/「ロイ・リキテンスタイン」/「友人としてのアーティストたち」(作家解説)/「パワーズ・コレクションと作家たち キミコ・パワーズへのインタビュー」(聞き手)/作品解説	南 雄介 (副館長)	「アメリカン・ポップ・アート展」
	「分割主義 その理念と実践から」, 章解説」. 印象派の筆触」, 作品解説	長屋 光枝 (主任研究員)	「印象派を超えて 点描の画家たち ゴッホ、スーラからモンドリアンまで」
	「ジョルジュ・スーラと色彩の科学」/作品解説/主要文献目録	米田 尚輝 (研究員)	「印象派を超えて 点描の画家たち ゴッホ、スーラからモンドリアンまで」
	「記憶の痕跡と武器アート: (いのちの輪たち) (2012年)をめぐって」	山田 由佳子 (研究員)	「イメージの力 国立民族学博物館コレクションにさぐる」
	「芸術における非芸術 その文脈」	南 雄介 (副館長)	「イメージの力 国立民族学博物館コレクションにさぐる」
	「イメージの力 美術館からの視点」	長屋 光枝 (主任研究員)	「イメージの力 国立民族学博物館コレクションにさぐる」
	「可能性の形式 中村一美の絵画について」/章解説	南 雄介 (副館長)	「中村一美展」
	略歴/文献目録	瀧上 華 (アソシエイトフェロー) 長谷川 珠緒 (研究補佐員)	「中村一美展」
<p>研究紀要の執筆 ア 東京国立近代美術館 (本館)</p>			
	タイトル	執筆者氏名(職名)	掲載誌名
	「不在の類型学: 日本における概念的な芸術の系譜(1)」	鈴木 勝雄 (主任研究員)	『東京国立近代美術館研究紀要』第18号
			発行年月日 26.3

<p>共著「資料紹介 メディア連携を企図する館史としての『東京国立近代美術館 60 年史』 「美術館の歴史を一冊の参考図書とする」試み再々論 企画展出品作家総索引の編集・刊行・公開を中心に」</p> <p>共著「アジアからの美術書誌情報の発信 - 東京国立近代美術館・国立西洋美術館 OPAC の artlibraries.net における公開の経緯とその意義」</p> <p>共著「資料紹介 メディア連携を企図する館史としての『東京国立近代美術館 60 年史』 「美術館の歴史を一冊の参考図書とする」試み再々論 企画展出品作家総索引の編集・刊行・公開を中心に」</p> <p>共著「資料紹介 メディア連携を企図する館史としての『東京国立近代美術館 60 年史』 「美術館の歴史を一冊の参考図書とする」試み再々論 企画展出品作家総索引の編集・刊行・公開を中心に」</p>	<p>布施 環 (研究補佐員)</p>	<p>『東京国立近代美術館研究紀要』第 18 号</p>	<p>26.3</p>												
	<p>水谷 長志 (主任研究員)</p>	<p>『東京国立近代美術館研究紀要』第 18 号</p>	<p>26.3</p>												
	<p>水谷 長志 (主任研究員)</p>	<p>『東京国立近代美術館研究紀要』第 18 号</p>	<p>26.3</p>												
	<p>渡邊 美喜 (研究補佐員)</p>	<p>『東京国立近代美術館研究紀要』第 18 号</p>	<p>26.3</p>												
<p>(工芸館)</p>															
<table border="1"> <thead> <tr> <th>タイトル</th> <th>執筆者氏名(職名)</th> <th>掲載誌名</th> <th>発行年月日</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>松田権六「優品之調査」</td> <td>北村 仁美 (主任研究員)</td> <td>『東京国立近代美術館研究紀要』第 17 号</td> <td>25.3.31</td> </tr> <tr> <td>ミュージアム・オブ・アーツ・アンド・デザイン 1956-2008:工芸 / CRAFT の行方</td> <td>木田 拓也 (主任研究員)</td> <td>『東京国立近代美術館研究紀要』第 17 号</td> <td>25.3.31</td> </tr> </tbody> </table>				タイトル	執筆者氏名(職名)	掲載誌名	発行年月日	松田権六「優品之調査」	北村 仁美 (主任研究員)	『東京国立近代美術館研究紀要』第 17 号	25.3.31	ミュージアム・オブ・アーツ・アンド・デザイン 1956-2008:工芸 / CRAFT の行方	木田 拓也 (主任研究員)	『東京国立近代美術館研究紀要』第 17 号	25.3.31
タイトル	執筆者氏名(職名)	掲載誌名	発行年月日												
松田権六「優品之調査」	北村 仁美 (主任研究員)	『東京国立近代美術館研究紀要』第 17 号	25.3.31												
ミュージアム・オブ・アーツ・アンド・デザイン 1956-2008:工芸 / CRAFT の行方	木田 拓也 (主任研究員)	『東京国立近代美術館研究紀要』第 17 号	25.3.31												
<p>(フィルムセンター)</p>															
<table border="1"> <thead> <tr> <th>タイトル</th> <th>執筆者氏名(職名)</th> <th>掲載誌名</th> <th>発行年月日</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>吉澤商店主・河浦謙一の足跡(1) 吉澤商店の誕生</td> <td>入江 良郎 (主任研究員)</td> <td>『東京国立近代美術館研究紀要』第 18 号</td> <td>26.3.31</td> </tr> <tr> <td>荻野茂二寄贈フィルム目録</td> <td>浅利 浩之 (客員研究員)</td> <td>『東京国立近代美術館研究紀要』第 18 号</td> <td>26.3.31</td> </tr> </tbody> </table>				タイトル	執筆者氏名(職名)	掲載誌名	発行年月日	吉澤商店主・河浦謙一の足跡(1) 吉澤商店の誕生	入江 良郎 (主任研究員)	『東京国立近代美術館研究紀要』第 18 号	26.3.31	荻野茂二寄贈フィルム目録	浅利 浩之 (客員研究員)	『東京国立近代美術館研究紀要』第 18 号	26.3.31
タイトル	執筆者氏名(職名)	掲載誌名	発行年月日												
吉澤商店主・河浦謙一の足跡(1) 吉澤商店の誕生	入江 良郎 (主任研究員)	『東京国立近代美術館研究紀要』第 18 号	26.3.31												
荻野茂二寄贈フィルム目録	浅利 浩之 (客員研究員)	『東京国立近代美術館研究紀要』第 18 号	26.3.31												

イ 京都国立近代美術館

タイトル	執筆者氏名(職名)	掲載誌名	発行年月日
「日本画の近代」	尾崎 正明 (前館長)	京都国立近代美術館研究論集 CROSS SECTIONS Vol.6	26.3.31
「近代日本工芸の流れ 1868-1945」	松原 龍一 (学芸課長)	京都国立近代美術館研究論集 CROSS SECTIONS Vol.6	26.3.31
「討議と質疑応答」	小倉 実子 (主任研究員)	京都国立近代美術館研究論集 CROSS SECTIONS Vol.6	26.3.31
「京都国立近代美術館で行 われた二つの教員研修」	朴 鈴子 (研究補佐員)	京都国立近代美術館研究論集 CROSS SECTIONS Vol.6	26.3.31

ウ 国立西洋美術館

タイトル	執筆者氏名(職名)	掲載誌名	発行年月日
大屋美那・国立西洋美術館主任研究 員 業績目録	川口 雅子 (主任研究員)	『国立西洋美術館研究紀 要』no. 18	26.3.31
Annibale Carracci's Hercules at the Crossroad and Marco Dente's print	渡辺 晋輔 (主任研究員)	『国立西洋美術館研究紀 要』no. 18	26.3.31
ラウル・デュフィのテキスタイル制作 - その実践と絵画作品への影響 -	矢野 ゆかり (研究補佐員)	『国立西洋美術館研究紀 要』no. 18	26.3.31
美術館の情報活動に関する一考察	川口 雅子 (主任研究員)	『国立西洋美術館研究紀 要』no. 18	26.3.31

館ニュース等の執筆

ア 東京国立近代美術館  
(本館)

タイトル	執筆者氏名(職名)	掲載誌名	発行年月日
「ドイツの博物館教育レポート」	一條 彰子 (主任研究員)	『現代の眼』601号	25.8

	「米国の美術館教育レポート 学校教育へのアプローチ」	一條 彰子 (主任研究員)	『現代の眼』602号	25.10
	「「プレイバック・アーティスト・トーク」展を準備しながら考えたこと」	大谷 省吾 (主任研究員)	『現代の眼』600号	25.6
	「「プレイバック・アーティスト・トーク」展連続講演会報告」	大谷 省吾 (主任研究員)	『現代の眼』602号	25.10
	新しいコレクション ジョアン・ミロ(絵画詩(おお!あの人やっちゃったのね))	蔵屋 美香 (美術課長)	『現代の眼』600号	25.6
	新しいコレクション 速水御舟(京の家・奈良の家)	鶴見 香織 (主任研究員)	『現代の眼』602号	25.10
	「抽象と待機 山田正亮(Work E-250)をめぐって」	中林 和雄 (企画課長)	『現代の眼』603号	25.12
	「新しいコレクション 奈良美智(Harmless Kitty)」	保坂 健二郎 (主任研究員)	『現代の眼』604号	26.2
	「新しいコレクション 中平卓馬(サーキュレーション 日付、場所、行為より)」	増田 玲 (主任研究員)	『現代の眼』603号	25.12
	美術館ニュースの今後 『現代の眼』六〇〇号発行を機に	松本 透 (副館長)	『現代の眼』600号(6-7月号)	25.6
	作品研究 村岡三郎(熔断 1380 x 11000mm)	松本 透 (副館長)	『現代の眼』602号(10-11月号)	25.6
	(工芸館)			
	タイトル	執筆者氏名(職名)	掲載誌名	発行年月日
	石黒宗麿の 黒釉葉文盃をめぐって	唐澤 昌宏 (工芸課長)	『現代の眼』599号	25.4.1
	後記	唐澤 昌宏 (工芸課長)	『現代の眼』603号	25.12.1
	新しいコレクション 桂盛仁(盒子 蟹)	諸山 正則 (主任研究員)	『現代の眼』600号	25.6.1
	「ボディ×ボディ×ボディ(仮称)(展覧会予告)」	今井 陽子 (主任研究員)	『現代の眼』599号	25.4

[作品研究] 人形の原像と近代：夢二と柳女の作品から	今井 陽子 (主任研究員)	『現代の眼』600号	25.6
加守田章二(曲線彫文壺)	木田 拓也 (主任研究員)	『現代の眼』603号	25.12.1
(フィルムセンター)			
タイトル	執筆者氏名(職名)	掲載誌名	発行年月日
永遠のフィルム/フィルムの永遠	岡島 尚志 (主幹)	NFC ニューズレター 第109号	25.6.1
『家族』『故郷』『同胞』 1970年代の映画の挑戦	岡島 尚志 (主幹)	NFC ニューズレター 第112号	25.12.1
山田洋次監督インタビュー 山田映画と撮影所の伝統)	入江 良郎 (主任研究員)	NFC ニューズレター 第112号	25.12.1
映画よ、凍れ	岡田 秀則 (主任研究員)	NFC ニューズレター 第108号	25.4.1
「ポスターを作る人」になりたかった。	岡田 秀則 (主任研究員)	NFC ニューズレター 第110号	25.8.1
動く前に、止める これからの小津安二郎論のために	岡田 秀則 (主任研究員)	NFC ニューズレター 第112号	25.12.1
映画というのは自己完結するものではない(下) 崔洋一監督インタビュー	大澤 浄 (研究員)	NFC ニューズレター 第108号	25.4.1
清水宏の映画宇宙	大澤 浄 (研究員)	NFC ニューズレター 第109号	25.6.1
清水宏フィルモグラフィ	大澤 浄 (研究員)	NFC ニューズレター 第109号	25.6.1
マルチバージョンとメタデータ標準規格	大澤 浄 (研究員)	NFC ニューズレター 第110号	25.8.1
「生誕 110年 映画監督 清水宏」 宋桓昌氏(『ともだち』主演)インタビュー 清水監督は、私にとっては隣近所の気立てのいいおじさんのようでした。	大澤 浄 (研究員)	NFC ニューズレター 第111号	25.10.1
「Memory!第一回国際映画遺産フェスティバル」報告 映画遺産ゼロからの出発	大傍 正規 (研究員)	NFC ニューズレター 第110号	25.8.1

『くら』『幽霊船』のデジタル復元 デジタル時代に向けた「ハイブリッド型」復元ワークフローの構築	大傍 正規 (研究員)	NFC ニューズレター 第112号	25.12.1
大森一樹監督インタビュー(上) 「8mm は世界を変えるかも?」と思ってましたね。	佐々木 淳 (客員研究員) 大澤 浄 (研究員)	NFC ニューズレター 第113号	26.2.1
ナショナル・フィルモグラフィ へ向けて 日本映画作品目録の紹介と比較	濱口 幸一 (客員研究員)	NFC ニューズレター 第111号	25.10.1
小津安二郎、絵画とデザイン、その拡がりへ向けて(上)	佐崎 順昭 (客員研究員)	NFC ニューズレター 第112号	25.12.1
小津安二郎、絵画とデザイン、その拡がりへ向けて(下)	佐崎 順昭 (客員研究員)	NFC ニューズレター 第113号	26.2.1

#### イ 国立西洋美術館

タイトル	執筆者氏名(職名)	掲載誌名	発行年月日
報告:2012年度収蔵作品について	大屋 美那 (主任研究員)	ZEPHYROS 第55号	25.5.20
所蔵作品:カルロ・クリヴェッリ(聖アウグスティヌス)	高梨 光正 (主任研究員)	ZEPHYROS 第55号	25.5.20
活動紹介:所蔵作品データベースが目指すもの	川口 雅子 (主任研究員)	ZEPHYROS 第55号	25.5.20
企画展「システーナ礼拝堂 500年祭 記念 ミケランジェロ展 天才の軌跡」	川瀬 佑介 (研究員)	ZEPHYROS 第56号	25.8.20
特別展「ル・コルビュジエと20世紀美術」	村上 博哉 (学芸課長)	ZEPHYROS 第56号	25.8.20
企画展「国立西洋美術館×ポーラ美術館 モネ、風景をみる眼 19世紀フランス風景画の革新」	陳岡 めぐみ (主任研究員)	ZEPHYROS 第57号	25.11.20
小企画展「生誕150周年記念 国立西洋美術館所蔵 エドヴァルド・ムンク版画展」	村上 博哉 (副館長)	ZEPHYROS 第57号	25.11.20
小企画展「ソフィア王妃芸術センター所蔵 内と外 スペイン・アンフォルメル絵	川瀬 佑介 (研究員)	ZEPHYROS 第57号	25.11.20

	画の二つの「顔」			
	「ジャック・カロ リアリズムと奇想の劇場」	中田 明日佳 (研究員)	ZEPHYROS 第 58 号	26.2.20
	「非日常からの呼び声 平野啓一郎が選ぶ西洋美術の名品」	渡辺 晋輔 (主任研究員)	ZEPHYROS 第 58 号	26.2.20
<b>ウ 国立国際美術館</b>				
	タイトル	執筆者氏名(職名)	掲載誌名	発行年月日
	「美の響演 関西コレクションズ」開催にあたって	安来 正博 (主任研究員)	国立国際美術館ニュース 第 195 号	25.4.1
	館蔵品紹介	橋本 梓 (研究員)	国立国際美術館ニュース 第 195 号	25.4.1
	工藤哲巳入門(11)「放射能による養殖」、そして八年ぶりの帰国	島 敦彦 (副館長)	国立国際美術館ニュース 第 195 号	25.4.1
	館蔵品紹介	山梨 俊夫 (館長)	国立国際美術館ニュース 第 196 号	25.6.1
	工藤哲巳入門(12)「脱皮の記念碑」と最後のハプニング	島 敦彦 (副館長)	国立国際美術館ニュース 第 196 号	25.6.1
	アンドレアス・グルスキーの理想郷	竹内 万里子 (客員研究員)	国立国際美術館ニュース 第 197 号	25.8.1
	館蔵品紹介	中西 博之 (主任研究員)	国立国際美術館ニュース 第 197 号	25.8.1
	工藤哲巳入門(13)イヨネスコの肖像	島 敦彦 (副館長)	国立国際美術館ニュース 第 197 号	25.8.1
	なぜ今、工藤哲巳なのか？	島 敦彦 (副館長)	国立国際美術館ニュース 第 198 号	25.10.1
	館蔵品紹介	中井 康之 (主任研究員)	国立国際美術館ニュース 第 199 号	25.12.1
	エロディ・ロワイエ&ヨアン・グルメル『The Play/ザ・プレイ』(一)	橋本 梓 (研究員)	国立国際美術館ニュース 第 199 号	25.12.1
	「アンドレアス・グルスキー展」に寄せて	植松 由佳 (主任研究員)	国立国際美術館ニュース 第 200 号	26.2.1

在外調査報告(一)調査して思索	中西 博之 (主任研究員)	国立国際美術館ニュース 第 200 号	26.2.1
郭徳俊の絵画について「郭徳俊 ニコッ とシェー 1960 年代絵画を中心に」に寄 せて	安来 正博 (主任研究員)	国立国際美術館ニュース 第 200 号	26.2.1
エロディ・ロワイエ&ヨアン・グルメル 『The Play/ザ・プレイ』(二)	エロディ・ロワイエ&ヨ アン・グルメル [翻訳:橋本 梓(研究 員)]	国立国際美術館ニュース 第 200 号	26.2.1

### エ 国立新美術館

タイトル	執筆者氏名(職名)	掲載誌名	発行年月日
「カリフォルニアの椅子」	長谷川 珠緒 (研究補佐員)	『国立新美術館ニュース』 No.26	25.5
山岸信郎氏旧蔵資料の公開について	長名 大地 (研究補佐員)	『国立新美術館ニュース』 No.26	25.5
「アーティスト・ワークショップ 高校生が 写し出す、とむらいの時」	井上 絵美子 (研究補佐員)	『国立新美術館ニュース』 No.26	25.5
「アーティスト・ワークショップ 木々に灯 す、ちいさな巣をつくろう～アートナイトで インスタレーションに挑戦」	吉澤 菜摘 (アソシエイトフェロー)	『国立新美術館ニュース』 No.26	25.5
「アンドレアス・グルスキー展、その展示 の多層性について」	山田 由佳子 (研究員)	『国立新美術館ニュース』 No.27	25.8
「研究員レポート オーストラリア出張報 告」	本橋 弥生 (主任研究員)	『国立新美術館ニュース』 No.27	25.8
「現代美術の博物館とコレクション国際 委員会(CIMAM)に参加して」	米田 尚輝 (研究員)	『国立新美術館ニュース』 No.27	25.8
「アーティスト・ワークショップ 『写真』以 前/暗黒を作り出そう」	井上 絵美子 (研究補佐員)	『国立新美術館ニュース』 No.27	25.8
「『アメリカン・ポップ・アート』展鑑賞ガイ ドを展示室で配布しています」	木内 祐子 (研究補佐員)	『国立新美術館ニュース』 No.27	25.8
点描の画家たちの「影」	岩崎 美千子 (研究補佐員)	『国立新美術館ニュース』 No.28	25.11

「アート・アーチ・ひろしま 2013」を訪れて」	宮島 綾子 (主任研究員)	『国立新美術館ニュース』 No.28	25.11
「黒川紀章メモリアル INTER-DESIGN FORUM TOKYO 2013『共生のアジアへ』」	西野 華子 (主任研究員)	『国立新美術館ニュース』 No.28	25.11
「東スロバキアの古都コシツェの暗闇に現れるアートの祭典、ピエラ・ノッツでの出会い」	山田 由佳子 (研究員)	『国立新美術館ニュース』 No.28	25.11
1970年代・展覧会と美術資料 展覧会カタログ・雑誌・写真	伊村 靖子 (研究補佐員)	『国立新美術館ニュース』 No.28	25.11
「アーティスト・ワークショップ あなたのユーモアをイラストにしよう！」	木内 祐子 (研究補佐員)	『国立新美術館ニュース』 No.28	25.11
「黒川紀章メモリアル INTER-DESIGN FORUM TOKYO 2013 関連イベント 黒川紀章メモリアルコンサート」	吉澤 菜摘 (アソシエイトフェロー)	『国立新美術館ニュース』 No.28	25.11
「印象派を超えて 点描の画家たち ゴッホ、スーラからモンドリアンまで」ジュニアガイド	長屋 光枝 (主任研究員)	「印象派を超えて 点描の画家たち ゴッホ、スーラからモンドリアンまで」ジュニアガイド	25.10
『国立新美術館ガイドブック アートのとびら Vol.8』	吉澤 菜摘 (アソシエイトフェロー)	『国立新美術館ガイドブック アートのとびら Vol.8』	26.2

### 国内外の美術館等との連携

#### シンポジウムの開催等による国内外の優れた研究者等との人的ネットワークの構築

#### ア 東京国立近代美術館

(本館)

セミナー・シンポジウム名	あなたの肖像 - 工藤哲巳回顧展プレ・イベント	開催日	平成 25 年 6 月 23 日
場所	東京国立近代美術館講堂	聴講者数	128 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	島敦彦(国立国際美術館副館長)、榊田倫広(東京国立近代美術館研究員)、中井康之(国立国際美術館主任研究員)、飯田高誉(青森県立美術館美術統括監)、池田亨(青森県立美術館学芸主幹)		
内容	工藤哲巳に関する 3 館での共同調査研究の成果報告		

(工芸館)

セミナー・シンポジウム名	社会システムのなかのオリンピックとデザイン	開催日	平成 25 年 4 月 21 日
場所	東京国立近代美術館	聴講者数	65 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	ジリー・トラガヌ(パーソンズ美術大学)、長田謙一(名古屋芸術大学)、暮沢剛巳(東京工科大学)、吉本光宏(ニッセイ基礎研究所)、関雅広(東京都生活文化局)、佐藤道信(東京芸術大学)、木田拓也(東京国立近代美術館)		
内容	オリンピックにおけるデザイン/デザイナーの役割、オリンピックにおける文化プログラムについての研究発表と討議。「東京オリンピック 1964 デザインプロジェクト」展関連事業、科研(基盤 A)「社会システム<芸術>とその変容」。		

(フィルムセンター)

セミナー・シンポジウム名	研究講演会「早稲田大学演劇博物館の映画コレクション」[再掲]	開催日	平成 25 年 11 月 2 日
場所	フィルムセンター大ホール	聴講者数	203 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	司会:入江良郎(フィルムセンター事業推進室長(主任研究員)) 講演者:竹本幹夫(早稲田大学文学学術院教授)、入江良郎、上田学(日本学術振興会特別研究員 PD)、児玉竜一(早稲田大学文学学術院教授)、板倉史明(神戸大学大学院国際文化学研究所准教授)、岡田秀則(フィルムセンター情報資料室長(主任研究員))、金子健(文化庁文化財部伝統文化課芸能部門文部科学技官)		
内容	早稲田大学坪内博士記念演劇博物館との共催で同博物館の貴重な映画コレクションを紹介する「ユネスコ『世界視聴覚遺産の日』記念特別イベント 伝説の映画コレクション 早稲田大学演劇博物館所蔵フィルム特別上映会」の会期中に、早稲田大学演劇映像学連携研究拠点との共催による研究講演会「早稲田大学演劇博物館の映画コレクション」を開催した。この講演会は、早稲田大学演劇映像学連携研究拠点でフィルムセンターの主任研究員が代表を務めた調査プロジェクト「演劇博物館所蔵映画フィルムの調査、目録整備と保存活用」(平成 21~25 年度)の研究結果発表を行うもので、演劇と映画の研究者が共同で、演劇博物館の映画収集の軌跡や主要なコレクションについて論じた。		

イ 京都国立近代美術館

セミナー・シンポジウム名	「映画をめぐる美術 マルセル・ブロータースから始める」展 連続アーティスト・トーク	開催日	平成 25 年 9 月 27 日
場所	京都国立近代美術館 講堂	聴講者数	70 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	ドミニク・ゴンザレス=フォルステル(作家) 田中功起(作家) アナ・トーフ(作家)		
内容	展覧会「映画をめぐる美術 マルセル・ブロータースから始める」開催に際し、出品作家によるアーティスト・トークを実施した。		

セミナー・シンポジウム名	PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭 2015 オープンリサーチプログラム[レクチャー/パフォーマンス] ドミニク・ゴンザレス=フォルステル 「M.2062 (Scarlett)」	開催日	平成 25 年 9 月 6 日
場所	京都府京都文化博物館	聴講者数	142 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	ドミニク・ゴンザレス=フォルステル(作家)		
内容	京都国際現代芸術祭組織委員会、一般社団法人京都経済同友会、京都府、京都市が主催する国際展「PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭 2015」において、当館の平成 25 年度展覧会「映画をめぐる美術 マルセル・ブロータースから始める」の出品作家であるドミニク・ゴンザレス=フォルステルのオープンリサーチプログラムが当館協力、国際交流基金後援により実施された。		

ウ 国立西洋美術館

セミナー・シンポジウム名	国際シンポジウム「ヨーロッパ絵画との出会い - 近代ギリシャと日本の場合 - 」	開催日	平成 25 年 6 月 8 日
場所	国立西洋美術館講堂	聴講者数	約 100 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	主催：近代ギリシャ絵画研究会、共催：国立西洋美術館 [発表]		

	木戸雅子(共立女子大学教授)、ファニ・マリア・チガク(ギリシャ、ベナキ美術館近代絵画・版画部門主任研究員)、鈴木杜幾子(明治学院大学教授)、大原まゆみ(明治学院大学教授)、アンドニオス・コティディス(アリストテリス・テサロニキ大学教授)、佐藤道信(東京藝術大学教授)、児島薫(実践女子大学教授) [パネルディスカッション] 司会:木戸雅子、パネリスト:馬淵明子(日本女子大学教授(当時))
内容	ギリシャ独立後、この国の画家たちがどのようにヨーロッパ各地の美術の影響を受け、またいかにしてアイデンティティを確立したのかが発表・議論された。同時に、比較例として日本の近代美術についての発表も行われた。

工 国立国際美術館

セミナー・シンポジウム名	あなたの肖像 工藤哲巳回顧展 国際シンポジウム「工藤哲巳をめぐる」	開催日	平成 25 年 11 月 23 日
場所	国立国際美術館	聴講者数	81 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	ドリュン・チョン(M+美術館チーフ・キュレーター)、富井玲子(美術史家)、ペドロ・エルバー(コーネル大学ロマンス語学科アシスタント・プロフェッサー)、島敦彦(国立国際美術館副館長)、中井康之(国立国際美術館主任研究員)、		
内容	国際交流基金との共催により、海外から専門家を招き、工藤哲巳の特異な世界について、幅広い見地から意見を交わし、理解を深めた。		

セミナー・シンポジウム名	NMAO 国際シンポジウム:現代美術をコレクションするとは?	開催日	平成 26 年 3 月 1 日
場所	国立国際美術館	聴講者数	89 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	パトリス・スミッセン(テート保存プログラム担当首席)、デボラ・ポッター(テートコレクション保存主席、コレクション部門ディレクター代理)、加藤弘子(東京都現代美術館企画係長)、丹羽晴美(東京都写真美術館事業企画係長)、相澤邦彦(兵庫県立美術館保存・修復グループ学芸員)、植松由佳(国立国際美術館主任学芸員)		
内容	美術館コレクションにおける近・現代美術作品の受入・展示・保存・修復をテーマとした国際シンポジウム。		

セミナー・シンポジウム名	NMAO ラウンドテーブル・ワークショップ	開催日	平成 26 年 3 月 2 日
場所	国立国際美術館	聴講者数	21 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	パトリシア・スミッセン(テート保存プログラム担当首席)、デボラ・ポッター(テートコレクション保存主席、コレクション部門ディレクター代理)、植松由佳(国立国際美術館主任研究員)、他		
内容	前日に開催したシンポジウムの内容を引き継ぎ、関係者のみの参加により日本の国内事情に照らし合わせた、より実際の議論を展開した。		

セミナー・シンポジウム名	現代美術の保存修復ワークショップ	開催日	平成 26 年 3 月 25 日
場所	国立国際美術館	聴講者数	6 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	アントニオ・ラーヴァ(イタリア国際修復機関副会長/ヴェナリア国立修復研究所教授)、岡田温司(京都大学大学院人間・環境学研究科教授)、他		
内容	現代美術修復の世界的権威であるアントニオ・ラーヴァ教授を招いて、講演、及び質疑応答の場を設け、既存の修復学や美術館における保存学では網羅しきれない数々の議題について議論を深めた。		

オ 国立新美術館

セミナー・シンポジウム名	「黒川紀章メモリアル INTER-DESIGN FORUM TOKYO 2013『共生のアジアへ』」	開催日	平成 26 年 10 月 11 日～10 月 13 日
場所	国立新美術館	聴講者数	737 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	10 月 11 日「アジアの世紀」: マリ・クリスティーン(異文化コミュニケーター)、水野誠一(ソーシャルプロデューサー)、中沢新一(人類学者)、長谷川祐子(東京都現代美術館チーフキュレーター)、黒川雅之(建築家)、遠藤秀平(建築家)、千住明(作曲家)、金光裕(建築家)、中島信也(CM 演出家)、藤巻幸大(ブランディング・プロ		

	<p>デューサー)、ペマ・ギャルポ(桐蔭横浜大学・大学院教授)、秋尾晃正(一般社団法人民際センター理事長)、波頭亮(経営コンサルタント)、青木保(館長)</p> <p>10月12日「思想と建築」: 蜷川有紀(画家・女優)、八束はじめ(建築家)、三枝成彰(作曲家)、南後由和(社会学者)、手塚貴晴(手塚建築研究所代表)、鈴木エドワード(建築家)、豊川斎赫(建築史家)、楨文彦(建築家)、團紀彦(建築家)、宮本佳明(建築家)、竹山聖(建築家)</p> <p>10月13日「アートと美術館」: アーロン・ベツキー(シンシナティ美術館館長)、日比野克彦(アーティスト)、宮島達男(現代美術家)、森司(東京アートポイント計画ディレクター)、土佐尚子(京都大学教授)、中津良平(シンガポール国立大学教授)、寺坂公雄(日本芸術院会員)、妹島和世(建築家)、浅田彰(京都造形芸術大学教授)、南雄介(副館長・学芸課長)、青木保(館長)</p>
内容	<p>主催: 一般社団法人日本文化デザインフォーラム、国立新美術館</p> <p>2013年は国立新美術館の設計を手がけた黒川紀章氏の七回忌にあたる。これを機に、黒川氏を中心に1980年に創設された日本文化デザイン会議(1990年より日本文化デザインフォーラム)と共催で、建築、美術、文化、デザインなど各方面で活躍する専門家を国内外から招いた、3日間にわたるフォーラムを開催した。3日間を通じたテーマとして、黒川氏が生涯を通じて提唱した「共生の思想」と、主だった活動の場とした「アジア」を掲げ、初日は「アジアの世紀」、2日目は「黒川紀章多面体」、そして最終日は「建築と美術館の未来」を主題に、多彩な出演者による講演や対談、ショートトークを展開した。メタボリズム運動をはじめとする黒川氏の業績を振り返るとともに、アジアから発信する新たな建築や美術館像について活発な議論を交わし、これからのアジアにおける文化発展の在り方を探る機会となった。</p>

セミナー・シンポジウム名	「新たなイメージ論に向けて」	開催日	平成26年2月22日
場所	国立新美術館講堂	聴講者数	45人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	水沢勉(神奈川県立近代美術館館長)、水野千依(京都造形芸術大学教授)、長屋光枝(主任研究員)、青木保(館長)		
内容	<p>「イメージの力 国立民族学博物館コレクションにさぐる」展は、地域や時代によってイメージを分類するのではなく、共通した効果や機能に着目し、人間とイメージとのダイナミックな交流を検証している。同時にこれは、日本及び西洋の近現代美術を中心に展覧会を開催してきた国立新美術館の活動を相対化する試みでもある。本展覧会に合わせて企画したシンポジウム「新たなイメージ論に向けて」では、西洋の美術史学が長い時間をかけて形成してきたイメージと人間との関係を問い直すとともに、そこから生まれる新たな視座を通じて、イメージが持つ根源的な力を再考した。</p>		

平成26年4月12日には、日本文化人類学会との共催による公開シンポジウム「アートと人類学: いまアートの普遍性を問う」を開催した。

**我が国の作家、美術作品による展覧会開催のための海外の美術館との連携・協力**

**ア 東京国立近代美術館**

本館では、第 55 回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展において、蔵屋美香(美術課長)が「キュレーター」として参加した田中功起の日本館での個展「abstract speaking: sharing uncertainty and collective acts」が、特別表彰を受賞した。

工芸館では、モリカミ博物館・日本庭園「Contemporary KOGEI Styles in Japan(現代の日本工芸)展」(主催:文化庁、外務省、在マイアミ総領事館、モリカミ博物館・日本庭園、会期:2013 年 10 月 8 日~2014 年 2 月 23 日)に特別協力を行った。

フィルムセンターでは、フォンダツィオーネ・チネテカ・ディ・ポローニャ(FIAF 加盟機関)との共催による第 27 回チネマ・リトロバート映画祭・特集企画「日本が声を上げる! パート 2:歌手とサムライ」において、P.C.L.映画製作所、J.O.トーキー、太秦発声映画等、日本におけるトーキー映画の発展に寄与した製作会社による初期トーキー映画 9 本を、すべて英語字幕付プリントで提供し、1930 年代の日本映画における先駆的、実験的な試みについて、映画祭に参加した世界各国の研究者やアーキビストたちの認識を高めることができた。ニューヨーク近代美術館、ドイツ・キネマテーク(共に FIAF 加盟機関)共催による映画の撮影・照明技法にスポットライトを当てた上映企画「影の美学」に対し、両会場併せて 14 本の映画フィルムを貸与するとともに、ベルリンでの上映に際してはフィルムセンター主幹がシンポジウム等に出席し、世界の映画史における日本映画の多大なプレゼンスについて、映画祭に参加した多くの観客の認識を促すことができた。

**イ 京都国立近代美術館**

国際交流基金との共催で、ローマ国立近代美術館において「近代日本画と工芸の流れ 1868-1945」展を開催し(2013 年 2 月 26 日~5 月 5 日)、尾崎正明(前館長)及び松原龍一(学芸課長)が、企画・作品選定を担当した。国内の美術館ほか所蔵する我が国の日本画・工芸作品によって計 170 点で構成し、我が国の近代美術作品を海外で紹介する貴重な機会となった。

**ウ 国立新美術館**

平成 27 年度に開催を予定している、韓国国立現代美術館と共同で企画し、韓国と日本を巡回する展覧会「アーティスト・ファイル アジア・シリーズ(仮称)」展について、平成 25 年度から準備に着手した。平成 26 年度は担当者がそれぞれの国を往来することにより、展覧会の実現に向けての打ち合わせ及び作家の調査を重ねる予定である。

**その他海外の美術館との連携・協力**

国立美術館本部では、第 23 回 ICOM 大会 (ICOM Rio 2013)、アジア・ヨーロッパ博物館ネットワーク (Asia-Europe Museum Network, ASEMUS)、第 7 回アジア美術館長会議などの国際会議へ出席した。

日豪美術館学芸員交流では、本橋弥生 (国立新美術館主任研究員) が渡豪し、オーストラリア現代美術館、オーストラリア国立美術館などを訪問した。オーストラリア国立美術館では、平成 26 年度に開催する「魅惑のコスチューム:バレエ・リュス展」の打ち合わせ及び作品調査などを行った。

【(小項目)1-1-6】	観覧環境の提供	【評価】  A																					
<p>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</p> <p>(6) 快適な観覧環境の提供</p> <p>-1 高齢者、障害者、外国人等を含めた入館者本位の快適な鑑賞環境の形成のために展示方法・外国語表示・動線等の改善、施設整備の計画的な実施に取り組む。</p> <p>-2 展示や解説パネルを工夫するとともに、音声ガイド等を導入するなど、鑑賞しやすさ、理解のしやすさに取り組む。入館者を対象とする満足度調査を定期的実施し、入場料金及び開館時間の弾力化などの管理運営の改善に取り組む。入館者にとって快適な空間となるよう、利用者ニーズを踏まえてミュージアムショップやレストラン等の充実を図る。</p>		<table border="1"> <tr> <td>H23</td> <td>H24</td> <td>H26</td> <td>H27</td> </tr> <tr> <td>A</td> <td>A</td> <td></td> <td></td> </tr> </table> <p>実績報告書等 参照箇所</p> <p>&lt;実績報告書&gt; P39～44</p> <p>(6) 快適な観覧環境の提供 高齢者、身体障害者、外国人等への対応 展示、解説の工夫と音声ガイドの導入 入場料金、開館時間等の弾力化 キャンパスメンバーズ制度の実施 ミュージアムショップ、レストラン等の充実</p>				H23	H24	H26	H27	A	A												
H23	H24	H26	H27																				
A	A																						
【インプット指標】																							
<table border="1"> <thead> <tr> <th>(中期目標期間)</th> <th>H23</th> <th>H24</th> <th>H25</th> <th>H26</th> <th>H27</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>決算額(百万円)</td> <td>1,698</td> <td>1,947</td> <td>1,653</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>従事人員数(人)</td> <td>69</td> <td>64</td> <td>61</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> </tbody> </table>						(中期目標期間)	H23	H24	H25	H26	H27	決算額(百万円)	1,698	1,947	1,653	-	-	従事人員数(人)	69	64	61	-	-
(中期目標期間)	H23	H24	H25	H26	H27																		
決算額(百万円)	1,698	1,947	1,653	-	-																		
従事人員数(人)	69	64	61	-	-																		
<p>1) 決算額は損益計算書 展覧事業費を計上している。(本項目は展覧事業費の一部であり、個別に計上できないため、展覧事業費全額を計上している。)</p> <p>2) 従事人員数は、すべての研究職員数及び事業担当事務職員を計上している。その際、役員及び事業担当を除く事務職員は勘案していない。</p>																							
評価基準	実績				分析・評価																		
<p>高齢者、身体障害者、外国人等を含めた入館者本位の快適な鑑賞環境の形成のために展示方法・外国語表示・動線等の改善、施設整備の計画的な実施に取り組んだか。</p>	<p><b>高齢者、身体障害者、外国人等への対応</b></p> <p>平成25年度の新規実施事項</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・アンケートで要望の多かった洋式トイレの増設(京都国立近代美術館)。</li> <li>・授乳室の新設(京都国立近代美術館)。</li> <li>・館内サインの一新(京都国立近代美術館)</li> <li>・最寄駅方面への分かりやすい案内表示板を2枚設置(国立新美術館)</li> </ul> <p>各館共通の継続実施事項</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・多目的(身体障害者用)トイレ、エレベータ(エスカレーター)、スロープ(手摺り)の設置</li> <li>・車椅子、ベビーカー(国立西洋美術館は除く)の貸出</li> <li>・身体障害者用駐車スペース(国立国際美術館は除く)の提供</li> </ul>				<p>来館者のニーズを把握し、洋式トイレの増設や、授乳室やサインの新設などの改善が行われており、高齢者、身体障害者、外国人等への対応は、目標に向けた充実が図られた。今後も、これらの対応の充実に期待したい。</p>																		

<p>展示や解説パネルを工夫するとともに、音声ガイド等を導入するなど、鑑賞しやすさ、理解のしやすさに取り組んだか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自動体外式除細動器(AED)の設置</li> <li>・盲導犬、介助犬の同伴による観覧</li> <li>・多言語による館案内表示</li> <li>・多言語による館内リーフレット、ミュージアムカレンダー等の配布</li> <li>・所蔵作品展(常設展)、企画展(一部を除く)において作品リスト(日・英)の配布</li> <li>・観覧者の休憩のための椅子を展示室に配置</li> <li>・オストメイト(人工肛門、人工膀胱保有者)用の設備を設置</li> <li>・キャプションに英語表記を併記</li> <li>・英語版ホームページの公開</li> </ul> <p>各館ごとの継続実施事項</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・東京都が実施する「ウェルカムカード」に参加し、外国人来館者の所蔵作品展観覧料を割引(東京国立近代美術館、国立西洋美術館)</li> <li>・所蔵作品展「MOMAT コレクション」英語版音声ガイドを導入(東京国立近代美術館本館)</li> <li>・インフォメーションカウンターに筆談ボードを設置(京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立新美術館)</li> <li>・貸出用拡大鏡 16 個を設置するとともに、授乳室及び安全仕様のキッズルームを地下1階に設置し、幼児向け絵本 400 冊を常設(国立国際美術館)</li> <li>・授乳室(地下1階)の設置、点字ブロック(正門から正面入口、地下鉄口から西入口(インターホンを設置))及び点字表示(エレベータ内他)の設置、補聴器等への磁気誘導無線システムの講堂内への設置(専用受信機 10 台)、ロビー等の館内ディスプレイでの展覧会や講演会等の情報表示、託児サービスの実施並びに文字を大きくし、見易くしたフロアガイド「大きな文字の利用案内」の館内配布(国立新美術館)</li> </ul> <p style="text-align: center;"><b>展示、解説の工夫と音声ガイドの導入</b></p> <p>平成 25 年度の新規実施事項</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・展示ケースの一部リニューアル(東京国立近代美術館工芸館)</li> <li>・展示ケース内の照明を蛍光灯から LED に更新(東京国立近代美術館工芸館)</li> <li>・ミュージアムカレンダーのリニューアル(京都国立近代美術館)</li> </ul> <p>各館共通の継続実施事項</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・共催展における音声ガイドの導入</li> <li>・館内リーフレット、フロアプラン、ミュージアムカレンダー等の配布</li> </ul> <p>各館ごとの継続実施事項</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・館内サインの拡大・多言語化、所蔵作品展で「重要文化財」のキャプション表示やホームページに重要文化財作品の解説ページを引き続き設けるとともに、所蔵作品展のための英語版音声ガイドの貸出を行った(東京国立近代美術館本館)。</li> </ul>	<p>新たに展示ケースの充実などが行われている。東京国立近代美術館における所蔵作品展の英語版音声ガイドなど、展示、解説パネル、音声ガイドの拡充は継続して行われており、これらの対応は評価できる。</p>
---	---	--

<p>入館者を対象とする満足度調査を定期的 に実施し、入場料金及び開館時間の弾力 化などの管理運営の改善に取り組んだ か。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キャプションサイズの拡大化、作品名のふりがな及び素材・技法の記載を行った(東京国立近代美術館工芸館)。</li> <li>・常設展「NFC コレクションでみる 日本映画の歴史」において、児童・生徒向けの「ジュニア・セルフガイド」を配布した(東京国立近代美術館フィルムセンター)。</li> <li>・企画展において、児童・生徒向けの「ジュニア・パスポート」を配布したほか、本館の建築探検マップ(日・英・仏・韓・中国語版)や館広報(館ニュース Zephyros の最新号及びバックナンバー)の配布及びホームページ掲載を行うとともに、常設展ガイドとして利用できる iPhone/iPod Touch・Android 携帯端末専用アプリ「Touch the Museum」の無料配信を行った。また、企画展の解説パネルを、見やすいように拡大文字の冊子に加工し、展示室内に配置したほか、版画展開催の際には、版画の技法を説明した小冊子を展示室内に配置した(国立西洋美術館)。</li> <li>・作品紹介キャプションをより見やすくするよう努めた(国立国際美術館)。</li> <li>・「イメージの力」展鑑賞ガイド『アートのとびら 国立新美術館ガイドブック vol.8』(日英併記)、「貴婦人と一角獣」展ジュニアガイド、「アメリカン・ポップ・アート展」鑑賞ガイド、「印象派を超えて 点描の画家たち」ジュニアガイドの配布を行った(国立新美術館)。</li> </ul> <p style="text-align: center;"><b>入場料金、開館時間等の弾力化</b></p> <p>国際博物館の日(5月18日、東京国立近代美術館フィルムセンターの上映会を除く。)及び文化の日(11月3日、国立新美術館を除く)の所蔵作品展(常設展)の観覧料を無料にするるとともに、夜間開館の実施、年始やゴールデンウィーク等休館日の臨時開館を実施した。また、所蔵作品展及び自主企画展の高校生以下及び18歳未満の者の観覧料の無料化についての周知に努めた。</p> <p>その他、平成25年度の各館の取組は以下のとおりである。</p> <p>(ア)東京国立近代美術館</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・東京メトロ、都営地下鉄ワンデーパスによる観覧料割引を実施(本館・工芸館)</li> <li>・「東京マラソン 2014」イベントガイド持参者についての、所蔵作品展の観覧料(個人一般)割引を実施(本館・工芸館)</li> <li>・JAF 会員券提示による観覧料(個人一般)割引を実施(本館・工芸館)</li> <li>・年始は1月2日から開館(本館所蔵作品展は無料)し、図録やオリジナルグッズをプレゼント(本館・工芸館)</li> <li>・共催展においてペア観覧券等による観覧料割引を実施(本館)</li> <li>・桜花期における休館日について、臨時開館を実施(本館・工芸館:4月1日、4月7日、3月24日、3月31日)</li> </ul>	<p>入館料、開館時間については、アンケート調査を踏まえ、文化の日、国際博物館の日における所蔵作品展の無料化、高校生以下及び18歳未満者の無料化、夜間開館、年始・ゴールデンウィーク等の臨時開館など、管理運営の改善に取り組んでおり、評価できる。また、混雑緩和のための開館時間の延長と臨時開館、地域のイベントに合わせた開館など各館の創意工夫による判断が随所に見られ、弾力的運用は評価できる。</p> <p>キャンパスメンバーズ制度による対前年度比の入館者が大幅に増えており、制度の着実な運用が行われていることを評価する。</p>
---	--	--

(イ) 京都国立近代美術館

- ・開館 50 周年を記念し、4 月 27 日を開館記念日とし、無料観覧を実施
- ・企画展を開催しない土曜日について、所蔵作品展の無料観覧を実施
- ・「京都岡崎レッドカーペット 2013」への協力の一環として特別夜間開館を実施(9 月 7 日)
- ・「岡崎ときあかり～あかりとアートのプロムナード 2013」への協力の一環として特別夜間開館を実施(10 月 26 日)
- ・「関西文化の日」にちなみ、所蔵作品展の無料観覧を実施(11 月 16 日、17 日)
- ・京都国立博物館、京都市美術館、京都文化博物館と組織する「京都ミュージアムズ・フォー」において、各館の友の会と相互割引を実施
- ・近隣の京都市美術館、細見美術館と連携し、相互割引を実施

(ウ) 国立西洋美術館

- ・クレジットカード及び電子マネー (Suica 及び PASMO) による観覧券の窓口販売
- ・年間を通じて開館時間を 30 分延長し、午後 5 時 30 分まで開館
- ・「夏休み子供音楽会 2013 (上野の森文化探検)」(主催: 東京文化会館 (公益財団法人東京都歴史文化財団) ほか) に参加し、音楽会参加者について常設展の観覧料金無料化を実施(7 月 28 日)
- ・教育普及プログラム「ファン・デー」の開催に伴い、常設展及び「ル・コルビュジエと 20 世紀美術」展の無料観覧を実施(8 月 10 日、11 日)
- ・「ラファエロ」展において、政府による美術品補償制度適用の還元策として高校生観覧料無料化を実施(4 月 1 日～7 日、平成 24 年度を含めると 3 月 22 日～4 月 7 日)。
- ・「ラファエロ」展において、団体観覧による混雑を解消するため、開館日を 1 日追加し、団体特別鑑賞会を実施(4 月 15 日)
- ・「ラファエロ」展について、会期末の混雑緩和のため、開館時間を午後 8 時まで延長(5 月 25 日、28 日～30 日、6 月 1 日)
- ・上野公園での明かりと稔りのフェスティバル「創エネ・あかりパーク 2013」に参加し、開館時間を午後 8 時まで延長(11 月 2 日、3 日)
- ・「国立西洋美術館 × ポーラ美術館 モネ、風景を見る眼 - 19 世紀フランス風景画の革新」展において、団体観覧による混雑を解消するため、開館日を 1 日追加し、団体特別鑑賞会を実施(1 月 20 日)
- ・「国立西洋美術館 × ポーラ美術館 モネ、風景を見る眼 - 19 世紀フランス風景画の革新」展について、会期末の混雑緩和のため、開館時間を午後 8 時まで延長(3 月 8 日、9 日)
- ・桜花期における休館日について、試行的に臨時開館を実施(3 月 31 日)

(工)国立国際美術館

- ・毎月第一土曜日に、所蔵作品展の無料観覧を実施
- ・開館期間中の金曜日に、午後7時まで延長開館を実施
- ・文化の日に企画展を含む全館無料化を実施(11月3日)
- ・関西文化の日に、所蔵作品展の無料観覧を実施(11月16日、17日)

(オ)国立新美術館

- ・クレジットカード及び電子マネー(Suica及びPASMO)による観覧券の窓口販売
- ・「平成25年度(第17回)文化庁メディア芸術祭」の無料観覧
- ・六本木アートトライアングル参加館との観覧料の相互割引及び共通マップの作成・配布
- ・公募団体展と企画展の観覧料の相互割引
- ・東京メトロ、都営地下鉄ワンデーパスによる観覧料割引
- ・共催展においてペア観覧券等による観覧料割引
- ・共催展において、高校生無料観覧日の設定を推進
- ・国際博物館の日(5月18日)に「カリフォルニア・デザイン 1930-1965 - モダン・リビングの起源 - 」展の無料観覧を実施
- ・「印象派を超えて 点描の画家たち ゴッホ、スーラからモンドリアンまで」において、政府による美術品補償制度の還元策として、高校生の無料観覧を実施(10月5日～11月24日の土・日・祝日[18日間])
- ・休館日に臨時開館を実施(4月30日)
- ・「イメージの力 国立民族学博物館コレクションにさぐる」及び「中村一美展」において、公募団体展と企画展の観覧料の相互割引に関し、65歳以上の観覧料に大学生団体料金を試行的に適用し、高齢者の観覧料を低廉化
- ・隣接する政策研究大学院大学との連携を深めるため、同大学の学生の自主企画展の入場無料化を実施

**キャンパスメンバーズ制度の実施**

国立美術館全体の事業として平成18年12月から実施している、大学、短期大学、高等専門学校及び専修学校等を対象とした会員制度「国立美術館キャンパスメンバーズ」については、引き続き特設サイト(パソコン版、モバイル版)において各館の展覧会情報を提供するとともに、サイトを周知するためのポスター及びチラシを加入校に配布するなど利用促進に努めた。平成25年度の実績としては、メンバー校は77校、各館利用者数は89,192名となっている。

東京国立近代美術館フィルムセンターでは、国立美術館キャンパスメンバーズの加盟校(東京国立近代美術館利用校)が、フィルムセンターの所蔵映画フィルムと施設を利用し

<p>入館者にとって快適な空間となるよう、利用者ニーズを踏まえてミュージアムショップやレストラン等の充実を図ったか。</p>	<p>て講義等を行うことができる「東京国立近代美術館フィルムセンター・大学等連携事業」及び大学等の学生がフィルムセンターで映画の上映会または展覧会を観覧したことを証明する「鑑賞証明カード」の配付がそれぞれ2年目を迎え、大学等連携事業については8回(5校)の講義が実施された。</p> <p><b>ミュージアムショップ、レストラン等の充実</b></p> <p>ミュージアムショップについては、所蔵作品の図版を使用したポストカードや図柄を活用したオリジナルグッズの開発に努め、ホームページにおいて展覧会図録やグッズの情報を紹介するなど広報宣伝を行った。また、レストランについては、企画展にちなんだ特別メニュー等を提供した。</p> <p>その他、平成25年度の各館の取組は以下のとおりである。</p> <p>(ア)東京国立近代美術館  &lt;ミュージアムショップ&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平成24年度に完売した「国立美術館アートカード」について、好評につき再販売を行った。</li> <li>・平成24年度の60周年を機にシンボルマークを活用したグッズの開発を行った。</li> <li>・ミュージアムショップのないフィルムセンターでは、上映会・展覧会の企画内容にあわせた書籍等の委託販売を行い、来館者サービスに努めた。</li> </ul> <p>&lt;レストラン&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「竹内栖鳳展」及び「工藤哲己展」にちなんだ特別メニューを提供した。</li> <li>・来館者が利用しやすいよう、より安価なメニューの提供に努めた。</li> </ul> <p>(イ)京都国立近代美術館  &lt;ミュージアムショップ&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・開館50周年記念展に合わせ、「上野リチ」オリジナルグッズを企画・作成し、オリジナルグッズの主力商品に据えた。</li> <li>・展覧会ごとに内容に関連した書籍を充実させ、アートグッズも絶えず新商品を取り入れた。</li> </ul> <p>&lt;レストラン&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・春夏と秋冬でメニューを入れ替え、京都の旬の食材を使った手作りのメニューを提供するとともに、企画展に合わせたテーマランチやテーマデザートの提供を行った。</li> <li>・ホームページを刷新し、情報を充実させた。</li> </ul> <p>(ウ)国立西洋美術館  &lt;ミュージアムショップ&gt;</p>	<p>ミュージアムショップ、レストラン等の付帯設備は、展覧会と連携した企画などの工夫がなされている。今後は、ショップやカフェテリアの空間デザインに専門的知見を生かすなど、各館の特徴をいかした空間となるよう期待したい。</p>
--	---	--

	<p>・販売品の充実のため、例年に引き続きオリジナルグッズの開発を行った。</p> <p>&lt;レストラン&gt;</p> <p>・各企画展に関連したメニューを開発し、提供した。</p> <p>(工) 国立国際美術館</p> <p>&lt;ミュージアムショップ&gt;</p> <p>・所蔵作品の絵葉書、レターセットや、美術館のロゴ入りマグカップ、Tシャツ、キーホルダー等、オリジナルグッズの充実のほか、企画展に合わせて、出展作家に関連した書籍、DVD等の販売を行い、来館者のニーズに合わせた運営を行った。</p> <p>(オ) 国立新美術館</p> <p>&lt;ミュージアムショップ&gt;</p> <p>・1階エントランスに可動式ミュージアムショップを新規にオープンした(平成26年2月)。</p> <p>それによって、包材を一新し、オリジナルグッズを製作し、種類を増やした。</p> <p>&lt;レストラン&gt;</p> <p>・展覧会にゆかりのある特別メニューを企画した。</p>	
--	--	--

【(中項目)1-2】	2. 我が国の近・現代美術及び海外の美術を体系的・通史的に提示しうるナショナルコレクションの形成・継承	【評定】			
		A			
		H23	H24	H26	H27
		A	A		

【(小項目)1-2-1】	<b>収蔵品の収集</b> <b>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</b> (1)-1 国民に対して多様な鑑賞機会を提供するとともに、国内外の美術館活動の活性化に資するため、各種制度を有効に活用し、ナショナルコレクションの形成を図る。その際の各館の役割・任務に沿った収集方針は、次に掲げるとおりとし、その収集方針に沿って、体系的・通史的にバランスのとれた所蔵作品の蓄積を図る。 なお、美術作品の収集に当たっては、その美術史的価値や意義等についての外部有識者の意見等を踏まえ、適宜適切な購入を図る。 また、収集活動を適時適切に行うために、美術作品の動向に関する情報の入手と機動性の向上に取り組む。 (東京国立近代美術館) 近・現代の絵画、版画・水彩・素描、彫刻、写真等の作品、工芸作品、デザイン作品、映画フィルム等を収集する。 美術・工芸に関しては近代美術全般の歴史的な所蔵作品の展示が可能となるように、歴史的価値を有する作品・資料を収集する。 また、映画フィルム等については、残存するフィルムの収集に取り組むとともに積極的に復元を図る。 (京都国立近代美術館) 近代美術史における重要な美術作品など、近・現代の美術・工芸・写真・デザイン作品等を収集する。 その際、京都を中心とする関西ないし西日本に重点を置き、地域性に立脚した所蔵作品の充実を図る。 (国立西洋美術館) 中世末期から20世紀初頭に至る西洋美術の流れの概観が可能となるように、松方コレクションを中心とした近代フランス美術の充実、近世ヨーロッパ絵画の充実及びヨーロッパ版画の系統的収集を行う。 (国立国際美術館) 日本美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするために、国際的な交流が極めて盛んになった1945年以降の国内外の美術並びに同時代の先端的な美術を中心に、総合的な影響関係を踏まえつつ、体系的に収集する。 (1)-2 所蔵作品の体系的・通史的なバランスの観点から欠けている部分を中心に、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、その積極的活用に努める。 (1)-3 各館の収集方針に則しつつ、緊密な情報交換と連携を図りながら、国立美術館全体のコレクションの充実を図る。	【評定】			
		A			
		H23	H24	H26	H27
A	A				
実績報告書等 参照箇所					
< 実績報告書 > P44～47 2 我が国の近・現代美術及び海外の美術を体系的・通史的に提示しうるナショナルコレクションの形成・継承 (1)美術作品の収集					

【インプット指標】

(中期目標期間)	H23	H24	H25	H26	H27
決算額(百万円)	1,668	2,985	3,402	-	-
従事人員数(人)	49	47	44	-	-

- 1) 決算額は固定資産の取得、処分、減価償却費及び減損損失累計額の明細における美術工芸品の当期増加額から寄贈による資産の取得額を減じた額を計上している。
- 2) 従事人員数は、国立新美術館を除くすべての研究職員数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準	実績	分析・評価																																																																																			
<p>各館の収集方針に沿って、体系的・通史的にバランスのとれた所蔵作品の蓄積を図ったか。</p> <p>なお、美術作品の収集に当たっては、その美術史的価値や意義等についての外部有識者の意見等を踏まえ、適宜適切な購入を図ったか。</p> <p>また、収集活動を適時適切に行うために、美術作品の動向に関する情報の入手と機動性の向上に取り組んだか。</p> <p>所蔵作品の体系的・通史的なバランスの観点から欠けている部分を中心に、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、その積極的活用に努めたか。</p> <p>各館の収集方針に則しつつ、緊密な情報交換と連携を図りながら、国立美術館全体のコレクションの充実を図ったか。</p>	<p><b>美術作品の収集</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>館名</th> <th>購入点数</th> <th>購入金額</th> <th>寄贈点数</th> <th>年度末所蔵作品数</th> <th>年度末寄託品数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">東京国立近代美術館</td> <td>本館</td> <td>88</td> <td>836,341,750</td> <td>49</td> <td>12,481</td> </tr> <tr> <td>工芸館</td> <td>19</td> <td>69,476,875</td> <td>9</td> <td>3,316</td> </tr> <tr> <td>京都国立近代美術館</td> <td>23</td> <td>801,614,000</td> <td>70</td> <td>11,494</td> <td>841</td> </tr> <tr> <td>国立西洋美術館</td> <td>8</td> <td>114,825,276</td> <td>0</td> <td>5,529</td> <td>122</td> </tr> <tr> <td>国立国際美術館</td> <td>70</td> <td>1,217,970,049</td> <td>37</td> <td>7,123</td> <td>134</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>208</td> <td>3,040,227,950</td> <td>165</td> <td>39,943</td> <td>1,422</td> </tr> </tbody> </table> <p>1 東京国立近代美術館本館では、『東京国立近代美術館 60 年史』の編纂を契機として、所蔵作品の計数方法等の見直しを行った。</p> <p>2 東京国立近代美術館本館では、『東京国立近代美術館 60 年史』の編纂を契機として、所蔵作品の計数方法等の見直しを行った。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>館名</th> <th>購入本数</th> <th>購入金額</th> <th>寄贈本数</th> <th>年度末所蔵本数</th> <th>年度末寄託品本数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東京国立近代美術館(フィルムセンター)</td> <td>297</td> <td>322,979,052</td> <td>4,706</td> <td>72,290</td> <td>8,018</td> </tr> </tbody> </table> <p>【美術作品の収集 過去の実績】</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>H21</th> <th>H22</th> <th>H23</th> <th>H24</th> <th>H25</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>購入点数</td> <td>400</td> <td>286</td> <td>674</td> <td>311</td> <td>207</td> </tr> <tr> <td>購入金額(千円)</td> <td>836,660</td> <td>1,375,962</td> <td>1,382,245</td> <td>2,037,301</td> <td>3,040,228</td> </tr> <tr> <td>寄贈点数</td> <td>229</td> <td>386</td> <td>1,213</td> <td>1,451</td> <td>165</td> </tr> <tr> <td>年度末</td> <td>33,354</td> <td>34,026</td> <td>35,913</td> <td>39,570</td> <td>39,942</td> </tr> </tbody> </table>	館名	購入点数	購入金額	寄贈点数	年度末所蔵作品数	年度末寄託品数	東京国立近代美術館	本館	88	836,341,750	49	12,481	工芸館	19	69,476,875	9	3,316	京都国立近代美術館	23	801,614,000	70	11,494	841	国立西洋美術館	8	114,825,276	0	5,529	122	国立国際美術館	70	1,217,970,049	37	7,123	134	計	208	3,040,227,950	165	39,943	1,422	館名	購入本数	購入金額	寄贈本数	年度末所蔵本数	年度末寄託品本数	東京国立近代美術館(フィルムセンター)	297	322,979,052	4,706	72,290	8,018		H21	H22	H23	H24	H25	購入点数	400	286	674	311	207	購入金額(千円)	836,660	1,375,962	1,382,245	2,037,301	3,040,228	寄贈点数	229	386	1,213	1,451	165	年度末	33,354	34,026	35,913	39,570	39,942	<p>収蔵品の収集については、購入、寄贈ともに全体として、体系的・通史的にバランスのとれたコレクションの充実に努めており、評価できる。</p> <p>美術品では、国内所蔵の作品の海外流出を防いだ措置などは評価できる。</p> <p>映画フィルムでは、映画史的に貴重なコレクションの充実を図るだけでなく、次期企画展の企画を念頭においた計画的な購入や、映画フィルムに関する大型技術資料の寄贈など、ナショナルセンターの収蔵品としての充実がなされており評価できる。</p>
館名	購入点数	購入金額	寄贈点数	年度末所蔵作品数	年度末寄託品数																																																																																
東京国立近代美術館	本館	88	836,341,750	49	12,481																																																																																
	工芸館	19	69,476,875	9	3,316																																																																																
京都国立近代美術館	23	801,614,000	70	11,494	841																																																																																
国立西洋美術館	8	114,825,276	0	5,529	122																																																																																
国立国際美術館	70	1,217,970,049	37	7,123	134																																																																																
計	208	3,040,227,950	165	39,943	1,422																																																																																
館名	購入本数	購入金額	寄贈本数	年度末所蔵本数	年度末寄託品本数																																																																																
東京国立近代美術館(フィルムセンター)	297	322,979,052	4,706	72,290	8,018																																																																																
	H21	H22	H23	H24	H25																																																																																
購入点数	400	286	674	311	207																																																																																
購入金額(千円)	836,660	1,375,962	1,382,245	2,037,301	3,040,228																																																																																
寄贈点数	229	386	1,213	1,451	165																																																																																
年度末	33,354	34,026	35,913	39,570	39,942																																																																																

所蔵作品数					
年度末 寄託品数	1,529	1,338	1,315	1,416	1,422

【映画フィルムの収集 過去の実績】

	H21	H22	H23	H24	H25
購入本数	1,194	413	291	247	297
購入金額(千円)	1,259,910	348,086	274,662	114,092	322,979
寄贈本数	1,648	852	1,479	1,523	4,706
年度末 所蔵本数	62,482	63,747	65,517	67,287	72,290
年度末 寄託品本数	8,018	8,018	8,018	8,018	8,018

各館における作品の収集は、各館の収集方針及び各館の研究員による調査・研究活動を通じ、収集すべき美術作品を検討し、学芸課長会議において、各館における収集計画について協議した上で、「美術作品購入又は寄贈受入れに関する規程」で定められた外部の有識者による美術作品購入選考委員会の開催を経て、実施した。

また、学芸課長会議において、作品収集についての情報交換を行った。

平成 25 年度に予算措置された美術作品購入費の用途について、各館の調査研究及び収集方針を踏まえ、法人全体で協議し、海外への流出可能性など緊急度の高さ、作品の品質と希少性等の観点から検討し、通常の予算では購入困難な作品を購入した。

各館の収集(購入・寄贈)の方針と実績

(ア)東京国立近代美術館

(本館)

< 購入 >

1970 年代以降の日本の作品として奈良美智(Harmless Kitty)を、日本の美術に多大な影響を与えた海外作家の作品として特別購入予算によりアレクサンダー・カルダー(モンスター)を、1900 - 1940 年代の日本画作品として吉川霊華(離騷)を購入した。他に特別購入予算により山下菊二の代表作(あけぼの村物語)を購入した。また、東日本大震災に関する若手作家の作品のリサーチを行い、Chim Pom(気合い100連発)他を購入した。

< 受贈 >

継続して収集してきた旧「盛田良子コレクション」より、バーバラ・ヘップワース、ピエール・スーラージュ、堂本尚郎の 3 作品を受贈した。また、速水御舟(丘の並木)、川端龍子(新樹の曲)、山下菊二の各時期の代表作計 5 点などを受贈した。

(工芸館)

< 購入 >

特別購入予算により重要な陶磁作品である岡部嶺男(青織部縄文鼎)を購入した。また、平成 24 年度収蔵分(購入・受贈)の関連で、近代工芸の主要な作家と位置付けている石黒宗磨の寄託中の作品 5 点を購入した。さらに、近代の漆芸を代表する赤塚自得と二十代堆朱楊成、金工の北原千鹿の重要な作品を購入した。

< 受贈 >

近代漆芸で活躍した辻村松華の明治期の経箱と吉田源十郎の 1926 年日本美術協会展覧会出品の硯箱という貴重な作品を受贈した。

(フィルムセンター)

< 購入 >

上映企画に合わせ、『奈良には古き仏たち』(1953 年)など清水宏監督作品 13 作品・34 本(これに加え、複製化により 7 作品・8 本を収集)、『二階の他人』(1961 年)など山田洋次監督作品では 26 作品の上映用ポジ・フィルムを収集した。また、平成 26 年度以降の上映企画を念頭に、東宝、KADOKAWA、国際放映各社より、初期カラー映画作品のフィルム購入を進めた。加えて、松竹株式会社との共同事業による小津安二郎監督カラー作品 4 作品のデジタル復元に伴い、各作品について三色分解白黒ネガ・フィルム、上映用ポジ・フィルム及び保存用デジタル素材等を収集した。

< 受贈 >

株式会社中国放送(新規の受入先)から、1960 年代より 80 年代初頭にかけて製作されたテレビ番組の映画フィルムを中心に 3,001 本を受贈した。戦後の教育映画配給を牽引した株式会社教配からは、持永只仁監督による人形アニメーションの原版類など 698 本の映画フィルムを受贈した。また、龍村仁監督の長編ドキュメンタリー・シリーズ「地球交響曲」第一部～第六部(1992～2006 年)の原版類について、龍村仁事務所、株式会社オンザロードから寄贈を受けた。個人製作による作品の寄贈受入については、日本における女性映像作家のパイオニア、出光真子が 1972 年より製作した全フィルム作品について、原版を中心に 50 本の映画フィルムを、作家より受贈した。

映画関連資料については、日活株式会社からスチル写真のガラス乾板など 9,188 点を受贈したほか、コレクターの井上英治氏から映画ポスター 3,833 点を受贈した。また、株式会社 IMAGICA から同社開発の 70mm マルチオブチカルプリンターなど大型技術資料 7 点の寄贈手続きがなされた。

(イ) 京都国立近代美術館

< 購入 >

マックス・エルンストの《人間の形をしたフィギュア》、フランシス・ピカビア《アストロラブ》など、長年に渡って収集してきたシュールレアリスムやダダイズムの作品を購入した。この収集により、まとまった形でのシュールレアリスム、ダダイズムの展示ができるようになった。また、陶芸でも、昨年に引き続き加守田章二の作品をまとめて購入したが、これにより現代陶芸の研究や展示にも大きな財産となった。また、近代京都画壇の重鎮であった竹内栖鳳の代表作の一つである《おぼる月》を購入できたことは、コレクションの柱である近代京都画壇の充実に大きな成果であった。

< 寄贈 >

東の高橋由一と並んで、明治時代、西の近代洋画の草分け的存在である田村宗立の作品はこれまで継続的に収集してきたが、平成 25 年度は、田村家に保管されていた田村の任命書や受賞の賞状、さらには田村の収集していた当時の様々な資料を受贈した。この貴重な寄贈資料により、田村の画業や作品、明治時代の関西洋画壇の深い研究が可能となり、大きな成果であった。

(ウ) 国立西洋美術館

< 購入 >

日本に残る旧松方コレクション作品のなかで最も重要な作品のひとつである、フランス・ロマン主義を代表する画家ウジェーヌ・ドラクロワの絵画《馬を連れたシリアのアラブ人》を購入した。版画に関しては、イタリア 16 世紀の重要な版画家ジョルジョ・ギージの代表作《人生の寓意》、17 世紀オランダの大画家レンブラントの肖像版画の代表作《ヤン・シックスの肖像》など 7 点を購入した。

(エ) 国立国際美術館

< 購入 >

戦前・戦後を通じ彫刻と絵画の両方においてパリで活躍した作家、アルベルト・ジャコメッティの絵画《男》をはじめ、ポール・マッカーシーや柴田敏雄の写真作品、ジャオ・チアエンの映像作品等を購入した。

< 寄贈 >

タイガー立石氏の版画作品を多数受贈し、既に所蔵している同氏の作品とあわせてまとまったコレクションが形成された。また、チョン・ソジョン氏の映像作品、柴田敏雄氏の写真作品等も受贈し、写真や映像分野におけるコレクションのより一層の充実を図った。

【(小項目)1-2-2】	収蔵品の保管・管理	【評定】			
【法人の達成すべき目標(計画)の概要】		B			
<p>(2)-1 国民共有の貴重な財産である美術作品を永く後世に伝えるとともに、展示等の美術館活動の充実を図る観点から、収蔵庫等保存施設の狭隘・老朽化への対応に積極的に取り組む。その際、各館における対策はもとより、抜本的な改善に向けた今後の方策として、各館で横断的に活用が可能な形態や方法についても、既存の施設との連携を図りながら、地元自治体や関係機関の協力を得て検討を進める。</p> <p>(2)-2 環境整備及び管理技術の向上に取り組むとともに、展示作品の防災対策の推進・充実を図る。</p>		H23	H24	H26	H27
		A	B		
		実績報告書等 参照箇所			
		<p>&lt;実績報告書&gt; P47～48 (2)収蔵庫保存施設の狭隘・老朽化への対応と適切な保存環境の整備等 収蔵庫等の狭隘・老朽化への対応 保存環境の整備等と防災対策の推進・充実</p>			
【インプット指標】					
(中期目標期間)	H23	H24	H25	H26	H27
決算額(百万円)	386	364	398	-	-
従事人員数(人)	40	39	37	-	-
<p>1)決算額は損益計算書 収集保管事業費を計上している。</p> <p>2)従事人員数は、収集保管業務に携わるすべての研究職員数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。</p>					
評価基準	実績			分析・評価	
<p>国民共有の貴重な財産である美術作品を永く後世に伝えるとともに、展示等の美術館活動の充実を図る観点から、収蔵庫等保存施設の狭隘・老朽化への対応に積極的に取り組んだか。その際、各館における対策はもとより、抜本的な改善に向けた今後の方策として、各館で横断的に活用が可能な形態や方法についても、既存の施設との連携を図りながら、地元自治体や関係機関の協力を得て検討を進めたか。</p>	<p>収蔵庫等の狭隘・老朽化への対応 ア 東京国立近代美術館 本館では、狭隘化が進行している状態であるが、収納できない作品については館外の倉庫を借りて保管する等の工夫を行っている。また、平成25年度には、作品同士の間隔が十分に取れないことから生ずる風通しの悪化と虫害の発生を防ぐためこまめな清掃を実施した。今後も引き続き収納の効率化、虫害防止等の対策を行う。</p> <p>工芸館では、狭隘化が急激に進行している状態であるが、可能な限り保管方法の工夫を行っている。今後は、より安全な保管を確保するために、外部倉庫の活用を検討していきたい。また、平成25年度には、展示室及び収蔵庫等について、除塵除菌処理、害虫防除処理及び包み込み燻蒸を行った。</p> <p>フィルムセンターでは、平成25年度末、相模原分館の敷地内に可燃性映画フィルムの保管を専用とする映画保存棟（重要文化財映画フィルム保存庫）を竣工し</p>			<p>収蔵品の保管・管理については、適切な温湿度管理・定期点検とともに、随時、施設の改修工事等を実施することにより、安全な保管・管理がなされている。</p> <p>また、フィルムセンター相模原分館に可燃性映画フィルム専用の保存棟を設置したことは高く評価できる。</p> <p>しかし、収蔵庫等の保存施設は、年々増加する所蔵品への対応を工夫しながら保存・管理を行っているが、ナショナルセンターとしての機能を損なうことがないように、早急に新たな保管施設の確保と収蔵品の保管環境の改善に取り組む必要がある。</p>	

た。平成 25 年度はこれに加え、以下のような対応を行った。

- ・京橋に設置していた KEM35 mm検査台に、画像取り込み装置を付設し、相模原分館に移設することによって、相模原分館でのより効率的な検査作業に資することが可能になった。
- ・中古の映画フィルム用ドライクリーナーを取得することにより、主に上映に使用されることが多い映画フィルムにおける軽微な汚れへの処置を行うことが可能になった。

映画関連資料については、現在ノンフィルム資料のうち紙素材の資料は 4 階図書室と地下 3 階収蔵庫に保管しているが、収蔵能力が限界に達しつつあるため、複本となった雑誌やプレスなどは相模原分館の新収蔵庫への部分的移転を始めた。また、映画人・映画会社の旧蔵品である未整理の新規寄贈資料も、同様に相模原分館への搬入を行っている。

今後は、映画保存棟 の運用を念頭に、民間倉庫で保管している可燃性映画フィルムの網羅的な状態確認を進めた上で、映画保存棟 への移動を優先すべきフィルムの選別を行う。

イ 京都国立近代美術館

狭隘化が急激に進行している状態であるが、収納できない作品については、館外の倉庫を借り、一時的に保管している。また、収蔵庫を新たに設立するための工事を調整中である。

ウ 国立西洋美術館

不具合により使用ができなくなっていた新館第一、第二収蔵庫の絵画ラックについて、調査と修繕を実施した。また、新館第一収蔵庫の中に、平成 24 年度に収集した宝飾品コレクション 805 点を収蔵するためのキャビネットを設置した。引き続き、収蔵庫内の日常的な整理整頓と、適正な温湿度管理、地震対策の徹底を実施していく。

エ 国立国際美術館

狭隘化が進行している状態であるが、ラックの隙間を可能な限り小さくする等の工夫により、適切な保存環境を維持している。引き続き、新たな収納ケースの整備、作品梱包の工夫、汚損した額縁の廃棄等を行い、適切な保存環境の整備について検討していく。

<p>環境整備及び管理技術の向上に取り組むとともに、展示作品の防災対策の推進・充実を図ったか。</p>	<p>保存環境の整備等と防災対策の推進・充実</p> <p>ア 東京国立近代美術館 (本館) 火災発生を想定した通報訓練を実施した(4月26日)。また、火災発生及び延焼による避難誘導訓練を実施、ミュージアムショップ及びライブラリのスタッフも参加し、誘導方法についてレクチャーしながらの訓練を実施した。訓練後、屋外階段を利用しての車椅子搬送講習・実技及びAED訓練を実施した(7月25日)。</p> <p>(工芸館) 茨城県沖にて地震発生、千代田区において震度6強を想定した避難誘導訓練を実施した(3月28日)。</p> <p>(フィルムセンター) 地下3階収蔵庫での作業者のため、収蔵庫での作業を前提とした火災訓練を実施した(6月11日)。</p> <p>イ 京都国立近代美術館 消防署指導のもとで避難誘導訓練・消火訓練を実施した(3月24日)。</p> <p>ウ 国立西洋美術館 常設展示室内での地震による衝撃の被害を軽減するために、すべての作品に衝撃吸収ゴムの取り付けと額装の改善を実施した。</p> <p>エ 国立国際美術館 火災発生を想定した防災訓練、及び新しく着任した職員(監視を含む)を主な対象として避難経路の確認を実施した。また、災害対策を維持するための定期点検を実施した。</p>	<p>適切な水準にあり、今後ともに、防災対策に取り組んでいくことを期待する。</p>
---	--	--

【(小項目)1-2-3】	収蔵品の修理	【評定】 <p style="text-align: center;">A</p>																					
<p>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</p> <p>(3)修理・修復に関しては、各館の連携を図りつつ、外部の保存科学の専門家等とも連携して、所蔵作品の保存状況を確実に把握し、修理・修復の計画的実施に取り組む。</p>		H23	H24	H26	H27																		
【インプット指標】		A	A																				
		実績報告書等 参照箇所																					
<table border="1" data-bbox="120 568 1229 746"> <thead> <tr> <th>(中期目標期間)</th> <th>H23</th> <th>H24</th> <th>H25</th> <th>H26</th> <th>H27</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>決算額(百万円)</td> <td>386</td> <td>364</td> <td>398</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>従事人員数(人)</td> <td>49</td> <td>47</td> <td>44</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> </tbody> </table>		(中期目標期間)	H23	H24	H25	H26	H27	決算額(百万円)	386	364	398	-	-	従事人員数(人)	49	47	44	-	-	<p>&lt;実績報告書&gt;</p> <p>P48～50</p> <p>(3)所蔵作品の修理・修復</p>			
(中期目標期間)	H23	H24	H25	H26	H27																		
決算額(百万円)	386	364	398	-	-																		
従事人員数(人)	49	47	44	-	-																		
<p>1)決算額は損益計算書 収集保管事業費を計上している。(本項目は収集保管事業費の一部であり、個別に計上できないため、収集保管事業費全額を計上している。)</p> <p>2)従事人員数は、国立新美術館を除くすべての研究職員数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。</p>																							
評価基準	実績	分析・評価																					
<p>各館の連携を図りつつ、外部の保存科学の専門家等とも連携して、所蔵作品の保存状況を確実に把握し、修理・修復の計画的実施に取り組んだか。</p>	<p><b>所蔵作品の修理・修復</b></p> <p>東京国立近代美術館</p> <p>絵画 15 件、工芸 8 件、資料・その他 3 件、映画フィルムデジタル復元 36 本、ノイズリダクション等 52 本、不燃化作業 57 本</p> <p>(本館)</p> <p>昨年に引き続き、平成 24 年に受贈した平福百穂(丹鶴青瀾)(六曲一双屏風)の大規模解体修理を実施し、終了した。特に水濡れによる顔料の流れの処置に取り組んだ。また、手薄だった紙資料の修復として、岸田劉生資料のうち日記類の補修を行った。</p> <p>(工芸館)</p> <p>平成 20 年度に収蔵した漆工 1 点、平成 23 年度に収蔵した人形 2 点の寄贈収蔵作品の修復を行い、展示の活用を図った。特に 23 年度に収蔵した野口光彦の人形作品は重度の修復を要し、平成 24 年度からの継続で完了した。また、染織作品で使用頻度の高い芹澤銈介の壁掛け・のれん 6 点につき</p>	<p>美術品の修理については、緊急性に応じて適切に実施されていると評価できる。</p> <p>また、フィルムセンターにおける一連の映画フィルムのデジタル復元や不燃化作業は、現像技師 OB の協力をあおぐなど、外部の保存科学の専門家と連携し、所蔵作品の計画的かつ適切な修理・修復に取り組んだと評価できる。</p> <p>国立美術館として専門修復家の業務を保持・確立しえない体制が続いており、諸外国のナショナル・ミュージアムに比して弱いことから、専門技術者などの人材の確保が求められる。</p> <p>また、映画フィルムについても、デジタル化が進む中で、フィルム保存、修理・修復の専門家育成の問題は早急に検討すべき課題である。</p>																					

実施し、丸洗いの後にカビやヤケによる変色等を修復した。目白漆芸研究所の文化財保存修復の専門家らと連携し、漆作品とあわせて胡粉のヒビ等の困難さが想定される御所人形の修復を試みた。所蔵する御所人形については、他にも修復を要する作品があるため、今後の対策を検討したい。

(フィルムセンター)

- ・松竹株式会社との共同事業により、『彼岸花』(1958年)を初めとする小津安二郎監督カラー作品4作品について、デジタル技術による画及び音の修復を行った。
- ・平成14年度から15年度にかけてデジタル復元を行った『斬人斬馬剣』(1929年)について、現存メディアからの修復データの読み出しとともに、現時点におけるより適切なデータファイル及び保存メディアへの書き換えを行った。
- ・戦前ドイツ映画の所蔵35mm可燃性フィルムの不燃化作業において、フィルムのジェネレーションと状態に即した適切な中間素材の作成を行った。
- ・記録映画作家中村麟子の旧蔵資料をはじめ、劣化・損傷の恐れがあるシナリオ等冊子に対して中性紙の保存ケースを制作して長期保存を図った。
- ・公開・貸出頻度の高いと思われる日本映画ポスターを中心に、和紙を用いた簡易修復を行った。
- ・小津安二郎監督カラー作品のデジタル復元に際しては、修復監修として複数の撮影監督や関係者の協力を仰ぐとともに、画の修復及び修復データからのネガ作成にあたったIMAGICA、音の修復にあたった松竹映像センター、光学合成によるプリント作成にあたったIMAGICA ウェストとの連携を行った。
- ・修復データの読み出し及び変換については、IMAGICA と連携するとともに、東京現像所等の技術者からの情報も参考にした。
- ・戦前ドイツ映画の不燃化作業については、IMAGICA ウェストと連携するとともに、現像技師OBの協力を仰いだ。

京都国立近代美術館

絵画3件

引き続き企画競争を導入して絵画作品の修復を行った。保存・修復の担当者がいないことから、企画競争の導入は研究員がその状態・修理方法を学ぶ絶好の機会である。実際の修理に際しては、決定された外部の業者と常に修理の状況を確認しつつ、意見交換を行った。

国立西洋美術館

絵画26件、彫刻1件

	<p>ポーラ美術館との共催による所蔵品を用いた「国立西洋美術館 × ポーラ美術館 モネ、風景をみる眼 19世紀フランス風景画の革新」展の準備のため、出品作品のうち額装状態の劣悪な作品に関して、改善作業を実施した。それ以外の収蔵作品についても、クリヴェッリ作品及びクールベ作品、ルノワール作品、ファンタン＝ラトゥール作品の作品調査、額装改善、画面処置を行った。また新収蔵のセリュジエ作品の額装改善を実施し、速やかに展示に供する準備をした。</p> <p>国立国際美術館      絵画 16 件、彫刻 11 件、資料・その他 15 件</p> <p>郭仁植、吉仲太造等の絵画作品の洗浄や、森口宏一、湯原和夫等の彫刻作品の研磨、コーティング等を中心に修復を行った他、「あなたの肖像 工藤哲巳回顧展」の開催に向けて、工藤哲巳に関連する資料等のクリーニング、欠損部の補強等を重点的に行った。</p>	
--	---	--

【(小項目)1-2-4】	収集・保管のための調査研究	【評定】 <b>A</b>			
【法人の達成すべき目標(計画)の概要】		H23	H24	H26	H27
(4)各館の方針に従い、所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究を計画的に行い、その成果を業務に反映させる。なお、実施に当たっては、国内外の博物館・美術館等及び大学等の機関とも連携を図る。		A	A		
		実績報告書等 参照箇所			
		<実績報告書>			
		P50～53			
		(4)美術作品の保管・修理等に関する調査研究			

【インプット指標】

(中期目標期間)	H23	H24	H25	H26	H27
決算額(百万円)	295	305	256	-	-
従事人員数(人)	49	47	44	-	-

1) 決算額は損益計算書 調査研究事業費(国立新美術館を除く)を計上している。(本項目は調査研究事業費の一部であり、個別に計上できないため、収集・保管業務のない国立新美術館を除く、調査研究事業費全額を計上している。)
   
 2) 従事人員数は、国立新美術館を除くすべての研究職員数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準	実績	分析・評価
各館の方針に従い、所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究を計画的に行い、その成果を業務に反映させたか。なお、実施に当たっては、国内外の博物館・美術館等及び大学等の機関とも連携を図ったか。	<b>美術作品の保管・修理等に関する調査研究</b> 各館における調査研究の実施状況は、以下のとおりである。 ア 東京国立近代美術館 (本館) (ア)所蔵作品に関する調査研究 所蔵作品展では、平成24年度のリニューアル以降、テーマ性の高い特集形式の展示を実施しており、各研究員の研究成果の展示への素早い反映を心がけている。平成25年度も所蔵作品の調査・研究に基づき、「日本画のプロセス - 土田麦僊、東山魁夷、高山辰雄の場合」、「何かがおこってる:1907-1945の軌跡」等の特集を企画した他、コレクションを中心とした小企画「都市の無意識」「泥とゼリー」を開催した。特に「何かがおこってる」は4-3階を使用した初の大型特集で、専門分野に応じて各研究員が知見を持ち寄り、映像、雑誌、ポスターなども駆使して、日露戦争後から太平洋戦争終結までの時代と美術の動向を描き出した。 (イ)保管・修理に関する調査研究	全体として所蔵作品や保存・修理に関する調査研究が着実になされており、評価できる。 所蔵作品の研究は年々、学術的に深まりを見せており、それに基づく様々な成果が生まれている。 また、映画フィルムにおける収集・保管のための情報収集で得たフィルモグラフィなどの情報は、将来的には利用者も活用できるようにデータの公開が速やかに望まれる。

昨年に引き続き、平成 24 年に受贈した平福百穂(丹鶴青瀾)(六曲一双屏風)の大規模解体修理を実施し、終了した。また、手薄だった紙資料の修復として、岸田劉生資料のうち日記類の補修を行った。

(ウ)所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究成果の美術館活動への反映

調査研究に基づき所蔵作品展において特集展示企画を行うとともに、「何かがおこってる:1907-1945 の軌跡」で 2 回、「都市の無意識」で 2 回、「泥とジェリー」で 3 回のトークをそれぞれ実施した。また「都市の無意識」「泥とジェリー」では解説小冊子を作成し、無償配布した。修復が完了した(丹鶴青瀾)は、平福百穂の代表作かつ(丹鶴青瀾)の関連作品である(荒磯)とともに、詳しい解説キャプションを付し、特別展示を行った。

(工芸館)

(ア)所蔵作品に関する調査研究

随時の専門的な調査研究とともに、所蔵作品展や企画展での展示、貸与及び熟覧等において専門家等と研究を行った。

(イ)保管・修理に関する調査研究

目白漆芸研究所と浅井エージェンシーの専門家らと連携して文化財保存修復の調査・研究と修復を計画的に実施した。

(ウ)所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究成果の美術館活動への反映

現状保存修復を実施する作品は活用頻度の高いもの、あるいは緊急度の高いものから計画的に行った。完了した作品については展示や貸与等に有効に活用した。

(フィルムセンター)

(ア)所蔵作品に関する調査研究

所蔵作品に関する調査研究として、平成 25 年度は以下の通り取り組んだ。

・平成 24 年度に引き続き、1980 年以降に製作・公開された日本映画について、今後映画フィルム等の収集計画を立てるうえで役立つ、詳細なフィルムグラフィーを作成するための調査を継続した。

・小型映画によるホームムービーについて、荻野茂二監督による寄贈フィルム・コレクションの目録を完成させた。

・戦前日本ニュース映画のコレクションのうち、『朝日世界ニュース』について、朝日新聞社からの依頼を受け、作品内容に関する遡及調査に協力した。

・日本映画におけるスチル写真に関する調査研究

・小津安二郎作品における図像に関する調査研究

・日本のフィルム・アーカイブの初期史を明らかにするフィルム・ライブラリー時代の

資料のカタログ化を実施した。

・「NFC デジタル展示室」における第二次大戦前の日本の映画館写真の公開に伴い、東京を中心とする映画館の歴史について調査を行った。

(イ)保管・修理に関する調査研究

映画フィルムの保管に関する調査研究として、平成 25 年度は以下の通り取り組んだ。

・映画フィルムのならし作業に伴う、映画保存棟のならし室等及び搬出時における適切な温湿度環境に関する調査研究

・可燃性映画フィルムの安全な保管に関する調査研究

映画フィルムの修理に関する調査研究として、平成 25 年度は以下の通り取り組んだ。

・カラーフィルムのデジタル修復に関する調査研究

・三色分解ネガでの保存に関する調査研究

・三色分解ネガからの光学合成に関する調査研究

・可燃性フィルムからの不燃化作業における、適切な中間素材の作成及び焼付方法に関する調査研究

また、ノンフィルム資料については、カタログ化の詳細化に努め、寄贈者別に配置されていたプレス資料の現物レベルでの統合作業を継続している。また、映画パンフレットなど過去に寄贈されながら未整理であった分野の資料のデータベース登録に引き続き取り組んでいる。

(ウ)所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究成果の美術館活動への反映

映画フィルムに関する調査研究成果は以下のとおり反映された。

・調査研究にあたった客員研究員により、荻野茂二監督による寄贈小型映画フィルムの目録を、研究紀要に発表した。

・朝日新聞社による調査研究への協力及び監修により、戦前日本ニュース映画を代表するシリーズ『朝日世界ニュース』を収録した DVD-BOX『朝日動画社 ニュース映画と朝日新聞』を刊行した。

映画フィルムの保管・修理に関する調査研究成果は以下のとおり反映された。

・アーカイブ事業等検討委員会による「相模原分館映画保存棟 ならし室温湿度指針に関する提案」に反映した。

・映画保存棟（重要文化財映画フィルム保存庫）の設計に反映した。

・小津安二郎監督カラー作品 4 作品のデジタル復元事業に反映した。

・戦前ドイツ映画の所蔵 35 mm可燃性フィルムの不燃化作業に反映した。

所蔵映画資料に関する調査研究成果は以下のとおり反映された。

・企画展「日本映画 スチル写真の美学」「小津安二郎の図像学」や、「NFC デジタル展示室」に反映した。

映画関連資料の修理に関する調査研究成果は以下のとおり反映された。

・一部のシナリオ等、劣化した文献資料の修復に反映した。

#### イ 京都国立近代美術館

##### (ア)所蔵作品に関する調査研究

コレクションと展覧会の連動の成果として、「芝川照吉コレクション展」のカタログを発行した。所蔵作品については、すべてカラー図版とし、作家・作品についても解説をつけた。また、開館以来の所蔵作品についても、データベース構築に向けての点検・整理、所蔵作品についての調査研究を行った。

##### (イ)保管・修理に関する調査研究

毎年取り組んでいるが、とりわけ貸出の要請が高い日本画、洋画などの作品を中心に、その修理・保管について、信頼のおける修復工房などにもアドバイスを得ながら、企画競争制度を活用して、各研究員の修理・保管についての意識が高められるよう努力した。一昨年行われた収蔵庫の空気調和工事も完了し、現在は、空調設備の安定稼働について経過観察を行っている。今後は収蔵庫内の地震対策(棚からの作品落下防止処置など)も含めて、早急の対応を行うために、保管・修理についても調査研究を進めていく。

##### (ウ)所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究成果の美術館活動への反映

一括収蔵した芝川照吉コレクションについては、展覧会としても披露し、カタログも刊行した。また、特別購入予算で購入したマックス・エルンスト、フランシス・ピカヴィアの作品は、特集展示として、既存のシュール、ダダのコレクションと一緒にコレクション・ギャラリーに展示して公衆の鑑賞に資するものとした。

#### ウ 国立西洋美術館

##### (ア)所蔵作品に関する調査研究

所蔵作品に関する調査研究として、平成 25 年度は以下のとおり取り組んだ。

・旧松方コレクションを含む松方コレクション全体に関する調査研究

・中世末期から 20 世紀初頭の西洋美術に関する調査研究

・所蔵版画作品に関する調査研究

・ル・コルビュジエによる本館の設計に関する調査研究

・クロード・モネに関する調査研究

・オーギュスト・ロダンとエミール＝アントワーヌ・ブールデル作品に関する調査研究

	<p>・ジャック・カロに関する調査研究</p> <p>・寄贈された橋本コレクションの指輪に関する研究</p> <p>・「国立西洋美術館所蔵作品データベース」に関する研究</p> <p>(イ)保存・修復に関する調査研究</p> <p>修復処置過程での紫外線、赤外線等の調査を実施し、絵画作品の状態及び制作過程を検証する調査を実施した。作品によっては周辺部の絵具層を分析し、その材質を明らかにした。こうした過程で、15世紀から19世紀までのさまざまな作品の技法や保存状態を確認し、これまでの処置の歴史を再確認しながら貸出のための安全・保存処置を実施した。また、作品ごとに、なされてきた処置、貸出履歴や過去の貸出時の温湿度記録などがすぐに把握できるよう、データベース化を進めた。</p> <p>(ウ)所蔵作品や関連する館外の美術品及び保存・修復に関する調査研究成果の美術館活動への反映</p> <p>調査研究の過程で、15世紀から19世紀までのさまざまな作品の技法や保存状態を確認し、これまでの処置の歴史を再確認しながら、震災後の被害の状況の確認及び貸出のための安全・保存処置を実施した。様々な技法の処置・調査は、作品の安全な貸出を実現すると同時に、こうした調査結果は展覧会のカタログ等に随時反映されている。また、調査・処置後の作品は常設展示に随時反映され、国民へのよりよい鑑賞環境の提供及び安定した状態の作品展示へと還元されている。あわせて、館報や紀要による対外的な情報発信を積極的に進めている。</p> <p>エ 国立国際美術館</p> <p>(ア)所蔵作品に関する調査研究</p> <p>平成25年度は、「あなたの肖像 - 工藤哲巳回顧展」の開催に向けて、長年にわたり継続していた工藤哲巳作品に関する調査研究の集大成の年度として調査研究を重点的に行う一方、その他の所蔵品についても引き続き調査研究を行った。</p> <p>(イ)保管・修理に関する調査研究</p> <p>文化庁博物館・美術館相互交流事業の支援により、英国のテートから、保存・修復の専門家を招き、美術館コレクションにおける近・現代美術作品の受入・展示・保存・修復をテーマとした国際シンポジウム「NMAO 国際シンポジウム：現代美術をコレクションするとは？」を開催、また同シンポジウムに続いて関係者によるワークショップを開催し、日本の国内事情に照らし合わせて、保存・修復に関するより実証的な議論を行った。</p> <p>(ウ)所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究成果の美術館活動への反映</p> <p>平成25年度は、長年にわたり続けてきた工藤哲巳作品に関する調査研究の成果</p>	
--	--	--

	<p>として、「あなたの肖像 - 工藤哲巳回顧展」を開催した。工藤哲巳とその作品に関する調査研究の成果は、昨年につき「国立国際美術館ニュース」において報告しており、また同展開催にあわせて、今後の工藤研究の基本資料となる 640 ページに及ぶ図録を完成させた。また、その他の所蔵品についても「国立国際美術館ニュース」紙上において、定期的に解説を行った。</p>	
--	---	--

【(中項目)1-3】	3. 我が国における美術館のナショナルセンターとして美術館活動全体の活性化に寄与				【評定】			
					A			
	H23	H24	H26	H27	A	A		

【(小項目)1-3-1】	ナショナルセンターとしての国内外の美術館等との連携・協力				【評定】			
	<p>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</p> <p>(1) 所蔵作品等に関する調査研究の成果を研究紀要、学術雑誌、展覧会に関わる刊行物、学会及びインターネット等を活用して広く発信する。また、各種セミナーやシンポジウムを開催する。</p> <p>(2)-1 国内外の優れた研究者を招聘しシンポジウムを開催するなど、美術館活動に対する示唆が得られるよう取り組むとともに、人的ネットワークの構築を推進する。</p> <p>(2)-2 海外の美術館において、我が国の優れた作家や美術作品を世界に広く紹介する展覧会が活発に行われるよう、海外の美術館との連携・協力を積極的に取り組む。</p> <p>(3) 国内外の美術館及びフィルム・アーカイブ等と保存・修復に関する情報交換を図りながら、修復・保存活動の充実に取り組む。</p> <p>(4) 所蔵作品については、その保存状況や各館における展示計画等を勘察しつつ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に行う。</p>				A			
					<p>H23 H24 H26 H27</p> <p>A A</p> <p>実績報告書等 参照箇所</p> <p>&lt;実績報告書&gt;</p> <p>P53～84</p> <p>3 我が国における美術館のナショナルセンターとして美術館活動全体の活性化に寄与</p> <p>(1) 所蔵作品等に関する調査研究成果の発信 研究紀要、学術雑誌、展覧会刊行物、学会等での発信 所蔵作品等に関するセミナー・シンポジウムの開催</p> <p>(2) 国内外の美術館等との連携 シンポジウムの開催等による国内外の優れた研究者等との人的ネットワークの構築 我が国の作家、美術作品による展覧会開催のための海外の美術館との連携・協力 その他海外の美術館との連携・協力</p> <p>(3) 国内外の美術館及びフィルム・アーカイブ等との保存・修復に関する情報交換</p> <p>(4) 所蔵作品の貸与等</p>			

【インプット指標】								
(中期目標期間)	H23	H24	H25	H26	H27			

決算額(百万円)	1,229	1,127	1,049	-	-
従事人員数(人)	57	54	50	-	-

1) 決算額は損益計算書 教育普及事業費を計上している。(本項目は教育普及事業費の一部であり、個別に計上できないため、教育普及事業費全額を計上している。)

2) 従事人員数は、すべての研究職員数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準	実績	分析・評価																																																																																									
<p>所蔵作品等に関する調査研究の成果を研究紀要、学術雑誌、展覧会に関わる刊行物、学会及びインターネット等を活用して広く発信したか。また、各種セミナーやシンポジウムを開催したか。</p>	<p>(1) 所蔵作品等に関する調査研究成果の発信</p> <p><b>研究紀要、学術雑誌、展覧会刊行物、学会等での発信</b></p> <p>ア 館の刊行物による研究成果の発信</p> <p>各館において、展覧会図録(計 28 冊)、研究紀要(計 3 冊)、館ニュース(計 7 種、34 冊発行)等の刊行物により、研究成果を発信した。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>館名</th> <th>展覧会図録</th> <th>研究紀要</th> <th>館ニュース</th> <th>所蔵品目録</th> <th>パンフレット・ガイド等</th> <th>その他</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="3">東京国立近代美術館</td> <td>本館</td> <td rowspan="3">1</td> <td>6</td> <td>-</td> <td>4</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>工芸館</td> <td>3</td> <td>-</td> <td>2</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>フィルムセンター</td> <td>6</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>京都国立近代美術館</td> <td>9</td> <td>1</td> <td>6</td> <td>1</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>国立西洋美術館</td> <td>4</td> <td>1</td> <td>4</td> <td>-</td> <td>3</td> <td>2</td> </tr> <tr> <td>国立国際美術館</td> <td>2</td> <td>-</td> <td>6</td> <td>-</td> <td>2</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>国立新美術館</td> <td>6</td> <td>-</td> <td>3</td> <td>-</td> <td>5</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>28</td> <td>3</td> <td>34</td> <td>1</td> <td>16</td> <td>4</td> </tr> </tbody> </table> <p>[注1] 京都国立近代美術館の所蔵品目録には、「所蔵作品目録」として刊行した「芝川照吉コレクション展」の図録を含む。</p> <p>[注2] 「パンフレット・ガイド等」には、小企画展の内容や所蔵作品の解説を掲載したパンフレット、子ども向けの鑑賞ガイド等が含まれる。</p> <p>【研究紀要、学術雑誌、展覧会刊行物での発信 過去の実績】</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>H21</th> <th>H22</th> <th>H23</th> <th>H24</th> <th>H25</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>展覧会図録</td> <td>38</td> <td>36</td> <td>28</td> <td>28</td> <td>28</td> </tr> <tr> <td>研究紀要</td> <td>3</td> <td>3</td> <td>3</td> <td>3</td> <td>3</td> </tr> <tr> <td>館ニュース</td> <td>33</td> <td>36</td> <td>37</td> <td>32</td> <td>34</td> </tr> <tr> <td>所蔵品目録</td> <td>1</td> <td>1</td> <td>2</td> <td>5</td> <td>1</td> </tr> </tbody> </table>	館名	展覧会図録	研究紀要	館ニュース	所蔵品目録	パンフレット・ガイド等	その他	東京国立近代美術館	本館	1	6	-	4	0	工芸館	3	-	2	0	フィルムセンター	6	-	-	0	京都国立近代美術館	9	1	6	1	-	-	国立西洋美術館	4	1	4	-	3	2	国立国際美術館	2	-	6	-	2	1	国立新美術館	6	-	3	-	5	1	計	28	3	34	1	16	4		H21	H22	H23	H24	H25	展覧会図録	38	36	28	28	28	研究紀要	3	3	3	3	3	館ニュース	33	36	37	32	34	所蔵品目録	1	1	2	5	1	<p>学会等発表、雑誌等論文掲載等で、所蔵作品等に関する調査研究成果の発信が日常的な業務としての確に実施されていると評価できる。</p> <p>特に、フィルムセンターでは、海外へのワークショップや雑誌や書籍への論文発表等、国際的な活動が積極的であり評価できる。</p> <p>全体として、学術的な国際交流、また査読有・ピアレビュー制度を持つ国際学会での報告や発信をしていくことも期待される。</p>
館名	展覧会図録	研究紀要	館ニュース	所蔵品目録	パンフレット・ガイド等	その他																																																																																					
東京国立近代美術館	本館	1	6	-	4	0																																																																																					
	工芸館		3	-	2	0																																																																																					
	フィルムセンター		6	-	-	0																																																																																					
京都国立近代美術館	9	1	6	1	-	-																																																																																					
国立西洋美術館	4	1	4	-	3	2																																																																																					
国立国際美術館	2	-	6	-	2	1																																																																																					
国立新美術館	6	-	3	-	5	1																																																																																					
計	28	3	34	1	16	4																																																																																					
	H21	H22	H23	H24	H25																																																																																						
展覧会図録	38	36	28	28	28																																																																																						
研究紀要	3	3	3	3	3																																																																																						
館ニュース	33	36	37	32	34																																																																																						
所蔵品目録	1	1	2	5	1																																																																																						

パンフレット・ガイド等	18	18	16	19	16
その他	6	9	9	12	4

イ 館外の学術雑誌、学会等における調査研究成果の発信

(ア) 東京国立近代美術館

[学会等発表] (本館)

タイトル	学会等名	発表者氏名 (職名)	日付	場所	聴講者 数 (人)
「米国の美術館における鑑賞教育の今」	日本美術教育連合	一條 彰子 (主任研究員)	25.10.20	東京家政大学	50
“Development of Art Appreciation Education Program Utilizing Works in Art Museum Collections	Learning Symposium 2014	一條 彰子 (主任研究員)	26.3.13	ニュー・サウス・ウェールズ美術館 (シドニー、オーストラリア)	60
「実験工房 コラボレーションの磁場」	「実験工房展」(世田谷美術館)	大谷 省吾 (主任研究員)	25.11.30	世田谷美術館	30
「From Postwar to Postmodern, Art in Japan 1945-1989」 出版記念パネルディスカッション		蔵屋 美香 (美術課長)	25.4.26	国際交流基金	120
「愛されるミュージアム？ ミュージアムと観客のこれまでとこれから」	群馬県博物館連絡協議会講演会	蔵屋 美香 (美術課長)	25.5.17	群馬県博物館連絡協議会	80
シンポジウム「アートで考える／アートを考える」	日本大学芸術学部美術学科	蔵屋 美香 (美術課長)	25.7.6	練馬区立美術館	60
「戦うからだ」		蔵屋 美香 (美術課長)	25.7.13	blanClass	7
第 55 回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展報告会		蔵屋 美香 (美術課長)	25.7.18	国際交流基金	120
クリティカル・アーカイヴ vol.1「香月康男をめぐる」		蔵屋 美香 (美術課長)	25.7.20	コムコチバアソシエイツ	45
「美術と美術館のために」	第 12 回カフェアオキ	蔵屋 美香 (美術課長)	25.7.21	国立新美術館	70

オープンリサーチプログラム「田中功起+蔵屋美香 抽象的に話すこと ヴェネチア・ビエンナーレに参加して」	京都国際現代芸術祭	蔵屋 美香 (美術課長)	25.7.27	同志社大学今出川キャンパス	250
「ヴェネチア・ビエンナーレに参加して: 経験を世界に伝えるということ」	岩手芸術祭	蔵屋 美香 (美術課長)	25.9.7	岩手県民会館	25
「六本木クロッシング 2013 展: アウト・オブ・ダウト」展パネルディスカッション「日本現代アートのいまを問う」	森美術館	蔵屋 美香 (美術課長)	25.9.22	アカデミーヒルズ タワーホール	200
「可能なる美術館 コレクションとアーカイヴ」	組立・転回	蔵屋美香 (美術課長)	25.10.5	東京都現代美術館	7
"A Brief history of Japanese contemporary art appreciated in global art context, and vice versa: from 1920s to 2010s"	韓国美術史学会 "Asian Art in Global Context" Symposium	蔵屋 美香 (美術課長)	25.10.12	弘益大学(ソウル)	90
「ヴェネチア・ビエンナーレに参加して: 経験を世界に伝えるということ」	東京藝術大学大学院先端芸術表現専攻講演会	蔵屋 美香 (美術課長)	25.10.15	東京藝術大学	45
セオリー・ランドテーブル 「歴史はぶり返す: 1910年代から 2010年代へ」		蔵屋美香 (美術課長)	25.10.23	近畿大学四谷アートステディウム	30
セオリー・ランドテーブル 「たたかうからだ 2 からだでたどる日本の美術 1907-1945」		蔵屋 美香 (美術課長)	25.10.30	近畿大学四谷アートステディウム	30
「「アーカイブ」と「データベース」のあいだで 慶応アートセンターと東京国立近代美術館の試み」	上智大学国際教養学部ファカルティ・デヴェロップメント	蔵屋 美香 (美術課長)	25.11.29	上智大学	40
「アーティストは美術館とどうつき合うべきか(特に「近代」美術館と)?」	東京藝術大学 情報プロデュース概論講演	蔵屋 美香 (美術課長)	25.12.2	東京藝術大学	40
「コレクションを活かす展示を作るための、ほんの少しのあたまたの体操」	平成 25 年度博物館学芸員専門講座「ニーズを創出する博物館」	蔵屋 美香 (美術課長)	25.12.4	国立教育政策研究所 社会教育実践研究センター	55

	After the Quake— sharing uncertainty The Japan Pavilion at the 55 <sup>th</sup> Venice Biennale	韓流芸術の世界化 のための文化戦略 グローバル現代ア ーティスト深化アカ デミー 韓日美術 文化交流セッション	蔵屋 美香 (美術課長)	25.12.14	弘益大学東アジア 芸術文化センター (ソウル)	45
	トークイベント「つくる、つ かう、つかまえる いくつ かの彫刻から 高柳恵里 × 蔵屋美香」		蔵屋 美香 (美術課長)	26.1.13	東京都現代美術 館	50
	ゲスト講評会		蔵屋 美香 (美術課長)	26.1.30	東京藝術大学	30
	「今、私たちが収蔵できま すか? アーティストとアー カイブ」	シブハウスアートミ ーティングプロジェク ト	蔵屋 美香 (美術課長)	26.2.1	シブハウス	40
	公開講評会「キュレータ ーの眼 2014」		蔵屋 美香 (美術課長)	26.3.15	女子美術大学	40
	シンポジウム「抗うアジア の表現と情動 オ ルタナティブな<記憶 - 歴史>を想像する」	カルチュラル・タイフ ーン 2013	鈴木 勝雄 (主任研究員)	25.7.14	東京経済大学	50
	トークイベント「芸術は何 を表し、何を匿ってきた か レトロスペクティブ (= 事後たとえば戦後)の 芸術、プロスペクティブ (事前)の芸術」	武蔵野美術大学	鈴木 勝雄 (主任研究員)	25.8.10	武蔵野美術大学 美術館	100
	「昭和戦前期の沖縄を描 いた絵画」	浦添市美術館	鈴木 勝雄 (主任研究員)	26.1.26	浦添市美術館	50
	「具体美術協会」セミナ ー・ワークショップ: アメリ カにおける戦後日本美術 展 Vol.2	大阪大学	鈴木 勝雄 (主任研究員)	26.2.22	大阪大学	30
	「きみはフランス・ペー コンをしているか?」	京都造形芸術大学	保坂 健二郎 (主任研究員)	25.4.10 25.4.20 25.5.15 25.5.29	京都造形芸術大 学・外苑キャンパ ス	40
	展覧会をつくる	本・現場・美術 番 外編	保坂 健二郎 (主任研究員)	25.4.20	青山ブックセンタ ー青山本店	90
	「猫町倶楽部 読書会」	猫町倶楽部	保坂 健二郎 (主任研究員)	25.4.27	東京ミッドタウン内 シスコシステムズ 会議室	70

トークイベント「炭坑の視覚表現をめぐって」	坑夫・山本作兵衛の生きた時代～戦前・戦時の炭坑をめぐる視覚表現	保坂 健二郎 (主任研究員)	25.7.13	原爆の図丸木美術館	40
堀田哲明について	堀田哲明展「たくさんのひとつの家」	保坂 健二郎 (主任研究員)	25.7.20	みずのき美術館	30
「絵画は愛か幽霊か」	多摩美術大学オープンキャンパス	保坂 健二郎 (主任研究員)	25.7.21	多摩美術大学八王子キャンパス	80
「ベーコンがいつもフレッシュで美味しい理由を考える」	「フランス・ベーコン展」	保坂 健二郎 (主任研究員)	25.8.3	豊田市美術館	70
「戦後の日本建築の変遷と現在の建築家について」	中韓印次世代キュレーター招聘	保坂 健二郎 (主任研究員)	25.9.12	国際交流基金	10
トークセッション	北山善夫「生きるための主題」展	保坂 健二郎 (主任研究員)	25.9.14	みずのき美術館	30
アート×建築-空間をつくるということ	鑑賞講座 建築を見るために	保坂 健二郎 (主任研究員)	25.9.21	川口市立アートギャラリー・アトリア	40
「はじまりの美術館プレートイベント はじめる美術館」	はじまりの美術館 (社会福祉法人安積愛育園)	保坂 健二郎 (主任研究員)	25.10.20	しおや蔵(猪苗代町)	60
「明日の美術館をつくろう。県民フォーラム」	滋賀県フォーラム	保坂 健二郎 (主任研究員)	25.11.3	コラボしが 21 大会議室	40
トークセッション	「Nerhol」展	保坂 健二郎 (主任研究員)	25.12.5	原宿 VACANT	70
「話すこと話せること話されること」	冬木遼太郎展	保坂 健二郎 (主任研究員)	25.12.7	京都 ART ZONE	30
「障害者の芸術活動の支援」	ミュージアム・マネージメント研修	保坂 健二郎 (主任研究員)	25.12.20	日比谷図書文化館	60
「講評会」	ポコラート全国公募展 vol.4	保坂 健二郎 (主任研究員)	25.12.23	アーツ千代田 3331	80
「アール・ブリュット 元年」	アメニティ・フォーラム 18	保坂 健二郎 (主任研究員)	26.2.7	大津プリンスホテル・コンヴェンションホール淡海	70
「トークセッション2:キュレーターの眼、アーティストの眼」	「未来の途中 美術・工芸・デザインの新鋭 12 人展」	保坂 健二郎 (主任研究員)	26.2.15	京都工芸繊維大学	30
「プロジェクトを解体する」	「平行する交差展」	保坂 健二郎 (主任研究員)	26.2.22	日本大学芸術学部	40
「アート界に象徴される刹那さとスピードの中で、いかに建築は立ち続けるべきか」	Aプロジェクト連続講座第9回	保坂 健二郎 (主任研究員)	26.3.14	新宿 NSビル・インテリアホール	90

「新しい美術館のかたち ～アール・ブリュット作品 を美術館があつかうこと ～」	「アール・ブリュット アート 日本」展	保坂 健二郎 (主任研究員)	26.3.15	酒遊館(近江八 幡)	50
「グルスキー作品を考え る 巨視的に、微視的 に」	「アンドレアス・グル スキー展」	増田 玲 (主任研究員)	25.7.14	国立新美術館	250
「石元作品に現れる“と き”をめぐって」	「高知県立美術館コ レクション展 石元泰 博・フォトギャラリー 刻 -moment-」	増田 玲 (主任研究員)	26.2.11	高知県立美術館	50
リテラル・イメージの行方 マイケル・フリードに よる『フランシス・ベー コンの達成』の読解を通じて	平成 24 年度美学会 東部会例会	榊田 倫広 (研究員)	25.12.7	早稲田大学	50
アーティスト・トーク 前谷 康太郎	ICC	榊田 倫広 (研究員)	26.1.18	ICC4 階特設会場	20
美術館の活用法 コレク ションを愉しむ		松本 透 (副館長)	25.10.26	世田谷美術館	50
美術放談(対談)	CCA 市民美術大学	松本 透 (副館長)	25.11.2	現代美術センター CCA 北九州	60
線を遊ぶ、語る 縄文か ら現代まで(トークセッ ション)	茅野市美術館アート ×コミュニケーション + 信州大学	松本 透 (副館長)	25.11.23	茅野市民館	100
「『14 のタベ』の残りのも の、について」	現在のアート<2013 >	三輪 健仁 (主任研究員)	25.12.21	森美術館	30
「アートの領域における 個人アーカイブズの深化 と拡張 パウル・クレ ーの事例に学ぶ」	日本アーカイブズ学 会	渡邊 美喜 (研究補佐員)	25.4.21	学習院大学	30

[雑誌等論文掲載](本館)  
学術書籍、研究報告書等の発行

タイトル	執筆者氏名(職名)	発行者	発行年月日
『アール・ブリュット アート 日本』	保坂 健二郎 (主任研究員)	平凡社	25.8
フランシス・ベーコン作(三人の人物と肖像)に関する一考察	榊田 倫広 (研究員)	『引込線 2013』(引込線 実行委員会)	25.11.20
『ドキュメント』14 のタベ Ⅱ パフォーマ ンスのあとさき、残りのものたちは身振りを 続ける[...後略...]』	三輪 健仁 (主任研究員)	青幻舎	25.12.2

【査読有り】学術誌論文掲載

タイトル	執筆者氏名(職名)	掲載誌名(発行者)	発行年月日
「米国の美術館における鑑賞教育 所蔵作品を活かしたスクールプログラムの調査結果に基づく一考察」	一條 彰子 (主任研究員)	日本美術教育研究論集 第47号	26.3
「霞光(眼のある風景)をめぐる(上)」	大谷 省吾 (主任研究員)	『美術研究』410号(東京 文化財研究所)	25.9
「霞光(眼のある風景)をめぐる(下)」	大谷 省吾 (主任研究員)	『美術研究』411号(東京 文化財研究所)	26.2
「シュルレアリスム絵画の日本における受容と展開についての研究」	大谷 省吾 (主任研究員)	博士論文(筑波大学)	26.3
「企業アーカイブズとしての高島屋史料館に関する一考察」	渡邊 美喜 (研究補佐員)	『GCAS Report』Vol.3(学 習院大学大学院人文科学 研究科アーカイブズ学 専攻)	26.3

【査読無し】学術誌論文掲載

タイトル	執筆者氏名(職名)	掲載誌名(発行者)	発行年月日
作品解説	蔵屋 美香 (美術課長)	『近代美術の名作 50』 (美術出版社)	26.4.30
Abstractly Speaking...:Koki Tanaka's Installation at the 55 <sup>th</sup> Venice Biennale	蔵屋 美香 (美術課長)	<i>Abstract speaking: sharing uncertainty and collective acts</i> (Nero Publishing)	25.6.1
「対談   田中功起 × 蔵屋美香 「大きな出来事」のあとで 文脈の読み替え/等価な経験/共有と継承」	蔵屋 美香 (美術課長)	田中功起『質問する』 (ART IT)	25.7.10
「私たちは誰に拍手したのか？」	蔵屋 美香 (美術課長)	『ドキュメント   14 の夕 べ』(青幻舎)	25.11.28
「可能なる美術館 コレクションとアーカイヴ」	蔵屋 美香 (美術課長)	『組立・転回』(組立)	26.3.3
「実験場 1950s」展の射程:冷戦期の文化研究の新視点(同時代史の現場 美術館における「同時代史」展示の可能性)	鈴木 勝雄 (主任研究員)	『同時代史研究』6号	
「昭和戦前期の沖縄の表象:再考のための三つの手がかり」	鈴木 勝雄 (主任研究員)	浦添市美術館主催「南からの風南への風:沖縄・台湾:近代沖縄の美術・工芸」展カタログ	
「Special issue: art documentation in Japan, in Art Libraries Journal, ARLIS/UK & Ireland, Vol.38, No.2, 2013の刊行について」	水谷 長志 (主任研究員)	『アート・ドキュメンテーション通信』97号(アート・ドキュメンテーション学会) 97号	25.4

「日本の美術文献の発信と伝達 国立美術館の artlibraries.net 参画の意味を思う」	水谷 長志 (主任研究員)	『全美フォーラム』4号(全国美術館会議)	25.8
共著「東京国立近代美術館アートライブラリ所蔵 藤田嗣治旧蔵書について その受入から公開まで -」	水谷 長志 (主任研究員)	『アート・ドキュメンテーション通信』99号(アート・ドキュメンテーション学会)	25.10
「日本のアート・ドキュメンテーションの四半世紀を記録し創生したメディア 『アート・ドキュメンテーション通信』の100号を祝う」	水谷 長志 (主任研究員)	『アート・ドキュメンテーション通信』100号(アート・ドキュメンテーション学会)	26.1
「MLA の差異と同質を踏まえて伝える文化"継承" - あるクラスの風景から 」	水谷 長志 (主任研究員)	『DHjp 新しい知の創造』1号(勉誠出版)	26.2
「海外博物館だより フランスのミュージアムにおける作品管理及びコレクション活用の試みについて」	三輪 健仁 (主任研究員)	『博物館研究』vol.49 No.3(公益財団法人 日本博物館協会)	26.2.25
「国際シンポジウム「地域・社会と関わる芸術文化活動のアーカイブに関するグローバル・ネットワーキング・フォーラム」参加報告記」	渡邊 美喜 (研究補佐員)	『アート・ドキュメンテーション通信』97号(アート・ドキュメンテーション学会)	25.4

学術誌以外(研究志向の薄い機関紙、美術雑誌、新聞等)における発表

タイトル	執筆者氏名(職名)	掲載誌名(発行者)	発行年月日
「あいちトリエンナーレ評 多様な視野、獲得の場に」	蔵屋 美香 (美術課長)	『朝日新聞』愛知版(朝刊)	25.11.13
「リミニ・プロトコル」	蔵屋 美香 (美術課長)	『美術手帖』2月号	26.1.1
「近代美術の眼 北脇昇(空の訣別)」	蔵屋 美香 (美術課長)	『読売新聞』都内版	26.3.14
「コレクションを中心とした小企画 泥とジェリー」	蔵屋 美香 (美術課長)	『美術の窓』4月号	26.3.20
「近代美術の眼 関野準一郎(墓とニューヨーク)」	鈴木 勝雄 (主任研究員)	『読売新聞』都内版	25.7.12
「近代美術の眼 津田青楓(犠牲者)」	鈴木 勝雄 (主任研究員)	『読売新聞』都内版	25.11.8
「近代美術の眼 ロヴィス・コリント「死の舞踏」より(死と芸術家)」	都築 千重子 (主任研究員)	『読売新聞』都内版	25.4.12
『もっと知りたい菱田春草』(著書)	鶴見 香織 (主任研究員)	東京美術	25.6.10
「近代美術の眼 速水御舟(京の家・奈良の家)」	鶴見 香織 (主任研究員)	『読売新聞』都内版	25.9.13
「近代美術の眼 川合玉堂(彩雨)」	鶴見 香織 (主任研究員)	『読売新聞』都内版	25.10.25

	作品解説 横山大観(或る日の太平洋)、徳岡神泉(富士山)、加藤東一(富士)	鶴見 香織 (主任研究員)	『富士山 日本の美 5』	25.10
	「上村松園(焔)」	中村 麗子 (主任研究員)	『ARTcollectors』51号	25.5
	本文、作品解説	中村 麗子 (主任研究員)	『もっと知りたい竹内栖鳳 生涯と作品』(東京美術)	25.9
	「栖鳳の眼力」、作品解説	中村 麗子 (主任研究員)	『竹内栖鳳』(別冊太陽) 211号	25.9
	「竹内栖鳳の写生帖」	中村 麗子 (主任研究員)	『美術の窓』359号	25.8
	連載「美術」	保坂 健二郎 (主任研究員)	『すばる』(集英社)	25.4 25.5 25.6 25.8 25.10 25.12 26.2
	連載「視線」	保坂 健二郎 (主任研究員)	『朝日新聞』(朝日新聞社)	25.5.5 25.6.9 25.7.14 25.8.18 25.9.22 25.10.20 25.12.8 26.1.19 26.3.2
	連載「月評」	保坂 健二郎 (主任研究員)	『新建築』(新建築社)	25.5 25.7 25.9 25.11
	「プロローグ   いま、なぜベーコンか?」「ベーコンの絵はどこがどうすごいのか」「フランスへの手紙」	保坂 健二郎 (主任研究員)	『芸術新潮』(新潮社)	25.4
	「近代美術の眼 須田一政 静岡・松崎浄感寺 『風姿花伝』より」	保坂 健二郎 (主任研究員)	『読売新聞』都内版	25.5.10
	「保坂健二郎さんとの往復書簡」	保坂 健二郎 (主任研究員)	田中功起『質問する』(フィルムアート社)	25.7
	「「はじめに色彩ありき」 菊地宏が色を使う理由」	保坂 健二郎 (主任研究員)	『10+1』website(LIXIL 出版)	25.9
	「青の時代は続く アートとブルーの多義性について」	保坂 健二郎 (主任研究員)	『Eyescream』(スペースシャワーネットワーク)	25.9
	「だんわしつ 「鑑賞・評価」から「共感・共有」へ」	保坂 健二郎 (主任研究員)	『指導と評価』(図書文化)	25.9

「今年のヴェネツィアはアール・ブリュットが台風の目」	保坂 健二郎 (主任研究員)	『芸術新潮』(新潮社)	25.9
「書評 西沢立衛 けんちくワークブック(くうねるところにすむところ)」	保坂 健二郎 (主任研究員)	『新建築』(新建築社)	25.10
「展覧会を「開く」のは、風景を、未完にするため」	保坂 健二郎 (主任研究員)	『をちこち Magazine』(国際交流基金)	25.10
「アール・ブリュットとはなにか」	保坂 健二郎 (主任研究員)	『教育美術』(教育美術振興会)	25.11
「時評 今なぜ私たちにアール・ブリュットが必要なのか」	保坂 健二郎 (主任研究員)	『凶区』2号(BOOK PEAK)	25.12
「雑感以上批評未満」	保坂 健二郎 (主任研究員)	『シェル美術賞展 2013』展カタログ(昭和シェル石油株式会社)	25.12
「写真と絵画の往還」	保坂 健二郎 (主任研究員)	『アサヒカメラ』(朝日新聞出版)	25.12
「平面ならではの生成 ランナーとクローン」	保坂 健二郎 (主任研究員)	『美術手帖』(美術出版社)	26.1
「書評 『匠たちの名旅館』」	保坂 健二郎 (主任研究員)	『住宅建築』(建築資料研究社)	26.2
「近代美術の眼 奈良美智(Harmless Kitty)」	保坂 健二郎 (主任研究員)	『読売新聞』都内版	26.2.14
「片山真妃の絵画について」	保坂 健二郎 (主任研究員)	『VOCA展 2014』(上野の森美術館)	25.3
「近代美術の眼 笠松紫浪(温泉の朝(信州野澤))」	榊田 倫広 (研究員)	『読売新聞』都内版	25.1.24
「やわらかくたっている 工藤哲巳の肯定性」	榊田 倫広 (研究員)	『美術手帖』999号(美術出版社)	26.1.24
「展覧会レビュー O JUN - 描く児」	榊田 倫広 (研究員)	『月刊美術』463号(サン・アート)	26.4月号
「展評「『偶像』としてのキャバ像:『ロバート・キャバノゲルダ・タロー 二人の写真家』展」	増田 玲 (主任研究員)	『美術手帖』984号(美術出版社)	25.5月号
「旅するまなざしと根をおろすもの、そしてさまざまな声」	増田 玲 (主任研究員)	『1972 ~ Kozo Miyoshi』展覧会プロシヤ(Gallery 916)	25.8月
「『わが東京 100』について」	増田 玲 (主任研究員)	須田一政写真集『わが東京 100』(禅フォトギャラリー)	25.10
「近代美術の眼 中山岩太(『中山岩太ポートフォリオ 2010』より 10 蝶(-))」	増田 玲 (主任研究員)	『讀賣新聞』都内版	25.6.14
「近代美術の眼 森山大道(『にっぽん劇場』)」	増田 玲 (主任研究員)	『讀賣新聞』都内版	25.12.13

ソウルで開かれた日本の現代美術展	松本 透 (副館長)	『美術の窓』No.356(5月号)	25.5.20
追悼 村岡三郎さんを偲んで	松本 透 (副館長)	『新美術新聞』1321号	25.9.1
審査講評	松本 透 (副館長)	「FACE展 2014 損保ジャパン美術賞展」カタログ (損保ジャパン東郷青児美術館)	26.2
「関根正二と生田長江 (女の顔) (神奈川近美蔵)をめぐって 美術・演劇・文芸をつなぐMLA」	水谷 長志 (主任研究員)	『ふぉーらむ』10号(図書館サポートフォーラム)	25.9

[学会等発表](工芸館)

タイトル	学会等名	発表者氏名 (職名)	日付	場所	聴講者数(人)
イタリア・ファエンツァをめぐる近年の現代陶芸事情 - グェッリーノ・トラモンティ回顧展と国際陶芸展ほか -	東洋陶磁学会	唐澤 昌宏 (工芸課長)	25.6.1	根津美術館	45
作家の言葉から日本の陶芸を考える	窯業指導所特別講座	唐澤 昌宏 (工芸課長)	25.7.31	茨城県工業技術センター窯業指導所	60
日本の工芸の現在(いま)を考える	平成 25 年度工芸館巡回展	唐澤 昌宏 (工芸課長)	25.9.14	田辺市立美術館	50
イタリア的な造形思考のすすめ	東洋陶磁学会	唐澤 昌宏 (工芸課長)	25.10.20	茨城県陶芸美術館	70
清瀬市立清瀬第八小学校 + 東京国立近代美術館工芸館の連携授業について	美術館・都図研研究局 連携研究報告会	今井 陽子 (主任研究員)	26.3.19	世田谷区立上北沢小学校	50
Japanese-ness/Asian-ness' in Crafts in the 1920s-30s: From the Works in Government Sponsored Competitive Exhibition, Teiten	2013 The International Design History Symposium	木田 拓也 (主任研究員)	25.6.27	国立雲林工科大学(台湾)	30
アメリカの美術館のコレクションにみる日本の近代工芸	国際シンポジウム: 白山谷喜太郎と日米文化交流	木田 拓也 (主任研究員)	25.11.24	金沢 21 世紀美術館	80

1964 Tokyo Olympic Games, A Design Project: "Japanese-ness" in Olympic Designs	5 <sup>th</sup> International Congress of International Association of Societies of Design Research	木田 拓也 (主任研究員)	25.8.27	芝浦工科大学	20
オリンピックのなかの<アート>と<デザイン>	公開コロキウム 「社会システム<芸術>とその変容」	木田 拓也 (主任研究員)	26.2.2	東京芸術大学	40
東京オリンピック 1940/1964	公開コロキウム 「社会システムのなかのオリンピックとデザイン」	木田 拓也 (主任研究員)	25.4.21	東京国立近代美術館	65
Crafts Crossing Borders in 1920s-40s	Inter-Asia Cultural Studies Society, Conference 2013	木田 拓也 (主任研究員)	25.7.5	シンガポール大学	50

【雑誌等論文掲載】(工芸館)  
学術書籍、研究報告書等の発行

タイトル	執筆者氏名(職名)	掲載誌名(発行者)	発行年月日
「渡辺素舟と昭和初期の『工芸美術』」『叢書・近代日本のデザイン』第52巻	木田 拓也 (主任研究員)	ゆまに書房	25.10.25

【査読有り】学術誌論文掲載

タイトル	執筆者氏名(職名)	掲載誌名(発行者)	発行年月日
大河内正敏と奥田誠一 陶磁器研究会 / 彩壺会 / 東洋陶磁研究所 大正期を中心に	木田 拓也 (主任研究員)	『東洋陶磁』第42号(東洋陶磁学会)	25.3.31
1964 Tokyo Olympic Games, A Design Project: "Japanese-ness" in Olympic Designs	木田 拓也 (主任研究員)	Consilience and Innovation in Design, Proceedings and Program vol. 2(国際デザイン学会)	25.8.24

【査読無し】学術誌論文掲載

タイトル	執筆者氏名(職名)	掲載誌名(発行者)	発行年月日
松下幸之助がみた伝統工芸とコレクションの意義	諸山 正則 (主任研究員)	「幸之助と伝統工芸」展図録(美術出版社)	25.4.13

現代の日本工芸展について 作家作品解説	諸山 正則 (主任研究員)	「現代の日本工芸」展図 録(外務省)	25.10.8
加藤委 - 素材への執着とアクションから 生まれる造形	唐澤 昌宏 (工芸課長)	『陶説』727号(日本陶磁 協会)	25.9.1
「日本伝統工芸展 60 回記念 工芸から K GEI へ」展に寄せて	唐澤 昌宏 (工芸課長)	『陶説』729号(日本陶磁 協会)	25.12.1
展覧会図録章解説(陶磁・ガラス・漆工・ 竹工・染織・人形・金工)	北村 仁美 (主任研究員)	『東京国立近代美術館工 芸館所蔵名品展 近代 工芸の巨匠たち』(田辺 市立美術館)	25.7
日本統治時代の朝鮮美術展の工芸:もう ひとつの日本近代工芸史	木田 拓也 (主任研究員)	『鹿島美術研究』年報第 30号別冊(鹿島美術財 団)	25.11.15
ミュージアム・オブ・アート&デザイン (MAD) 生まれ変わったアメリカン・ク ラフト・ミュージアム	木田 拓也 (主任研究員)	『博物館研究』第 48 巻第 10号(日本博物館協会)	25.10
大陸に渡った工芸家:近代日本の工芸家 にとつての『アジア的なもの』	木田 拓也 (主任研究員)	『デザイン史学』第 11 号 (デザイン史学研究会)	25.8.9
‘Japanese-ness/Asian-ness’ in Crafts in the 1920s-30s: From the Works in Government Sponsored Competitive Exhibition, Teiten,’	木田 拓也 (主任研究員)	<i>Proceedings for Translating and Writing Modern Design Histories in East Asia for the Global World, Organizing Committee of 2013 Yunlin Symposium</i>	25.6.27

学術誌以外(研究志向の薄い機関紙、美術雑誌、新聞等)における発表

タイトル	執筆者氏名(職名)	掲載誌名(発行者)	発行年月 日
第 53 回東日本伝統工芸展鑑査・審査好 評	諸山 正則 (主任研究員)	同展図録(日本工芸会東 日本支部)	25.4.17
高島屋美術部と工芸	諸山 正則 (主任研究員)	『高島屋美術部百年史: 1909-2010』(高島屋)	25.4
柳宗理のデザイン	諸山 正則 (主任研究員)	『別冊太陽 柳宗理』(平 凡社)	25.7.25
内田鋼一が生み出すモノ	唐澤 昌宏 (工芸課長)	『内田鋼一展 - うつわか らの風景 - 』カタログ (paramita museum)	25.5
白磁の可能性を求めて 庄村久喜の 「白妙磁」	唐澤 昌宏 (工芸課長)	『白妙磁の世界 庄村久 喜展』カタログ(そごう横 浜店)	25.7

岡部嶺男の「青瓷」	唐澤 昌宏 (工芸課長)	『土を宝石に変えた鬼才の陶芸家 岡部嶺男展』カタログ(阪急うめだ本店)	25.8
大和保男の陶芸的表現にみる作陶姿勢と思考	唐澤 昌宏 (工芸課長)	『大和保男の陶芸 魂の造形』展カタログ(山口県立萩美術館・浦上記念館)	25.9
ハンス・コパーが生み出したもの	唐澤 昌宏 (工芸課長)	『HANS COPER』展カタログ(水戸忠交易)	25.10
想いの造形	唐澤 昌宏 (工芸課長)	『土の姿』展カタログ(益子陶芸美術館)	25.12
加藤重高氏を偲ぶ	唐澤 昌宏 (工芸課長)	『美術年鑑』(美術年鑑社)	25.12
隠崎隆一:心の造形としての備前焼	唐澤 昌宏 (工芸課長)	『隠崎隆一 事に仕えて』展カタログ(菊池寛実記念 智美術館)	26.1
総評	唐澤 昌宏 (工芸課長)	『第53回日本クラフト展』カタログ(日本クラフトデザイン協会)	26.1
日本の美意識と技「工芸から K GEI へ」展に寄せて	唐澤 昌宏 (工芸課長)	『聖教新聞』	26.1.30
「工芸」のイメージと、これからの「工芸 = K GEI」	唐澤 昌宏 (工芸課長)	『CLIMB』22(金沢市卯辰山工芸工房)	26.3.31

[学会等発表](フィルムセンター)

タイトル	学会等名	発表者氏名 (職名)	日付	場所	聴講者数 (人)
Film Archives After Film	国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)	岡島 尚志 (主幹)	25.4.24	フィルモテカ・デ・カタルーニャ(バルセロナ)	200
フィルム生産縮小時代の映画保存 “フジ・ショック”後のフィルム・アーカイブ	日本映像学会	岡島 尚志 (主幹)	25.6.1	東京造形大学	50
映画保存の今後 世界と日本のフィルム・アーカイブの立場から	映画の復元と保存に関するワークショップ	岡島 尚志 (主幹)	25.8.24	京都文化博物館	100
映像遺産の保存と活用 相模原市関連の古い映像を見ながら	相模原市公開講座	岡島 尚志 (主幹)	25.9.27	フィルムセンター 相模原分館	56

デジタル時代の映画保存 問題の整理	映画産業団体連合会(映団連)セミナー	岡島 尚志 (主幹)	25.10.22	六本木ヒルズ・オーデトリウム	100
『その夜の妻』 若き日の小津安二郎	ベルリン国際映画祭	岡島 尚志 (主幹)	26.2.8	シネマックス8(ベルリン)	100
世界のフィルム・アーカイブ/シネマテーク その新たな動きと求められる人材	2013 年度アート・マネージャー養成講座「シネマ・マネジメント・ワークショップ」	岡島 尚志 (主幹)	26.3.4	映画美学校	20
東京国立近代美術館フィルムセンターにおける映画フィルムの長期保管	日本新聞協会新聞マイクロ懇話会	棚木 章 (主任研究員)	25.6.27	日本新聞協会	80
記録映画の保存と活用を考える	第16回ゆいん文化・記録映画祭	棚木 章 (主任研究員)	25.6.30	湯布院公民館	100
公共上映における映写機器等の現状と課題 優秀映画鑑賞推進事業を事例として	全国コミュニティシネマ会議 2013 in 浜松	棚木 章 (主任研究員)	25.9.7	クリエイト浜松	30
デジタル時代の映画保存の在り方について 日本映画界の現状	映団連セミナー	棚木 章 (主任研究員)	25.10.22	六本木ヒルズ・オーデトリウム	100
映画のいろ、小津のいろ	JR 東日本 大人の休日倶楽部 趣味の会	棚木 章 (主任研究員)	25.11.13	ステーションコンファレンス万世橋	40
映像アート作品のアーカイブについて	日本映像学会 アナログメディア研究会	棚木 章 (主任研究員)	26.1.18	阿佐ヶ谷美術専門学校	30
データベースから見るフィルム・アーカイブの保存と上映	2013 年度映像アート・マネージャー養成講座「シネマ・マネジメント・ワークショップ」	棚木 章 (主任研究員)	26.1.28	映画美学校	20
F シネマ・プロジェクト フィルム上映を考える	恵比寿映像祭	棚木 章 (主任研究員)	26.2.16	東京都写真美術館	100
蘇ったフィルムたち 東京国立近代美術館フィルムセンター復元作品特集	川崎市市民ミュージアム	棚木 章 (主任研究員)	26.2.22	川崎市市民ミュージアム	60
吉澤商店主・河浦謙一の足跡をたどる	日本映像学会 映画文献資料研究会	入江 良郎 (主任研究員)	25.7.6	日本大学芸術学部	18
調査研究プロジェクト「演劇博物館所蔵映画フィルムの調査、目録整備と保存活用」について	研究講演会「早稲田大学演劇博物館の映画コレクション」	入江 良郎 (主任研究員)	25.11.2	フィルムセンター・大ホール	203

日本映画社ジャカルタ製作所の活動について	研究講演会「早稲田大学演劇博物館の映画コレクション」	岡田 秀則 (主任研究員)	25.11.2	フィルムセンター・大ホール	
震災をめぐるドキュメンタリー映画のアーカイブ	山形国際ドキュメンタリー映画祭	岡田 秀則 (主任研究員)	25.10.13	山形美術館	約 50
Restoration of <i>Kujira</i> and <i>Yuureisen</i>	Memory! 第一回国際映画遺産フェスティバル	大傍 正規 (研究員)	25.6.5	ポファナセンター(ブノンペン)	30
仏・露・日における無声映画の音 初期フランス映画の受容研究	博士論文公聴会	大傍 正規 (研究員)	25.6.20	京都大学人間・環境学研究科	20
政岡憲三『くもとちゅうりっぷ』大藤信郎『くじら』『幽霊船』レストア報告	東京国際映画祭「日本アニメーションの先駆者(パイオニア)たち～デジタル復元された名作」	大傍 正規 (研究員)	25.10.19	シネマート六本木	100

[雑誌等論文掲載](フィルムセンター)  
 学術書籍、研究報告書等の発行

タイトル	執筆者氏名(職名)	掲載誌名(発行者)	発行年月日
フィルム生産縮小時代の映画保存 “フジ・ショック”後のフィルム・アーカイブ	岡島 尚志 (主幹)	日本映像学会報 No.164	
A Love Letter to Film	岡島 尚志 (主幹)	Journal of Film Preservation, No.89 (FIAP)	25.11
『早稲田大学演劇映像学連携研究拠点テーマ研究「演劇博物館所蔵映画フィルムの調査、目録整備と保存活用」(平成 21 年度～25 年度)成果報告』	入江 良郎 (主任研究員)	早稲田大学演劇映像学連携研究拠点テーマ研究	26.2.28
『仏・露・日における無声映画の音 初期フランス映画の受容研究』(博士論文)	大傍 正規 (研究員)	京都大学人間・環境学研究科	25.7.23 (学位授与日)
『越境するスターダム 帝政期ロシアと日本におけるマックス・ランデーの受容』堀潤之・菅原慶乃編『越境の映画史』	大傍 正規 (研究員)	関西大学出版部	26.3.31
東京国立近代美術館フィルムセンター監修『映画公社旧蔵 戦時統制下映画資料集』第 1 巻『映画公社関係資料』解題	佐崎 順昭 (客員研究員)	ゆまに書房	26.1.24
東京国立近代美術館フィルムセンター監修『映画公社旧蔵 戦時統制下映画資料集』第 2 巻『映画配給社資料』解題	佐崎 順昭 (客員研究員)	ゆまに書房	26.1.24

東京国立近代美術館フィルムセンター監修『映画公社旧蔵 戦時統制下映画資料集』第3巻「大日本活動写真協会調査月報」解題	佐崎 順昭 (客員研究員)	ゆまに書房	26.1.24
東京国立近代美術館フィルムセンター監修『映画公社旧蔵 戦時統制下映画資料集』第4巻「大日本活動写真協会調査月報」解題	佐崎 順昭 (客員研究員)	ゆまに書房	26.1.24

【査読無し】学術誌論文掲載

タイトル	執筆者氏名(職名)	掲載誌名(発行者)	発行年月日
Nitrate Film Production in Japan: a Historical Background of the Early Days	岡田 秀則 (主任研究員)	The Oxford Handbook of Japanese Cinema (Oxford University Press)	26.1.30
日本映画社ジャカルタ製作所の活動について	岡田 秀則 (主任研究員)	「演劇博物館所蔵映画フィルムの調査、目録整備と保存活用」(早稲田大学演劇映像学連携研究拠点テーマ研究)	26.2.28
Archiving Disaster: Multiple Versions of Documentary Films about the Great Kanto Earthquake	大澤 浄 (研究員)	Journal of Film Preservation, No. 89 (FIAP)	25.11.1
寅次郎の「ディグニティ」 『男はつらいよ フーテンの寅』準備稿覚書	大澤 浄 (研究員)	森崎東党宣言!(インスク립ト)	25.11.25
映画フィルムのネガに付随する鑽孔テープの記録内容を解読する	宮澤 愛 (事務補佐員)	平成 25 年度アーカイブズ・カレッジ(史料管理学研修会)短期コース(主催:国文学研究資料館)	
東京国立近代美術館フィルムセンターにおける個人寄贈の小型映画フィルムの保存と活用について	郷田 真理子 (技能補佐員)	平成 25 年度アーカイブズ・カレッジ(史料管理学研修会)短期コース(主催:国文学研究資料館)	
東京国立近代美術館フィルムセンターにおける所蔵雑誌の保存と公開	笹沼 真理子 (事務補佐員)	平成 25 年度アーカイブズ・カレッジ(史料管理学研修会)短期コース(主催:国文学研究資料館)	
国立近代美術館フィルムセンターにおけるスチル資料の保管と今後の課題について	朴 美和 (事務補佐員)	平成 25 年度アーカイブズ・カレッジ(史料管理学研修会)短期コース(主催:国文学研究資料館)	

学術誌以外(研究志向の薄い機関紙、美術雑誌、新聞等)における発表

タイトル	執筆者氏名(職名)	掲載誌名(発行者)	発行年月日
『東京物語』 家族のこころを描く日本映画の至宝	岡島 尚志 (主幹)	東京物語(松竹・南座)	25.7.13
復元を通して、映画フィルムを知る	棚木 章 (主任研究員)	熱風(株式会社スタジオ・ジブリ)	25.4.10
映像とテキストでよみがえる『朝日世界ニュース』	棚木 章 (主任研究員)	朝日動画社 ニュース映画と朝日新聞(朝日新聞社)	25.7.10
映画祭の「いま」が映画保存の「あした」を支える	棚木 章 (主任研究員)	大分合同新聞(大分合同新聞社)	25.8.5
逆立ちする映画、存在しない果実の汁	岡田 秀則 (主任研究員)	「見る」(京都国立近代美術館)	26.2.15
日本の映画ポスター文化と野口久光の芸術	岡田 秀則 (主任研究員)	Hisamitsu Noguchi The Graphic Works(開発社)	26.3.5

(イ) 京都国立近代美術館

[学会等発表]

タイトル	学会等名	発表者氏名(職名)	日付	場所	聴講者数(人)
『Dekoraive Kunst』誌とユークラフトシュティール:マイアー=グレーフェヒムテジウスを中心に」	日本独文学会秋季研究発表会『シンポジウム 「世紀転換期ドイツ語圏の芸術誌の諸相 - その多様性の根源にあるものは何か』	池田 祐子 (主任研究員)	25.9.29	北海道大学	35
「ウィーン～総合芸術の都市」	第 85 期一橋フォーラム 21 『近代の都市と芸術』如水会主催	池田 祐子 (主任研究員)	26.3.5	如水会館	70
グッゲンハイム美術館での Gutai	大阪大学総合学術博物館	平井 章一 (主任研究員)	25.6.22	大阪大学総合学術博物館	50
「吉田初三郎の観光案内 函 近代日本景の形成」	民族芸術学会 第 130 回研究例会「近代における場の変容」	平田 剛志 (研究補佐員)	25.6.29	立命館大学国際平和ミュージアム会議室	30

[雑誌等論文掲載]  
 学術書籍、研究報告書等の発行

タイトル	執筆者氏名(職名)	掲載誌名(発行者)	発行年月日
「ドイツ世紀転換期の装飾とフォルムに見られる日本と自然に関する言説 - ユーゲントシュティールの盛衰とその背景」『国際シンポジウム「装飾とデザインのジャポニスム」報告書』	池田 祐子 (主任研究員)	研究代表者:馬淵明子・ 国立西洋美術館館長	26.1

[査読無し]学術誌論文掲載

タイトル	執筆者氏名(職名)	掲載誌名(発行者)	発行年月日
現代作家紹介 境界を超えて 井原康雄	平井 章一 (主任研究員)	美術フォーラム 21(醍醐 書房)28号	25.11

学術誌以外(研究志向の薄い機関紙、美術雑誌、新聞等)における発表

タイトル	執筆者氏名(職名)	掲載誌名(発行者)	発行年月日
巻頭エッセイ『掛け軸のこと』	柳原 正樹 (館長)	『美術京都』(公益財団法人 中信美術奨励基金)	26.3
“GUTAI”と「具体」	平井 章一 (主任研究員)	月刊美術(実業之日本 社)455号	25.7
革新と伝統 白髪一雄のアクション・ペイン ティング	平井 章一 (主任研究員)	月刊ギャラリー(ギャラリ ーステーション)345号	26.1
美術家、教育者、啓蒙者として - 嶋本昭 三氏のこと	平井 章一 (主任研究員)	美術年鑑(美術年鑑社)	26.1
創造の源泉、その再考 竹久夢二「新し き夢二像」	山野 英嗣 (客員研究員)	花美術館(蒼海出版)	25.4.20
創造の源泉、その再考 竹久夢二「私は 洋画家になりたかった」	高見澤 こずえ (研究補佐員)	花美術館(蒼海出版)	25.4.20
京都国立近代美術館開館50周年記念特 別展 交差する表現に寄せて	山野 英嗣 (客員研究員)	美術年鑑(美術年鑑社)	26.1
「隅田川の影と光 影からくり絵とキャン パス・プロジェクション」	平田 剛志 (研究補佐員)	『映像試論 100』第2号 (Port Gallery T)	25.10.10
「モリス 内海聖史の絵画」	平田 剛志 (研究補佐員)	『内海聖史個展:星の話』 (内海聖史)	25.10
「カオスモス・ペインティング」	平田 剛志 (研究補佐員)	『中島麦個展:星々の悲 しみ - blue on blue』 (Gallery OUT of PLACE)	26.3

「彫刻の不条理について」	平田 剛志 (研究補佐員)	『花岡伸宏 Nobuhiro Hanaoka』(MORI YU GALLERY)	26.3
「置物の日常」	平田 剛志 (研究補佐員)	友枝望著『CLUSTER 友枝望』(友枝望)	26.3.20

(ウ) 国立西洋美術館

[学会等発表]

タイトル	学会等名	発表者氏名 (職名)	日付	場所	聴講者数 (人)
「救援から支援へ: 全国美術館会議の活動」	美術史学会美術館博物館委員会シンポジウム	村上 博哉 (学芸課長)	25.4.21	仙台市博物館ホール	100
「米国の美術館における鑑賞教育の今」	日本美術教育連合	寺島 洋子 (主任研究員)	25.10.20	東京家政大学	50
「美術館の情報資料室はどのような情報を扱っているか」	筑波大学知識情報特論講演会	川口 雅子 (主任研究員)	25.10.23	筑波大学	80
「アジアからの美術書誌情報の発信 - 東京国立近代美術館・国立西洋美術館 OPAC のartlibraries.net における公開の経緯とその意義」	アート・ドキュメンテーション学会	川口 雅子 (主任研究員)	25.11.17	跡見学園女子大学	80
「ポートレートによる国家の歴史: ナショナル・ポートレート・ギャラリーの諸問題」	表象文化論学会	横山 佐紀 (主任研究員)	25.6.30	関西大学	30
「ミュージアムの空間構成と教育プログラム 歴史展示の装置として」	日本比較教育学会	横山 佐紀 (主任研究員)	25.7.7	上智大学	20
シンポジウム「博物館の可能性をさぐる」	博物館学芸員専門講座	横山 佐紀 (主任研究員)	25.12.6	国立教育政策研究所社会教育実践研究センター	50

[雑誌等論文掲載]

学術書籍、研究報告書等の発行

タイトル	執筆者氏名(職名)	掲載誌名(発行者)	発行年月日
『美を究め美に遊ぶ』	陳岡 めぐみ (主任研究員)	東信堂	25.7

『イタリアの世界文化遺産を歩く』	飯塚 隆 (研究員)	同成社	25.10
『ローマ 外国人芸術家たちの都』	渡辺 晋輔 (主任研究員)	竹林舎	25.10
『版画の写像学 デューラーからレンブラントへ』	渡辺 晋輔 (主任研究員)	ありな書房	25.12.15

【査読有り】学術誌論文掲載

タイトル	執筆者氏名(職名)	掲載誌名(発行者)	発行年月日
「アジアからの美術書誌情報の発信 - 東京国立近代美術館・国立西洋美術館 OPAC の artlibraries.net における公開の経緯とその意義」	川口 雅子 (主任研究員)	東京国立近代美術館研究紀要	26.3
"La donation au Louvre, en 1873, du tableau de Constable La Baie de Weymouth, c à écoulisses : L éon Gauchez, John W. Wilson et la bataille de l 'école anglaise"	陳岡 めぐみ (主任研究員)	<i>Revue du Louvre : la revue des mus ées de France</i>	25.6
「米国の美術館における鑑賞教育-所蔵作品を活かしたスクールプログラムの調査結果に基づく一考察」	寺島 洋子 (主任研究員)	日本美術教育連合第 47 号研究論文集	26.3.31

【査読無し】学術誌論文掲載

タイトル	執筆者氏名(職名)	掲載誌名(発行者)	発行年月日
「美術史における画像の力とデジタル技術」	川口 雅子 (主任研究員)	DHjp(勉誠出版)	26.2
第 6 回(2013 年度)秋季研究発表会第 3 部参加報告記	黒澤 美子 (研究補佐員)	アート・ドキュメンテーション通信(アート・ドキュメンテーション学会)	26.1.25

学術誌以外(研究志向の薄い機関紙、美術雑誌、新聞等)における発表

タイトル	執筆者氏名(職名)	掲載誌名(発行者)	発行年月日
「国立西洋美術館:コレクションの価値を高めるデータベースへの挑戦」	川口 雅子 (主任研究員)	文化庁月報(文化庁)	25.6
「国立西洋美術館 ル・コルビュジエと 20 世紀美術」	村上 博哉 (学芸課長)	文化庁月報(文化庁)	25.8
「国立西洋美術館 × ポーラ美術館 モネ、風景をみる眼 19 世紀フランス風景画の革新」	陳岡 めぐみ (主任研究員)	うへの(上野のれん会)	25.12.1

「睡蓮」	陳岡 めぐみ (主任研究員)	読売新聞夕刊	25.12.10
「美術館における学校利用」	寺島 洋子 (主任研究員)	博物館研究(日本博物館協会)	25.6
「私が学校教育に求めること」	寺島 洋子 (主任研究員)	学校教育(広島大学付属小学校教育研究会)	25.9
「薄布の魅力」	寺島 洋子 (主任研究員)	造形ジャーナル(開隆堂)	25.11.1
「本当のラファエロ」「レオナルドとミケランジェロふたりの巨匠から学んだもの」	渡辺 晋輔 (主任研究員)	美術手帖 (美術出版)	25.5
「聖ゲオルギウスと竜」	渡辺 晋輔 (主任研究員)	読売新聞夕刊	25.4.2

(工) 国立国際美術館

[学会等発表]

タイトル	学会等名	発表者氏名 (職名)	日付	場所	聴講者数 (人)
「The Day When Things Stopped Being Ordinary」	2013 Asian art biennial curator's forum	植松 由佳 (主任研究員)	25.10.6	台湾国立現代美術館(台中)	200

[雑誌等論文掲載]

学術誌以外(研究志向の薄い機関紙、美術雑誌、新聞等)における発表

タイトル	執筆者氏名(職名)	掲載誌名(発行者)	発行年月日
ARTIST INTERVIEW リュック・タイムス	中西 博之 (主任研究員)	美術手帖(美術出版社)	25.7
「美の饗宴 関西コレクションズ 『おじいさんと孫娘』	植松 由佳 (主任研究員)	朝日新聞(朝日新聞大阪本社)	25.5.23
「海外博物館だより イギリスのミュージアム事情 コレクションにおけるタイム・ベースド・メディア作品の受入保存修復について」	植松 由佳 (主任研究員)	『博物館研究平成 25 年 7 月号』(公益財団法人日本博物館協会)	25.6.25
「よりアクチュアルに展開するメディアアート」	植松 由佳 (主任研究員)	『第 17 回文化庁メディア芸術祭 受賞作品集』	26.2

(オ)国立新美術館

[学会等発表]

タイトル	学会等名	発表者氏名 (職名)	日付	場所	聴講者 数 (人)
区間 3 分割による階段関数系を用いた絵画画像の色彩変化の計量の試み	日本色彩学会画像色彩研究会 2013 年度研究発表会、日本色彩学会画像色彩研究会	室屋 泰三 (主任研究員)	26.3.2	国立新美術館	
鈴木長吉作「十二の鷹」の形状計測とその CG 化に向けた検討	日本色彩学会画像色彩研究会 2013 年度研究発表会、日本色彩学会画像色彩研究会	室屋 泰三 (主任研究員)	26.3.2	国立新美術館	
「Peinture et ornement : les intérieures intimes d'Edouard Vuillard dans les années 1890 (絵画と装飾:1890 年代におけるエドゥアール・ヴイヤーの親密な室内空間)」	パリ第 8 大学・東京大学主催日仏研究発表会	横山 由季子 (アソシエイトフェロー)	26.3.20 26.3.21	パリ、サン＝ドニ歴史芸術博物館、パリ高等師範学校	

[雑誌等論文掲載]

学術書籍、研究報告書等の発行

タイトル	執筆者氏名(職名)	掲載誌名(発行者)	発行年月日
美術批評家著作選集 第 15 巻 今泉篤男 植村鷹千代	谷口 英理 (アソシエイトフェロー)	ゆまに書房	25.9

[査読有り]学術誌論文掲載

タイトル	執筆者氏名(職名)	掲載誌名(発行者)	発行年月日
「眼と手の記憶の交錯:ピエール・ボナールの「傘を持つ女」連作(1894-1898 年)」	横山 由季子 (アソシエイトフェロー)	『R ésonnances』(第 8 号) (東京大学教養学部、フランス語・イタリア語部会、『R ésonnances』編集委員会)	26.1

学術誌以外(研究志向の薄い機関紙、美術雑誌、新聞等)における発表

タイトル	執筆者氏名(職名)	掲載誌名(発行者)	発行年月日
美術の日本近現代史	谷口 英理 (アソシエイトフェロー)	『美術の日本近現代史』 (東京美術)	26.1
「スーラの点描と分割主義」	長屋 光枝 (主任研究員)	『暮らすめいと』(中日新聞東京本社)	25.9
『イメージ』雑感 美術史学の立場から」	長屋 光枝 (主任研究員)	『月刊みんぱく』(国立民族学博物館)	26.2
『イメージの力 国立民族学博物館コレクションにさぐる』展について」	長屋 光枝 (主任研究員)	『新美術新聞』1336号 (美術年鑑社)	26.2
「ミュージアムへ行こう！国立新美術館人とアートが出会う場所」	西野 華子 (主任研究員)	『理大 科学フォーラム』 (東京理科大学)	25.9
「加山又造(猫)」	西野 華子 (主任研究員)	『月刊美術』No.458(サン・アート)	25.11
“To See as Artists See: American Art from the Phillips Collection”	西野 華子 (主任研究員)	Phillips Collection Magazine(Phillips Collection)	26.2
特集「ポップ・アートをもう一度」(監修)	南 雄介 (副館長)	『サライ』誌8月号	25.8
「作品でたどる軌跡」	南 雄介 (副館長)	『別冊太陽 横尾忠則 芸術にゴールはない』	25.9
「オルセー美術館展 印象派の誕生 描くことの自由」	宮島 綾子 (主任研究員)	『美術の窓』第33巻第2号(通巻385号)(生活の友社)	26.2
「クローズアップ工芸」展における映像展示について	室屋 泰三 (主任研究員)	現代の眼603号	25.12
「マティスやデ・キリコ、バクストらが手掛けたバレエ衣装たち」	本橋 弥生 (主任研究員)	『美術の窓』2月号 (No.365)(生活の友社)	26.2

「グループワークH 中学生の鑑賞～抽象的な作品を題材として～ サブファンリテーター感想」	吉澤 菜摘 (アソイエイトフェロー)	『平成 25 年度美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修 Web 報告』(独立行政法人国立美術館)	25.11
書評「ルーヴルの現在性、あるいは美術館の使命」 ジャック・ラング著 / 塩谷敬訳 『ルーヴル美術館の戦い グラン・ルーヴル誕生をめぐる攻防』	米田 尚輝 (研究員)	『未来』(562 号)(未来社)	25.7
「モンドリアンとファン・ドゥースブルフのグラフィック・イメージ」	米田 尚輝 (研究員)	『引込線 2013』(引込線実行委員会)	25.11
「偶然の縫れ 今井龍満の絵画」	米田 尚輝 (研究員)	『今井龍満作品集 偶然を生きるものたち』(求龍堂)	26.3

【学会等発表、雑誌等論文掲載での発信 過去の実績】

	H21	H22	H23	H24	H25
学会等発表	51	48	61	68	109
雑誌等論文掲載	63	53	79	114	172

ウ インターネットによる調査研究成果の発信

(ア)東京国立近代美術館

「研究紀要」の収録論文をホームページ上に掲載した。

(イ)国立西洋美術館

・国立西洋美術館ニュース ZEPHYROS をホームページ上に掲載した。

・科学研究費助成事業「海外における松方コレクション関連資料の収集と公開」の研究成果の一部として、松方コレクションに関する展覧会リストである「松方コレクションに関する展覧会：1922-1960 年」をホームページ上で発信した。

(ウ)国立新美術館

「国立新美術館活動報告」及び「国立新美術館ニュース」を、ホームページ上で公開した。

国内外の優れた研究者を招聘しシンポジウムを開催するなど、美術館活動に対する示唆が得られるよう取り組むとともに、人的ネットワークの構築を推進したか。

### 所蔵作品等に関するセミナー・シンポジウムの開催

#### ア 東京国立近代美術館

(工芸館)

セミナー・シンポジウム名	萩の陶芸家たち展 記念座談会	開催日	平成 25 年 4 月 5 日
場所	山口県立萩美術館・浦上記念館	聴講者数	65 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	外館和子(美術評論家)、徳留大輔(山口県立萩美術館・浦上記念館 専門学芸員)、唐澤昌宏(東京国立近代美術館工芸課長)		
内容	萩陶芸家協会設立 20 周年を記念して開催した「萩の陶芸家たち展」に伴う関連行事。萩における陶芸制作と現代陶芸界との関わりを、協会の 20 年の歩みと照らし合わせながら検証し、将来の萩における陶芸制作について論議した。		

セミナー・シンポジウム名	座談会「東京オリンピックの証言者」	開催日	平成 25 年 5 月 12 日
場所	東京国立近代美術館	聴講者数	71 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	勝井三雄(グラフィックデザイナー)、小西啓介(グラフィックデザイナー)、道吉剛(デザインディレクター)		
内容	東京オリンピックのデザインワークに関わった三者に、東京オリンピックのデザイン史的な意義や当時のエピソードなどを聞いた。「東京オリンピック 1964 デザインプロジェクト」展関連事業。		

セミナー・シンポジウム名	対談「山田和×唐澤昌宏」	開催日	平成 25 年 9 月 8 日
場所	福井県陶芸館	聴講者数	48 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	山田和(陶芸家)、唐澤昌宏(東京国立近代美術館工芸課長)		
内容	「山田和展～出会いと研鑽、極めた技は未踏の新境地へ～」に伴う関連行事。陶芸家・山田和の作陶活動について、過去から現在、そして未来の展望までを		

所蔵作品等に関するセミナー・シンポジウムの開催は、優れた研究者を招へいし、国内外での美術館でのシンポジウムへの参加などにより人的ネットワークの構築を実現しており、評価できる。

聞いた。

セミナー・シンポジウム名	Tradizione e attualita' della ceramic giapponese	開催日	平成 25 年 10 月 15 日
場所	ファエンツァ国際陶芸美術館(イタリア)	聴講者数	60 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	伊勢崎晃一郎(陶芸家)、Jeff Shapiro(陶芸家)、唐澤昌宏(東京国立近代美術館工芸課長)		
内容	イタリア・ファエンツァで開催された第 11 回十月日本祭(OTTOBRE Giapponese)に伴う関連行事。備前で陶芸を学んだアメリカの陶芸家、ジェフ・シャピロと備前の陶芸家、伊勢崎晃一郎は兄弟弟子であるとともに師弟関係にあることから、日本の伝統的窯業地である備前を通して、日本の陶芸における伝統と現在性について語った。		

セミナー・シンポジウム名	公開シンポジウム「伝統工芸の“今”、そして“未来”を考える」	開催日	平成 26 年 1 月 12 日
場所	東京国立近代美術館 講堂	聴講者数	121 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	田口義明(漆芸家)、藤沼昇(重要無形文化財「竹工芸」の保持者)、前田昭博(重要無形文化財「白磁」の保持者)、唐澤昌宏(東京国立近代美術館工芸課長)		
内容	個人作家的工芸制作と伝統工芸の関わりについて、各氏の制作思考をもとに伝統工芸の現状を把握するとともに、未来の伝統工芸の在り方を探った。日本伝統工芸展が 60 回目の節目を迎えたのを記念して開催した「工芸から K GEI へ」展関連事業。		

セミナー・シンポジウム名	鼎談	開催日	平成 26 年 2 月 22 日
場所	菊池寛実記念 智美術館	聴講者数	105 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	伊勢崎淳(重要無形文化財「備前焼」の保持者)、隠崎隆一(陶芸家)、唐澤昌宏(東京国立近代美術館工芸課長)		

内容	「隠崎隆一 事に仕えて」展に伴う関連行事。隠崎隆一の師である伊勢崎淳とともに、隠崎の作品や備前焼の現在と未来について聞いた。
----	--

(フィルムセンター)

セミナー・シンポジウム名	研究講演会「早稲田大学演劇博物館の映画コレクション」	開催日	平成 25 年 11 月 2 日
場所	フィルムセンター大ホール	聴講者数	203 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	司会:入江良郎(フィルムセンター事業推進室長(主任研究員)) 講演者:竹本幹夫(早稲田大学文学学術院教授)、入江良郎、上田学(日本学術振興会特別研究員 PD)、児玉竜一(早稲田大学文学学術院教授)、板倉史明(神戸大学大学院国際文化学研究所准教授)、岡田秀則(フィルムセンター情報資料室長(主任研究員)), 金子健(文化庁文化財部伝統文化課芸能部門文部科学技官)		
内容	早稲田大学坪内博士記念演劇博物館との共催で同博物館の貴重な映画コレクションを紹介する「ユネスコ『世界視聴覚遺産の日』記念特別イベント 伝説の映画コレクション 早稲田大学演劇博物館所蔵フィルム特別上映会」の会期中に、早稲田大学演劇映像学連携研究拠点との共催による研究講演会「早稲田大学演劇博物館の映画コレクション」を開催した。この講演会は、早稲田大学演劇映像学連携研究拠点でフィルムセンターの主任研究員が代表を務めた調査プロジェクト「演劇博物館所蔵映画フィルムの調査、目録整備と保存活用」(平成 21～25 年度)の研究結果発表を行うもので、演劇と映画の研究者が共同で、演劇博物館の映画収集の軌跡や主要なコレクションについて論じた。		

イ 京都国立近代美術館

セミナー・シンポジウム名	講演会「洋画家たちの近代」	開催日	平成 26 年 2 月 2 日
場所	川越市立美術館	聴講者数	62 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	平井章一(主任研究員)		
内容	国立美術館巡回展開催に伴い、講演会を実施した。		

セミナー・シンポジウム名	講演会「洋画家たちの近代」	開催日	平成 26 年 3 月 1 日
場所	佐倉市立美術館	聴講者数	40 人

		数	
講師・パネリスト等の氏名(職名)	平井章一(主任研究員)		
内容	国立美術館巡回展開催に伴い、講演会を実施した。		

ウ 国立国際美術館

セミナー・シンポジウム名	あなたの肖像 工藤哲巳回顧展プレ・イヴェント	開催日	平成 25 年 6 月 15 日
場所	国立国際美術館	聴講者数	105 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	島敦彦(国立国際美術館学芸課長)、榊田倫広(東京国立近代美術館研究員)、中井康之(国立国際美術館主任研究員)、池田亨(青森県立美術館学芸主幹)、福元崇志(国立国際美術館研究補佐員)		
内容	「あなたの肖像 工藤哲巳回顧展」の開催に先立つプレ・イヴェントとして、工藤哲巳の作品、行為、言動をめぐる研究報告会を開催した。調査研究の発表に加え、工藤が 1969 年に鋸山(千葉県房総)で制作した岩壁モニュメントの記録映画「脱皮の記念碑 工藤哲巳の記録」(1970 年)の上映も行った。		

【所蔵作品等に関するセミナー・シンポジウムの開催 過去の実績】

	H21	H22	H23	H24	H25
セミナー・シンポジウム	12	12	7	7	10

海外の美術館において、我が国の優れた作家や美術作品を世界に広く紹介する展覧会が活発に行われるよう、海外の美術館との連携・協力に積極的に取り組んだか。

(2)国内外の美術館等との連携

シンポジウムの開催等による国内外の優れた研究者等との人的ネットワークの構築

ア 東京国立近代美術館

(本館)

セミナー・シンポジウム名	あなたの肖像 - 工藤哲巳回顧展プレ・イヴェント	開催日	平成 25 年 6 月 23 日
場所	東京国立近代美術館講堂	聴講者数	128 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	島敦彦(国立国際美術館副館長)、榊田倫広(東京国立近代美術館研究員)、中井康之(国立国際美術館主任研究員)、飯田高誉(青森県立美術館美術統括監)、池田亨(青森県立美術館学芸主幹)		

各館において、国内外の研究者を招へいし、セミナーやシンポジウムを開催し、積極的に活動成果を発信したことは評価できる。

京都国立近代美術館では、ローマ国立近代美術館での近代日本美術に関する展覧会に積極的に協力した。また、東京国立近代美術館研究員がキュレーターとして参加したヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展の展示が、特別表彰を受けた成果は評価できる。

内容	工藤哲巳に関する3館での共同調査研究の成果報告			国立美術館本部における国際博物館会議(ICOM)、アジア・ヨーロッパ博物館ネットワーク(ASEMUS)、アジア美術館長会議等への積極的な出席は意義深い。	
(工芸館)					
セミナー・シンポジウム名	社会システムのなかのオリンピックとデザイン	開催日	平成25年4月21日		
場所	東京国立近代美術館	聴講者数	65人		
講師・パネリスト等の氏名(職名)	ジリー・トラガヌ(パーソンズ美術大学)、長田謙一(名古屋芸術大学)、暮沢剛巳(東京工科大学)、吉本光宏(ニッセイ基礎研究所)、関雅広(東京都生活文化局)、佐藤道信(東京芸術大学)、木田拓也(東京国立近代美術館)				
内容	オリンピックにおけるデザイン/デザイナーの役割、オリンピックにおける文化プログラムについての研究発表と討議。「東京オリンピック1964デザインプロジェクト」展関連事業、科研(基盤A)「社会システム<芸術>とその変容」。				
(フィルムセンター)					
セミナー・シンポジウム名	研究講演会「早稲田大学演劇博物館の映画コレクション」【再掲】	開催日	平成25年11月2日		
場所	フィルムセンター大ホール	聴講者数	203人		
講師・パネリスト等の氏名(職名)	司会:入江良郎(フィルムセンター事業推進室長(主任研究員)) 講演者:竹本幹夫(早稲田大学文学学術院教授)、入江良郎、上田学(日本学術振興会特別研究員PD)、児玉竜一(早稲田大学文学学術院教授)、板倉史明(神戸大学大学院国際文化学研究科准教授)、岡田秀則(フィルムセンター情報資料室長(主任研究員))、金子健(文化庁文化財部伝統文化課芸能部門文部科学技官)				
内容	早稲田大学坪内博士記念演劇博物館との共催で同博物館の貴重な映画コレクションを紹介する「ユネスコ『世界視聴覚遺産の日』記念特別イベント 伝説の映画コレクション 早稲田大学演劇博物館所蔵フィルム特別上映会」の会期中に、早稲田大学演劇映像学連携研究拠点との共催による研究講演会「早稲田大学演劇博物館の映画コレクション」を開催した。この講演会は、早稲田大学演劇映像学連携研究拠点でフィルムセンターの主任研究員が代表を務めた調査プロジェクト「演劇博物館所蔵映画フィルムの調査、目録整備と保存活用」(平成21~25年度)の研究結果発表を行うもので、演劇と映画の研究者が共同で、演劇博物館の映画収集の軌跡や主要なコレクションについて論じた。				

イ 京都国立近代美術館

セミナー・シンポジウム名	「映画をめぐる美術 マルセル・ブローターズから始める」展 連続アーティスト・トーク	開催日	平成 25 年 9 月 27 日
場所	京都国立近代美術館 講堂	聴講者数	70 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	ドミニク・ゴンザレス=フォルステル(作家) 田中功起(作家) アナ・トーフ(作家)		
内容	展覧会「映画をめぐる美術 マルセル・ブローターズから始める」開催に際し、出品作家によるアーティスト・トークを実施した。		

セミナー・シンポジウム名	PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭 2015 オープンリサーチプログラム[レクチャー/パフォーマンス] ドミニク・ゴンザレス=フォルステル 「M.2062 (Scarlett)」	開催日	平成 25 年 9 月 6 日
場所	京都府京都文化博物館	聴講者数	142 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	ドミニク・ゴンザレス=フォルステル(作家)		
内容	京都国際現代芸術祭組織委員会、一般社団法人京都経済同友会、京都府、京都市が主催する国際展「PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭 2015」において、当館の平成 25 年度展覧会「映画をめぐる美術 マルセル・ブローターズから始める」の出品作家であるドミニク・ゴンザレス=フォルステルのオープンリサーチプログラムが当館協力、国際交流基金後援により実施された。		

ウ 国立西洋美術館

セミナー・シンポジウム名	国際シンポジウム「ヨーロッパ絵画との出会い - 近代ギリシャと日本の場合 - 」	開催日	平成 25 年 6 月 8 日
場所	国立西洋美術館講堂	聴講者数	約 100 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	主催: 近代ギリシャ絵画研究会、共催: 国立西洋美術館 [発表]		

	<p>木戸雅子(共立女子大学教授)、ファニー・マリア・チガク(ギリシャ、ベナキ美術館近代絵画・版画部門主任研究員)、鈴木杜幾子(明治学院大学教授)、大原まゆみ(明治学院大学教授)、アンドニオス・コティディス(アリストテリス・テサロニキ大学教授)、佐藤道信(東京藝術大学教授)、児島薫(実践女子大学教授)</p> <p>[パネルディスカッション]</p> <p>司会:木戸雅子、パネリスト:馬淵明子(日本女子大学教授(当時))</p>
内容	<p>ギリシャ独立後、この国の画家たちがどのようにヨーロッパ各地の美術の影響を受け、またいかにしてアイデンティティを確立したのかが発表・議論された。同時に、比較例として日本の近代美術についての発表も行われた。</p>

エ 国立国際美術館

セミナー・シンポジウム名	あなたの肖像 工藤哲巳回顧展 国際シンポジウム「工藤哲巳をめぐって」	開催日	平成 25 年 11 月 23 日
場所	国立国際美術館	聴講者数	81 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	ドリユン・チョン(M+美術館チーフ・キュレーター)、富井玲子(美術史家)、ペドロ・エルバー(コーネル大学ロマンス語学科アシスタント・プロフェッサー)、島敦彦(国立国際美術館副館長)、中井康之(国立国際美術館主任研究員)、		
内容	国際交流基金との共催により、海外から専門家を招き、工藤哲巳の特異な世界について、幅広い見地から意見を交わし、理解を深めた。		

セミナー・シンポジウム名	NMAO 国際シンポジウム:現代美術をコレクションするとは?	開催日	平成 26 年 3 月 1 日
場所	国立国際美術館	聴講者数	89 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	パトリシア・スミッセン(テート保存プログラム担当首席)、デボラ・ポッター(テートコレクション保存主席、コレクション部門ディレクター代理)、加藤弘子(東京都現代美術館企画係長)、丹羽晴美(東京都写真美術館事業企画係長)、相澤邦彦(兵庫県立美術館保存・修復グループ学芸員)、植松由佳(国立国際美術館主任学芸員)		
内容	美術館コレクションにおける近・現代美術作品の受入・展示・保存・修復をテーマとした国際シンポジウム。		

セミナー・シンポジウム名	NMAO ラウンドテーブル・ワークショップ	開催日	平成 26 年 3 月 2 日
場所	国立国際美術館	聴講者数	21 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	パトリシア・スミッセン(テート保存プログラム担当首席)、デボラ・ポッター(テートコレクション保存主席、コレクション部門ディレクター代理)、植松由佳(国立国際美術館主任研究員)、他		
内容	前日に開催したシンポジウムの内容を引き継ぎ、関係者のみの参加により日本の国内事情に照らし合わせた、より実際の議論を展開した。		

セミナー・シンポジウム名	現代美術の保存修復ワークショップ	開催日	平成 26 年 3 月 25 日
場所	国立国際美術館	聴講者数	6 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	アントニオ・ラーヴァ(イタリア国際修復機関副会長/ヴェナリア国立修復研究所教授)、岡田温司(京都大学大学院人間・環境学研究科教授)、他		
内容	現代美術修復の世界的権威であるアントニオ・ラーヴァ教授を招いて、講演、及び質疑応答の場を設け、既存の修復学や美術館における保存学では網羅しきれない数々の議題について議論を深めた。		

オ 国立新美術館

セミナー・シンポジウム名	「黒川紀章メモリアル INTER-DESIGN FORUM TOKYO 2013『共生のアジアへ』」	開催日	平成 26 年 10 月 11 日～10 月 13 日
場所	国立新美術館	聴講者数	737 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	10 月 11 日「アジアの世紀」:マリ・クリスティーヌ(異文化コミュニケーター)、水野誠一(ソーシャルプロデューサー)、中沢新一(人類学者)、長谷川祐子(東京都現代美術館チーフキュレーター)、黒川雅之(建築家)、遠藤秀平(建築家)、千住明(作曲家)、金光裕(建築家)、中島信也(CM 演出家)、藤巻幸大(ブランディング・プロデューサー)、ペマ・ギャルポ(桐蔭横浜大学・大学院教授)、秋尾晃正(一般社団法人)		

	<p>民際センター理事長)、波頭亮(経営コンサルタント)、青木保(館長)</p> <p>10月12日「思想と建築」:蜷川有紀(画家・女優)、八束はじめ(建築家)、三枝成彰(作曲家)、南後由和(社会学者)、手塚貴晴(手塚建築研究所代表)、鈴木エドワード(建築家)、豊川斎赫(建築史家)、榎文彦(建築家)、團紀彦(建築家)、宮本佳明(建築家)、竹山聖(建築家)</p> <p>10月13日「アートと美術館」:アーロン・ベツキー(シンシナティ美術館館長)、日比野克彦(アーティスト)、宮島達男(現代美術家)、森司(東京アートポイント計画ディレクター)、土佐尚子(京都大学教授)、中津良平(シンガポール国立大学教授)、寺坂公雄(日本芸術院会員)、妹島和世(建築家)、浅田彰(京都造形芸術大学教授)、南雄介(副館長・学芸課長)、青木保(館長)</p>
内容	<p>主催:一般社団法人日本文化デザインフォーラム、国立新美術館</p> <p>2013年は国立新美術館の設計を手がけた黒川紀章氏の七回忌にあたる。これを機に、黒川氏を中心に1980年に創設された日本文化デザイン会議(1990年より日本文化デザインフォーラム)と共催で、建築、美術、文化、デザインなど各方面で活躍する専門家を国内外から招いた、3日間にわたるフォーラムを開催した。3日間を通じたテーマとして、黒川氏が生涯を通じて提唱した「共生の思想」と、主だった活動の場とした「アジア」を掲げ、初日は「アジアの世紀」、2日目は「黒川紀章多面体」、そして最終日は「建築と美術館の未来」を主題に、多彩な出演者による講演や対談、ショートトークを展開した。メタボリズム運動をはじめとする黒川氏の業績を振り返るとともに、アジアから発信する新たな建築や美術館像について活発な議論を交わし、これからのアジアにおける文化発展の在り方を探る機会となった。</p>

セミナー・シンポジウム名	「新たなイメージ論に向けて」	開催日	平成26年2月22日
場所	国立新美術館講堂	聴講者数	45人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	水沢勉(神奈川県立近代美術館館長)、水野千依(京都造形芸術大学教授)、長屋光枝(主任研究員)、青木保(館長)		
内容	<p>「イメージの力 国立民族学博物館コレクションにさぐる」展は、地域や時代によってイメージを分類するのではなく、共通した効果や機能に着目し、人間とイメージとのダイナミックな交流を検証している。同時にこれは、日本及び西洋の近現代美術を中心に展覧会を開催してきた国立新美術館の活動を相対化する試みでもある。本展覧会に合わせて企画したシンポジウム「新たなイメージ論に向けて」では、西洋の美術史学が長い時間をかけて形成してきたイメージと人間との関係を問い直すとともに、そこから生まれる新たな視座を通じて、イメージが持つ根源的な力を再考した。</p>		

平成26年4月12日には、日本文化人類学会との共催による公開シンポジウム「アートと人類学:いまアートの普遍性を問う」を開催した。

### 我が国の作家、美術作品による展覧会開催のための海外の美術館との連携・協力

#### ア 東京国立近代美術館

本館では、第 55 回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展において、蔵屋美香(美術課長)が「キュレーター」として参加した田中功起の日本館での個展「abstract speaking: sharing uncertainty and collective acts」が、特別表彰を受賞した。

工芸館では、モリカミ博物館・日本庭園「Contemporary KOGEI Styles in Japan(現代の日本工芸)展」(主催:文化庁、外務省、在マイアミ総領事館、モリカミ博物館・日本庭園、会期:2013年10月8日~2014年2月23日)に特別協力を行った。

フィルムセンターでは、フォンダツォーネ・チネカ・ディ・ボローニャ(FIAF加盟機関)との共催による第27回チネマ・リトロバート映画祭・特集企画「日本が声を上げる! パート2:歌手とサムライ」において、P.C.L.映画製作所、J.O.トーキー、太秦発声映画等、日本におけるトーキー映画の発展に寄与した製作会社による初期トーキー映画9本を、すべて英語字幕付プリントで提供し、1930年代の日本映画における先駆的、実験的な試みについて、映画祭に参加した世界各国の研究者やアーキビストたちの認識を高めることができた。ニューヨーク近代美術館、ドイツ・キネマテーク(共にFIAF加盟機関)共催による映画の撮影・照明技法にスポットライトを当てた上映企画「影の美学」に対し、両会場併せて14本の映画フィルムを貸与するとともに、ベルリンでの上映に際してはフィルムセンター主幹がシンポジウム等に参加し、世界の映画史における日本映画の多大なプレゼンスについて、映画祭に参加した多くの観客の認識を促すことができた。

#### イ 京都国立近代美術館

国際交流基金との共催で、ローマ国立近代美術館において「近代日本画と工芸の流れ1868-1945」展を開催し(2013年2月26日~5月5日)、尾崎正明(前館長)及び松原龍一(学芸課長)が、企画・作品選定を担当した。国内の美術館ほかが所蔵する我が国の日本画・工芸作品によって計170点で構成し、我が国の近代美術作品を海外で紹介する貴重な機会となった。

#### ウ 国立新美術館

平成27年度に開催を予定している、韓国国立現代美術館と共同で企画し、韓国と日本を巡回する展覧会「アーティスト・ファイル アジア・シリーズ(仮称)」展について、平成25年度から準備に着手した。平成26年度は担当者がそれぞれの国を行き来することにより、展覧会の実現に向けての打ち合わせ及び作家の調査を重ねる予定である。

<p>国内外の美術館及びフィルム・アーカイブ等と保存・修復に関する情報交換を図りながら、修復・保存活動の充実に取り組んだか。</p>	<p><b>その他海外の美術館との連携・協力</b></p> <p>国立美術館本部では、第 23 回 ICOM 大会 (ICOM Rio 2013)、アジア・ヨーロッパ博物館ネットワーク (Asia-Europe Museum Network, ASEMUS)、第 7 回アジア美術館長会議などの国際会議へ出席した。</p> <p>日豪美術館学芸員交流では、本橋弥生 (国立新美術館主任研究員) が渡豪し、オーストラリア現代美術館、オーストラリア国立美術館などを訪問した。オーストラリア国立美術館では、平成 26 年度に開催する「魅惑のコスチューム：バレエ・リュス展」の打ち合わせ及び作品調査などを行った。</p> <p><b>(3) 国内外の美術館及びフィルム・アーカイブ等との保存・修復に関する情報交換</b></p> <p>ア 東京国立近代美術館 (フィルムセンター)</p> <p>UCLA フィルム・アンド・テレビジョン・アーカイブ、ジョージ・イーストマン・ハウス、フィルムアルヒーフ・オーストリア、福岡市総合図書館 (以上 FIAF 加盟機関)、神戸映画資料館、映画製作各社、現像所等より、映画フィルムに関する新たな所在情報を得た。</p> <p>フォンダツィオーネ・チネテカ・ディ・ボローニャ (FIAF 加盟機関)、映画製作各社、現像所、映画フィルム製造会社、映画関連機器メーカー等との間で、映画フィルムの保存・修復に関する調査や情報交換を行った。また、研究者及び補佐員が、「Memory! 第 1 回国際映画遺産フェスティバル」(カンボジア・プノンペン)、「第 17 回東南アジア太平洋地域視聴覚アーカイブ連合会議」(タイ・バンコク)、「映画の復元と保存に関するワークショップ」、「恵比寿映像祭」、「映団連セミナー」等で行われたシンポジウムやワークショップに参加することで、参加者との情報交換に努めた。</p> <p>映画資料館・図書館における映画資料の収集・保存・公開事業の展開について情報交換を行った (北九州市松永文庫、八丁座映画図書館)。</p> <p>イ 国立国際美術館</p> <p>NMAO ラウンドテーブル/ワークショップを開催した (平成 26 年 3 月 2 日)。前日に開催した「NMAO 国際シンポジウム：現代美術をコレクションするとは？」に続き、2 日目は、美術関係者を対象として、英国テートからの 2 名のゲストとともに、参加者によるディスカッションを行った。前日のシンポジウムを受け、日本の国内事情に照らし合わせて、保存・修復に関するより実際の議論を行った。</p>	<p>国立国際美術館においては、国際シンポジウムが開催され、フィルムセンターでは、各国のフィルム・アーカイブ等との保存・修復に関する情報交換を行っており、目標を達成していると、評価できる。</p>
--	---	--

所蔵作品については、その保存状況や各館における展示計画等を勘案しつつ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に行ったか。

**(4)所蔵作品の貸与等  
作品の貸与**

館名	貸出件数	貸出点数	特別観覧件数	特別観覧点数
東京国立近代美術館 (本館)	71	252	225	701
東京国立近代美術館 (工芸館)	27	257	47	147
京都国立近代美術館	64	346	83	222
国立西洋美術館	8	55	91	306
国立国際美術館	28	413	25	62
計	198	1,323	471	1,438

京都国立近代美術館では、神戸市立小磯記念美術館で開催された特別展「関西学院の美術家～知られざる神戸モダニズム～」に41点の作品を貸与した。愛知県陶磁美術館の開館35周年記念企画展「モダニズムと民藝 北欧のやきもの:1950's-1970's デンマーク、スウェーデン、ノルウェー、フィンランド」に「協力」名義で26点の作品を貸与したほか、笠岡市竹喬美術館で開催された「霊と艶をもとめて 村上華岳」展に寄託作品を含めて27点の作品を貸与した。

国立西洋美術館では、昨年に比べ貸出件数が減少しているが、借用依頼の多い19世紀フランス風景画の多くがポーラ美術館との共同企画である「国立西洋美術館×ポーラ美術館 モネ、風景をみる眼 19世紀フランス風景画の革新」展へ出品されたことが主な理由である。一方、同展のため、ポーラ美術館に対しては、モネの全所蔵作品をはじめとする多数の作品を貸与した。

**映画フィルム等の貸与**

種別	貸出		特別映写観覧		複製利用	
	件数	点数	件数	点数	件数	点数
映画フィルム	75	175	77	241	41	438

種別	貸出		特別観覧	
	件数	点数	件数	点数
映画関連資料	5	166	35	446

所蔵作品の貸与等については、全体として適切な水準にあり、評価できる。特に、フィルムセンターでは、海外へのフィルム貸与も積極的に行っており評価できる。

映画フィルムの貸与については、海外及び国内への貸与、あるいは共同主催事業における提供及び通常の貸与に分類できる。海外への協力のうち、共同主催事業では、平成 24 年度に引き続き、フォンダツィオーネ・チネテカ・ディ・ボローニャ (FIAF 加盟機関) との共催による第 27 回チネマ・リトロバート映画祭・特集企画「日本が声を上げる！ パート 2: 歌手とサムライ」において、日本の最初期トーキー映画 9 本の映画フィルムを提供した。ニューヨーク近代美術館、ドイツ・キネマテーク (共に FIAF 加盟機関) 共催による映画の照明技法にスポットライトを当てた上映企画「影の美学」に対し、両会場併せて 14 本の映画フィルムを貸与した。日本の初期アニメーション映画については、チネテカ・ナツィオナーレ (イタリア・FIAF 機関) における生演奏付上映会に対し、6 本の映画フィルムを貸与した。また、英国映画協会サウスバンク (FIAF 機関) とエジンバラ国際映画祭が共催した、フランス人監督ジャン・グレミヨンの回顧展には、小宮登美二郎コレクションから不燃化したプリント『燈台守』(1929 年) を貸与し、フィルムセンターによる幅広い映画保存活動の成果を、世界中の研究者や愛好者に示すことができた。

国内での協力のうち、共同主催事業では、平成 24 年度に引き続き京都国立近代美術館との間で開催した「NFC 所蔵作品選集 MoMAK Films」において、『銀輪』[デジタル復元版] (1956 年) 等日本映画 11 本と『女だけの都』(1936 年) 等外国映画 11 本を、国立国際美術館との間で開催した「第 7 回中之島映像劇場」においては、『くもとちゅうりっぷ』[デジタル復元版] (1943 年) 等日本アニメーション映画 45 本を提供し、関西における所蔵フィルムの定期的な上映拠点として堅固な地盤を築くことができた。また、一般社団法人コミュニティシネマセンターとの間で開催した「蘇ったフィルムたち 東京国立近代美術館フィルムセンター復元作品特集」巡回事業では、近年の復元事業の成果となる日本映画 34 本を提供した。通常の貸与では、福岡市総合図書館 (FIAF 機関)、神戸映画資料館、川喜多記念映画文化財団、仙台市市民文化事業団、山口市文化振興財団等が主催する上映会や、湯布院映画祭、カナザワ映画祭、高崎映画祭等の映画祭、並びに神保町シアター、新文芸坐、ラピュタ阿佐ヶ谷等の名画座における特集上映に対しては、番組において欠くことのできない作品について、所蔵プリントの貸与を行った。

特別映写観覧については、大学等教育研究機関、映画関連団体、映画及びテレビ番組製作会社、映画・映像に係る非営利法人等による調査、研究、研修等に、所蔵プリントの試写を通して寄与した。

複製利用については、著作権者等による運用、美術館・博物館等の収集作品や展示作品の充実、映像作品や番組における資料としての映像提供等に寄与したが、平成 24 年度テレビ朝日映像から申請を受けた、戦後日本ニュース映画を代表するシリーズ『東映ニュース』の原版フィルムへの複製利用が、本年度も引き続き行われ、3 回の申請に際し計 325 本のフィルムを提供した。

映画資料の貸出については、日本でも数少ない常設の映画関連展示施設である鎌倉市川喜多映画記念館へ貸出を行った。

【作品の貸与 過去の実績】

	H21	H22	H23	H24	H25
貸出件数	197	189	174	180	198
貸出点数	1,825	1,318	1,577	1,305	1,323
特別観覧件数	384	320	397	418	471
特別観覧点数	1,145	772	829	1,082	1,438

【映画フィルム等の貸与(東京国立近代美術館フィルムセンター)】

	H21	H22	H23	H24	H25
貸出件数	82	71	80	100	75
貸出本数	242	181	168	272	175
特別映写観覧件数	129	93	92	83	77
特別映写観覧本数	397	351	267	288	241
複製利用件数	39	38	39	37	41
複製利用本数	96	74	62	426	438

【映画関連資料の貸与(東京国立近代美術館フィルムセンター)】

	H21	H22	H23	H24	H25
貸出件数	5	0	7	4	5
貸出点数	68	0	209	39	166
特別観覧件数	24	28	45	20	35
特別観覧点数	93	167	787	943	446

【(小項目)1-3-2】	ナショナルセンターとしての人材育成					【評定】  B			
【法人の達成すべき目標(計画)の概要】						H23	H24	H26	H27
(5)-1 美術教育の一翼を担うナショナルセンターとして、全国の小・中学校等や公私立美術館における教育普及活動の充実に資するプログラムの開発・実施を行うとともに、前中期目標期間に作成した教材の普及に取り組む。						B	B		
(5)-2 全国の小・中学校等における鑑賞教育や、全国の美術館における教育普及活動の活性化を図るため、指導にあたる人材の育成を目指した全国レベルの教員、学芸員等の研修を実施する。						実績報告書等 参照箇所			
(6) 大学院生等を対象としたインターンシップ等の事業を進め、今後の美術館活動を担う中核的人材を育成する。						<実績報告書>			
(7) 全国の美術館等の運営に対する援助、助言を適時行うとともに、企画展の共同主催やそれに伴う共同研究及びその他の研修制度を通じて、関係者の情報交換・人的ネットワークの形成等に取り組む。なお、学芸担当職員を対象とした研修制度については、当該館のニーズや実態等を十分に踏まえるとともに、これまでの実施方法等を含め、平成23年度中に見直しのための幅広い検討を行い、その結果に基づき、平成24年度から実施する。						P84～87			
						(5) 美術教育の一翼を担うナショナルセンターとしての活動 美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修の実施 先駆的・実験的な教材やプログラムの開発 (6) 美術館活動を担う中核的人材の育成 (7) 全国の美術館等との連携・人的ネットワークの構築 企画展・上映会等の共同主催と共同研究 キュレーター研修			
【インプット指標】									
(中期目標期間)	H23	H24	H25	H26	H27				
決算額(百万円)	62	68	57	-	-				
従事人員数(人)	60	57	53	-	-				
1) 決算額はセグメント情報 本部 教育普及事業費を計上している。(5)-1 は本部の教育普及事業費の一部であり、個別に計上できないため、本部の教育普及事業費全額を計上している。その他の事業については各館の教育普及事業費の一部であり、個別に計上できないため、本項目では計上していない。) )									
2) 従事人員数は、すべての研究職員数及び研修担当事務職員数を計上している。その際、役員及び研修担当を除く事務職員は勘案していない。									

評価基準	実績	分析・評価
<p>全国の小・中学校等や公立私立美術館における教育普及活動の充実に資するため、先導的・先駆的な教材やプログラムの開発・実施を行うとともに、前中期目標期間に作成した教材の普及に取り組んだか。</p> <p>全国の小・中学校等における鑑賞教育や、全国の美術館における教育普及活動の活性化を図るため、指導にあたる人材の育成を目指した全国レベルの教員、学芸員等の研修を実施したか。</p> <p>・ 修了後の活動状況等、業務の成果・効果が出ているか。</p>	<p><b>先駆的・実験的な教材やプログラムの開発</b></p> <p>ア 国立美術館全体としての取組 各館から学校へ、鑑賞教材「国立美術館アートカード」の貸出をするほか、教員の研修などの機会をとらえて紹介している。平成 25 年度には各館(国立新美術館を除く)のミュージアムショップと連携協力し、アートカードの増刷を行った。</p> <p>イ 東京国立近代美術館 工芸館では所蔵作品展「ボディ」開催に際して、中学生以下を対象としたセルフガイドを作成した。1 つのリーフレットで異なる対象年齢の需要に応えるために、内容の難度に応じて文字の級数に差をつけるなどの工夫を試みた。</p> <p><b>美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修の実施</b></p> <p>8 年目となる「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」は、より多くの方々と研修成果を共有するため、従来冊子として発行してきた研修記録を平成 23 年度からウェブサイトで公開しているが、平成 25 年度も引き続き公開した。また、本研修において「教員免許状更新講習」を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・参加人数:99 名(小中学校教諭 63 名、指導主事 8 名、学芸員 28 名)</li> <li>・会 期:平成 25 年 7 月 29 日、30 日(2 日間)</li> <li>・会 場:東京国立近代美術館(7 月 29 日)、国立新美術館(7 月 30 日)</li> <li>・教員免許状更新講習:受講者 10 名(全員に履修証明書を授与)</li> </ul> <p>東京国立近代美術館及び国立西洋美術館では、東京都図画工作研究会、東京都現代美術館、東京都美術館との共催で教員研修を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平成 25 年 6 月 21 日 鑑賞授業(於:東京国立近代美術館)</li> <li>・平成 25 年 6 月 28 日 公開授業(於:世田谷区立上北沢小学校)</li> <li>・平成 25 年 7 月 1 日 公開授業・研修会(於:東京国立近代美術館)</li> </ul> <p>学習指導要領及び学校の授業とつながる美術館利用についての研修の一環として、東京国立近代美術館と上北沢小学校では、美術館への複数回来館をともなう連携授業を行い、休館日を使って研修会を開催しその成果を発表した。</p> <p>京都国立近代美術館では、京都市教育委員会、京都市図画工作教育研究会との共催で、小学校教員を対象に鑑賞教育の指導力向上に向けた講座を開催した。講演会、展覧会鑑賞、グループワーク等を実施し、76 名の参加者があった。</p> <p>【業務の成果・効果】 平成 25 年度「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」に参加した指導者</p>	<p>鑑賞教材「アートカード」の作成・貸与や工芸館における対象年齢に応じた作品のセルフガイドの作成など、教材開発と普及に取り組んだが、教育プログラムとして十分な水準に達していない。</p> <p>研修成果を共有するための研修記録のウェブサイトの可視化は評価できる。また、学校における鑑賞教育の充実は、総合的学習とともに必須であり、指導者研修は、成果も上げており、今後も継続すべきである。</p> <p>終了後のアンケート結果については、評価が高いものの、その後の追跡調査</p>

<p>・業務の効率化について、教材作成作業等の効率化、研修施設の有効活用、施設管理業務の民間委託等の取組を行っているか。</p> <p>・受益者負担の妥当性・合理性があるか。</p> <p>大学院生等を対象としたインターンシップ等の事業を進め、今後の美術館活動を担う中核的人材を育成したか。</p>	<p>に対しアンケートを実施し、その評価等の測定を行った。その結果、当該研修の総合評価として「満足計」（「非常に満足」・「満足」の合計）は 98.0%、「不満計」（「やや不満」・「不満」の合計）は 0.0%であった。研修への参加によって能力（知識・スキル）が向上したかについては、「思う計」（「大いに思う」・「思う」の合計）は 91.9%、「思わない計」（「そう思わない」・「全く思わない」の合計）は 0.0%であった。研修内容は職場で活用できるかについては、「思う計」（「大いに思う」・「思う」の合計）は 93.9%、「思わない計」（「そう思わない」・「全く思わない」の合計）は 0.0%、研修内容を地域の学校や美術館に広く還元できるかについては、「思う計」（「大いに思う」・「思う」の合計）は 86.9%、「思わない計」（「そう思わない」・「全く思わない」の合計）は 0.0%であった。</p> <p>【業務の効率化についての取組状況】 「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」は、主に、体験型プログラムを実施するものであり、座学や講義を前提として継続的に使用する教材等を作成していない。また、美術作品が展示されている展示室でのプログラムもあり、民間委託がなじむものではない。</p> <p>【受益者負担の妥当性・合理性】 国立美術館では有料の人材育成業務を行っていない。</p> <p style="text-align: center;"><b>美術館活動を担う中核的人材の育成</b></p> <table border="1" data-bbox="663 890 1592 1412"> <thead> <tr> <th>館名</th> <th>インターンシップ受入数</th> <th>博物館実習受入数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="3">東京国立近代美術館</td> <td>本館</td> <td>6</td> </tr> <tr> <td>工芸館</td> <td>3</td> </tr> <tr> <td>フィルムセンター</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>京都国立近代美術館</td> <td>4</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>国立西洋美術館</td> <td>7</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>国立国際美術館</td> <td>7</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>国立新美術館</td> <td>9</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>37</td> <td>21</td> </tr> </tbody> </table>	館名	インターンシップ受入数	博物館実習受入数	東京国立近代美術館	本館	6	工芸館	3	フィルムセンター	1	京都国立近代美術館	4	-	国立西洋美術館	7	-	国立国際美術館	7	-	国立新美術館	9	-	計	37	21	<p>を行うなど改善が望まれる。</p> <p>「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」は、主に体験プログラムとして、展示室など既存の施設等を活用し実施しており、業務の効率化については、適切であると認められる。</p> <p>受益者負担については、他機関の状況を参考にするなど、検証が必要である。</p> <p>今後の美術館活動を担う大学院生等を対象としたインターンシップ、博物館実習受入れについては、各館の実施体制を踏まえ、適切に行われている。</p> <p>また、次代を担う美術館員（学芸員）の養成は、将来に向けての課題である。後継者養成を制度として確かなものとするべきである。</p>
館名	インターンシップ受入数	博物館実習受入数																									
東京国立近代美術館	本館	6																									
	工芸館	3																									
	フィルムセンター	1																									
京都国立近代美術館	4	-																									
国立西洋美術館	7	-																									
国立国際美術館	7	-																									
国立新美術館	9	-																									
計	37	21																									

全国の美術館等の運営に対する援助、助言を適時行うとともに、企画展の共同主催やそれに伴う共同研究及びその他の研修制度を通じて、関係者の情報交換・人的ネットワークの形成等に取り組んだ。

【インターンシップ・博物館実習受入数 過去の実績】

	H21	H22	H23	H24	H25
インターンシップ 受入数	31	29	35	44	37
博物館実習受入数	15	17	17	15	21

全国の美術館等との連携・人的ネットワークの構築

企画展・上映会等の共同主催と共同研究

館名	共同主催件数	共同研究件数
東京国立近代美術館	本館	3
	工芸館	0
	フィルムセンター	7
京都国立近代美術館	5	5
国立西洋美術館	3	5
国立国際美術館	5	5
国立新美術館	4	4
計	27	24

【企画展・上映会等の共同主催と共同研究 過去の実績】

	H21	H22	H23	H24	H25
共同主催件数	18	27	21	24	27
共同研究件数	17	29	26	27	24

特記事項(共同研究によって特に得られた成果等)

(ア)東京国立近代美術館

(本館)

「あなたの肖像 - 工藤哲巳回顧展」では、展覧会に先駆けて主催3館担当研究員による研究発表会をプレイベントとして開催した。

(フィルムセンター)

・「NFC 所蔵作品選集 MoMAK Films」では、京都国立近代美術館と協議しながら作品の選定、提供を行った。

・映画美術資料を調査及び整理するとともに、その画像をデジタル化し、若手美術監督等

企画展・上映会等の共同主催と共同研究については優れた水準で実施されており、他館との連携・協力は今後とも期待される。

の育成及び映画美術の研究に活用することを目的とする「日本映画美術遺産プロジェクト」を協同組合日本映画・テレビ美術監督協会と共同で進めている。

(イ) 京都国立近代美術館

東京国立近代美術館フィルムセンターと共催で「チェコの映画ポスター」展を開催したほか、同館と共催の映画会「MoMAK Films」を5回(計10日)開催した。

(ウ) 国立西洋美術館

共同主催による企画展等(3件3機関)については、以下のとおり実施した(括弧内は共同主催機関)。

1. 「ラファエロ」(フィレンツェ文化財・美術館特別監督局)
2. 「ソフィア王妃芸術センター所蔵 内と外 スペイン・アンフォルメル絵画の二つの『顔』」(国立ソフィア王妃芸術センター)
3. 「国立西洋美術館×ポーラ美術館 モネ、風景をみる眼 - 19世紀フランス風景画の革新」(ポーラ美術館)

共同研究による企画展等(5件6機関)については、以下のとおり実施した(括弧内は共同研究機関)。

1. 「ラファエロ」(フィレンツェ文化財・美術館特別監督局)
2. 「システイーナ礼拝堂 500年祭記念 ミケランジェロ展 - 天才の軌跡」(カーサ・ブオナローティ、福井県立美術館)
3. 「ル・コルビュジエと20世紀美術」(ギャラリー・タイセイ)
4. 「ソフィア王妃芸術センター所蔵 内と外 スペイン・アンフォルメル絵画の二つの『顔』」(国立ソフィア王妃芸術センター)
5. 「国立西洋美術館×ポーラ美術館 モネ、風景をみる眼 - 19世紀フランス風景画の革新」(ポーラ美術館)

(エ) 国立国際美術館

「美の響演 関西コレクションズ」では大阪市立近代美術館建設準備室、京都国立近代美術館、滋賀県立近代美術館、兵庫県立美術館、和歌山県立近代美術館の各館と、「フランス国立クリュニー中世美術館所蔵《貴婦人と一角獣》展」及び「アンドレアス・グルスキー展」では国立新美術館と、「あなたの肖像 工藤哲巳回顧展」では東京国立近代美術館及び青森県立美術館と共同研究を行った。特に、「美の響演 関西コレクションズ」については、作品の貸出、展示、図録の制作等、関西圏の6美術館の連携と協力により展覧会が実現したことは特筆すべきである。

また、上映会については、東京国立近代美術館フィルムセンターとの共催により「第7回中之島映像劇場日本の漫画映画の誕生と発展 草創期～1946年」を開催した。

(オ)国立新美術館

「カリフォルニア・デザイン 1930-1965 モダン・リビングの起源」ではロサンゼルス・カウンティ美術館と、「フランス国立クリュニー中世美術館所蔵『貴婦人と一角獣』展」ではフランス国立クリュニー中世美術館、国立国際美術館と共同研究及び共同主催を行った。「印象派を超えて 点描の画家たち ゴッホ、スーラからモンドリアンまで」展ではクレラー＝ミュラー美術館、愛知県美術館と共同研究を、広島県立美術館と共同研究及び共同主催を行った。「イメージの力 国立民族学博物館コレクションにさぐる」展では国立民族学博物館と共同研究及び共同主催を行った。

**キュレーター研修**

館名	受入人数
東京国立近代美術館(本館・工芸館)	2
京都国立近代美術館	1
国立西洋美術館	1
国立国際美術館	0
国立新美術館	0
計	4

【キュレーター研修 過去の実績】

	H21	H22	H23	H24	H25
受入人数	5	2	5	5	4

平成23年度7月から9月までの間に各都道府県教育委員会及び美術館等約400件に対してキュレーター研修に関するアンケート調査(回答約50%)を実施した。その結果、派遣元の「人員(研究員)不足」「旅費等の予算不足」、また、「公募時期」や「受入館の情報不足」等が当該研修への参加を困難にしている主な要因であることが判明した。

アンケート調査の結果を踏まえ、当該研修への参加者を増員すべく、参加環境を整備するために、国立美術館として対応が可能な「受入館の情報提供」「公募時期の適正化」等について検討し、平成25年度公募(平成26年度分)から全国美術館会議に不参加の大学美術館(11館)を新たに公募リストへ追加した。

学芸担当職員を対象とした研修制度について、当該館のニーズ・実態等を十分踏まえ、これまでの実施方法等を含め見直しのための検討を行ったか。また、結果に基づき行ったか。

学芸担当職員の受入人数は4名と、低調であり、目標を達成しているとは言えず、検討が急務である。23年度に実施したアンケート調査の結果を踏まえ、受入人数の増加に向け、効果や受益者負担の妥当性なども含めて更なる再検討を要する。

【(小項目)1-3-3】	フィルムセンターの取組状況					【評定】			
【法人の達成すべき目標(計画)の概要】						A			
<p>(8)-1 フィルムセンターは我が国の映画文化振興の中核的機関として、国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)の正会員として、引き続き国際的な事業等に取り組み、「所蔵映画フィルム検索システム」を拡充する等、各種情報の収集・発信を行う。さらに、映画団体が行う映画資料の保存に関するプロジェクトや大学等が行う映画フィルム調査等の各種取組について連携・調整の役割を積極的に果たすため、当該団体等との連絡会議を年に3回程度主宰する。</p> <p>(8)-2 フィルムセンターが、より機動的かつ柔軟な運営を行うため、東京国立近代美術館の映画部門から、各館とならぶ独立した一館となることを引き続き検討する。</p>									
【インプット指標】						A	A		
						実績報告書等 参照箇所			
						<p>&lt;実績報告書&gt;</p> <p>P87～88</p> <p>(8)我が国の映画文化振興の中核的機関としてのフィルムセンターの活動</p> <p>国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)の正会員としての活動</p> <p>日本映画情報システムの運営</p> <p>所蔵映画フィルム検索システムの拡充</p> <p>映画関係団体等との連携</p> <p>フィルムセンターの東京国立近代美術館からの独立の検討</p>			
【インプット指標】									
(中期目標期間)	H23	H24	H25	H26	H27				
決算額(百万円)	1,370	1,441	1,364	-	-				
従事人員数(人)	11	9	8	-	-				
<p>1) 決算額はセグメント情報 東京国立近代美術館 経常費用を計上している。(本項目は、フィルムセンターの経費を個別に計上できないため、東京国立近代美術館の経費全額を計上している。)</p> <p>2) 従事人員数は、フィルムセンターの職員数を計上している。その際、役員は勘案していない。</p>									
評価基準	実績				分析・評価				
引き続き国際的な事業等に取り組み、「所蔵映画フィルム検索システム」を拡充する等、各種情報の収集・発信を行ったか。さらに、映画団体が行う映画資料の保存に関するプロジェクトや大学等が行う映画フィルム調査等の各種取組について連携・調整	<p><b>国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)の正会員としての活動</b></p> <p>スペイン・バルセロナで開催された第69回FIAF会議にフィルムセンター主幹及び研究員が出席した。開催時、運営委員・副会長であった主幹はイベント「第二世紀フォーラム」にパネリストとして出席するなど、連盟全体の運営、アジア地区グループFAFAの会合開催以外でも主導的な役割を果たした。また、研究員の論文がFIAF機関誌「映画保存ジャーナル」に掲載された。</p>				<p>フィルムセンター主幹が国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)の副会長を務めるとともに、センター自身も正会員として中心的な活動をしており、評価できる。</p> <p>フィルムの収集・保存・修復、上映会や展覧会の企画・実施、教育・研究活動の展開、国内外諸機</p>				

<p>の役割を積極的に果たすため、当該団体等との連絡会議を年に3回程度主宰したか。</p> <p>フィルムセンターが、より機動的かつ柔軟な運営を行うため、東京国立近代美術館の映画部門から、各館とならぶ独立した一館となることを引き続き検討したか。</p>	<p><b>日本映画情報システムの運営</b></p> <p>文化庁が実施する「日本映画情報システム」については、文化庁主導で民間へ委託することで運営管理を行っている。フィルムセンターとしては、平成25年度も公開データベースへの接続に関する協力を行った。平成24年度に旧作の遡及登録はほぼ終了し、平成25年度からは新作情報のアップデートに移行した。</p> <p><b>所蔵映画フィルム検索システムの拡充</b></p> <p>「所蔵映画フィルム検索システム」については、平成25年度中に日本劇映画のレコード337件を新たに公開し、公開件数は6,453件となった。</p> <p><b>映画関係団体等との連携</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・国内団体との連携は、共催巡回事業を通じて、一般社団法人コミュニティシネマセンターとの連携及び実施会場となった広島市映像文化ライブラリー、川崎市市民ミュージアムへの協力を行った。映画フィルムの貸与を通じては、日本映像学会、川喜多記念映画文化財団、神戸映画資料館、記録映画保存センター、せたがや文化振興財団等への協力を行った。また、特別映写観覧を通じては、日本映画撮影監督協会、日本アニメーション協会、早稲田大学演劇博物館、首都大学東京、筑波大学、明治大学、立教大学、日本大学、桜美林大学、北九州市立大学等への協力を行った。</li> <li>・海外団体との連携は、フォンダツィオーネ・チネテカ・ディ・ポローニャ(FIAF加盟機関)との共催事業において、番組編成、カタログ執筆、プリント提供等を通じて、協力を行った。映画フィルムの貸与を通じては、韓国映像資料院、英国映画協会サウスバンク、ドイツ・キネマテーク、ミュンヘン映画博物館(ドイツ)、ベルギー王立シネマテーク、オーストリア映画博物館、ニューヨーク近代美術館、シネマテーク・ケベコワーズ(カナダ。以上FIAF加盟機関)、国際交流基金マニラ日本文化センター(フィリピン)等への協力を行った。また、特別映写観覧を通じては、ベルリン自由大学(ドイツ)、国立臺南藝術大學(台湾)等への協力を行った。</li> <li>・日本映画・テレビ美術監督協会と連携して「日本映画美術遺産プロジェクト」を行い、映画美術資料のデジタル化と保存を進めている。また、シナリオ作家協会との協議により、同協会会員の旧蔵シナリオのフィルムセンターへの寄贈について検討が行われることとなった。</li> </ul> <p><b>フィルムセンターの東京国立近代美術館からの独立の検討</b></p> <p>平成25年度も館の内外で独立のための検討を行い、また、関連する資料作成や予算要求等を積極的に行ったが、必要な人員の確保が認められず、独立には至らなかった。</p>	<p>関との積極的な連携など、ナショナルセンターとして高く評価される。</p> <p>また、日本映画情報システム、所蔵映画フィルム検索システムの拡充を図り、情報収集・発信に努めており、映画関係団体や大学等との連携強化にも積極的に取り組んだ。</p> <p>東京国立近代美術館フィルムセンターの独立に関しては、かねてより検討されているが、我が国唯一のフィルムアーカイブとして国際的にも注目、期待されているナショナルセンターであることに鑑み、引き続き検討することを期待する。</p>
--	---	---

【(大項目)2】	業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置	【評定】			
		A			
		H23	H24	H26	H27
		A	A		

【(小項目)2-1】	業務の効率化の状況	【評定】			
		A			
		H23	H24	H26	H27
		A	A		
<p>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</p> <p>収蔵品の安全性の確保、快適な観覧環境の提供、入館者サービスの充実及びその他業務の質の向上を考慮しつつ、業務運営全般について、次の取組を行い、事務及び事業の改善を図る。</p> <p>1 一般管理費等の削減</p> <p>運営費交付金を充当して行う事業については、業務の効率化を進め、中期目標の期間中、一般管理費については15%以上、業務経費については5%以上の効率化を図る。ただし、美術作品購入費、美術作品修復費、土地借料等の特殊要因経費はその対象としない。また、人件費については次項に基づき取り組むこととし、本項の対象としない。</p> <p>具体的には下記の措置を講ずる。</p> <p>(ア)情報通信技術を活用した業務の効率化</p> <p>(イ)使用資源の削減</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・省エネルギー (エネルギー使用量を5年計画中に5%削減)</li> <li>・廃棄物減量化</li> <li>・リサイクルの推進</li> </ul> <p>3 契約の点検・見直し</p> <p>(1)業務運営の効率化を図るため、美術作品の購入など随意契約が真にやむを得ないものを除き、契約については引き続き競争性のあるものへ移行する。また、契約が一般競争入札等による場合であっても、真に競争性が確保されているか等の観点から点検し、見直しを行う。</p> <p>(2)施設の管理・運営(展示事業の企画等を除く。)については、東京国立近代美術館本館及び工芸館、東京国立近代美術館フィルムセンター及び国立新美術館で民間競争入札を実施している。</p> <p>(3)施設内店舗の賃貸については、現契約終了の同意を得たうえで、快適な観覧環境の提供及び入館者サービスの充実に留意し、より一層の鑑賞環境の向上と効率化のため、企画競争の導入を含めたより良い方途の検討を行い、順次措置する。</p> <p>4 保有資産の有効利用</p> <p>保有する美術館施設等の資産については、利用実態を把握し、保有の目的・必要性に鑑み、一層の有効利用に資するための方策を検討・実施する。</p>		<p>実績報告書等 参照箇所</p> <p>&lt; 実績報告書 &gt;</p> <p>P89～93</p> <p>業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置</p> <p>1 業務の効率化のための取り組み</p> <p>(1)各美術館の共通的な事務の一元化</p> <p>(2)使用資源の削減</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>省エネルギー(5年計画中に5%の削減)</li> <li>廃棄物減量化</li> <li>リサイクルの推進</li> </ul> <p>(4)民間委託の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>一般管理部門を含めた組織・業務の見直し</li> <li>と民間委託の推進</li> <li>広報・普及業務の民間委託の推進</li> </ul> <p>(5)競争入札の推進</p>			

評価基準	実績	分析・評価																																																																												
<p>収蔵品の安全性の確保、快適な観覧環境の提供、入館者へのサービスの充実及びその他業務の質の向上を考慮しつつ、業務運営全般について、次の取組を行い、事務及び事業の改善を図ったか。</p> <p>(一般管理費等の削減)            運営費交付金を充当して行う事業については、業務の効率化を進め、中期目標の期間中、一般管理費については15%以上、業務経費については5%以上の業務の効率化を図ったか。            具体的には下記の措置を講じたか。            (ア) 情報通信技術を活用した業務の効率化            (イ) 使用資源の削減            ・省エネルギー(エネルギー使用量を5年計画中に5%削減)            ・廃棄物減量化            ・リサイクルの推進</p>	<p>(ア) 引き続き理事長の指示による事務局長のトップマネジメントの下、各館の事務組織が有機的に連携し、効果的・効率的な業務を遂行するとともに、各館で行っていた出版物のうち年報について法人本部において一元的に実施した。また、法人内で採用しているVPN(Virtual Private Network:暗号化された通信網)を用いたグループウェア及びテレビ会議システム、特にテレビ会議システムについては、定期的な会議等に積極的に活用している。</p> <p>(イ) 使用資源の削減            使用量、使用料金の削減割合(対前年度比)</p> <table border="1" data-bbox="483 453 1747 979"> <thead> <tr> <th rowspan="2">館名</th> <th colspan="3">使用量</th> <th colspan="3">使用料金</th> </tr> <tr> <th>電気</th> <th>ガス</th> <th>合計</th> <th>電気</th> <th>ガス</th> <th>合計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東京国立近代美術館本館</td> <td>101.4%</td> <td>98.2%</td> <td>100.1%</td> <td>102.1%</td> <td>111.9%</td> <td>105.6%</td> </tr> <tr> <td>東京国立近代美術館工芸館</td> <td>96.2%</td> <td>-</td> <td>96.2%</td> <td>102.3%</td> <td>-</td> <td>102.3%</td> </tr> <tr> <td>東京国立近代美術館フィルムセンター</td> <td>82.1%</td> <td>-</td> <td>82.1%</td> <td>91.7%</td> <td>-</td> <td>91.7%</td> </tr> <tr> <td>東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館</td> <td>98.4%</td> <td>-</td> <td>98.4%</td> <td>125.2%</td> <td>-</td> <td>125.2%</td> </tr> <tr> <td>京都国立近代美術館</td> <td>95.8%</td> <td>91.1%</td> <td>94.9%</td> <td>109.5%</td> <td>102.1%</td> <td>108.2%</td> </tr> <tr> <td>国立西洋美術館</td> <td>94.6%</td> <td>94.9%</td> <td>94.7%</td> <td>106.2%</td> <td>107.4%</td> <td>106.7%</td> </tr> <tr> <td>国立国際美術館</td> <td>94.5%</td> <td>-</td> <td>94.5%</td> <td>118.7%</td> <td>-</td> <td>118.7%</td> </tr> <tr> <td>国立新美術館</td> <td>98.0%</td> <td>97.5%</td> <td>97.8%</td> <td>119.7%</td> <td>110.9%</td> <td>116.9%</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>96.4%</td> <td>96.6%</td> <td>96.4%</td> <td>113.8%</td> <td>109.7%</td> <td>112.7%</td> </tr> </tbody> </table> <p>東京国立近代美術館工芸館・フィルムセンター・フィルムセンター相模原分館及び国立国際美術館は、ガス設備を設置していない。            使用量の合計は、電気は一般電気事業者からの昼間買電を9.97GJ/千kWh、夜間買電を9.28GJ/千kWh、特定規模電気事業者からの買電を9.76GJ/千kWh、都市ガスを45GJ/千kWhに換算し得た熱量に0.0258kl/GJを乗じて得た原油換算量を、各施設の延床面積で除した値(原単位)を基礎とする(エネルギーの使用の合理化に関する法律施行規則に基づく。)</p> <p>省エネルギー(増減の理由等)            国立美術館においては、業務の特殊性から、展覧会場や美術作品収蔵庫において一定の温湿度維持等が必要とされ削減が難しいものの、引き続き、美術作品のない区画における設定温度の適格化(夏季28、冬季19)、夏季における服装の軽装化、不使用設備機器類のこまめな停止及び職員等の意識の啓発によりエネルギーの削減に努めた。</p>	館名	使用量			使用料金			電気	ガス	合計	電気	ガス	合計	東京国立近代美術館本館	101.4%	98.2%	100.1%	102.1%	111.9%	105.6%	東京国立近代美術館工芸館	96.2%	-	96.2%	102.3%	-	102.3%	東京国立近代美術館フィルムセンター	82.1%	-	82.1%	91.7%	-	91.7%	東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館	98.4%	-	98.4%	125.2%	-	125.2%	京都国立近代美術館	95.8%	91.1%	94.9%	109.5%	102.1%	108.2%	国立西洋美術館	94.6%	94.9%	94.7%	106.2%	107.4%	106.7%	国立国際美術館	94.5%	-	94.5%	118.7%	-	118.7%	国立新美術館	98.0%	97.5%	97.8%	119.7%	110.9%	116.9%	計	96.4%	96.6%	96.4%	113.8%	109.7%	112.7%	<p>情報通信技術を活用した業務の効率化をはじめ、民間委託の推進、契約の競争性・透明性の確保など、業務運営全般について業務の効率化の努力がみられる。</p> <p>グループウェア及びテレビ会議システムの利用により、情報の共有化、出張費等の削減、役職員の時間の有効利用など業務の効率化に努力している。            エネルギー削減のための諸施策の実行、省エネルギー計画に基づく施設設備改修及び節電対策により、省エネルギーの取組は実施されていると評価できる。            なお、電気・ガスの使用量及び使用料金の増加については、館ごとに合理的な説明がなされている。            また、廃棄物の減量化については、主に国立西洋美術館の展覧会の来館者数の増加、展覧会に使用した部材の廃棄に伴う廃棄物排出量の一時的な増加があったものの、ペーパーレス化、古紙の分別回収による再資源化などを行って減量化に努力している。しかし、一時的な要因とはいえ、館によっては、廃棄物の排出量や廃棄料金は増加していることから、今後も法人全体として</p>
館名	使用量			使用料金																																																																										
	電気	ガス	合計	電気	ガス	合計																																																																								
東京国立近代美術館本館	101.4%	98.2%	100.1%	102.1%	111.9%	105.6%																																																																								
東京国立近代美術館工芸館	96.2%	-	96.2%	102.3%	-	102.3%																																																																								
東京国立近代美術館フィルムセンター	82.1%	-	82.1%	91.7%	-	91.7%																																																																								
東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館	98.4%	-	98.4%	125.2%	-	125.2%																																																																								
京都国立近代美術館	95.8%	91.1%	94.9%	109.5%	102.1%	108.2%																																																																								
国立西洋美術館	94.6%	94.9%	94.7%	106.2%	107.4%	106.7%																																																																								
国立国際美術館	94.5%	-	94.5%	118.7%	-	118.7%																																																																								
国立新美術館	98.0%	97.5%	97.8%	119.7%	110.9%	116.9%																																																																								
計	96.4%	96.6%	96.4%	113.8%	109.7%	112.7%																																																																								

	<p>また、エネルギーの使用の合理化に関する法律に基づき、エネルギー管理統括者の元で、省エネルギー計画策定等を行い、各館において可能な箇所から、施設設備の改修を行い、省エネルギー効果を高めた。特に、国立新美術館においては、引き続き、BEMS(Building and Energy Management System)により、詳細なエネルギーの使用量と室内環境の把握を行い、その情報を定例的に開催する省エネルギー推進会議へ報告し、省エネルギー対策に生かすなどの取り組みを行っている。</p> <p>更に、平成 24 年度に引き続いて「2013 年度夏季の電力需給対策について(25 文科施第 47 号)」及び「2013 年度冬季の電力需給対策について(25 文科施第 318 号)」を踏まえた節電対策を施した。具体的内容は以下のとおり。</p> <p>(1) 設備・機器等の使用抑制</p> <p>    空調に係る節電</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・部分的な運用、時間的な運用など柔軟に対応</li> <li>・設定温度夏季 28 、冬季 19 を徹底(展示室及び収蔵庫等を除く)</li> <li>・節電にも役立つ服装の励行</li> <li>・ブラインドを調節し、夏季は直射日光を遮光、冬季は暖気を確保</li> <li>・空調機のフィルター清掃</li> </ul> <p>    照明に係る節電</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・執務室の照明は、最低基準の照度を確保しつつ大幅削減</li> <li>・廊下、ロビー、階段等は、安全確保を優先し極力消灯</li> <li>・昼休みの消灯を徹底</li> <li>・白熱電球の原則使用禁止(代替品のない場合を除く)</li> </ul> <p>    エレベータ、エスカレータ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・必要最小限度の運転、階段利用の促進</li> </ul> <p>    衛生設備に係る節電</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・給湯室、洗面台、電気温水器等の利用時間、設定温度の変更</li> <li>・自動販売機の消灯、設定温度の変更</li> <li>・暖房便座、温水洗浄の停止</li> <li>・便所温風器(手乾かし器)の停止</li> </ul> <p>    OA 機器等</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・一定期間使用しない場合の電源の切断</li> <li>・節電モードでの使用を徹底</li> <li>・プリンタ、コピー機等の使用制限</li> </ul> <p>    その他</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ノー残業デーの推進</li> <li>・冷蔵庫、電気ポット等、家電機器の使用制限</li> <li>・冬季のハロゲンヒーター等の暖房機器の個人使用の禁止</li> </ul>	<p>継続的な減量化の努力が必要である。</p> <p>なお、館ごとの廃棄物の排出量及び廃棄料金の増加については、おおむね合理的な説明がなされている。</p> <p>エネルギー使用量については、法人全体で 3.6%減少したことは評価でき、一方、使用料金は供給会社の値上げによって 12.7%増加している。引き続き法人全体として継続的な減量化の努力を求めたい。</p>
--	--	---

- ・各テナントへの節電の協力要請
- ・サーバ室等個別空調機器の適切な温度設定
- (2) 夏季休暇等の確実な取得
  - 業務効率の維持等に留意しつつ、次の取組を推進
  - ・夏季休暇の完全取得、夏季における年次休暇の計画的長期取得
- (3) その他
  - ・超過勤務の一層の縮減
  - ・中長期の節電にも資する設備の設置等の検討及び着手
  - ・夏季及び冬期における全館一斉休業日の実施

東京国立近代美術館本館の電気使用量は、平成 24 年度がリニューアル工事により、2 ヶ月半程度の期間休館をしていたため、電気使用量が少なかったことにより、前年度比で増加している。

東京国立近代美術館フィルムセンターの電気使用量の減少は、配管等改修工事により、8 月 8 日～10 月 30 日までの間、大ホール及び小ホールが休室していたためである。

なお、法人全体ではエネルギー使用量は 3.6%減少したが、使用料金は供給各社の値上げの影響により 12.7%の増加となっている。

排出量、廃棄料金の削減割合(対前年度比)

館名	排出量			廃棄料金	
	一般廃棄物	産業廃棄物	合計	一般廃棄物	産業廃棄物
東京国立近代美術館本館	94.0%	70.3%	84.5%	94.0%	70.3%
東京国立近代美術館工芸館	79.9%	113.8%	84.7%	79.9%	113.8%
東京国立近代美術館フィルムセンター	111.8%	485.1%	330.3%	221.8%	278.8%
京都国立近代美術館	81.1%	93.3%	86.7%	-	60.7%
国立西洋美術館	134.6%	73.6%	111.2%	131.2%	72.4%
国立国際美術館	74.7%	27.7%	61.6%	79.8%	24.4%
国立新美術館	92.3%	160.4%	108.2%	88.1%	123.7%
計	100.1%	152.7%	116.4%	98.8%	127.0%

京都国立近代美術館は、一般廃棄物の処理を清掃業者に一括して委託しているため、廃棄料金が算出できない。

東京国立近代美術館フィルムセンターには、東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館を含む。

廃棄物減量化(増減の理由)

国立美術館においては、開館日数や来館者数の増減による影響など、業務の性質上、廃棄物の計画的な削減が難しいものの、引き続き、事務・研究部門における電子メール、グループウェアの活用による通知文書の発信やサーバ保存文書の共同利用によるペーパーレス化、両面印刷の促進等による用紙の節減に努めるとともに、古紙の分別回収による再資源化を進めることにより、廃棄物の削減を図った。

廃棄物の排出量及び廃棄料金の増加は、来館者数の増加及び展覧会に使用した部材の廃棄に伴う増加といった一時的な要因によるものが主である。

東京国立近代美術館工芸館の産業廃棄物の排出量の増加は、虫害対策により1ヶ月半程度の長期休館を行い、その期間中に館内廃棄物の整理を行ったためである。

東京国立近代美術館フィルムセンター(相模原分館を含む)の一般廃棄物及び産業廃棄物の排出量の増加は、施設整備費補助金によって行われた配管等改修工事及び相模原分館収蔵庫増築等工事の影響により、一時的に廃棄物が増加したためである。

国立国際美術館の一般廃棄物の排出量の減少は、平成25年度より大阪市では資源化可能な紙類を一般廃棄物で排出することが禁止されたためである。産業廃棄物の排出量に比し廃棄料金が高価となっているのは、平成25年度より大阪市による一般廃棄物の回収が行われなくなったことにより、民間業者へ委託せざるを得なくなったためである。また、同館の産業廃棄物の排出量及び廃棄料金は、平成24年に台座の処分を行い、一時的に排出量が増加したため、前年度比で減少している。

国立新美術館の産業廃棄物の排出量及び廃棄料金の増加は、公募展展示室の蛍光灯が、メーカーの保守期間に達し、交換を実施したためである。

リサイクルの推進

前年度に引き続き、古紙含有率100%のコピー用紙の利用、廃棄物の分別、OA機器等トナーカートリッジのリサイクルによる再生使用を行い、リサイクルの推進に努めた。

【一般管理費の削減状況】

一般管理費の削減は順調に進められたか。

【一般管理費の削減状況】

(単位:千円)

	H22 年度実績	H25 年度実績	削減割合
一般管理費	695,969	712,680	2.40%

特記事項(増加の理由)

国立西洋美術館新館の屋上防水工事等の緊急を要する工事費用のため。

一般管理費については、前年度と比べて削減割合が悪化しているが、これは、国立西洋美術館新館の屋上防水工事等の緊急を要する工事費用のためである。引き続き継続的な削減の努力が必要である。

【事業費の削減状況】

事業費の削減は順調に進められたか。

契約の点検・見直し

(1) 業務運営の効率化を図るため、美術作品の購入など随意契約が真にやむを得ないものを除き、契約については引き続き競争性のあるものへ移行したか。また、契約が一般競争入札等による場合であっても、真に競争性が確保されているか等の観点から点検し、見直しを行ったか。

(2) 施設の管理・運営(展示事業の企画等を除く。)については、既に東京国立近代美術館(本館及び工芸館)で実施している民間競争入札の検証結果等を踏まえ、当該館における対象範囲の拡大や他施設への導入に取り組んだか。

(3) 施設内店舗の賃貸については、現契約終了の同意を得たうえで、快適な観覧環境の提供及び入館者サービスの充実に留意し、より一層の鑑賞環境の向

【事業費の削減状況】

(単位:千円)

	H22 年度実績	H25 年度実績	削減割合
業務経費	3,201,573	2,558,602	20.08%

**一般管理部門を含めた組織・業務の見直しと民間委託の推進**

次のとおり民間委託を行い業務の効率化を図った。

(ア) 会場管理業務、(イ) 設備管理業務、(ウ) 清掃業務、(エ) 保安警備業務、(オ) 機械警備業務、(カ) 収入金等集配業務、(キ) レストラン運営業務、(ク) アートライブラリ運営業務、(ケ) ミュージアムショップ運営業務、(コ) 美術情報システム等運営支援業務、(サ) ホームページサーバ運用管理業務、(シ) 電話交換業務、(ス) 展覧会アンケート実施業務、(セ) 省エネルギー対策支援業務、(ソ) 展覧会情報収集業務

「競争の導入による公共サービスの改革に関する法律」に則り民間競争入札を行った東京国立近代美術館本館及び工芸館の管理運営業務(展示事業の企画等を除く。以下同じ。)並びに東京国立近代美術館フィルムセンターの管理運営業務、国立新美術館の管理運営業務は、契約事務の軽減、統括管理業務導入による事務と委託業務の効率化、民間事業者の相互連携の推進による適確な業務の実施とともに、それぞれの業務の専門的知識を活かした適確な提案による施設設備維持管理と観覧環境の向上に寄与した。

**広報・普及業務の民間委託の推進**

次のとおり民間委託を行い業務の効率化を図った。

(ア) 情報案内業務、(イ) 広報物等発送業務、(ウ) 交通広告等掲載、(エ) ホームページ改訂・更新業務、(オ) インターネット検索サイト、(カ) ラジオCM等を利用した総合的な広報宣伝業務、(キ) 講堂音響設備オペレーティング業務

**競争入札の推進**

**一般競争入札の実績**

ア 契約件数及び契約金額(少額随契を除く) 138 件、9,955,480,873 円

イ 契約種別毎の年間契約数

競争性のある契約 65 件(47.1%)、2,862,039,650 円(28.7%)

【内訳】

- ・一般競争入札 58 件、2,631,379,803 円
- ・企画競争、公募 6 件、228,499,847 円
- ・不落随契 1 件、2,160,000 円

事業費の削減は順調に進められている。

東京国立近代美術館、フィルムセンター、国立新美術館の管理運営業務を民間競争入札の導入により効率化を図るなど、各業務について民間委託を推進している。

<p>上と効率化のため、企画競争の導入を含めたより良い方途の検討を行い、順次措置したか。</p> <p>【契約の競争性、透明性の確保】</p> <p>契約方式等、契約に係る規程類について、整備内容や運用は適切か。</p> <p>契約事務手続に係る執行体制や審査体制について、整備・執行等は適切か。</p>	<p>競争性のない随意契約 73 件(52.9%)、7,093,441,223 円(71.3%)</p> <p>【内訳】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・同一所管公益法人等 2 件、4,780,118,135 円</li> <li>・同一所管公益法人等以外の法人等 71 件、2,313,323,088 円</li> </ul> <p>(うち美術作品の購入に関する随意契約 33 件、1,859,957,316 円)</p> <p>【契約に係る規程類の整備及び運用状況】</p> <p>契約に係る規程類等</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>独立行政法人国立美術館会計規則</li> <li>独立行政法人国立美術館会計規程の特例を定める規程</li> <li>独立行政法人国立美術館契約事務取扱細則</li> <li>独立行政法人国立美術館契約公表基準</li> <li>独立行政法人国立美術館食堂及び店舗貸付取扱要領</li> <li>独立行政法人国立美術館における「企画競争・公募」並びに「総合評価落札方式」の取扱いについて</li> </ul> <p>国の契約基準と異なる規程の有無</p> <p>「独立行政法人等における契約の適正化について(通知)」(平成 20 年 12 月 3 日付け 20 文科会第 583 号)を受け、国と同様の契約基準としており、国と異なる規程はない。</p> <p>【執行体制】</p> <p>法人本部:室長1名、会計担当係 係長1名、主任・係員2名</p> <p>東京国立近代美術館:室長1名、会計担当係 係長1名、主任・係員2名(法人本部職員兼務)</p> <p>京都国立近代美術館:会計担当係 係長1名、主任・係員2名</p> <p>国立西洋美術館:会計担当係 係長1名、主任・係員3名</p> <p>国立国際美術館:会計担当係 係長1名、主任・係員2名</p> <p>国立新美術館:会計担当係 係長1名、主任・係員1名</p> <p>【審査体制】</p> <p>各館に分任契約担当役を設置し、契約手続等が会計規則等に則り適正に行われているかの審査を行い、契約を締結する体制をとっている。また、随意契約の場合は、当該契約を随意契約とすることが適正かを十分に精査した上で、契約を行うよう本部からの指導の徹底を行っている。</p> <p>各館での契約手続等が適正に行われているかについては、監事監査及び内部監査においても確認を行っている。</p> <p>なお、契約監視委員会において、監事及び外部有識者の意見を踏まえ、契約の点検見直しを行っている。</p>	<p>契約に係る規程類の整備は適切と判断される。</p> <p>契約事務手続に係る執行体制や審査体制は整備されている。また、監事監査及び内部監査においても確認を行うとともに契約監視委員会による契約の点検見直しが行われており、特段の問題はない。</p>
--	--	---

【契約監視委員会の審議状況】

実施状況

実施回数1回(平成 26 年 2 月 19 日)

審議内容

- ・平成 24 年度契約監視委員会後の契約について
- ・平成 25 年契約点検結果について
- ・平成 26 年契約事前点検結果について
- ・平成 25 年における公益法人等への会費の支出状況について

指摘事項

特になし

【随意契約等見直し計画】

「随意契約等見直し計画」の実施・進捗状況や目標達成に向けた具体的取組状況は適切か。

【随意契約等見直し計画の実績と具体的取組】

	平成 20 年度実績		見直し計画 (H22 年 4 月公表)		平成 25 年度実績		との比較増減 (見直し計画の進捗状況)	
	件数	金額 (千円)	件数	金額 (千円)	件数	金額 (千円)	件数	金額 (千円)
競争性のある契約	82	2,430,355	101	2,639,329	65	2,862,040	36	222,711
競争入札	81	2,426,890	98	2,623,745	58	2,631,380	40	7,635
企画競争、公募等	1	3,465	3	15,584	7	230,660	4	215,076
競争性のない随意契約	119	9,955,158	100	9,746,184	73	7,093,441	27	2,652,743
合計	201	12,385,513	201	12,385,513	138	9,955,481	63	2,430,032

【原因、改善方策】

競争性のない随意契約に関して、平成 25 年度実績が見直し計画に比し、件数及び金額ともに減少している。引き続き少額随契又は真にやむを得ない場合を除き競争性の確保に努めるものとする。

法人の性質上、随意契約によらざるを得ない契約を除き、「随意契約等見直し計画」の実施・進捗状況等は適切と判断される。  
また、随意契約に係る契約情報は公開されている。

【個々の契約の競争性、透明性の確保】

再委託の必要性等について、契約の競争性、透明性の確保の観点から適切か。

一般競争入札等における一者応札・応募の状況はどうか。その原因について適切に検証されているか。また検証結果を踏まえた改善方針は妥当か。

【再委託の有無と適切性】

無し

【一者応札・応募の状況】

摘要	平成 20 年度実績		平成 25 年度実績		と の比較増減	
	件数	金額 (千円)	件数	金額 (千円)	件数	金額 (千円)
競争性のある契約	82	2,430,355	65	2,862,040	17	431,685
うち、一者応札・応募 となった契約	29	1,404,497	24	1,277,548	5	126,949
一般競争契約	29	1,404,497	18	1,049,048	11	355,449
指名競争契約	0	0	0	0	0	0
企画競争	0	0	3	112,506	3	112,506
公募	0	0	3	115,994	3	115,994

【原因、改善方針】

一者応札・応募となった契約は、平成 20 年度に対し平成 25 年度は 5 件減少している。一般競争契約は 11 件減少し、企画競争 3 件及び公募 3 件が増加している。引き続き、HP を活用した公告及び公告期間の 20 日以上確保など、平成 21 年度に定めた「一者応札・応募に係る改善方針について」の実施により、一者応札・応募の解消に努める。

「一者応札・応募に係る改善方針について」は以下のとおり。

- (1) 競争参加資格要件については、調達目的を確実に達成するための必要最小限度のものとするを徹底する。
- (2) 一者応札、一者応募となっている契約については、業務等の内容に応じ、早期執行に努めるとともに、契約（落札決定）後の準備期間を考慮した上で入札時期を設定するなど、履行期間及び準備期間の十分な確保を図る。
- (3) 現在、国の規則に準じて 10 日以上としている公告期間について、過去に一者応札・一者応募となった契約については、原則として 20 日以上公告期間を確保することとする。
- (4) 物品・役務の調達については、入札公告等の時点で調達内容が把握できるよう、原則として仕様書等についてもホームページから閲覧可能とし、競争参加手続の効率化に努めることとする。

再委託はない。

一般競争入札等における一者応札・応募となった契約は減少している。また、一者応札・応募に係る改善方針は妥当と認められる。

<p>【関連法人】 法人の特定の業務を独占的に受託している関連法人について、当該法人と関連法人との関係が具体的に明らかにされているか。</p> <p>当該関連法人との業務委託の妥当性についての評価が行われているか。</p> <p>関連法人に対する出資、出えん、負担金等(以下「出資等」という。)について、法人の政策目的を踏まえた出資等の必要性の評価が行われているか。</p> <p>【実物資産】 (保有資産全般の見直し) 実物資産について、保有の必要性、資産規模の適切性、有効活用の可能性等の観点からの法人における見直し状況及び結果は適切か。</p> <p>見直しの結果、処分等又は有効活用を行うものとな</p>	<p>【一般競争入札における制限的な応札条件の有無と適切性】 業務の特殊性に応じて、応札条件に制限を設けることがある。応札条件については契約監視委員会に諮り、特に問題ない旨の意見を得ている。</p> <p>【関連法人の有無】 無し</p> <p>【当該法人との関係】 無し</p> <p>【当該法人に対する業務委託の必要性、契約金額の妥当性】 無し</p> <p>【委託先の収支に占める再委託費の割合】 無し</p> <p>【当該法人への出資等の必要性】</p> <p>【実物資産の保有状況】 実物資産の名称と内容、規模 有形固定資産 171,182 百万円 (内訳) 建物 53,075 百万円 構築物 988 百万円</p> <table border="1" data-bbox="479 1254 1274 1461"> <thead> <tr> <th>建物名称</th> <th>延面積 (m<sup>2</sup>)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東京国立近代美術館</td> <td>17,192</td> </tr> <tr> <td>東京国立近代美術館工芸館</td> <td>1,867</td> </tr> <tr> <td>東京国立近代美術館フィルムセンター</td> <td>6,912</td> </tr> <tr> <td>東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館</td> <td>9,576</td> </tr> </tbody> </table>	建物名称	延面積 (m <sup>2</sup> )	東京国立近代美術館	17,192	東京国立近代美術館工芸館	1,867	東京国立近代美術館フィルムセンター	6,912	東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館	9,576	<p>関連法人はない。</p> <p>実物資産の保有の必要性、資産規模の適切性、有効活用の可能性等については、減損もなく、特に指摘すべき点はない。また、資産除去債務については、財務諸表の注記事項において適切に開示されており、特に問題はない。</p> <p>見直しの対象となった保有資産は</p>
建物名称	延面積 (m <sup>2</sup> )											
東京国立近代美術館	17,192											
東京国立近代美術館工芸館	1,867											
東京国立近代美術館フィルムセンター	6,912											
東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館	9,576											

った場合は、その法人の取組状況や進捗状況等は適切か。

京都国立近代美術館	9,762
国立西洋美術館	17,369
国立国際美術館	13,487
国立新美術館	49,710

土地 49,972 百万円

敷地名	面積 (㎡)
東京国立近代美術館フィルムセンター敷地	722
東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館敷地	14,997
京都国立近代美術館敷地	5,001
国立西洋美術館敷地	2,208
国立新美術館敷地	20,514

機械装置 274 百万円、車両運搬具 1 百万円、工具器具備品 661 百万円、美術品・収蔵品 66,208 百万円

無形固定資産 6 百万円

ソフトウェア 3 百万円、電話加入権 3 百万円

・職員宿舎は保有していない。

保有の必要性(法人の任務・設置目的との整合性、任務を遂行する手段としての有用性・有効性等)

独立行政法人国立美術館は、東京国立近代美術館(本館・工芸館・フィルムセンター)、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館及び国立新美術館の五館で組織されているが、いずれの美術館も、国の文化政策の必要性から、その目的・名称・機能・施設・建設場所・運営形態等を国において検討し、国自らが建設し、独立行政法人国立美術館に現物出資されたものであり、その美術館が建設された意義、建設され場所等を最大限に尊重し、法人の目的を達成するためには、五館それぞれが設置された場所において設置目的に相応しい特色ある活動を展開することが必要不可欠である。

有効活用の可能性等の多寡

遊休している建物及び土地等の固定資産はない。

見直し状況及びその結果

整理合理化計画等において、個別に指摘された資産の見直しはない。また、監事監査において指摘された資産の見直しはない。

なく、処分等を行う必要はない。

<p>「勧告の方向性」や「独立行政法人の事務・事業の見直しの基本方針」、「独立行政法人の職員宿舎の見直し計画」、「独立行政法人の職員宿舎の見直しに関する実施計画」等の政府方針を踏まえて、宿舎戸数、使用料の見直し、廃止等とされた実物資産について、法人の見直しが適時適切に実施されているか(取組状況や進捗状況等は適切か)。</p> <p>(資産の運用・管理)</p> <p>実物資産について、利用状況が把握され、必要性等が検証されているか。</p> <p>実物資産の管理の効率化及び自己収入の向上に係る法人の取組は適切か。</p> <p>【金融資産】 (保有資産全般の見直し)</p> <p>金融資産について、保有の必要性、事務・事業の目的及び内容に照らした資産規模は適切か。</p>	<p>処分又は有効活用等の取組状況 / 進捗状況 該当なし</p> <p>政府方針等により、処分等することとされた実物資産についての処分等の取組状況 / 進捗状況 該当なし</p> <p>基本方針において既に個別に講ずべきとされた施設等以外の建物、土地等の資産の利用実態の把握状況や利用実態を踏まえた保有の必要性等の検証状況 5 館とも年間を通して、展覧会の開催、美術作品(映画フィルムを含む)の収集保管(国立新美術館を除く)、調査研究及び教育普及事業を実施しており、建物、土地等の保有が必要である。</p> <p>見直し実施計画で廃止等の方針が明らかにされている宿舎以外の宿舎及び職員の福利厚生を目的とした施設について、法人の自主的な保有の見直し及び有効活用の取組状況 該当なし</p> <p>実物資産の管理の効率化及び自己収入の向上に係る法人の取組 東京国立近代美術館本館及び工芸館の管理・運営業務については、平成 21 年度より公共サービス改革法に基づく民間競争入札を導入している。他館への導入等については、平成 23 年度からの中期計画で「既の実施している東京国立近代美術館での検証結果等を踏まえ、当該館における対象範囲の拡大や他施設への導入に取り組む。」ことを明記し、平成 25 年度より国立新美術館においても、公共サービス改革法に基づく民間競争入札を導入している。</p> <p>(平成 25 年度に実施した業務の概要及び入札等の対象範囲)</p> <p>東京国立近代美術館本館及び工芸館の管理・運営・警備業務 東京国立近代美術館フィルムセンターの管理・運営業務 国立新美術館の管理・運営業務</p> <p>【金融資産の保有状況】 金融資産の名称と内容、規模 現金及び預金(1,955 百万円)</p> <p>保有の必要性(事業目的を遂行する手段としての有用性・有効性) 平成 25 年度末における未払金(1,667 百万円)の支払い等</p>	<p>「勧告の方向性」や「独立行政法人の事務・事業の見直しの基本方針」等の政府方針において処分等することとされた実物資産はない。</p> <p>独立行政法人国立美術館の保有するすべての建物、土地等は有効に活用されており、保有の必要性があると認められる。</p> <p>実物資産の管理の効率化については、民間競争入札を実施している美術館での対象範囲の拡大及び他館での新規導入が行われており、適切に行われている。</p> <p>金融資産の保有の必要性、事務・事業の目的及び内容に照らした資産規模については、特に指摘すべき</p>
--	--	--

<p>資産の売却や国庫納付等を行うものとなった場合は、その法人の取組状況や進捗状況等は適切か。</p> <p>(資産の運用・管理) 資金の運用状況は適切か。</p> <p>資金の運用体制の整備状況は適切か。</p> <p>資金の性格、運用方針等の設定主体及び規定内容を踏まえて、法人の責任が十分に分析されているか。</p> <p>(債権の管理等) 貸付金、未収金等の債権について、回収計画が策定されているか。回収計画が策定されていない場合、その理由は妥当か。</p>	<p>資産の売却や国庫納付等を行うものとなった金融資産の有無 利益剰余金は独立行政法人通則法第 44 条第 1 項による積立金として計上することとしており、中期目標期間終了後に、自己収入により取得した固定資産の価格相当額及びリース損益等影響額を除いた額を国庫に返納することとなっている。</p> <p>金融資産の売却や国庫納付等の取組状況 / 進捗状況 中期目標期間終了後、文部科学大臣との協議のうえ国庫納付額を決定し、速やかに国庫納付を行う。</p> <p>【資金運用の実績】 当法人の金融資産は現金及び預金のみであり、国債や有価証券等の運用実績はない。</p> <p>【資金運用の基本的方針(具体的な投資行動の意志決定主体、運用に係る主務大臣・法人・運用委託先間の責任分担の考え方等)の有無とその内容】 該当なし</p> <p>【資産構成及び運用実績を評価するための基準の有無とその内容】 該当なし</p> <p>【資金の運用体制の整備状況】 該当なし</p> <p>【資金の運用に関する法人の責任の分析状況】 該当なし</p> <p>【貸付金・未収金等の債券と回収の実績】 平成 26 年 3 月 31 日現在の債権は、未収入金 788 百万円、立替金 4 百万円となっている。 なお、未収入金は当期に工事が完了した施設整備費補助金の未収入(776 百万円)が主な要因である。</p>	<p>点はない。</p> <p>資産の売却や国庫納付等を行う金融資産はない。</p> <p>資金は現金及び預金のみであり、資金の運用状況及び運用体制の整備状況について特段の問題はないと判断している。</p> <p>未収入金はその要因が明確であり、回収可能性に問題はない。また、貸付金はない。</p>
---	---	---

<p>回収計画の実施状況は適切か。 ) 貸倒懸念債権・破産更生債権等の金額やその貸付金等残高に占める割合が増加している場合、 ) 計画と実績に差がある場合の要因分析が行われているか。</p>	<p>【回収計画の有無とその内容(無い場合は、その理由)】 当法人は資金等の貸付を行っておらず、中期目標期間終了後に利益剰余金を国庫納付するため、回収計画及び運用方針は制定していない。</p>	
<p>回収状況等を踏まえ回収計画の見直しの必要性等の検討が行われているか。</p>	<p>【回収計画の実施状況】 該当なし</p>	
	<p>【貸付の審査及び回収率の向上に向けた取組】 該当なし</p>	
	<p>【貸倒懸念債権・破産更生債権等の金額 / 貸付金等残高に占める割合】 該当なし</p>	
	<p>【回収計画の見直しの必要性等の検討の有無とその内容】 該当なし</p>	
<p>【知的財産等】 (保有資産全般の見直し) 特許権等の知的財産について、法人における保有の必要性の検討状況は適切か。</p>	<p>【知的財産の保有の有無及びその保有の必要性の検討状況】 現在保有している特許権等の知的財産はない。</p>	
<p>検討の結果、知的財産の整理等を行うことになった場合には、その法人の取組状況や進捗状況等は適切か。</p>	<p>【知的財産の整理等を行うことになった場合には、その法人の取組状況 / 進捗状況】 該当なし</p>	
<p>(資産の運用・管理)</p>	<p>【出願に関する方針の有無】 該当なし</p> <p>【出願の是非を審査する体制整備状況】 該当なし</p> <p>【活用に関する方針・目標の有無】 該当なし</p>	<p>現在保有している知的財産はない。</p>

<p>特許権等の知的財産について、特許出願や知的財産活用に関する方針の策定状況や体制の整備状況は適切か。</p> <p>実施許諾に至っていない知的財産の活用を推進するための取組は適切か。</p>	<p>【知的財産の活用・管理のための組織体制の整備状況】</p> <p>中期目標に定められた、当法人が実施する事業において、知的財産を出願する必要があるものは想定されていない。今後、美術館活動の結果として特許取得が可能となるものが創出された場合は、その案件ごとに検討する。</p> <p>【実施許諾に至っていない知的財産について】</p> <p>該当なし</p> <p>原因・理由 該当なし</p> <p>実施許諾の可能性 該当なし</p> <p>維持経費等を踏まえた保有の必要性 該当なし</p> <p>保有の見直しの検討・取組状況 該当なし</p> <p>活用を推進するための取組 該当なし</p>	
---	---	--

【(小項目)2 - 2】	給与水準の適正化等	【評定】											
<p>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</p> <p>国家公務員の給与水準とともに業務の特殊性を十分考慮し、対国家公務員指数の抑制を図り、各年度における対年齢・地域・学歴勘案の指数が引き続き100以下となるように取り組むとともに、対年齢勘案の指数についても100以下となるように努め、その結果について検証を行い、検証結果や取組状況を公表する。</p> <p>また、これまでの人件費改革の取組を平成23年度まで継続するとともに、平成24年度以降は、今後進められる独立行政法人制度の抜本的な見直しを踏まえ、取り組むこととする。ただし、人事院勧告を踏まえた給与改定分及び競争的資金により雇用される任期付職員に係る人件費については本人件費改革の削減対象より除く。</p> <p>なお、削減対象の「人件費」の範囲は、各年度中に支給した報酬(給与)、賞与、その他の手当の合計額とし、退職手当、福利厚生費は含まない。</p>		<p style="text-align: center;">A</p> <table border="1" data-bbox="1601 263 2190 343"> <tr> <td>H23</td> <td>H24</td> <td>H26</td> <td>H27</td> </tr> <tr> <td>A</td> <td>A</td> <td></td> <td></td> </tr> </table> <p>実績報告書等 参照箇所</p> <p>&lt;実績報告書&gt; P94～95 4 人件費の抑制、給与体系の見直し 人件費決算 給与体系の見直し</p>				H23	H24	H26	H27	A	A		
H23	H24	H26	H27										
A	A												
評価基準	実績	分析・評価											
<p>国家公務員の給与水準とともに業務の特殊性を十分考慮し、対国家公務員指数の抑制を図り、各年度における対年齢・地域・学歴勘案の指数が引き続き100以下となるように取り組むとともに、対年齢勘案の指数についても100以下となるように努め、その結果について検証を行い、検証結果や取組状況を公表したか。</p> <p>また、これまでの人件費改革の取組を平成23年度まで継続するとともに、平成24年度以降は、今後進められる独立行政法人制度の抜本的な見直しを踏まえ、取り組むこととしたか。</p> <p>【給与水準】</p> <p>給与水準の高い理由及び講ずる措置(法人の設定する目標水準を含む)が、国民に対して納得の得られるものとなっているか。</p> <p>法人の給与水準自体が社会的な理解の得られる水準となっているか。</p>	<p>【ラスパイレス指数(平成25年度実績)】</p> <p>【事務】 対国家公務員・・・100.1</p> <p>【研究】 対国家公務員・・・96.8</p> <p>事務職員の給与水準については、年齢のみを勘案した対国家公務員指数は100.1と国家公務員を上回っているが、地域勘案の指数は90.7とな</p>	<p>給与水準は国家公務員に準じており、結果的に社会一般の情勢に適合する選択をしており、ラスパイレス指数に沿って見ても、適切な給与水準であると評価できる。</p> <p>法人ホームページにおいても取り組み状況が公表されており、適正に実施されていると評価できる。</p> <p>また、過年度から人件費の削減は順調に実施されており、引き続き、適正な水準の維持に努めていくべきである。</p> <p>ラスパイレス指数に関しては100.1となっているが、地域勘案指数は90.7であり、適切な水準である。</p> <p>ラスパイレス指数を踏まえると、法人の給与水準は、社会的な理解の得られる水準となっていると考えられる。</p>											

<p>国の財政支出割合の大きい法人及び累積欠損金のある法人について、国の財政支出規模や累積欠損の状況を踏まえた給与水準の適切性に関して検証されているか。</p> <p>【諸手当・法定外福利費】 法人の福利厚生費について、法人の事務・事業の公共性、業務運営の効率性及び国民の信頼確保の観点から、必要な見直しが行われているか。</p> <p>【会費】 ・法人の目的・事業に照らし、会費を支出しなければならない必要性が真にあるか(特に、長期間にわたって継続してきたもの、多額のもの)。 ・会費の支出に見合った便宜が与えられているか、また、金額・口座・種別等が必要最低限のものとなっているか(複数の事業所から同一の公益法人等に対して支出されている会費については集約できないか)。 ・監事は、会費の支出について、本見直し方針の趣旨を踏まえ十分な精査を行っているか。 ・公益法人等に対し会費(年 10 万円未満のものを除く。)を支出した場合には、四半期ごとに支出先、名目・趣旨、支出金額等の事項を公表しているか。</p>	<p>り国家公務員を下回る。本部事務局及び5館の美術館のうちの3館が東京都特別区内に所在し、1級地に勤務する事務・技術職員の割合が国を大きく上回る(国立美術館:73.5%、国:30.0%)ため、年齢のみを勘案した指数においては国家公務員を上回ったものと考えられる。 国の勤務地の比率については、「平成25年国家公務員給与等実態調査」を用いて算出</p> <p>【福利厚生費の見直し状況】 支出実績は、健康診断経費、産業医委託経費など必要最小限であるので、見直す必要はない。</p> <p>【会費の見直し状況】 特例財団法人日本博物館協会に対し、東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館及び国立新美術館から会費を支出している。当該協会では国内外の博物館等に関する調査研究を行っており、会議等への参加による情報収集及び意見交換によって業務の質の向上に資するものであり、会費の支出が必要である。</p> <p>【監事による会費支出の精査】 平成 25 年度契約監視委員会において、日本博物館協会への会費支出の点検を行った。</p> <p>【公益法人等に対する会費支出の公表】 公益法人等に対する会費支出については、四半期ごとにHPで公表している。</p>	<p>業務運営の効率性の上からも必要な範囲と考える。</p> <p>会費は業務の質の向上に資する必要最低限のものと認められる。</p> <p>定期監事監査にて、前年度における公益法人等への会費支出状況について精査を行っており、適切と認められる。</p> <p>国立美術館のウェブサイトにて、公益法人等への会費支出状況の掲載、四半期ごとの更新を行っており、適切と認められる。</p>
--	---	--

【(小項目)2 - 3】	内部統制	【評定】			
<p>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</p> <p>5 内部統制・ガバナンスの強化</p> <p>(1) 組織を構成する人員・美術館施設及び国から交付される運営費交付金等を有効に活用し、常に健全で適正かつ堅実な管理運営環境を確保できるよう、理事長のマネジメントの強化や監査機能の充実について検討を行いつつ、その結果を逐次運営管理に反映させるなど内部統制の充実・強化を図る。</p> <p>(2) 外部有識者で構成する外部評価委員会を年1回以上開催し、当該委員会において、国立美術館の目標等を踏まえ、年度ごとに業務の実績に関する評価を実施する。また、評価結果については、公表するとともに、その結果を組織、事務、事業等の改善に反映させる。</p>		A			
		H23	H24	H26	H27
		A	A		
		実績報告書等 参照箇所			
評価基準	実績	分析・評価			
<p>組織を構成する人員・美術館施設及び国から交付される運営費交付金等を有効に活用し、常に健全で適正かつ堅実な管理運営環境を確保できるよう、理事長のマネジメントの強化や監査機能の充実について検討を行いつつ、その結果を逐次運営管理に反映させるなど内部統制の充実・強化を図ったか。</p>	<p>理事長の召集及び主宰で独立行政法人国立美術館館長等会議(以下「館長等会議」という。)を開催している。館長等会議は、国立美術館の業務の適正かつ円滑な執行を図るため、各館の館長及び理事で構成する会議である。</p> <p>館長等会議における審議事項は、国立美術館の運営に関する基本方針等であり、国立美術館の運営管理上の重要事項について協議した。原則として隔月に1回開催している。ただし、理事長が特に必要と認めた場合は、臨時に館長等会議を開催している。なお、平成25年度は、6回開催した。</p> <p>(平成25年度における主要な議題)</p> <p>平成24年度業務実績報告書について</p> <p>平成24年度決算について</p> <p>監事監査による監査報告及び監査意見に対する措置状況について</p> <p>美術作品購入計画について</p> <p>就業規則等の一部改正について</p> <p>館長等会議の開催に際しては、各館の館長の他、役員である理事及び監事、室長以上の職員の出席を求めており、説明又は意見を求めるとともに、同時に館長等会議における決定等について周知を図る場として活用した。</p> <p>(平成25年度 館長等会議開催日)</p> <p>第1回館長等会議(平成25年6月20日)</p> <p>第2回館長等会議(平成25年9月13日)</p> <p>第3回館長等会議(平成25年11月28日)</p>	<p>国立美術館の業務の適正かつ円滑な執行を図るため、理事長主宰による国立美術館館長等会議を開催し、運営に関する基本方針等の重要事項について協議するなど、内部統制の充実・強化について取り組んでいる。</p>			

<p>外部有識者で構成する外部評価委員会を年1回以上開催し、当該委員会において、国立美術館の目標等を踏まえ、年度ごとに業務の実績に関する評価を実施したか。また、評価結果については、公表するとともに、その結果を組織、事務、事業等の改善に反映させたか。</p> <p>【法人の長のマネジメント】  (リーダーシップを発揮できる環境整備)  法人の長がリーダーシップを発揮できる環境は整備され、実質的に機能しているか。</p>	<p>第4回館長等会議(平成26年1月23日)  第5回館長等会議(平成26年3月20日)</p> <p>(平成25年度 臨時館長等会議開催日)  第1回臨時館長等会議(平成26年2月21日)</p> <p>外部評価委員会(設置根拠:独立行政法人国立美術館組織規則)は、単年度ごとの業務の実績について評価を行う組織で、平成25年度は、4月25日、5月23日、6月6日の3日間開催し、「平成24年度外部評価報告書」を取りまとめ、理事長に報告された。</p> <p>また、平成24年度業務実績報告書と合わせて、平成24年度外部評価報告書を法人ホームページ上で公開した。</p> <p>その外部評価報告書の中で、ナショナルセンターとして更に国際文化交流の推進を求められたことを踏まえ、平成25年度はフィレンツェ文化財・美術館特別監査局等との共催により、国立西洋美術館において「ラファエロ」展を開催した。本展は、平成24年度に東京国立近代美術館工芸館(協力:京都国立近代美術館)がイタリア・フィレンツェにあるピッティ宮殿において開催した「日本のわざと美 - 近現代工芸の精華 -」展との交換展であった。交換展という形式は、「ラファエロ」展のための作品借用料等の低廉化にも寄与しており、企画展を実施する上での新たな工夫を実現したものであった。</p> <p>また、強く言及されているフィルムセンターの独立についても、必要な人員の予算要求等を積極的に行ったが、実現には至らなかった。</p> <p>【リーダーシップを発揮できる環境の整備状況と機能状況】  原則、隔月1回(1年度内5回)開催される館長等会議により、法人における予算、人員等の決定手続きは行われている。(詳細は既述)</p> <p>原則として、各館における美術作品の収集、展覧会の開催計画は、各館の館長の主導で行われている。なおこれらの情報交換の場として、学芸調整役、各館の副館長、学芸課長、事務局長(理事兼務)が出席する学芸課長会議が開催されている。</p> <p>法人の長である理事長の補佐体制として、理事を3名任命するとともに、各館に館長を配置し、各館の館務を掌理させている。また、本部に理事を兼任する事務局長を置き、本部事務局の企画立案機能の充実を図るとともに、各館横断的な調査研究業務及びその他の学芸に係る専門的な重要事項に係る事務を掌理する学芸調整役を新たに配置し、各館が有機的に連携し、効果的・効率的な業務を遂行しうる体制</p>	<p>外部評価委員会を3回開催し、業務の実績に関する評価を実施するとともに、その結果をホームページにおいて公表している。評価結果については、事務、事業等の改善にいかしている。</p> <p>館長等会議、事務局長を長とする本部事務局や理事や独立行政法人国立美術館運営委員会による理事長の補佐体制の整備を通じて、理事長がリーダーシップを発揮できる環境は整備され、実質的に機能していると認められる。また、これらの体制を通して理事長は組織にとって重要な情報等について適時的確に把握していると認められる。</p> <p>館長等会議により、法人における総合調整機能、資源の戦略的配分とその効果が検討・決定されている。また、各館における美術作品の収集、展覧会の開催計画の情報交換の場として、学芸</p>
--	--	--

<p>(法人のミッションの役職員への周知徹底)</p> <p>法人の長は、組織にとって重要な情報等について適時的確に把握するとともに、法人のミッション等を役職員に周知徹底しているか。</p>	<p>を整備した。</p> <p>これらのほか、理事長のマネジメントを補佐するため、引き続き、外部の有識者で組織する、独立行政法人国立美術館運営委員会及び独立行政法人国立美術館外部評価委員会を開催した。</p> <p>運営委員会(設置根拠:独立行政法人国立美術館組織規則)は、理事長が諮問する国立美術館の管理運営に関する重要事項について、理事長の諮問に応じて審議し、理事長に対して助言する組織で、平成25年度は、7月17日及び平成26年3月4日の2回開催し、第1回では、平成24年度事業実績、行政改革の動き等について、第2回では、平成25年度事業の中間報告、平成26年度事業計画、独立行政法人改革等に関する基本的な方針(閣議決定)等について、意見を求めたところである。</p> <p>【組織にとって重要な情報等についての把握状況】</p> <p>理事長、理事、監事及び各館の館長で構成する独立行政法人国立美術館館長等会議を原則として隔月に1回開催し、法人として対処すべき課題や各館における現状等について意見交換を行い、その対処方針等を決定している。平成25年度は、独立行政法人改革等に関する基本的な方針(閣議決定)、画像資産貸出業務の外部委託、美術作品購入計画等について検討した。また、外部有識者で構成する独立行政法人国立美術館運営委員会や独立行政法人国立美術館外部評価委員会の開催を通じても重要な情報等の把握に努めている。</p> <p>監事監査において指摘された法人本部及び各館における課題(リスク)のうち法人として取り組むべき課題(リスク)について、その原因を分析し、監査意見に対する措置状況において対応策を明らかにし、館長等会議において各館に周知した。</p> <p>【役職員に対するミッションの周知状況及びミッションを役職員により深く浸透させる取組状況*】</p> <p>独立行政法人国立美術館館長等会議、独立行政法人国立美術館運営委員会、独立行政法人国立美術館外部評価委員会の開催に際しては、役員及び各館の館長はもとより、各館の副館長・部長・課長・室長が常時出席しており、これらの会議を通じて、ミッションの周知等を行っている。毎年度秋(11月)に開催される合同会議(拡大館長等会議)については、特定の課題やその他の課題等について、副館長・学芸課長も参加し意見交換を行う場としている。平成25年度は各館の展覧会運営及び展覧会における他館との連携に関して意見交換を行った。</p> <p>このほか、研究系職員を中心とした学芸課長会議や事務系職員を中心とした運営管理会議を開催し、これらを通じてミッションの周知等を実施している。平成25年度</p>	<p>課長会議が開催されている。</p> <p>館長等会議、運営委員会及び外部評価委員会並びに学芸課長会議及び運営管理会議に一定の管理職又は職員が参加することによって、法人のミッション等を役職員に周知させている。</p>
---	---	--

<p>(組織全体で取り組むべき重要な課題(リスク)の把握・対応等)</p> <p>法人の長は、法人の規模や業種等の特性を考慮した上で、法人のミッション達成を阻害する課題(リスク)のうち、組織全体として取り組むべき重要なリスクの把握・対応を行っているか。</p>	<p>においては、それぞれ5回開催した。</p> <p>【組織全体で取り組むべき重要な課題(リスク)の把握*状況】</p> <p>独立行政法人国立美術館の事務事業に係る政府としての決定を遵守するとともに、外部の有識者で構成する独立行政法人国立美術館運営委員会や独立行政法人国立美術館外部評価委員会の開催を通じて、組織全体で取り組むべき重要な課題(リスク)の把握に努めている。また、独立行政法人国立美術館館長等会議、運営管理会議・学芸課長会議における状況聴取のほか、監事や会計監査人との意見交換を通じて把握に努めている。</p> <p>【組織全体で取り組むべき重要な課題(リスク)に対する対応*状況】</p> <p>平成25年度において取組んだ課題に対する対応としては、主に次のとおりである。</p> <p>理事長が法人又は国立美術館各館に係る諸課題に適切、かつ迅速に対処するために必要な経費として、理事長裁量経費を計上した。</p> <p>十分な人件費の確保が望めない現在の状況において、常勤職員の増加は困難を極める中、運営委員会委員の意見書を外部に発信するとともに、平成23年度より、限られた人件費の中で、人材の採用、開発、育成に支障をきたさないよう設計した任期付研究員及びアソシエイトフェロー制度を有効に活用した。</p> <p>なお、同制度のうち、任期付研究員制度については、将来、研究員への登用も考慮したものとなっている。</p> <p>館長等会議及び学芸課長会議において、美術作品購入費の用途について協議し、海外への流出可能性など緊急度の高さ、作品の品質と希少性等の観点から、美術作品の購入を検討した。</p> <p>「今夏の電力供給対策について(24文科施第117号)」及び「今冬の電力需給対策について(24文科施第355号)」を踏まえ、使用電力の抑制に取り組んだ。</p> <p>5館の横断的・総合的事業プロジェクトとして、平成22年度に初めての合同企画展「陰影礼讃 国立美術館のコレクションによる」を開催し高評を得た。平成24年度は、「記憶と想起—コレクションとリコレクション(仮称)」を企画案として採択し、担当者を決定した。平成27年度の開催に向けて、平成25年度においても準備を進めた。</p>	<p>組織全体で取り組むべき重要な課題(リスク)として、主に実績に記載されている項目を把握するとともにその対応策を適切に行っていると判断される。</p>
--	---	--

<p>その際、中期目標・計画の未達成項目(業務)についての未達成要因の把握・分析・対応等に注目しているか。</p> <p>(内部統制の現状把握・課題対応計画の作成)</p> <p>法人の長は、内部統制の現状を的確に把握した上で、リスクを洗い出し、その対応計画を作成・実行しているか。</p>	<p>台風等自然災害時及び急病人(来館者)の発生等の不測の事態において、臨時閉館や救急処置等適切に対応できるよう体制を構築している。</p> <p>地震による衝撃の被害を軽減するため、衝撃吸収ゴムや額装の改善を適宜実施した。</p> <p>【未達成項目(業務)についての未達成要因の把握・分析・対応状況】</p> <p>文部科学省評価委員会による評価結果では、第2期中期目標の未達成項目はなかったが、ナショナルセンターとしての人材育成については中期計画の達成度がB評価(達成度70%~100%)であった。特にキュレーター研修について、応募者側の事情を勘案した上で、参加者数増加に向けた改善が求められたことから、キュレーター研修の参加希望者及び派遣元の事情を考慮し、募集の時期を早めるとともに、当該研修年度の展覧会開催予定について情報提供を行った。(詳細は既述)</p> <p>【内部統制のリスクの把握状況】</p> <p>各館における定例会議等や法人としての運営管理会議、学芸課長会議及び館長等会議を通じて、内部統制のリスクの把握に努めている。</p> <p>また、監事監査要綱や監事監査実施基準による監査のほか、独立行政法人国立美術館会計規則に基づく会計監査、独立行政法人国立美術館内部監査実施規則に基づく資産及び会計に係る事務全般の監査、独立行政法人国立美術館競争的資金等取扱規則に基づく内部監査、独立行政法人国立美術館文書管理規則に基づく監査等を通じて内部統制のリスクの把握に努めている。</p> <p>なお、平成25年度における監事監査報告書において、法人全体での課題として、次のことが指摘された。</p> <p>人件費削減に伴う人員不足及び勤務状況について</p> <p>人員の不足については、平成23年度に制度化した「任期付研究員」及び「アソシエイトフェロー」の有効活用により研究員を確保するとともに、職員の心身の健康維持のために、これまで、産業医による個別面談及びメンタルヘルスケアに関する研修等に加え、一斉休業の実施を制度化した。</p> <p>【内部統制のリスクが有る場合、その対応計画の作成・実行状況】</p> <p>監査結果報告書を受けて、法人本部において、「監査報告書の監査意見に対する措置状況について(通知)」を作成し、運営管理会議及び館長等会議において協議</p>	<p>中期目標・計画の未達成項目ではないが、指摘された項目については参加者募集の時期を早めるとともに展覧会開催予定について情報提供を行い、適切に対応している。</p> <p>内部統制の整備・運用状況は、有効に機能を発揮していると判断される。</p> <p>また、各館における定例会議等や法人としての運営管理会議、学芸課長会議を通じて、内部統制のリスクの把握に努める体制が確立していると考えられる。</p> <p>内部統制リスクへの対応については、適宜、運営管理会議及び館長等会議において協議するとともに各館に周知することにより、適切に対応している。</p> <p>人員の不足は、将来の法人の目的達成に支障を来し、職員の心身の健康維持に悪影響を及ぼすことが懸念される。任期付研究員及びアソシエイト・フェローの制度導入については、人件費の有効活用という観点だけでなく、美術館の使命を全うするための人材の確保・養成という観点からも、適正な運用に努め、必要に応じて常勤職員の増加等を図る必要がある。</p>
---	--	---

<p>【監事監査】 監事監査において、法人の長のマネジメントについて留意しているか。</p>	<p>の上、監事に送付した。措置状況に記載した法人としての対処等については、会議を通じて各館に周知の上、今後具体的な対策を検討していくこととした。</p> <p>【監事監査における法人の長のマネジメントに関する監査状況】</p> <p>1. 監査規程の整備状況</p> <p>(1) 監事監査 独立行政法人国立美術館監事監査要綱(平成13年4月2日制定 国立美術館規程第4号) 独立行政法人国立美術館監事監査実施基準(平成13年4月2日制定 国立美術館規程第5号) 独立行政法人国立美術館監事監査要領(平成13年4月1日制定)</p> <p>(2) 内部監査 独立行政法人国立美術館内部監査実施規則(平成23年3月30日制定 国立美術館規則第7号) 独立行政法人国立美術館平成24年度内部監査計画</p> <p>(3) 独立行政法人国立美術館職員倫理規則(平成18年3月31日制定 国立美術館規則第26号)</p> <p>2. 監査体制の整備状況</p> <p>(1) 監事監査 監事(文部科学大臣任命) 2名(非常勤2名) 監査の事務補助(監事監査要綱第6条) 平成25年度実績 3名 兼務:局長1名・室長2名(独法移行後、毎年3~4名体制)</p> <p>(2) 内部監査 監査員(内部監査実施規則第4条) 職員のうちから1名以上 平成25年度実績 7名(兼務:室長1名・係長2名・係員2名) 総括及び調整等(内部監査実施規則第11条) 総括及び調整:事務局長</p> <p>3. 監査実績(実施項目、実施時期、監査手法等)</p> <p>(1) 監事監査の実績 監事監査の概要 独法移行後(平成13年4月以降)各年度において、館長等会議(隔月1回)その他重要な会議に出席するほか、役職員から事業の報告を聴取し、重要な決裁書類等を閲覧し、本部において、財務及び業務についての状況を調査した。さらに、会計監査人から会計監査人の監査方法及びその結果について説明を受け、会計帳簿等の調査を行い、財務諸表、事業報告書及び決算報告書について検討を加え、いずれも適</p>	<p>監事は、館長等会議その他重要な会議への出席、役職員からの事業の報告の聴取、重要な決裁書類等の閲覧、及び会計監査人からの説明などを通して、理事長のマネジメントに留意した上で、監査を実施していると判断される。</p>
--	--	---

正であることを確認するとともに、業務の執行に関する法令遵守等の状況についても確認した。

定期監査スケジュール、報告書、指摘事項等

監事監査計画作成(4月) 提出先:理事長

定期監査(6月)

業務監査(毎年度1回) 監査結果報告書(提出先:理事長)

会計監査(年度決算時) 監査結果報告書(提出先:理事長)

監査結果報告については、運営管理会議、館長等会議で結果を報告することとしており役職員に対して具体的に周知している。また、監査で指摘を受けた事項がある場合、その事項に対する措置状況については、法人全体の取組として、運営管理会議、館長等会議に諮り、改善提案を「監査結果報告書の監査意見に対する措置状況について(通知)」として監事に報告している。

その他の監査

館長等会議その他重要な会議への出席。聴取、意見交換等、重要な書類等の回付(監事監査要綱第13条)、出納計算内訳表等(月末)の回付、3館における臨時監査の実施。

臨時監査(毎年度1回) 監査結果報告書(提出先:理事長)

監査結果報告書については、各館に周知し、定期監査と同様に、運営管理会議及び館長等会議で結果を報告することとしており、役職員に対して具体的に周知している。また、監査で指摘を受けた事項がある場合、その事項に対する措置状況については、法人全体の取組として、運営管理会議及び館長等会議に諮り、改善提案を「監査結果報告書の監査意見に対する措置状況について(通知)」として監事に報告している。

各館臨時監査実施状況

平成25年11月28日(国立国際美術館)

平成26年2月12日(国立西洋美術館)

平成26年2月13日(国立新美術館)

会計監査人との連携

会計監査人からの監査計画の報告(3月頃)、会計監査人からの監査報告(6月)

「独立行政法人、特殊法人等監事連絡会」総会及び第9部会への参加

会計検査院実施によるセミナー等 公会計監査フォーラム(8月)など年間数回参加

(2) 内部監査の実績

<p>監事監査において把握した改善点等について、必要に応じ、法人の長、関係役員に対し報告しているか。その改善事項に対するその後の対応状況は適切か。</p>	<p>内部監査の概要  内部監査実施規則に基づき平成13年度から実施した。平成25年度においては東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館及び国立新美術館を対象として、契約方法の妥当性、見積徴収方法、旅費・諸謝金の取り扱い等について、2人～3人の監査員が監査に当たった。</p> <p>監査スケジュール、報告書、指摘事項等  内部監査計画の通知：平成25年7月25日  実地監査実施：平成25年8月28日（東京国立近代美術館）  平成25年8月30日（京都国立近代美術館）  平成25年8月27日（国立国際美術館）  平成25年8月29日（国立西洋美術館）  平成25年8月26日（国立新美術館）</p> <p>内部監査報告書の提出：監査実施後1か月以内</p> <p>【監事監査における改善点等の法人の長、関係役員に対する報告状況】  監査結果概要  法人監査、定期監査  独立行政法人国立美術館監事監査要綱（平成13年国立美術館規程第4号）第9条第1項に基づき、法人監査については、平成25年6月21日付、定期監査については、平成25年12月27日付、平成26年3月10日付で、監査結果報告書が提出されている。監査意見が付されたものについては、理事長から監事に対し、「監査意見に対する措置状況」を通知している。</p> <p>【監事監査における改善事項への対応状況】  監査結果報告書を踏まえ、監査結果報告書における監査意見については、館長等会議（平成26年6月11日）において審議し、独立行政法人国立美術館監事監査要綱（平成13年4月2日国立美術館規程第4号）第10条第2項に基づき、措置状況等を監事に通知した。</p> <p>主な措置状況：  ・「任期付研究員」のうち2名を、審査を経て常勤研究員に採用  ・「アソシエイトフェロー」制度の有効活用  ・職員の心身の健康維持のため、産業医による個別面談及びメンタルヘルスケアに関する研修等に加え、平成25年度から一斉休業日の正式導入</p>	<p>監事監査において把握した改善点等については、適宜報告がなされていると認められる。また、その改善事項への対応状況も適切に行われていると判断される。</p>
---	--	---

【(小項目)2 - 4】	情報安全	【評定】			
<p>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</p> <p>(3) 保有する情報については、国民が適正な情報を円滑に得られるよう、ホームページにおける情報を充実させるなど、必要な措置を講じて、適切に情報を開示する。また、保有する情報の安全性向上のために、必要な管理体制の整備を図るとともに、情報セキュリティに配慮した業務運営の情報・電子化に取り組むなど、情報セキュリティ対策を推進する。</p>		A			
		H23	H24	H26	H27
		A	A		
		実績報告書等 参照箇所			
		<p>&lt;実績報告書&gt;</p> <p>P13～15</p> <p>(3) 美術に関する情報の拠点としての機能の向上          情報通信技術 (ICT) を活用した展覧会情報や調査研究成果などの公表等</p> <p>P79</p> <p>3 管理情報の安全性の向上</p>			
<b>評価基準</b>	<b>実績</b>	<b>分析・評価</b>			
<p>保有する情報について、国民が適正な情報を円滑に得られるよう、ホームページにおける情報を充実させるなど、必要な措置を講じて、適切に情報を開示したか。また、保有する情報の安全性向上のために、必要な管理体制の整備を図るとともに、情報セキュリティに配慮した業務運営の情報・電子化に取り組むなど、情報セキュリティ対策を推進したか。</p>	<p>保有する情報について、ホームページにおける情報の充実等、国民への適切な情報の開示についての本部及び各館の取組みは以下のとおりである。</p> <p>&lt;各館の ICT 活用の特徴&gt;</p> <p>(ア)本部          平成 20 年度にリニューアルした法人ホームページにおいては、引き続き 5 館の展覧会及び各種催事等トピックスの一覧を維持した。          「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」については、平成 23 年度より「指導者研修 Web 報告」のページを充実させて、平成 25 年度も継続してその記録公開に努めた。</p> <p>(イ)東京国立近代美術館          平成 19 年度より稼働のコンテンツ・マネジメント・システム (CMS) を用いて、ホームページ・コンテンツの追加更新を迅速化しているが、サイト構成及びデザイン等において一層の改良を図るべく大規模リニューアルを実施するため、ホームページ全体の刷新へ向けて全館的に見直し、全面改修へ向けての仕様書を策定した (改修は平成 26 年度に実施予定)。          独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システムに新収蔵作品の文字画像データを追加するとともに、同システムへの著作権のある作品画像掲載を進めるため、許諾を得た工芸 [陶磁] の作品 611 点について画像を新規登録した。また、</p>	<p>本部及び各美術館においてホームページにおける情報の充実を行うとともに、保有する情報の安全性向上のためのセキュリティ対策が十分図られている。また、保有個人情報の管理状況について、監事監査も実施されている。</p> <p>今後もホームページを閲覧する人が増加していくように更なる充実を期待する。</p> <p>一方で、ホームページのみならず、機関リポジトリーや SNS が拡大している現在、外部への情報漏えいなどの管理について検討する必要がある。</p>			

工芸についての著作権者情報の整備を引き続き行い、工芸[漆工・染織]の著作権許諾申請手続を開始した。

平成 23 年度に着手した東京国立近代美術館所蔵作品管理システムならびに独立行政法人国立美術館総合目録のデータ登録更新のためのインターフェースの改良を、他国立美術館と連携して実装させ、平成 25 年度は各館ローカルシステムと総合目録とのデータ連携を改善した。

平成 23 年度に欧米主要美術図書館横断検索システムである artlibraries.net ([http://artlibraries.net/index\\_en.php](http://artlibraries.net/index_en.php))と国立美術館の図書検索システム(東京国立近代美術館及び国立西洋美術館)の連携可能性について、国立情報学研究所と連携して始めた受託研究の成果により、artlibraries.net への参加を実現させ、全国美術館会議の会報などにおいて国内広報に尽くした。

フィルムセンターでは、初めてのウェブ上での所蔵資料公開事業である「NFC デジタル展示室」を開設し、5 回の特集展示を行った。事業関連の情報を提供する「NFC メールマガジン」は着実に登録者が増えている。また、NFCD(ナショナル・フィルムセンター・データベース)については、人物情報の統合を進めるとともに、所蔵映画フィルムの運用を NFCD 上で行えるよう重要な改善を加えた。さらに、映画関連資料へのアクセス希望に対しては、図版提供をすみやかに行うため、また、識別を容易にするため適宜デジタル・データへのスキャンや簡易撮影を行いデータの蓄積を進めた。

#### (ウ)京都国立近代美術館

ホームページにおいて、各展覧会の基本情報や講演会、教育普及関連のイベントの案内・報告、美術館ニュースや研究論集の内容紹介、さらには「友の会」の行事報告などを行った。特にコレクション・ギャラリー(常設展示)については、展示替えごとに出品リストや解説を掲載するだけでなく、平成 25 年度から著作権に支障のない範囲で出品作品の画像を掲載し、情報のさらなる充実に努めた。また、レストランのページをリニューアルし、料理の特色やメニューを掲載して、より具体的で親しみやすい内容にした。

#### (エ)国立西洋美術館

ホームページやフェイスブック・ページを通じて展覧会や教育普及プログラム、所蔵作品に関する情報等を和英 2 か国語で提供し、活動状況を広く社会に紹介した。

所蔵作品データベースについては、科学研究費補助金(研究成果公開促進費)の交付を受けて内容の充実に取り組んだ。平成 25 年度は作品購入に関する法人文書などアーカイブズ(資料)の調査を重点的にを行い、各作品の来歴データの追加入力を実施した。また、個々の作品の「展示中」情報ステータスの更新を例年通り実施

し、利用者のニーズに応えた。さらに、『研究紀要』などの調査研究成果の公開のため、国立情報学研究所が提供する機関リポジトリ共用サービスの利用について検討を進め、平成 26 年度導入に向けて具体的な準備に着手した。科学研究費助成事業「海外における松方コレクション関連資料の収集と公開」の成果の一部として、展覧会リストである「松方コレクションに関する展覧会：1922-1960 年」をホームページ上で公開した。所蔵作品に関する情報資産の安全な運用のため、所蔵作品情報管理システムのバックアップ・コピーの遠隔地での保管を例年どおり実施した。

(オ)国立国際美術館

老朽化に伴いウェブサーバをリプレイスし、ハードウェアと OS の入替を行った。また、工藤哲巳回顧展においては、共同開催の東京国立近代美術館、青森県立美術館とともに特設ウェブサイトを開設し、最新情報を日々更新した。

(カ)国立新美術館

引き続き展覧会情報検索サービス「アートコモンズ」において日本国内の美術館、画廊、美術団体が開催する展覧会の情報を収集し、検索可能とすることに努めた。平成 25 年度は 3,018 件の展覧会情報を 1,170 の美術館・美術団体・画廊の協力により収集・公開した。

ホームページを通じて、国立新美術館の活動を紹介すると共に、これまでのメールマガジンの発行に加え、ソーシャルネットワークサービス(SNS)の活用により、昨今のインターネットの利用形態の変化に対応した幅広い情報発信の道筋について実践的に試行・検証した。

保有する情報の安全性向上のために必要な管理体制の整備と情報セキュリティ対策についての法人全体での取組み

個人情報の保護については、引き続き、個人情報保護に関する説明会への参加や情報漏えいの事例等の通知を行うとともに、個人情報ファイルの保有状況調査の実施等にあわせ、重要書類は鍵のかかる保管庫に納めること、個人情報を取り扱う業務中に離席する際は、当該書類やパソコン画面を他の職員等から見られないような措置を講じること、廃棄する際はシュレッダーにかけることなど、厳格に書類管理を行った。また、あわせてウィルス対応ソフトウェアの導入の徹底や最新のプログラムへの更新を随時行うなど、電子メール等による外部からのウィルス進入を回避する安全策を講じた。

【(大項目)3】	予算(人件費の見積もりを含む)、収支計画及び資金計画	【評定】			
		A			
		H23	H24	H26	H27
		A	A		

【(小項目)3 - 1】	財務の状況	【評定】			
		A			
		H23	H24	H26	H27
		A	A		
<p>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</p> <p>収入面に関しては、実績を勘案しつつ、自己収入を積極的に確保することにより、計画的な収支計画による運営を図る。自己収入については、入場料収入等の増額を目指す。</p> <p>また、外部資金については、寄附金や企業からの支援(協賛金等)の獲得のほか「キャンパスメンバーズ」等への加入者の増大などに取り組む。</p> <p>なお、管理業務の効率化を図る観点から、各事業年度において、適切な効率化を見込んだ予算による運営に取り組む。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 予算(中期計画の予算) 別紙のとおり</li> <li>2 収支計画 別紙のとおり</li> <li>3 資金計画 別紙のとおり</li> </ol> <p>短期借入金の限度額</p> <p>短期借入金の限度額は、15億円。</p> <p>短期借入金が想定される理由は、運営費交付金の受入れに遅延が生じた場合である。</p> <p>不要財産及び不要財産となることが見込まれる財産の処分に関する計画</p> <p>なし</p> <p>上記以外の重要な財産の処分等に関する計画</p> <p>なし</p> <p>剰余金の使途</p> <p>決算において剰余金が発生した時は、次の経費等に充てる。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 美術作品の購入・修理</li> <li>2 展覧会の充実</li> <li>3 調査研究事業の充実</li> <li>4 情報・資料の収集等事業の充実</li> <li>5 講演会・出版その他教育普及事業の充実</li> <li>6 研修事業の充実</li> <li>7 入館者サービス、情報提供の質的向上、老朽化対応のための施設・設備の充実</li> </ol> <p>その他主務省令で定める業務運営に関する事項</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 施設・設備に関する計画(別紙4)</li> </ol>		<p>実績報告書等 参照箇所</p> <p>&lt; 実績報告書 &gt;</p> <p>P96 ~ 99</p> <p>予算(人件費の見積もりを含む)、収支計画及び資金計画等</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 予算</li> <li>2 収支計画</li> <li>3 資金計画</li> <li>5 短期借入金</li> <li>6 重要な財産の処分等</li> <li>7 剰余金</li> </ol> <p>P86</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>9 施設設備に関する計画</li> </ol> <p>P84</p> <p>(3) 目的積立金の使用状況</p> <p>(4) 積立金(通則法第44条第1項)の状況</p>			

<p>(1) 施設・設備の老朽化への対応、入館者の安全確保及び利便性の向上等のため、長期的な視野に立った整備計画を策定し、施設・設備に関する計画に沿った整備を推進する。</p> <p>(2) 国立新美術館の管理運営を適切に実施するため、用地(未購入の土地)について、施設・設備に関する計画に基づき、予算措置に応じて購入を進める。</p> <p>3 中期目標期間を超える債務負担  中期目標期間を超える債務負担については、国立美術館の業務運営に係る契約の期間が中期目標期間を超える場合で、当該債務負担行為の必要性及び資金計画の影響を勘案し、合理的と判断されるものについて行う。</p> <p>4 積立金の使途  前中期目標期間の期間の最終年度において、独立行政法人通則法第44条の処理を行ってなお積立金があるときは、その額に相当する金額のうち文部科学大臣の承認を受けた金額について、次期へ繰り越した経過勘定損益影響額等に係る会計処理に充当する。</p>																						
<p><b>評価基準</b></p> <p>収入面に関して、実績を勘案しつつ、自己収入を積極的に確保することにより、計画的な収支計画による運営を図ったか。</p> <p>自己収入については、入場料収入等の増額を目指したか。</p> <p>また、外部資金については、寄附金や企業からの支援(協賛金等)の獲得のほか「キャンパスメンバーズ」等への加入者の増大などに取り組んだか。</p> <p>管理業務の効率化を図る観点から、各事業年度において、適切な効率化を見込んだ予算による運営に取り組んだか。</p> <p>【収入】</p>	<p><b>実績</b></p> <p>自己収入については、目標入館者数を上回る入館者数を得たことなどから、予算額1,106百万円に対して決算額が1,198百万円であり、予算額を92百万円上回ったことから、計画的な収支計画による運営を行うことができた。</p> <p>外部資金については、平成24年度以降の各種事業の実施に際し、協賛金等を得た(平成25年度実績9百万円)。</p> <p>キャンパスメンバーズについては、平成25年度加入数は77校であった。</p> <p>中期計画に定めたとおり、運営費交付金を充当して行う事業については、業務の効率化を進め、中期目標期間中、一般管理費については15%以上、業務経費については5%以上の効率化を図る(ただし、美術作品購入費、美術作品修復費、土地借料等の特殊要因経費はその対象としない。また、人件費については別に定める。)こととしている。この計画に基づき、一般管理費 3.02%、業務経費 0.371%の効率化を行い、年度計画予算を策定している。平成25年度については、年度計画予算に基づき執行し、特殊要因経費を除いた削減率は、一般管理費 2.40%、業務経費 20.08%となった。一般管理費については、緊急を要する工事費用等により、増加となった。</p> <p>【平成25年度収入状況】(単位:千円)</p> <table border="1" data-bbox="638 1257 1601 1465"> <thead> <tr> <th>収入</th> <th>予算額</th> <th>決算額</th> <th>差引増減額</th> <th>備考</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>運営費交付金</td> <td>7,545,727</td> <td>7,545,727</td> <td>0</td> <td></td> </tr> <tr> <td>施設整備費補助金</td> <td>5,104,264</td> <td>5,532,778</td> <td>428,514</td> <td></td> </tr> <tr> <td>事業等収入</td> <td>1,106,043</td> <td>1,207,456</td> <td>101,413</td> <td></td> </tr> </tbody> </table>	収入	予算額	決算額	差引増減額	備考	運営費交付金	7,545,727	7,545,727	0		施設整備費補助金	5,104,264	5,532,778	428,514		事業等収入	1,106,043	1,207,456	101,413		<p><b>分析・評価</b></p> <p>予算、収支計画及び資金計画については、計画額と実績額とのかい離についておおむね説明がされており、当該かい離の要因が法人の業務運営に問題があることによるものではなく、特に指摘すべき事項はないと判断される。</p> <p>今後も入館者数が増加する良い企画を期待するとともに、前期より減少した協賛金等の獲得に努められたい。</p>
収入	予算額	決算額	差引増減額	備考																		
運営費交付金	7,545,727	7,545,727	0																			
施設整備費補助金	5,104,264	5,532,778	428,514																			
事業等収入	1,106,043	1,207,456	101,413																			

受託収入	0	0	0	
計	13,756,034	14,285,961	529,927	

金額は単位未満切り捨てのため、合計が合致しない場合がある。

【主な増減理由】

事業等収入は、展覧会の入館者数が目標入館者数を上回ったことから、予算に比べ収入増となった。

施設整備費補助金は、平成 24 年度補正予算に係る工事が当期へ繰越になったこと及び当期予算のうち次期繰越となった工事があることから、計画額と異なっている。

【支出】

【平成 25 年度支出状況】(単位:千円)

支出	予算額	決算額	差引増減額	備考
一般管理費	1,340,835	1,376,083	35,248	
うち、人件費	264,132	262,745	1,386	
うち、物件費	1,076,703	1,113,337	36,634	
事業経費	7,310,935	7,123,209	187,725	
うち、人件費	712,349	714,840	2,491	
うち、物件費	6,598,586	6,408,368	190,215	
施設費	5,104,264	5,532,778	428,514	
受託経費	0	0	0	
計	13,756,034	14,032,070	276,036	

金額は単位未満切り捨てのため、合計が合致しない場合がある。

【主な増減理由】

一般管理費及び事業経費のうち物件費は、美術作品購入費の運営費交付金債務の平成 26 年度以降への繰越等により支出減となった。

施設整備費補助金は、平成 24 年度補正予算に係る工事が当期へ繰越になったこと及び当期予算のうち次期繰越となった工事があることから、計画額と異なっている。

【収支計画】

【平成 25 年度収支計画】(単位:千円)

区分	計画額	実績額	差引増減額
費用の部			
経常費用	5,148,370	5,047,155	101,215
管理部門経費	1,303,041	1,515,371	212,330
うち人件費 (注1)	264,132	354,000	89,868
うち一般管理費 (注2)	1,038,909	1,161,371	122,462
事業部門経費	3,680,549	3,380,179	300,370
うち人件費 (注3)	712,349	624,058	88,291
うち展示事業費 (注4)	1,887,162	1,690,445	196,717
うち調査研究事業費 (注4)	189,903	155,043	34,860
うち教育普及事業費 (注4)	891,135	910,630	19,495

減価償却費	164,780	151,605	13,175
収益の部			
經常収益	5,148,370	5,116,608	31,762
運営費交付金収益 (注5)	3,877,547	3,685,549	191,998
展示事業等の収入 (注6)	1,106,043	1,198,456	92,413
資産見返運営費交付金戻入	149,375	137,964	11,411
資産見返寄附金戻入	1,928	3,050	1,122
資産見返物品受贈額戻入	13,477	10,634	2,843
寄附金収益	-	8,156	8,156
施設費収益 (注7)	-	72,796	72,796
經常利益		69,453	
臨時損失		1,655	
臨時利益		-	
当期純利益		67,797	
前中期目標期間繰越積立金取崩額		1,611	
当期総利益		69,408	

金額は単位未満切り捨てのため、合計が合致しない場合がある。

【主な増減理由】

(注1)退職手当の支出による。

(注2)緊急に行った設備等の修繕及び更新に係る経費の増加等による。

(注3)人員の削減等の効率化による。

(注4)支出経費の見直しを行ったことによる。

(注5)運営費交付金による固定資産の取得が見込より多かったため、資産見返運営費交付金又は資本剰余金に計上されたことによる。

(注6)入場料収入等の増加による。

(注7)施設整備費補助金による工事の完了による。

【資金計画】

【平成 25 年度資金計画】(単位:千円)

区分	計画額	実績額	差引増減額
資金支出	13,756,034	13,311,339	444,695
業務活動による支出(注1)	8,546,193	8,266,933	279,260
投資活動による支出(注2)	5,209,841	5,044,406	165,435

財務活動による支出	-	-	-
資金収入	13,756,034	13,648,708	107,326
業務活動による収入	8,651,770	8,743,835	92,065
運営費交付金による収入	7,545,727	7,545,727	0
展示事業等による収入(注3)	1,106,043	1,198,108	92,065
投資活動による収入	5,104,264	4,904,873	199,391
施設整備補助金による収入(注4)	5,104,264	4,904,873	199,391
資金増加額		337,370	
資金期首残高		1,617,168	
資金期末残高		1,954,539	

金額は単位未満切り捨てのため、合計が合致しない場合がある。

【主な増減理由】

(注1)美術品・収蔵品の購入に係る運営費交付金の平成26年度以降への繰越による。

(注2)当期に完了した工事代金が年度末時点で未払となっていることによる。

(注3)入場料収入等の増加による。

(注4)平成24年度施設整備費補助金の精算に伴い、一部が平成25年度の収入となったこと及び平成25年度施設整備費補助金の精算に伴い、一部が平成26年度の収入になることによる。

【当期総利益(当期総損失)】

当期総利益 69,408,939 円

【当期総利益(又は当期総損失)の発生要因】

自己収入の増加による収益。

【財務状況】

(当期総利益(又は当期総損失))

当期総利益(又は当期総損失)の発生要因が明らかにされているか。

また、当期総利益(又は当期総損失)の発生要因は法人の業務運営に問題等があることによるものか。

財務状況については、自己資本比率が高く、当期総利益を計上しているなどから、特段の問題はないと判断される。

当期総利益の発生要因は、自己収入の増加によるものであり、法人の業務運営に問題等はないと判断される。

<p>(利益剰余金(又は繰越欠損金))</p> <p>利益剰余金が計上されている場合、国民生活及び社会経済の安定等の公共上の見地から実施されることが必要な業務を遂行するという法人の性格に照らし過大な利益となっていないか。</p> <p>繰越欠損金が計上されている場合、その解消計画は妥当か。</p> <p>当該計画が策定されていない場合、未策定の理由の妥当性について検証が行われているか。さらに、当該計画に従い解消が進んでいるか。</p> <p>(運営費交付金債務)</p> <p>当該年度に交付された運営費交付金の当該年度における未執行率が高い場合、運営費交付金が未執行となっている理由が明らかにされているか。</p> <p>運営費交付金債務(運営費交付金の未執行)と業務運営との関係についての分析が行われているか。</p> <p>(溜まり金)</p> <p>・ いわゆる溜まり金の精査において、運営費交付金債務と欠損金等との相殺状況</p>	<p>【利益剰余金】</p> <p>前中期目標期間繰越積立金 377,754,257 円 積立金 100,593,497 円 当期末処分利益 69,408,939 円</p> <p>【繰越欠損金】</p> <p>計上なし</p> <p>【解消計画の有無とその妥当性】</p> <p>該当なし</p> <p>【解消計画に従った繰越欠損金の解消状況】</p> <p>該当なし</p> <p>【解消計画が未策定の理由】</p> <p>該当なし</p> <p>【運営費交付金債務の未執行率(%)と未執行の理由】</p> <p>運営費交付金債務の未執行率 10.63%(802,098,757 円) 未執行の理由 美術作品購入に係る事業は業務達成基準としているが、平成 25 年度に予定していた当該事業の一部が実施できなかったため、当該費用が未執行の債務として計上された。</p> <p>【業務運営に与える影響の分析】</p> <p>次年度以降に当該業務が実施でき次第、債務は解消する予定である。</p> <p>【溜まり金の精査の状況】</p> <p>当法人は運営費交付金以外の財源で手当てすべき欠損金が発生していないことから、運営費交付金債務と相殺されているものはない。</p>	<p>利益剰余金が法人のインセンティブになるように期待している。</p> <p>運営費交付金の未執行の理由が記載されており、その理由も適切である。</p> <p>溜まり金はない。</p>
--	---	---

<p>に着目した洗い出しが行われているか。</p> <p>【短期借入金の限度額】 中期目標期間中の短期借入の実績は有ったか。有る場合は、その額及び必要性は適切であったか。</p> <p>【重要な財産の処分等に関する計画】 重要な財産の処分に関する計画は有るか。ある場合は、計画に沿って順調に処分に向けた手続きが進められているか。</p> <p>【剰余金の使途】 利益剰余金は有るか。有る場合はその要因は適切か。</p> <p>目的積立金は有るか。有る場合は、活用計画等の活用方策を定める等、適切に活用されているか。</p> <p>施設・設備の老朽化への対応、入館者の安全確保及び利便性の向上等のため、長期的な視野に立った整備計画を策</p>	<p>また、当期総利益がキャッシュフローを伴わない費用と相殺されているものはない。</p> <p>【溜まり金の国庫納付の状況】 該当なし</p> <p>【短期借入金の有無及び金額】 該当なし</p> <p>【必要性及び適切性】 該当なし</p> <p>【重要な財産の処分に関する計画の有無及びその進捗状況】 重要な財産の処分に関する計画はない。</p> <p>【利益剰余金の有無及びその内訳】 前中期目標期間繰越積立金 377,754,257 円 積立金 100,593,497 円 当期末処分利益 69,408,939 円</p> <p>【利益剰余金が生じた理由】 前中期目標期間繰越積立金は、自己収入で購入した固定資産、リース資産の残存価格によるものである。 積立金は今中期目標期間の未処分利益によるものである。 当期末処分利益は自己収入の増加及び運営費交付金の節約による収益によるものである。</p> <p>【目的積立金の有無及び活用状況】 目的積立金は計上していない。</p> <p>東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館について、平成 21 年度から重要文化財に指定された可燃性映画フィルムがあり、それらを安全に保管する必要性から専用倉庫の増築等工事を行った。</p>	<p>短期借入金はない。</p> <p>重要な財産の処分に関する計画はない。</p> <p>利益剰余金の要因は適切であり、法人の性格に照らし過大な利益剰余金ではなく、特に問題ないと判断される。</p> <p>目的積立金はないため、使途の問題はない。また、積立金の支出はない。</p>
--	--	---

<p>定し、施設・設備に関する計画に沿った整備を推進したか。</p> <p>国立新美術館の管理運営を適切に実施するため、用地(未購入の土地)について、施設・設備に関する計画に基づき、予算措置に応じて購入を進めたか。</p> <p>【施設及び設備に関する計画】 施設及び設備に関する計画は有るか。有る場合は、当該計画の進捗は順調か。</p> <p>【中期目標期間を超える債務負担】 中期目標期間を超える債務負担は有るか。有る場合は、その理由は適切か。</p> <p>【積立金の使途】 積立金の支出は有るか。有る場合は、その使途は中期計画と整合しているか。</p>	<p>東京国立近代美術館フィルムセンターの空調機の配管について、平成 6 年より使用しており、平成 24 年に漏水があったため、館内環境保全の必要性から更新工事を行った。</p> <p>京都国立近代美術館の電気設備について、設置から 20 年以上を経過し不具合の発生及び保守に必要な部品の調達が困難となっていることから、平成 24 年度から平成 26 年度までの 3 年計画で更新工事を行うものとし、平成 25 年度は電気設備の更新を行った。また、エレベーターについても、設置から 25 年以上経過しており、耐用年数を超過し経年劣化が全体に及んでいること、法律で義務付けられている戸開走行保護装置等の設置ができていないことから、平成 25 年度から平成 26 年度までの 2 年計画で改修工事を行うものとし、平成 25 年度は常用エレベーター等の改修工事を行った。</p> <p>国立新美術館の土地購入について、平成 25 年度は 45 億 9 千万円が予算措置され、当該購入により、持分比率は 68.44%となった。また、国立新美術館のエレベーターは、法律で義務付けられている戸開走行保護装置が設置されていないことから、来館者等の安全性を確保するため、設置工事を行った。</p> <p>【施設及び設備に関する計画の有無及びその進捗状況】 中期計画の施設・設備に関する計画に基づき、以下の施設整備が完了した。 ・東京国立近代美術館フィルムセンター配管等改修工事 ・東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館重要文化財映画フィルム収蔵庫増築等工事 ・京都国立近代美術館電気設備等更新(3年計画2年目) ・京都国立近代美術館昇降機設備等改修工事(2年計画の1年目) ・国立新美術館土地購入(平成25年度取得分) ・国立新美術館エレベーター戸開走行保護装置設置工事</p> <p>【中期目標期間を超える債務負担とその理由】 中期目標期間を超える債務負担はない。</p> <p>【積立金の支出の有無及びその使途】 積立金の支出はない。</p>	<p>施設及び設備に関する計画は中期計画に基づき適切に実施されていると認められる。</p> <p>中期目標期間を超える債務負担はない。</p>
--	--	---

【(小項目)3-2】	人事の状況	【評定】																																											
<p>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</p> <p>2 人事に関する計画</p> <p>(1)方針</p> <p>国家公務員制度改革や類似独立行政法人等の人事・給与制度改革の動向を勘案しつつ、職員の能力や業績を適切に反映できる人事・給与制度の検討を引き続き行う。</p> <p>人事交流を促進するとともに、職員の資質向上を図るための研修機会の提供に努める。また、効率的かつ効果的な業務運営を行うため、非公務員化のメリットを活かした制度を活用する。</p> <p>(2)人員に係る指標</p> <p>給与水準の適正化等を図りつつ、業務内容を踏まえた適切な人員配置等を推進する。</p> <p>(参考)中期目標期間中の人件費総額見込額</p> <p>4,729百万円</p> <p>但し、上記の額は、役職員に対し支給する報酬(給与)、賞与、その他の手当の合計額であり、退職手当、福利厚生費を含まない。</p>		A																																											
		H23	H24	H26	H27																																								
		A	B																																										
		実績報告書等 参照箇所																																											
		< 実績報告書 >																																											
		P100～101																																											
		8 人事に関する計画																																											
評価基準	実績	分析・評価																																											
<p>【人事に関する計画】</p> <p>人事に関する計画は有るか。有る場合は、当該計画の進捗は順調か。</p> <p>人事管理は適切に行われているか。</p> <p>業務内容を踏まえた適切な人員配置を行っているか。また、有期雇用職員職員人事制度の活用を図ったか。</p>	<p>【人事に関する計画の有無及びその進捗状況】</p> <p>・人事に関する計画は上記の通りであり、順調に進捗している。</p> <p>【常勤職員数の推移】</p> <p>法律及び閣議決定により、平成18年から平成23年の間に常勤職員人件費を6%削減する総人件費改革が行われた。</p> <table border="1" data-bbox="591 951 1554 1034"> <thead> <tr> <th>18年度</th> <th>19年度</th> <th>20年度</th> <th>21年度</th> <th>22年度</th> <th>23年度</th> <th>24年度</th> <th>25年度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>127</td> <td>125</td> <td>125</td> <td>119</td> <td>114</td> <td>113</td> <td>103</td> <td>103</td> </tr> </tbody> </table> <p>各年度当初における職員数</p> <p>国立美術館では、継続的な業務の見直しや人員の再配置、退職後の職員の不補充、平成23年度より制度化した任期付研究員及びアソシエイトフェロー制度の有効活用を行っている。</p> <p>・常勤職員、任期付職員の計画的採用状況</p> <table border="1" data-bbox="591 1294 1554 1418"> <thead> <tr> <th></th> <th>18年度</th> <th>19年度</th> <th>20年度</th> <th>21年度</th> <th>22年度</th> <th>23年度</th> <th>24年度</th> <th>25年度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>常勤職員</td> <td>1</td> <td>1</td> <td>6</td> <td>1</td> <td>1</td> <td>0</td> <td>3</td> <td>8</td> </tr> <tr> <td>任期付職員</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>1</td> <td>4</td> <td>5</td> </tr> </tbody> </table> <p>平成25年度には、「任期付研究員」のうち2名を審査を経て常勤研究員に採用した</p>	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	127	125	125	119	114	113	103	103		18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	常勤職員	1	1	6	1	1	0	3	8	任期付職員	0	0	0	0	0	1	4	5	<p>人事に関する計画に基づき、適切に進められている。</p> <p>人事管理についても、業務内容を踏まえた人員配置等適切に行っている。</p> <p>業務内容に応じて、任期付職員を採用するとともに、任期付研究員の一部を審査を経て、常勤研究員として採用するなど、効果的な活用が行われている。</p> <p>なお、法人の人員は、諸外国の代表的な美術館等と比較して、非常に貧弱である。法人が適切に人事管理等を行っているとしても、現状以上の人員の削減は、ナショナルセンターとしての美術館の機能の低下を招き、法人の目的達成を阻害する恐れがある。</p>
18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度																																						
127	125	125	119	114	113	103	103																																						
	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度																																					
常勤職員	1	1	6	1	1	0	3	8																																					
任期付職員	0	0	0	0	0	1	4	5																																					

<p>職員の意識向上を図るため、次の職員研修を実施したか。</p> <p>ア 新規採用者・転任者職員研修 イ 接遇研修 ウ メンタルヘルスケアに関連する研修</p> <p>外部の研修に職員を積極的に派遣し、その資質の向上を図ったか。特に研究職職員への研修機会の増大に努めたか。</p> <p>職員のメンタルヘルスケアの一層の推進を図ったか。</p>	<p>・ 危機管理体制等の整備・充実に関する取組状況</p> <p>各館において消防訓練を実施し、地震や火災への対応を想定した準備を整え、危機管理の対策を講じ、不測の事態にも柔軟に対応できるよう危機管理の意識を持つように徹底した。</p> <p>ア、イ 主に新規採用者(非常勤職員を含む)・外部機関からの転入者を対象として、接遇・クレーム研修を実施した。(平成 25 年 7 月 26 日実施 研修参加者・・・17名)</p> <p>ウ メンタルヘルスケアに関する研修を実施した。(平成 25 年 7 月 25 日実施 研修参加者19名)</p> <p>文部科学省・文化庁が主催する研修のみならず、他省庁等が主催する研修の情報提供を行い積極的に参加を促した。</p> <p>産業医による個別面談を実施した。</p>	<p>新規採用者、転任者研修、接遇・クレーム研修、メンタルヘルスケアに関する研修は実施されている。</p> <p>文部科学省・文化庁主催による学芸員研修をはじめ他省庁等が主催する研修などに積極的に職員を派遣している。</p> <p>産業医による個別面談により、職員のメンタルヘルスケアを実施している。</p>
--	---	--